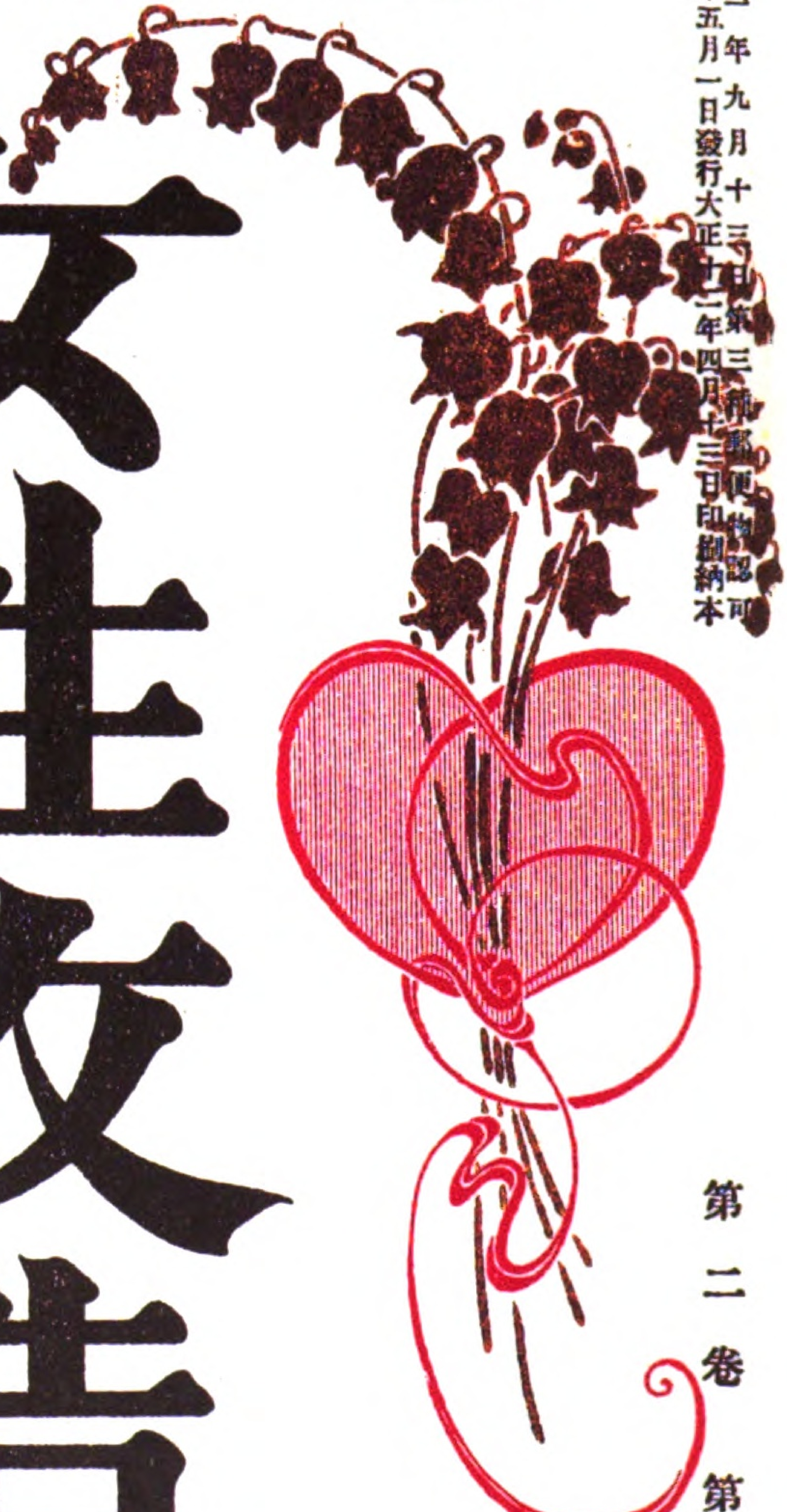
THE JOSEIKAIZO

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十二年五月一日發行大正十二年四月十三日印刷納本

女性改造



第二卷第五號

五月號


ハリキン石鹸
品質が廣告以上に良品なりし時
購買者の喜びは頂點に達します
良品廉價の眞實を認められた。
ハリキン石鹸が非常な需要を喚
起してゐる事は誠に喜びに堪へ
ません益々御愛用を願ひます。
東京・大阪 ハリキン化粧品株式會社


西川
御婚禮蒲團
新柄夏座蒲團
日本橋印
ぬいめなしかや
本濱蚊帳
モスリン友禪
當店の增築工事も五月には落成と共、益々賣場も擴張し 品も愈々豐富に陳列致します 賑々しく御來店を御待ち申ます
（カタログ御一報次第進呈）
東京日本橋角
西川商店



女性改造五月號目次

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

月經帶 ビクトリヤ



向ふから來るのはお蝶様
五月の風にそよ〳〵と
返るもすその輕快さ
花から花へ時知らず
戯れて廻つて飛んでゐる



一號品
純良ゴム製
（丸罐入）

すが〳〵しい初夏の漫歩に、樂しい御家庭の御仕事に嫌な月經時も平常と變りなく御活動を自由にするビクトリヤ月經帶を御用ひ下さい。

特色・柔軟ゴム製・伸縮自在
洗濯自由・耐久力有・使用簡便

送料 内地十二錢 朝鮮支那四十五錢

●定價 一號品 金五拾錢

到る所の藥店小間物店にあり！

イージーおしめ

●ベビーちやんの幸福

★可愛い赤ちやんの幸福の爲に、ゴム製イージーおしめカバーを御用ひ下さい

著けて心地よく寢冷えをしらず
まる〳〵肥つて行く計り！



特色

●伸縮自在のゴム製品にして體裁頗る上品●大小便は決して漏れず、赤ちやんの衣服は常に清潔●着脱に手數がかゝらず、洗濯はただ水をかけろ計りで奇麗になります、カサ張らず旅行携帯に便利。

到る所の藥店小間物店にあり！

定價	別製平ル附	純ゴム製	純ゴム特製
小形（一二歳用）	七十錢	八十錢	一圓十錢
大形（三四歳用）	八十錢	九十錢	一圓卅錢

直接發賣元へ御注文の節は送料二十錢添へ前金にお願ひいたします〇代金引換は二十四錢御手切御前送下さい

發賣元 東京市本所區番場町

大和ゴム製作所

電話墨田[illegible]一〇三三・一〇三四番
振替東京一三〇〇二番

黒人ルネ・マラン作
高瀬毅譯

（黒人の赤裸々な戀愛は我々をしてゾッとせしむ）

定價壹圓五拾錢
書留送料十五錢

參拾參版

バツアラ

黒人の書いた世界唯一の白人反抗の一大小說

單に一片の好奇心を以つて我々日本人は本書を看過してよからうか、我々有色人種として彼等白人から常に差別的に遇されてをるの時、たま〳〵此作者の如き敢然として白人に反抗、挑戰する勇猛なる國際小說の出たことは我々日本人がいかに意氣地なく、常に御都合主義なるを冷笑するものの如く感ぜらるる、殊に此著者が黒人でありこの著が藝術的に世界に巨大なる光を發した點に於て有色人種の先覺者だと自負する我々は慚愧の至りではないか、此三百萬の讀者を有せる『バツアラ』が世界第一の好評を有して居るのは、ゾラ以上に愛慾が露骨で、赤裸々で、大膽であるからである、一夫多妻の蠻地で、九人の妻妾を擁せる大酋長バツアラに愛慾を以つて挑戰したる一青年の勇敢なる戀の凱歌が、天下數百萬の讀者をしていかに血を湧かしめ、そして手に汗を握らしむるか

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

理學博士 石原純著
岡本一平畫

アインスタイン教授講演錄

第八版

定價壹圓八拾錢
書留送料十五錢

絶好の記念として各學校、各家庭の注文殺到

全世界の科學界を革命せる絶世の大偉人アインスタイン氏の來朝を記念する唯一の記念錄です、本書は博士が日本に於ける九回の大講演を尤も正確に、尤も通俗に石原博士が筆記した者です、それにア氏に隨從せる我國唯一の漫畫家岡本一平畫伯がア氏の風貌、性癖を描いた十八葉の人物畫、人物評、ア氏自ら描ける自贊畫等を挿入しました「相對性理論」を研究する人も、ア氏の雄大な人物を研究する人々も必ず一讀すべきです、本書は各學校各家庭より注文殺到して何日にして十版を重ぬるの大盛況を呈しました。

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二


香水界空前の快擧
四月一日より御買上げの方に
（有名化粧品店薬店にて販賣す）
宮内省御買上品
原料香水
オリヂナル
香水用ハンカチフ
無代進呈
ローン製
優美花模様入
小瓶二個ニ壹枚
中瓶一個ニ壹枚
大瓶一個ニ貳枚
特大瓶一個ニ四枚
宛進呈
衛生口紅
カオール本舗
株式會社安藤井筒堂
東京日本橋區水天宮前



入浴の前の處女　〔ブルツクセル〕

小説 ダビデと子たち

吉田絃二郎作

（吉田氏の尤も自信ある作物のみを集めた傑作集）

定價貳圓　送料十七錢

第八版

時代の要求する宗教的名著を見よ

創作壇の人格者と稱せらるる吉田氏の傑作として自らも認め、他よりもしかく推稱せられつつある本書は、氏が宗敎的思索より得たる獨特のもので、聖者として自己の精神的空虚を感じたダビデが、三角戀愛より端なくも自己の息子と或女を競爭したため、老臣からは愛情をつかされ、又自身も腫物の膿血に惱む人生の愛慾と苦惱を氏一流の感激を以つて綴られたものだ

識者に清冽の一感激を投げた逸作

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番

め

かす。

著者は本書を殘して鵬程萬里の旅に上る

佛人フラマリオン作　高瀨毅譯

超絶せる大太陽の永劫不滅の絶對生命なり」と叫べる處、正に來らん

[illegible]

新道徳の黎明を告ぐる霹靂的一大豫言の戀愛科學小説なりとす。新時代の青年淑女、本書によりて如何なる新生を把握せんとする。

世界滅亡觀、人類終焉記から出發した戀愛科學小説出づ

定價貳圓
送料十七錢

東京市芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二一

一つの註文

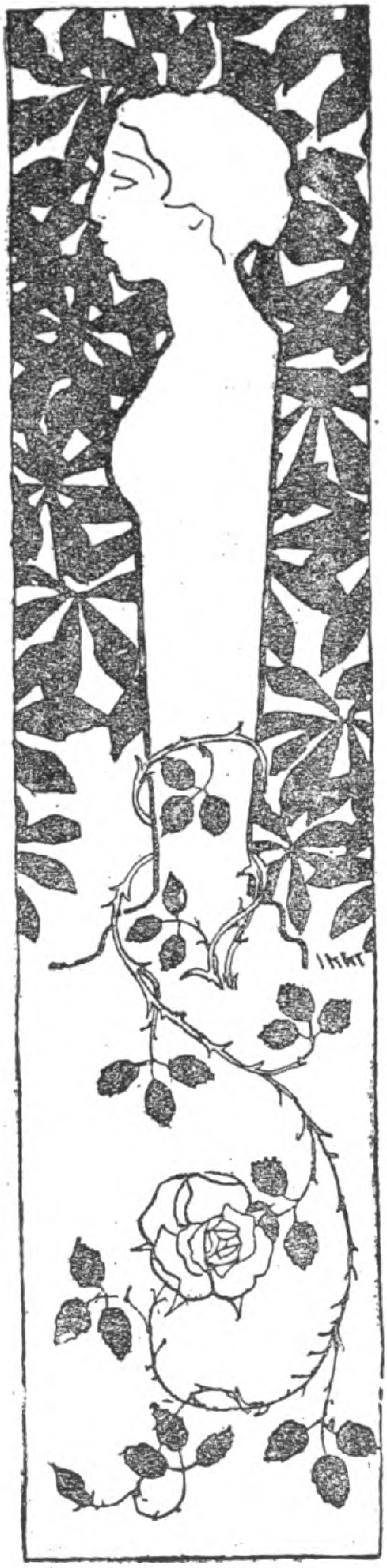
諸姉に一つの註文があります。

眼ざめたとおつしやる智識階級の女性が、未だ〳〵階級思想に囚はれ、ブルヂョア的虚榮の跡をのみ趁はるる現象を私たちはにが〳〵しい限りに思ひます、婚姻にまれ、交際にまれ、ただしは病氣の診察にまで人格を主とせず、學位とか、大きな病院の持主でさへあればいいやうに感ぜらるることがそも〳〵の間違ゐです、大野某の事件でも錯誤の主因は娘さんでなく、それは實に大野を信じたる虚榮なるその親たちではありませんか、あれだけの娘さんが痛々しい手傷をしたにもかかはらず、その親たちはます〳〵娘の所有慾を感じ、そして娘さんを唯だ何かの阿堵物の如く取扱つて自己の腹立たしさのいやしに犠牲にした樣な悲慘な姿です、自已の誤ちであつたことや、自已の責任なぞを知らぬその親達の仕打は全く時代錯誤も甚しいではありませんか。

有爵者が何です、博士が何です、金持ちが何です、こう云ふ階級の人には眞の人生なく、眞の幸福もなく、そして獸人が多いのです。あなた方の親たちは好んでこの獸人たちと交遊し、婚姻を欲しておる、そしてダイヤやルビーの光りに眩惑されている、こう云ふ境地にある人は十中の八九までは白痴です、眞に人格の價値を知ることの出來ぬ憫むべき中性者です、半獸です。藝妓や、娼妓なら馬鹿華族や、ノラ息子の魔光にも目がくるれ、相當に教養ある人々がまだ〳〵こんな風に目醒めぬのはどう云ふ譯でせう。

現代の總てのものは腐爛しきつてゐる、教育も社會もこの腐つたレールの上を走つてゐる、この忌むべき因襲の上ばかり何にも知らずに走りつづけてゐる。眞の人生の道を歩かうとするならば、どうしてもこれ等の獸人たちと道を別にせねばなりません、そうしてこそ人生の眞意義も、藝術の眞諦もうかがはれます。

だが、そこに達するには偉大なる勇氣、誰にも冒されぬ鐵の如き自信がなくてはならない。腐亂せる宗教より離れ、死の如き教育より脫し、事大主義の社會と家庭とから解放されてそこに始めて人生の正しき光りが現れ、人類が新しく生くる道が發見される、そして自由な晴れやかな威嚴ある新道は私たちによりて組成さるる。



心なき業に就いて

倉田百三

此の拙なき感想を柳宗悅兄に捧ぐ。

此處に自分が考へるのは人格の「仕上げ」と「磨き」とに就てゞある　我々は憎む可きものや、卑しむ可きもの等の罪惡を犯さないと云ふだけでは、人格が未だ完成したとは云へない。それ以上に、我々が若し眞に高貴を願ふならば、人格の仕上げと磨きとが充分に行き屆かなければならない。我々のカルチユアとはすなはち此れである。我々は一つの玉の如くに圓滿にして完成せる人格とならむ事を願はなければならない。固より斯くの如きは或る人々に取つては、有閑にして餘裕ある詮議立てゞあらう、若し我々が我々の生物學的存在を維持する事さへ脅やかされて居るならば、我々は先づ其の保證

を得る爲めに心身を勞して餘裕無く、道德の問題さへも省みる事が出來ないかも知れない。今日の或人々が云ふ如く我々が生命を脅やかされる時、暴力や殺人等の憎む可き行爲も肯定され、我々が食に飢える時、窃盜や、賣淫等の卑しむ可き行爲も是認されなければならないかも知れない。故に憎む可き卑しむ可き行ひより自由となれる限りは、それ以上を要求するが如きは贅澤の沙汰となさるゝかも知れない。自分が此處に考ふるが如き問題は「衣食足つて」後「知る禮節」の問題であつて、衣食足らざる者に取つては無意義であるかも知れない。自分はかゝる言說には充分に同情し得る者ではあるが、自分はその人間的同情を壓へて、少くとも次の二點を主張して置かなければならない。

第一に我々が人格の仕上げと磨きとに於いて最も完成したる人と考へる聖人は、必ずしも所謂衣食の足つた人では無く寧ろ物質的貧窮の中に暮して居た人である。聖貧の士である「疏食を飯ひ、水を飲み肱を曲げて枕」した孔子や、食を人人の門に乞ふたフランシスである。殊に自分が此處に特に考へんとする心なき業に就いて、最も纖細にして鋭敏な神經を持つて居た彼の良寛の如きは、顏を洗ふにも、味噌を擦るにも、一つの鉢を用ひた程貧しさを極めた人である。故に人格の仕上げと磨きとは必ずしも衣食の足つた者のみに意義ある問題であるとは思へない。固より一般の人に取つてカルチュアの問題が衣食の問題よりは緊要では無いのは當然である。衣食足らざる時人格の仕上げや磨きに心を配るだけの餘裕の持ち難き事も當然である。併し此處に嚴肅なる當爲の問題に就き我々の人間的同情を超克して考へる時、彼の聖貧の人が既に達し得たところの人格的完成は、一般の人々に對して、貧富に關はらず、課せられなければならない道德的意義ある問題でなければならない。我々が往相の世界に立つ時、(「道心の三つの相に就いて」參照)危急に迫れる人間に取つても尙殺人は惡である。飢餓に瀕せる女に取つても、賣淫は猶卑しむ可き行爲であり、寺門に施しを乞ふ乞食に取つても、良寛の所謂「布施の多い少い云ふ事」は心なき業である。第二に我々は凡そ當爲の問題に就いて考ふる時、リツプスの云ふ如く我々の個人的制約を離れて、一般の問題として考察しなければならない。即ち我々の主觀的事情は如何にもせよ、凡そ一人の

人間が其の人格價値を最後迄徹底して求める時、我々は如何なる事を心懸けなければならないかの問題を考察しなければならない。即ち一般に人間としての立場、人類としての見地に於いて、考察しなければならない。(リツプス倫理學の根本問題參照）故に人格の仕上げと磨きとの問題の如きも、只だ有閑階級のみの問題としてゞはなく、總べての人類に通ずる公な問題として意義を持ち得るのである。我々の生存の意義、凡ての價値の究極は人格價値である。我々の衣食住は此の價値を生かすための條件である。故に我々の衣食住が安定した時、我々は必然的に人格價値を追究して遂に其の仕上げと磨きとの問題に迄到達す可き筈である。故に衣食住が安定すると否とに關はらず、我々の人格の仕上げと磨きとの問題は依然として常に我々の究極の問題になるのであるが、たゞ我々が、不幸にして衣食住の安定を缺く時、其處迄手が屆かないのに過ぎない。然もそれは一般の人の常であると云ふに止どまり、聖人は衣食住の不安定の中に於いて、反つて人格の仕上げと磨きとを成就したのである。否寧ろ人格の仕上げと磨きとを成就せむが爲めに、衣食住の不安の中に生きざるを得なくなつたのである。固より我々は聖人ではない。併し乍ら我々が理想を設定せむとする時、我々は自己を聖人の道にも堪へ得る者として、即ち其の道に依つて少くとも、自己を責め得るものとして、考へなければならない。然らざれば、凡そ道德の問題を論ずる事は初めから無意義となるからである

　我々の人格の仕上げと磨きとに於いて、我々が最も戒めなければならない事は心なき業である。我々が已でに憎む可きもの、卑しむ可きものとして考へなければならない如き罪惡から放たれたる後は、我々は自己の人格の尊嚴を棄却し、汚辱するが如き著しき不德は犯さないであらう。他人から爪彈きされ、面を反けられるが如き所業は爲さないであらう。少くとも我々は相當の品位を有する人格として他人の前に通用するであらう。併し乍らそれは我々が人格として通用したと云ふに止どまり、我々の人格が特に他人を惹き附け、尊ばしめ、慕はしめる力は其れ以上の人格の匂ひ、空氣でなければならない。況して自分の德の爲めに他人を德に導き、善に化せしめむが如き Virtue はそれ以上の積極的な力でなけ

ればならない。心なき業は我々の人格の匂ひと空氣とを高貴ならしめる爲めに、必ず避けねばならない行爲である。他の如何なる美點と力とを具へて居ても、我々が心なき業を爲すならば、我々の人格は高貴であるわけには行かない。床しきものであるわけには行かない。心なき業とは心使ひなき業である。思ひ遣りなき業である。同情なき業である。其れが最も人間的な形を取つて現れる時は、無智や、無作法や、我儘となつて現れるのであるが、此等の行爲の生ずる根本は凡そ調和に對する感覺の缺乏に存する。凡そ「調和的なるもの」を愛する心が乏しいところより、凡ての心なき業が生ずるのである。凡そ「調和的なるもの」は此の世界に於いて最も高き心である。美である。力の感じさへも此の境地に於いては一つの均衡を保つた靜けさとなるのである。我々は天的なるものを調和的なるものとして描かざるを得ない。故に一つの人格が高貴である爲めには、其れは豐であり、力強くあるだけでは不充分であり、その上に調和的なるものでなければならない。「和氣」は君子の最後の德でなければならない。此の凡そ調和的なるものに對する愛が乏しく、感覺が鈍き時、我々は上は造物主に對し、下は草木や、無生物に對して心なき業を爲すに到るのである。此れを支那風に言ひ表せば凡そ「禮」に對する感覺の缺乏より、總べての心なき業が生れるのである。例へば、此處に少數の親しき人々が集つて晩餐會を開いたとき、若し其處に一人の招かれざる客が侵入して來たとする。此の場合、其の客の行爲が心なき業であるとすれば、其れが其の晩餐會の調和を破るからである。併し乍ら若し其の招かれざる客が優れて德のある人であり、又集れる人々が同じく德のある人々であるならば、其の侵入者は却つて一座の調和に刺戟と變化とを與へて、其の調和を一層豐富に、力強くせしめる事も出來、又集へる人々は其の侵入者を受け入れる事に依つて、其の晩餐會を一層樂しく生々させる事も出來るのである。卽ち我々の調和に對する德の如何に依つて、一つの行爲が心なき業ともなり、或ひは無邪氣な行ひともなるのである。又例へば前にあげた良寛の所謂「布施の多い少い云ふ事」が心なき業となるのは、たゞ彼が慾深いと云ふだけからでは無く、凡そ受ける者と與ふる者との間の調和の感覺の缺乏の爲めである。我々は與ふる者が無私の動機を以て、

又物吝しみせずして與へ、受くる者が此れを强ひざるは勿論、物質の多少を問はず、此れを感謝して受ける事に依つて、初めて授受の問題に關する調和の意識に達するのである、故に「布施の多い少い云ふ事」は施す者の如何を問はず、其れは受くるものゝ側に於ける心なき業である。故に同じく良寛は「くれて後其の事云ふ」事を以て同じく心なき業の一つとなして居るのである。此れ受くる者の如何を問はず、與ふるものゝ側に於ける心なき業である。此の二つの行爲は共に授受の問題に關する調和の感覺の缺乏より生ずる、又失戀の人の前にて戀の幸福の話をする事が心なき業となるのは、相手にその寂しさを增さしめる事を慮らざる相手と、場處と、時との宜しきに適はざる無感覺の爲めであつて、相手を悲しましめむとする事を意圖して爲す無慈悲の行爲と同一ではない。此の場合一人の人間が失戀に苦しみ、他の人間が戀を得て喜び、其の二人が語り合はなければならないと云ふ一つの不調和な出來事に對して感覺鈍きところより生ずるのである。若し其の感覺鈍き者は出來るだけ其の不調和を目立たしめざるやうに爲す筈である。更に一層立ち入つて考へれば、此の不調和をも調和と感じ得る程に此の世界の調和を願はずには居られない人は、かゝる行ひをも心なき業となさずして、失戀の人と戀に浸れる人と、共にその戀に就て語り合ふ事を最も强くして、深き調和ある事を感じ得る迄滿足しないであらう。故に調和の求め方が公であり、男性的であり、悲壯であり、一言にして盡せば積極的である場合と、私的であり、女性的であり、偷安的であり、一言にして盡くせば消極的である場合とは、我々が心なき業として考へる行爲も自ら相異して來る。我々は出來得る限り積極的な處に於て調和を求めなければならない。例へば病人の傍にて花見の話をするのは普通の場合に於いては心なき業である。我々は其れを思ひ遣りなき行爲と考へるのである。併し乍ら其の病人が若し素直にして且つ强かつたならば、他人が花見の話をして吳れる事を喜び、若し自分を憐れむで花見の話を避けるならば、却つて心に適はないであらう。現に自分の如きは長き鍛錬の後、今日に於いては、他人の花見の話を素直に聞く事を喜び、他人が氣兼ねする事を却つて苦痛とするに到つて居る。此の場合に於いて、病人の傍にて花見の話をする事は必ずしも心なき業ではなく、

寧ろ其れを心なき業と感ずる事は、病人の側の徳の不足である。その病人は其の人を羨ますして、其の花見の光景を聞く事を喜ぶ程素直になる可きであつたのである。其れは病人が負はなければならない試みなのである。我々が調和に就いて考ふる時、我々は個人的制約を離れて――即ち病む者が自分であり、花見る者が他人であると云ふ意識を離れて、一般に一人の病人と一人の健康者との間の調和として、最も積極的なる處に調和を求めなければならない。積極的なる調和とは積極的により大なる生命價を創り出さむが爲めに、負ふ可き者に負はしめて求めるところの調和である。例へば此の病人と健康者との花見の場合に於いて、出來る限り生命價を大ならしめる調和は、病人に羨望を克服せしめ、健康者に姑息な同情を克服せしめ、病人は素直な心となつて耳を傾け、健康者は病人を慰めんが爲めに物語る事に依つて一つの調和を求める事である。從つてかゝる調和は一つの悲壯である。凡そ克服と悲壯とを伴はずして一つの悲劇的事件を調和に導かむとする時、其れは姑息なる偸安とならざるを得ない。負ふ可きものを負はしめずして調和を求める事は消極的なる卑屈である。心なき業は思ひ遣りなき業ではあるが、其の思ひ遣りが私的にして人間的なる時、所謂婦女子的若しくは好々爺的同情となつて、彼のツアラトウストラの厳しく排斥したところのものとなる。斯くの如き人間的同情は我々の成長を阻むものである。故に心なき業は我々が眞に同情すべき時に同情なき行爲をなす事でなければならない。同情すべき時に同情をせず、不必要なる場合に思ひ遣りなく振舞ふ事でなければならない。例へば忠臣藏の判官切腹の場に於いて、檢死と城受取りの役人たる石堂と、藥師寺との二人の使者に於いて、石堂の示した同情と寛大とは當に同情すべき時の同情であつて彼は役目に反して居るのではない。併し藥師寺の振舞ひは同情すべき時に同情せず、然も不必要なる時に思ひ遣りなく振舞ふのであつて、心なき業の典型的なるものである。我々は主君の安否を氣遣つて、息せき馳せつけた由良之助が、然も檢死の役人を憚つて進み兼ねて居る心と、其れを知つて、既に切腹した主君の傍に咫尺する事を許し、促す石堂の心との間に最も時と場所とに相應しき調和を感ずる。之に反し、悲嘆に暮れて居る家臣達の心と、已むを得ずして此の無慈悲な

役目を仰せ附かつたのに過ぎ無い藥師寺のあらけなき心との間に不適當にして、不必要なる不調和を感じざるを得ないのである。凡そ必要であるか、不必要であるかと云ふ事は、心なき業であるか否かを決定する最も重要な標準の一つである。それが必要である時は、已むを得ないものとして許される行爲も、其れが不必要である時、其の行爲を出來得べくば爲さざらんと欲する心が無かつたと云ふ點に於いて、動機上許し難きものとなる。例へば他人の罪惡を責めると云ふ事は他人を悔ひ改めしめ、若しくは道德の尊嚴を維持する爲に必要である場合には、其れを爲す事を欲しない乍らも、已むを得ずして敢て爲す場合もあるであらう。併し他人が既に其の罪惡を認め、且つ其れを悔ひ改めて居る時、猶此れを責むる事は不必要であるが故に心なき業である。此の意味に於いて逃ぐる敵を追ふ事や、人の嫌がる點に觸れる事や、自己の幸福を不幸なる者に見せびらかす事や、動物を虐待する事や、草木を傷附ける事等は心なき業である。生業(なりはひ)の爲めに獵すなどり」する事は許されても、なぐさみに鳥魚を殺す事は心なき業である。職務の爲めでなく他人の罪惡や、過失を發く事は心なき業である　他人の無邪氣な試みや催しに**けち**を附ける事は心なき業である。他人が矜つて居る時、其の「鼻を折る」事は心なき業である。童子が積み重ねて居る石を押し崩す鬼の如く、總て他人の企てを何の必要もなく、此れを毀す事を喜ぶところの心なき人が如何に世間に多い事であらう。又一つの法規がある時、不必要に杓子定規を以て其の內容を解釋し、其の適用を面倒ならしめる官吏の行爲の如きは心なき業である。

又或行爲は假令其れが必要であつても、時と場合のよろしきとを得ない時は心なき業となる。例へば過失を重ねる子供や、召使や、弟子等に對して、それを戒しめる事は必要であつても、他人の面前にて此れを叱咜するが如きは心なき業である。他に適當な時と場處とを撰ぶ可きである。祝ひの爲めの催しの席にて、餘りに眞面目(シリアス)なる、人々の心を緊張せしめ過ぎる演說を爲すが如きも、其の內容が其れ自身に於いて如何に立派であつても、心なき業である。出立の準備に忙しく或は何事かに心を奪はれて餘裕なき時、眞面目なる、また入組むだ相談を持ち掛ける如きも心なき業である。我々の生理的必

需と云ふものは、必要と云ふ點に於いて、最も典型的なるものであるが、同時に最も時と場所との適當を要する點に於いても典型的なるものである。生理的必需が時と場所との適當を缺く時に生ずる心なき業は極端なる無作法となつて現はれ、自他の威嚴を傷付けないでは置かない。其の具體的な例を擧げる事は避けやう。其れは又一つの心なき業であるからである。

我々の禮儀若しくは作法と云ふものは、調和に對する我々の感覺が、日常生活的な部分に現はれたものである。即ち此れに從ふ時、我々の日常生活が最も調和ある形を取る事が出來るのである。固より不調和な心を以て禮儀作法の形式を取る事が調和を生み得ない事は當然である。併し乍ら我々の心が素直である時、我々の調和を愛する心が、其の形を取る時、最も良く生かされるのである。斯くの如き形式の一つの系統となれるものが禮儀作法である。固より禮儀作法の形式は、固定せずして變更すべきものである。又必ずしも或る一定の禮儀作法に從はなければならない事はない。併し禮儀作法には、其の生じ來たつた原因と由來とに正しき意義があり、何等かの形に於いて我々が禮儀作法を持たないならば、恐らく我々の生活は文化(カルチュア)あるものとなり得ないであらう。我々は禮儀作法を生み出す力を尊ばなければならない。我々は天國を想像する時、其處に最も自由なる、美しき形に於ける「禮」の理念を思ひ浮べざるを得ないのである。支那に於いて、古來「禮」を尊び、詩、書、樂等と共に士の必ず修むべき德となされ、彼の「禮記」の如き精緻なる軌範を生じた事は、其處に、ある經世的な目的が含まつて居るとは云へ、東洋人の心が如何に調和と高貴とを愛して居たかと云ふ事を示して我々をして敬意を持たしめるに足る。故に我々が禮儀作法に反する行爲を爲す時、其れは又心なき業となる。其の父母に敬語を使はぬ子女や、老人や、長者に推讓せぬ若者や、師を敬はぬ弟子や、先輩を輕んずる年少者の行爲は心なき業である。斯くの如きは固より人間が人間として對等である事を認めた上に於いて、其れ以上に生ずる或る意識である。人間が人間として對等であるが故に、師弟や親子や、長幼の序別を無視するが如きは貧弱にして、淺薄な心である。我々は父母や、師や、長者を敬ふ事に依つて些かも自己の人格が低められたと感じない。寧ろ其の反對をなす事に依つて、自己の人格の

粗野なる事を感ずるのである。ダビデがエホバの祭壇の前にぬかづく事に依つて、ダビデの王としての威嚴は少しも傷付けられない。キリストがヨハネの前に跪いて其の洗禮を受けても基督の神の子としての尊嚴は少しも損はれない。クララがフランシスの足下に俯して此れを拜しても、和紀郎子が王仁の爲めに履を揃へても其の淸さと尊さとは毫末も減ずる事はなく、反つて床しさを添へるのである。デモクラシーは人間が人間として對等である事、如何なる人格も其の獨立と自由とを保持する權利を有する事を原理として居る限りに於いて固より正當である。併し乍ら我々が自ら欲して、自己の人格を卑しめる事無く取る處の獻身や、恭敬や、推讓やの禮をも排斥する時に、其れは其の正しき限界を越えて居る。凡て一般的なる原理以上の個性的にして特異なる部分は、我々の凡ての文化を複雜にして精彩あらしめる積極的內容であるが故に、決して猥りに此れを排斥してはならない。我々の精神の微妙なる現れ方、感情の複雜なる陰影はかゝる特異なる部分に於いて、最も具體的な形を取つて現はれるものだからである。又純粹にデモクラチックな對人關係に於いても、其の相互の人格の獨立と自由とを尊重する爲めにも、其の共同生活を秩序あらしめ、便利ならしむる爲めにも、禮儀作法は又必要である。斯くの如き禮儀作法に反する事も心なき業である。例へば他人が自分の厚意をアクセプトするかしないかを待たずして、猥りに此れに働きかけ、相手の迷惑となる事をも顧みず、好意の押し賣りを爲すが如きは此れである。假りに學資に窮せる一人の青年を見て、此れに學資を補助せんと欲する時、其れが純粹に好意から出て居ると云つて、我々は只金錢を與へればいゝと云ふわけには行かない。其の青年が學資を受ける事をアクセプトするか否かを待たなければならない。かゝる神經を費す事なく、只學資を出して遣れば喜ぶであらうと思ふ人に對して、其の青年が或る侮辱を感じ、此れを拒絕したとしても當然である。其處にパトロンたらんとする者の禮儀がある。況して見知らぬ婦人に對して此れを戀慕したからと云つて、直に手紙を送り、許可を得ずして訪問し、狎れ〳〵しく振舞ふ事は心なき業である。其處に戀する者の作法がある。自分が「或る表出に就いて」の中に書いた如き凡ての粗野と、狎褻と無作法とは心なき業であ

る。此等は畢竟相手の人格の獨立と自由とを尊重せず、且つ自己の心情が粗野にして平淺なるが爲めに、他人の心情のデリカシイを推察する事の出來ない所より生ずるものであつて、自己の人格の低卑なる事を示すものである。凡て相手の迷惑となる事を慮りなく爲す事は心なき業である。故に何が相手の迷惑となるかを知らざる時我々は心なき業を爲さゞるを得ない。故に、我々は心なき業を避けむと欲すれば、先づ對人關係に於ける日常生活の事實を知らなければならない。禮儀作法は此の事實より發生したる行爲の形式的規範である。例へば未知の人に面會を求める時、其の人の信用して居る知人の紹介狀を持ち、豫め許可を受け、日時を定めて訪問する事が、古來禮儀作法に適ふとされるのは何處より生じるのであるか。其れは我々の日常生活の事實に於いて、多くの詐欺師や、利用せんとする者や、好奇心ある者等の訪問を受け、然も業務に忙しく、時間の制限あるが故に、正しくして緊要なる動機を持つ訪問者を、不正にして無意義なる訪問者から防がむが爲めに、紹介狀の必要を生ずるのである。又我々には種々の個人的事情に依つて他人と面會する事能はざる場合があり、又他人との約束や、業務の能率等の爲めに時間の都合があるが爲めに、豫め承諾を受け、時日を定める必要が生じるのである。此の必要より生じた訪問の禮儀、作法を守らずして訪問した時、如何なる結果が生じるであらうか。第一に主人は客を信用する事が出來ない。然も疑つてかゝる事は心苦しい。面會を謝絶すれば客の心は傷つき、面會すれば仕事の計畫は亂され、他との約束は破れる。即ち主人の立場は迷惑なる窮境である。デイレンマである。其の結果は主客の間が不調和とならざるを得ない。故に此の不調和を避けむとする智慧の爲めに、一定の禮儀作法が必要となるのである。併し此の事實の智識なき者はかゝる禮儀作法を煩瑣にして、形式的なりとし、主人の愛の缺乏に歸するであらう。斯くの如きは純眞にして人間らしき人々の却つて犯し易き心なき業である。自分は嘗つて西田幾多郎氏を訪問せむとして、氏が面會日を指定されたと云ふだけを以て、氏に對する尊敬を放棄せむとした事があつた。其れは事實の智識なき處より生じる生一本なる誤謬である。禮儀作法が我々に取つて必要なのは其れを守らない時、人と人との間の調和が破れるからで

ある。故に調和を愛する者は自から禮儀作法を重んずるに到るのである。又其れは能率上の便宜より生ずる。我々は禮儀作法に從ふ時、最も能率を上げ、却つて無駄を省き、目的を達する近道を歩むのである、彼の茶道の如き、精緻なる禮儀作法さへも、其れは禮を重んずる我々の「こゝろ」と、實際に必要なるあらゆる手續きとを、最も簡單なる方法に據つて果さむとする原理より工夫されたるものである。即ち其の道に從ふ時、主客の間に最も美しき和樂を生じ、種々の手拔かりや、過失なく、最も簡素に取り運ばれるのである。又我々が雜沓の場所に於いて、或る禮儀作法を持つのは、能率上の便宜の爲めである。我々が公共の場所に於いて傍若無人に振舞ふ事を心なき業と爲すのは其の爲めである。固より斯くの如き禮儀作法は其れが純粹に形式的となり、只便宜の爲めの手段に過ぎない時に於いては、此れに反する事は我々の人格の價値を決定する程の重大なものとはならない。我々は所謂文明人の公共的なる禮儀作法を極めて良く守り乍らも、最も本質的なる點に於いて、卑しむ可き人格ある事を知り、又反對にかゝる形式的方面を無視し乍ら、人格の本質の高貴なる人を知つて居る。併し乍ら其れは禮儀作法を重ぜざる處に高貴さがあるのではない。又禮儀作法を守る點に於いては、卑しき人にも美點があるのである。何事も强調することを愛する或る時期に於いては、我々は「心」を愛するために、好むで形式を輕蔑する。併し乍ら眞の調和はそれに相應しき形式に宿る心である。心を盛る形式が相應しくない時、其の心も眞に調和に達する事は出來ない。例へば圓滿なる「心」の宿る最も相應しき圖形は圓である。圓以外の如何なる圖形に於いても、しかく圓滿なる「心」を現はす事は出來ない。我々は徒にフオルマリズムを輕蔑してはならない。併し乍ら如何なる場合に於いても、心は主であつて形は役である。從つて禮儀作法の形は我々の日常生活の事實が變化するに從つて、變化して差支へなく、又變化すべき筈のものである。又我々の心の力（ヴアチユー）に依つて形を超越する事が出來る。例へば前の例に於いて、招かれざる客が却つて一座の調和を亂す事なくして、此れに精彩を添へ得る德を持つて居るならば、彼は招待を受けずして出席すると云ふ禮儀作法に對する違反を自分の德に據つて超越したのである。故に我々の德が成就すればするだけ、我

々の禮儀作法は無駄を省き、簡素にして美しきものとなり得る。紹介狀を持つて人を訪問すると云ふが如き禮儀は、美しき禮儀では無い。其れは惡と虛僞との存在を豫想し、是れに打ち勝たむが爲めに生じたものである。若し我々の間に欺くものがないならば、我々は只素直に門を敲けば足りるのである。天上の禮と地上の禮とは此處にも亦趣きを異にする。前者に於いては禮とは只美くしきものを最も良く生かさむが爲めの形である。後者に於いては、美しきものを醜きものより守らむが爲めの形である。天上のよき人とよき人との間の挨拶は如何に美しき禮であらう。凡そ人と人とが挨拶を換はしてゐる光景は地上に於いても最も美しきものゝ一つである。自分は其の美を見出し得るに到る迄には長き歲月を要した。其處には何等の實利若しくは必要がないが故に、却つて形式的虛禮的の感じを與へたのである。併し心の深まるに從ひ、地上の醜くして、限られたる事を體驗するにつれ、實利と必要とを含まざるが故に、却つて美しき、淸き感じを與へるに到るのである。我々は地上の運命として常に實利と、限界の中に齷齪として居るのであるが、路上に偶々知人と出會ひたる時、或るひは久濶の友を訪ねた時、暫く凡ての俗事を忘れて、心から安きを問ひ、祝福を送るのである。「お久しう御座います」「お變り御座いませんか」「お蔭樣で」と問ひ又答へる短き言葉の中に、限り無き意味が籠つて居る。或は「お早う。」と云ひ、「お休み」と云ふ言葉にも、愛と祝福との美しき味ひが含まれて居る。我々は挨拶をする時、此等の實利と必要より放たれたる愛と祝福の美しき言葉を、然も單純にして心からなる禮儀の形を以て表現するのである。大人の世界に於いてかゝる美しきものは恐らく少いであらう。固より禮儀作法の形式のみが複雜であつて、自由な美しき心が伴はれない時、其れが忌む可きである事は云ふ迄も無いが、禮を辨へず、無作法に過ぎる事は一つの低卑である事は免れない。「野人禮に習は」ざるの趣きは愛す可きものであつても、高貴である事は出來ない、故に相應しき禮儀作法を無視して振舞ふ事は心なき業である。凡そ相應しさとは一つの骨である。我々は相手と時と場所とに應じて如何なる行爲が如何なる度合ひに於いて、相應しきかを直感するのである。其れは智慧と德と教養されたる感覺と趣味とが自から體得するのであ

る。凡そ物に徹底する事は人格の力として根本的に重要なるものであるが、調和の感じは又人格の力の靜的な現はれである。インテンシチーが大であると云ふ事だけでは人格の仕上げと磨きとに於いて未だ充分ではない。其の外に「程の良さ」がなければならない。我々が富士山をかく迄仰ぐのは、其れが高く雲上に聳えて居るからだけではない。其の形が實に美しく調和して居るからである。殊に我々が地上の最も美しきものとして崇拜すべき淑女の名に價ひする者は其の心情に於いても、態度に於いても――其のすべてのものごしつまはづれに於いて、高貴にして調和したるものでなければならない。其れは一切の心なき業から自由となれるものでなければならない。自分は心からかゝる淑女に憧憬するものである。彼のダンテがベアトリチエの美に打たれたのは彼女に於いて眞の淑女を見出したからであつた。彼は路上に於いて「此の妙へなる少女が白き衣を着て二人のよほど年長けたる貴女の間に並むで」居るのと逢ひ、彼の女が「言葉に盡くし難き禮讓より、いとも德高き仕方にて挨拶した」時に、彼は其の爲めに「其の時總ゆる祝福の限りを見る心地を覺えた」と「新生」に書いて居る。其の時の印象がダンテの一生に決定的契機を與へたのである。斯くの如き天的なる淑女に對しては、我々の一つの心なき業も彼の女の貴さと靜さを侵し傷つけ、又彼女の些細の心なき業も、全く彼女の美と釣合ふ事能はずして、淑女としての全體の調和を毀して終ふであらう。我々は現實に於いて斯くの如き淑女に出會ふ事は至難であらう。併しダンテが若くして此の世を去つたベアトリチエを眞の淑女として心に祀つたやうに、天上の淑女の理念を、最も調和した、天的に祝福せられたものとして憧憬の的とすべきである。かゝる憧憬を以て、現實の貴夫人を眺める時、我々は如何に幻滅を感じなければならないであらう。例へば一人の美しく、高貴に装へる貴夫人を見たとする。併し彼女が一人の召使ひにはしたなき言葉をかける時、或は貧しき者に物吝しみし、若くは自己の地位を誇るが如き感じが閃めくならば、其れは貴夫人の名前に價ひせないものである。貴夫人は天上の淑女の面影を傳へて居る限りに於いて貴夫人である。眞の貴夫人は善と調和との華であつて、啻に自らが善と德とを具へて居るばかりではなく、ダンテがベアトリチエを讃めて居

るにやうに、其の人を見る事に依つて、周圍の者が善と徳とを得る如きものでなければならない。ダンテは「新生」の中にベアトリチェの徳が「如何に他の人々の上に働くかを物語らむが爲めに一つのソネットに次の如くに歌つて居る。

わが戀ふ君を貴女たちのあひだに見るものは
ありとあらゆる福ひをすべて完たく見るなれ
彼女とともにあゆむものは美しき恩寵を
神のみまへに感謝すべきなり、しかして
彼女の美しさにはたかき德あれば、
ねたみごころはいかなる人にもおこることなく
なほ人々をして彼女とともに貴とさと
愛と信を衣として歩ましむ。
彼女の面わはすべてのものを謙だらしめ、
たゞ彼女ひとりたのしきすがたなるのみならで、
みな人は彼女によりて譽れをぞうく。
彼女の行ひはあつき優しさありて、
こころにかの君をもとめ思へば。
人みな愛の妙へなる甘きにためいきすなり。

我が國に於いて自分が貴夫人の鑑として最も尊ぶのは彼の光明皇后である。皇后は美しく、德高く、信心深く、人民に善

と美との光りを被らせる程の、其の名に相應しき后であつた。厚く三寶を敬ひ、寺を建て、貧しき者、病める者を憐れまれた。手づから浴室に於いて癩病やみの膿を洗ひ、また路傍に於いて乞丐に化成した阿閦佛に逢はれたと云ふは實に美しき説話である。我々は皇后が乞丐を惠み、其の乞丐が實は佛であつた時に、跪いて佛を拜する皇后の姿を讃美せずには居られない。凡そ帝王が神を敬ひ、皇后が佛に禮する事には一種特別な美しさがある。彼等は地上の最高の權力者であるが故に、彼等が拜するは權力に對してゞはなく、其の凡ての地上の者を拜跪せしめる權力を以ても、尙拜跪せなければならない德の力を拜跪するのである。然も此れを拜跪する事に依つて彼等の威嚴は益々加はるのである。其處に天輪聖王の特殊な美しさがある。光明皇后の場合に於いては、聖武天皇を輔けて天輪聖王たらしめ、國母としての最高の地位にあつて其の美と德とを以て遍く人民を德の光りに浴せしめたのである。何者も聖貧の人の前に跪く美しくして高貴なる貴夫人程此の地上に於いて美しきものはないであらう。

自分は「父の心配」の小山夫人に於いて、又一人の母らしき、夫人らしき、年長けたる婦人を書く心算であつた。自分はあの場合小山夫人は最も相應しく振舞はせた心算である。あの場合小山夫人が道子に對して賞讃と感謝の心を持ち、其れを表現したいのは固より當然である。併し其れをくどく言ひ現はす事は此の場合に相應しくなく、又自分の娘に幸福を與へて呉れた道子に對して、却つて露骨となるであらう。其れは心なき業である。併し乍ら其の感謝と賞讃の心持を云ひ表はさない事は又人情を知らぬ心なき業である。故に小山夫人は此の溢るゝ賞讃と感謝の心を「ほんの一口だけ」表したのである。然も一つの實際問題を、道子にとつては實に重要な音樂を勉强する爲めに洋行すると云ふ問題を申し出たのである。あの申し出はあの場合相應しき事であり、相應しき仕方に於いて爲されたのである。然も其れは心と形との如何に依つては、最も露骨なオフェンシヴな心なき業である。小山夫人は充分に其の危險を知り乍ら、道子に對する愛の爲めに、道子に取つて此の大事なことを言つて遣らずには居られなかつたのである。其れは道子の心の悲しみを支へる一つの柱を

與へむ爲めの愛であつた。夫人は道子の心を傷つけざらん事を充分に心使ひし乍ら、敢て其の申し出を爲したのである。其の申しでが心なき業とならなかつたのは、夫人の德と眞心の爲めと、此れを受け入れる道子の心の素直さの爲めであつた。あのシーンを只蛇足であると云つて斥けるが如き批評家は自分には調和に對する感覺の乏しき、心情淺き人としか思へない。我々の日常生活に於いて、斯くの如き心使ひは、實意の表はれる最も大事な機會であり、從つて此れを素直に受け入れざる事は心なき業である。例へば或る貧しき人に何事かの勞を拂はせた時に、其の人が報酬を目的として働いたのではない事を熟知し乍らも、何等かの謝禮をしたいと願ふのは自然である。而して其れを品物を以てするよりも、金錢を以てする方が便利ならむと推察して一封を贈つたとする。彼は其れに依つて恩を返したと思ふのではなく、取引きが濟むだと思ふのでもなく、相手を恥づかしめる心算では猶更にない。其の金錢は感謝と實意との象徴である。此の場合相手が立腹し、無下に此れを突き返すが如きは心なき業である。此の場合には贈つた者は赤面する外はない。此の場合は無邪氣に、素直に受け取るのが相應しい。無邪氣さと素直さとが缺乏する時、我々の日常生活は實に窮屈と不自由とに堪へないものとなるであらう。心なき業は我々の德の如何に依つて生ずるものであつて、行爲の形に依つて定まるものではない。或時は矜る事が心なき業であり、或時はへり下る事が心なき業である。無邪氣さと、蟲の良さと、人懷しさと、狎々しさと、威ある事と、猛き事とを區別するは、相手と、時と、場所とに依つて生ずる一つの呼吸であり、其の呼吸を直感するものは、我々の德であり、其の德を磨くものは我々のカルチュアである。調和に對する我々の愛が我々を導いて、我我の人格を圓滿なるものに仕上げ、玉の如くに磨き、玲瓏たるものとならしむる時、我々は初めて心なき業から放たれて自由になる事が出來るのである。

最後に此處に最も深き心なき業がある。其れは我々が我々に生を與へたもの、造物主に對する心なき業である。即ち造られた者が、造り主の心に適はぬ所業を爲す事である。此れは根本的の調和に對する感覺の不足である。例へば、造物主

は被造物が其の與へられたる生命を感謝して享け、造物主が其の生命を奪ふ迄、欣々と其の生命をエンヂョイする事を欲して居るにも拘らず、我々が其の心を享けずして、徒らに禁欲し、若しくは蟻の如くに只勞働のみを營むで、生を樂しむ事を知らざるが如き此れである。其れは慥に造り主の心に適はざる事である。我々は動物や、草木や、小兒の生活を觀る時に、つく〴〵と其の事を感ずる。其の生き、成長し、喜び遊ぶ狀は實に美しい。自分は今でもはつきりと思ひ出だす事が出來るが、自分が小學校の三年生の時、習字の授業時間に、窓の下の町外れの街道を祭りの行列が通つた時に、我々の先生は暫く習字を止めて其れを見る事を我々に許した。生徒達は筆を棄てゝ窓に倚り、此れを眺めた。併し自分は一人書き續けて、此れを見やうとはしなかつた。其の時先生は寂しさうな顏をして「そんな事をするものではありません」と云つた。自分は祭りを見やうともせずして、習字にいそしむ事を、勤勉な善い行ひであると思つたのである。併し其れは其の先生の心に適はなかつた。固より其の先生は親切な、勤勉な人であり、自分は特に其の先生に愛されてゐた。其の先生の名前も、顏も特別にはつきりと覺へてゐる。其の時先生は何故其れがいけないかを少しも説明はしなかつた。其れがいけないと云ふ事をはつきりと説明する事が先生にも出來なかつたのかも知れない。自分も此の頃になつて、初めて其の事がはつきりと解つた氣がする。其の先生は固より勤勉を好み、怠惰を厭ふて居るのである。併し子供達に自分が許した其れだけの樂しみは素直に樂しむで貰ひたかつたのである。斯くの如き心は、我々に生を與へたものゝ心にあるに相違ない。我々が素直に生命の喜びを享受しない事は神の心に適ふとは思へない。血眼になつて修業し、禁欲し、勞働するのみにて、其處に觀照と享受の餘裕を有せざる生活法は、被造物として相應しきものではないであらう。花鳥風月を樂しみ、異性を戀愛し、子供を育て、樣々の無邪氣な遊戯を試みる事は神が許して居る事である。斯くの如き生命の享受に逆ふ事は心なき業である。又與へられた環境を有るが儘に先づ受け入れむと努力する前に、此れを改造せむとする事も心なき業である。神に從順なる者は、先づ與へられたものを尊重し、自己の主觀を深める事に依つて、成る可く環境を其の儘に調和

と觀じ得るやうに努め、然る後初めて改造の要求を起す可きである。自己の主觀を深めずして、只管與件を改造せむとする事は造化に對する心なき業である。又小兒に對して、餘りに教訓めきたる育て方を爲すが如きも此の種の心なき業に屬する。小兒は無邪氣に遊びたのしむべき筈のものである。彼等に理解し難き宗教の教義や、道徳的な觀念を吹き込み、又餘りに重き科業を課する事は心なき業である。無邪氣さを缺き、教訓めきたる事を語り、餘りに勉强に捉はれたる小兒は美しくない。自分は此の點に於いては西田天香氏や江渡氏に同じ難きものである。又山室軍平氏の「平民の福音」の中に載せられた善良な少女と不良少女との日記に於いても、自分は後者の日記に寧ろ善良さを感ずる點が多い者である。自己の慾望を犧牲にし、不幸なる者を、殊に經濟的に不幸なる者を救濟するのみが善ではない。眞に素直に、自由に生き、考へ、眺め、感じ、働きかける事は一層原本的な善である。我々の基督的愛と犧牲との善は、此の素直な、自由な心を以て、他人の不平や、窮乏に對した時、自然に、必然的に起る時に於いて、最も純粹なのである。基督教的愛を教へる爲めに、無邪氣や、素直や、自由さを失はしめるならば、斯くの如き子供の育て方は子供をいぢけさせ、子供の此の地に於ける最も大事な使命を損はしめるものである。此れは許されたものに對して、素直でない處より生ずる心なき業である。又凡て物事を性急に、餘裕なく、穿鑿し過ぎ、杓子定規的に規矩せんとする事も亦此種の心なき業に屬する。其れは此の造物主の博き心と、餘裕ある宇宙の調和に適はさるものである。一つの根本的方式を立て乍ら、例外を許すところに此の世界の博き心の一つの特色がある。例外無き事は一つの貧弱である。簡單である。例へば聖書にある「犬も亦食卓より落ちたパン屑を拾つて食べる」事を許す心である。大佛の鼻の穴に盗賊の住む事を許す心である。愛嬌ある怠け者を養つて置く事は勤勉なる長者の餘裕である。雲雀の如く唄ふ事しか知らない詩人や、此の世を厭ふ尼や、星を眺めて世事を顧みない學者や、死後の世界を夢見る事に生きる宗教家や、凡て特色ある例外を、「凡ての人が衣食住の爲めに勞働せさるべからず」と云ふ根本主義の蔭に受け入れて置く事の出來るのは、世界の運行と、人類の文化史とが持たねばならない餘裕で

ある。斯くの如くにして初めて萬物を容れて化育する宇宙の心に適ふのである。

心なきの一々の具體的なる例を擧げれば、枚擧に暇ないであらう。（良寛の「心淺く見ゆるもの」といふ手記の中には數十の例が擧げてある）凡ての心なき業はもの〻調和に對する感覺の缺乏より生じ、或る時は他人に對する同情なき行爲となり、禮に適はざる振舞ひとなり、神と世界の心に反するいぢけた、不自然な、餘裕なき態度となつて現はれるのである。而して此れは卑しむ可き、憎むべき罪惡でなくても、眞に高貴を願ふ人格に取つては、其の仕上げと磨きとの完成に於いて、必ず避けられなければならないところのものである。此等の缺點と、曇りと、制限と歪みとから、自由にならない限り、我々は圓滿にして、自由なる君士人となる事は出來ないであらう。

一九二三、三、一三

精神上の苦痛

武者小路實篤

○

肉體の苦痛の耐え難いのは　肉體を尊重させるために過ぎない。もし我等の肉體に髪毛や爪のやうに神經がなかつたら、我等は肉體を平氣で傷つけるであらう。又身體に故障があつても我等の氣分が健全な時と同じやうに快活であつたら我等ば身體の故障に氣がつかないであらう。肉體の苦痛は耐え難い、いやなものであればある程、我等は肉體の傷つくことを恐れ、そして肉體の健全に成長するやう心がけるであらう。肉體の苦痛はそれ自身のためにあるのではなく、個人の生命を健全に成長さすためにある。

身體が健康な時には理窟ぬきに愉快である。身體の方から生命のよろこびが出ない時には、自分達が自分の身體を不健全な位置におく時であると云つてまちがいがない。

腹がへるのは苦痛である。それは何か食べろと云ふ知らせである　だから喰べれば愉快になる。喉が喝けば苦痛である。それは水をのめと云ふ知らせである。だから水をのめば愉快だ。働きすぎることは苦痛だ、それは休めと云ふ知らせだ、だから休むと愉快だ。

病氣の時は不快だ。それは病氣を早くなほせと云ふのだ。だから病氣がなほる時は甚だ愉快だ。

負傷をする時は隨分痛い、それは負傷をしないやうに注意をしろと云ふのだ。それは負傷をすることは身體にとつて有

害、無益だからである。

我等は時に苦痛に耐えることで我等の肉體を鍛えることは出來る。だが無理はよくない。そして大體、この肉體の耐えがたい苦痛、不快をさけることが肉體の健全を保つために必要である。

しかし人間には肉體の苦痛以外の苦痛がある。即ち精神上の苦痛だ。肉體上の苦痛は肉體を健全にたもつために存在すると見ることが出來る、言葉をかへると個人の生命をこの世に健全にたもたせるために必要であると云へる。それと同じく精神上の苦痛は、精神を健全に保つためにあると云へると思ふ。そしてそのことは人類を健全に成長させるために必要なのであると云へると思ふ。

このことはわかり切つたことと思ふ。しかし氣がついてゐない人も多いやうだから、出來るだけ說明して見たく思ふ。

○

精神的苦痛は何處からくるか。精神的苦痛にもいろいろある。一々あげて云ふのは大變であるし、時間もなく、よくゐつたにしても不可能であらう。根氣もない。それで二三例をあげては話をすゝませてゆくことにする。

例へば侮辱されてよろこぶものはあるまい。侮辱されても得すればいゝと云ふ不自然に覺つた人もたまにはあるが、それは健全だとは云へない。侮辱されゝば腹を立てる。生命もいらない、大事な家もいらない、さう云ふやうな氣持になることは誰でも同感出來る程度に、一般性をもつてゐる。之は東西古今を通じ、階級の如何んをとはず、人間のもつてゐる人情である。

侮辱されるのがいやだと云ふことは個人に侮辱されない人間になれと云ふことを命じてゐるのだととることが出來ると思ふ。

侮辱されることが不快なら不快な程、侮辱されない人間になりたいと云ふ氣は强くなるはずだ。之が人間を立派にする

ためには必要なことである。この本能は決して高尚な本能ではないが、人間らしい本能であり、そして社會的な本能である。決して自己の生命を健全にするために與へられたものとして說明することは出來ない。人間がもし侮辱されても平氣なやうに出來てゐたら、人間は安逸許りを求めて向上する力を失ふであらう。多くの人はたゞ侮辱されるのを恐れるだけで、惡事をせず、體面を重じて正しい仕事をしてゐるとゝつてもまちがいではないであらう。

侮辱されても平氣な人間に二種類ある。それは侮辱になれすぎた向上心を失なつたものと、侮辱される以上の大きな確信をもつてゐる人とである。尤も兩方とも侮辱されることは好きではないであらう。しかしその感じが前者は鈍くなり、後者は更に高くなつたのだ。前者は侮辱に壓倒されたのである。後者は侮辱に打ち克つ力をもつてゐる。

耶蘇は最もひどく侮辱された一人であらう。だが彼は侮辱するものが何にも知らないことを知つてゐた。

しかし兩者とも侮辱を感じないのではない。そして侮辱そのものを愛するのではない。

少くも人間が侮辱されるのをいやがる本能は人間を人間らしくするために必要な本能である。そして之あるために人間が墮落せず、向上し、或は發憤するために與へられてゐるものである。この藥がきゝすぎて相手を殺したり、自分を殺したりするのは自然の意志にそむいてゐる。之はお互が立派な人間になるために自然から與へられたものと見るのがすなほである。之にうちかつためには自分を他人に侮辱されない人間にすることが必要だが、それでもなほ侮辱された時には、相手の自分を侮辱する元因が、相手の理解の不足や、又相手のあやまつた人生觀の上に立つてゐることを知る時、笑つてすましておけばいゝのである。その時、侮辱されることはなほその人の確信と自覺と、決心をますことになるであらう。侮辱される以下で滿足してはいけない。侮辱されることが正當な時は我等は恥なければならない。そしてその恥に打ちかつ確信ある生活に入り、又仕事をすることが自然の意志に叶ふのである。

それから又他人に不快を與へることは不快である。我々は他人に不快を與へて平氣でゐると云ふわけにはゆかない。勿

論、自分が顧みて疚しくない時はいゝが、疚しい時にはなほ不快である。理窟はどうだつても、他人に不快を與へると云ふことは面白くない。他人をいぢめてよろこぶとか、他人の不幸をよろこぶとか云ふ人もある。さう云ふ人は侮辱される人々である。しかしさう云ふ人でなかつたら他人に不快を與へることは何となくいやなことにちがいない。それは共に愉快に共によくなることが、人類のためにいゝことで、お互に不快を感じて生てゆくことが、人類のためによくないことであるとゝつてまちがひないと思ふ。

それから罪の自覺も精神上の大きな苦痛の一つである。之も人間を自暴自棄にさせるために存在するのではなく、悔ひ改めて更に勇猛心を起させるために存在すると見ることが出來る。たゞ社會の道徳が化石してゐる時は、罪を罰すると云ふ傾向がつよくなるので、罪の自覺と社會的罰を恐れる心とが一緒になる。前者は自然なものであるが、後者は不自然の域に入つてゐる、人間の小さい頭で考へた屁理窟が入てゐる。個人の内に目ざめた罪の自覺の苦痛は耐えられないものであり、又同情されるべきものである。だから「過ちをあらためるに憚る勿れ」とか、「悔ひ改め」とか云ふことがいゝことになつてゐる。それが自然の意志に叶つてゐる。精神的病氣をなほす最良法である。人はその時、その人をせめてはいけない。それは人類の意志に反する。人類は放蕩息子を罰するのは再生させたいためである。家に歸つてくればよろこぶ父である。

○

精神的苦痛は決して、精神的苦痛のために存在してゐるのではない。

だから精神的の苦痛を受けてゐる時は、早くその元因を知つてそれをすなほにのぞくことが必要である。その元因をのぞかせるために精神的苦痛はあるのだ。

嫉妬の如きも精神的苦痛である。嫉妬することも、嫉妬されることも隨分いやなものである。

之は相手を專有したいと云ふ所から出る。兩方がお互に信じあひ、謹みあふことをそれは要求してゐるととるべきである。さもなければ自己の不當の要求をすてることを命じられてゐるととるべきである。

元より我等は人類の要求する通りには中々生きられない。

肉體だつて誰も好んで不健康にはしたくないし、又自分の力の許す限り健康にしたく思ふ、それでもいろいろの元因で身體をこわしたり、負傷したりする。

精神上の苦痛も我等は好まずして招き、又招かずしてその淵におちこむことがある。しかしさう云ふ時、自分達はよくその元因を知り其處に自然の意志を出來るだけ尊敬してそれから全快することが必要である。

簡單な快樂を求めるものは、自然がなぜ人間に精神的苦悶や、苦痛を與へたかを見ずにただ快樂でそれをごまかさうとする。罰を受けないわけにはゆかない。

この自然の意志によつて精神的苦痛をなほさうとするものは、遂に最も深い意味での樂天家、神を認めるもの、少くも天意を認めるものになる。其處には一つの法則があることを見出すから。しかしそれをおろそかにして精神的苦痛をごまかすものは、益々天意からはなれ、よりどころを失なふ。

精神的に何となく愉快な時は、自分の精神のあり場所が正しい時だ。そして精神的に何となく不快な時は自分の心のあり場所が正しくない時だ。

憎惡が美徳でないのは、憎惡に燃えることで心が愉快にはならないことでわかる。それは元より憎惡を起させる元因にもよくない所がある。自然は一方それをなほすことを求めてはゐるが、同時にその人の心の用意のまだ不足を示してゐる。

憎惡を愛にかへることが出來る人があつたら、それは世に勝つた人であり、不調和を調和で喰ひとめる人である。

「敵を愛せよ」と云ふ。愛することによつて、おもむろに敵に反省すべき點は反省させることが出來る人は敵に勝つた人

である。

自分は憎惡に燃えながら相手に反省を求めたり、相手を忠告したりする人を見る時、あさましい氣がする。その時その人の精神的病氣は相手に傳染する

心が憎惡に燃えてゐる時でも、相手を屈服させることは出來る。しかし相手と融和することは出來ない。そして自分の心もちを愉快にすることは出來ない。そして何か他の元因で心のなかが愉快になつた時は、憎惡は姿をかくしてゐる。

それは自然は一時的に憎惡に燃ゆることをやむを得ずゆるしてはゐるが、よろこんではゆるしてゐないことを示してゐる。

憎惡は人類の意志がすなほに生ることが出來ない時に起る、一種の害をふくむ黑雲である。兩者が融和したくつて融和出來ない時に起る。だからお互が讓りあつて調和出來れば憎惡はなくなる、そして和解したよろこびが生れる。それは人類の健全の成長に役に立つものである。

人類は親であつて、個人は子供である。仲のいゝことを人類はのぞんでゐる。だから仲よく成長してゆく時、心によろこびの使ひをおくり、仲がよくなく協力すべき力を相爭ふことにつかふ時、心の內に罰として苦痛の使使おくる。それは早く和解させたいためである。しかしそれは皆が仲よく安逸をむさぼることを意味しない。皆が仲よく精神と肉體を健全に生かすことを意味する。

自然や人類は言葉や、行ひで我等を制裁したり、罰したりはしない、しかし我等に精神的苦痛を與へることで、我等を制裁し、罰し又我等を導いてゐる

目は美しいものを見ることを欲し、耳は美しい音をきくことを欲する。そして精神は美しき精神にふれることを欲する。そのよろこびは無限である。

自分は隨分要領の得ないかき方をしたかも知れない。だが、自分の言ひたいことはわかつたと思ふ。あとは自分で實際の場合にあてはめて考へてもらふことをのぞむ。

我等は精神上の苦痛を耐え忍ぶ事を傲りにしてはいけない。それは印度の苦行僧が身體を傷つけてよろこぶやうに醜い。

我等は精神上の苦痛をまた安價にごまかせると思つてはいけない。それは腹がわるいのに、痛みさへとまればもういゝと思つてゐるのよりなほ愚である。その時苦痛は反つて增して歸つてくるだらう。さもなくも自分のより所からます〳〵迷ひ出すであらう。

我等は精神上の苦痛はそのよつてくる所を見きはめなければならない。そしてその元因がわかつたらその元因をのぞかなければならない。その元因がわからなかつたら、その元因を根氣よくさがさなければならない。又元因がわかつても中中なほしにくかつたら、根氣よく、それをなほさうとしなければならない。我等をつくつたものは我等に不可能なことを要求しない。萬一要求して來たら我等はそれに責任はない。自分には出來ること切り出來ません。あとはあなたに任せますと云ふより仕方がない。

我等は精神上の苦悶を見當ちがひな方法でなほさうとする時、我等はその苦悶はとてもとりのぞくことの出來ないもののやうに思ふだらう。だがその苦悶を人類の望む通りに解決がつく時、人類はその人の心に喜びの使をよこし、聲高く生命の讃歌を歌はす。

その時、理窟はどうつかうとも、その人は愉快を感じないわけにはゆかない。

自分は精神上の藪醫者が、人間の心の苦痛、及び喜びの微妙さを知らずに、知つた風のことをよく云ふのを聞く、彼等は、すべての人間が人類の一員であることを知らない。そして人類の意志を知らない。それでは救ひの來ないのは當然である。

（一二、三、一六）

心靈虐殺の兒童教育

原田實

自然が親をば教育家に、兒どもをば教育の對象物に、それぞれ造らなんだが爲めに、すべての教育が失敗に了つたとはルソーの雋鋭な發想だが、この批評家らしい言葉の底に含まれてゐる考へと同じやうな考へは、ルソーの如き卓拔な頭腦の所有者ならなくとも、少なくもすなほに人間の心を眺める者の、現在の教育に對した場合、極く普通に懷かずにはゐられないところのものである。永い間人間が言ひならはして來てゐる教育といふものが、本當に人間を造ることゝは必ずしも親密な關係を持つてをらぬものであるといふことは、まことに誰の心の眼にも、今や瞭然ではあるが、然しながらかなり深く看取せられてをるところである。

然し、教育がどうのかうのといふ理屈はもう聽き飽きた。或ひは言ひ飽きた。エレン・ケイはこんなことを言つてゐる『私は未だ曾て「自己活動」とか「個人的發達」とか「選擇の自由」とかいふ美はしい言葉を伴はない教育學上の論議を讀んだことはない。これらの言葉は恰も私に、食人族の犧牲祭に伴奏される音樂を想はしめる。これらの言葉は使用されると同時に、しかもその同じ主張者に依つて制限や差控へやが説かれる。彼等が表看板に借りて改修を主張し居るところの偉大なる原理に比ぶれば、彼等の主張の實際は滑稽なほどに無意義である。從つて生徒は、教育の理想、教育學的組織、試驗の要求（彼等は試驗の廢止を肯んじない）の犧牲となることを何時までも續けてゐる。學校が兒どもに對して犯してゐる不斷の罪惡は、常に兒どもに關する謬理に墮ちてゐるといふことである』と。

私はこゝには理屈を言はないで、直ちに吾々の世界に行はれてゐる兒どもの教育の事實の一面を觀て見たい。そしてそこに、いかに兒どもの心靈を虐殺し人類の生命の芽を蹂躪し去るやうな要素のあるかを視、そして心ある人々とともに、これを歎きこれを憤りたいとおもふ。

二

兒どもは何處にも休息所を持たない觀がある。家庭には大人がゐる。祖父母も父母も大きな兄も姉も、恐く皆兒どもにとつては、己れの平和な世界を脅かす無賴の徒であるに過ぎない場合が多い。多くは、兒どもを平和な兒ども自身の精神の天國に神遊せしめようとはしない。愛すると言つては絕え間ない干渉をする。干渉でなくても、愛撫の亂發、接吻の亂射が試みられる。何でそれが兒どもにとつて有難いことであらう。中にも教育に心懸けるといふ親達は、多くは兒どもの精神の世界を、不知不識のうちに脅かし續けるのが常である。己れの趣味に依り、己れの思想に依り、己れの習慣に依り、己れの性癖に依つて、兒どもの一擧一動を支配しようとあせる結果になるのは、この種の親達の常例である。

兒どもの精神の世界は、眞に到り難い王國の觀があるのだ。兒どもは、意識的に言葉や文章を以て自己の思想や理想やを表現するといふやうな間のろいことはしない。そんな必要がないのだ。ただ彼等は直接に生活する。ひたむきにただ生活するのだ。然るに、兒どもに對する教育的な親達の顧慮の多くは、えて馬鹿らしい發問となつて現はれがちである。例へば、お前は今何を考へてゐるかとか、お前は悲しくないかとか、お前は嬉しくないかとか、お母さんとお父さんとどちらが好きかとか、お母さんがゐなくなつてもよいかとか、大人になつたらとても失禮で言へないやうな發問をして、漫りに兒どもの心の秘密に觸れようとする。しかも、兒どもがこれに對して逡巡して返答を遲らすやうのことがあれば、愈よ益よ執拗に問ひ詰めて行く。子供は面倒になるから、明々白々の虛僞や出鱈目を言はざるを得ない。己れの生存の爲めには仕方がない、いゝ加減なことを言つてその場を逃れようとする。ところが、洞察力の鈍いおしなべての親達は、兒どものいや／＼ながらのそんな返答からも、飛び上るやうな喜びをでも發見するかのやうに喜んで見せたり、またその反對に苦り切つて見せたりする。そこで兒どもは、自らのいゝ加減な返答にも、意外な反響のあるのを見て、虛僞や出鱈目に深く興味を持つやうになり、その純潔な心が知らず識らずに汚され、やがて心靈の虐殺が營まれる結果となるのである。

さうでないにしても、さういふ發問に依つて兒どもの自由が刻々に妨げられて行く。伸びようとする若芽が絕えず喙ばまれて行くのである。兒ども時代に、おのが庭の古木の幹の片蔭で、或は屋根裏の小部屋の片隅で、文字どほり魂を天國に遊ばせつゝ夢遊病者の如くに己れ一人の世界に神遊した自分達の快い經驗を思ひ起し得る人々は、所謂教育的な親達のその所謂教育的な配慮が、却つて甚だしく兒どもの精神の平安を害し、引いて身體の發育を妨げずにはおかぬといふ

ことを知るであらう。

三

況んや、無思慮なる大方の大人達の間においては、兒ども達は殆ど一寸の身動きも出來ない概がある。右へ動いても左へ歩いても、前へ進んでも、後へ退いても、殆ど動きさへすれば、無意味な叱責や誰何やの洪水が忽ち湧き起るのである。然しながら、僅かに幸ひなことには、動かなければ生きられないのが、兒どもの本性なのであるから、兒どもはそれでもなほ事實に於ては多少のスキを窺つて幾らかは冒險的に活躍を試みるのである。但しこの爲めに、彼等がその心靈の上に受ける打擊の恐ろしさが如何なるものであるかは、心あるものゝ思ふて見なければならぬところのものである。

而して、その叱責や誰何が理不盡である上に更にまた、彼等の叱責は常に論理的徹底を缺いでゐる。所謂ロヂツクが合はないのだ。事物に對する兒どもの態度は、常に清純透徹してゐて、如何なる場合にも人性の泉に根ざすみづ〳〵しき直ほさを失はぬのであるが、大人の叱責には殆ど論理的連絡がない。例へば、兒どもが氷辷りをやるとする。大人は始めはその無邪氣さに拍手して歡ぶかも知れぬが、一朝その氷面が裂けて兒どもが衣服でも濡らすことにならうものなら、忽ち大人は「それ見ろ」とばかりに叱り飛ばす。また例へば、兒どもが石垣の上を渡るとする。大人は始めは一寸位叱るけれども、兒どもがその叱りに屈せず遊びを續ける時は、つひに喝采して見物することをしかねない。但しその兒どもが、ひと度足を踏みはずして墜落するが如きことあれば、また「それ見たか」と叱り飛ばす。その拍手や喝采と叱責との間の論理が到底合はない。少なくも兒どもにはその理論が理解出來ないのだ。

もつと露骨な例を擧げれば、兒どもがうちの座敷でお茶をこぼした時はこれを叱らないやうな母親も、他家の座敷で同じ兒どもがそのやうな過ちをする時は、まるで人が變つたやうな劍幕で叱り飛ばすのである。然るに純眞な兒どもにはその間の論理が辿れない。たゞ大人の權威と愛とを疑ふばかりだ。

而して餘りに度々さういふことにぶつかると、つひに兒どもは、人前を繕ふことが道德なのだなと考へるやうになる。また先きに擧げたやうな例の場合であれば、行爲の結果のみを重んずることが道德なのだなと解するやうになる。これが純潔なる兒どもの心靈の虐殺でなくて何であらう。

四

兒どもの心靈の虐殺は、學校に於て更に益々甚だしく慘酷に行はれる。

多數の兒どもを一堂に集めて劃一に教授したり訓練したりするのだから、とてもうまく行く筈がないのだ。これこそ、個性尊重とか、創造主義とか、自動主義とか、口には言つてはゐるのだが、その立派な理窟が決して實行されてはゐないのである。

氣の弱い神經質のデリケートな兒どもは、學校に於ける社會的生活から、いた／＼しく壓迫を感じ、打擊を受ける。輕はづみな驕慢な傾向の兒どもは、益々輕はずみになり驕慢になる。虛榮がそこで盛んに醞釀される。兒どもらしい純眞な性格が、日々刻々そこに於て削り取られ奪ひ去られてしまふのである。そこに於ては、殆んどあらゆる兒どもに、その固有の本性を伸ばし得るの機會や餘地が與へられないのである。學校は試驗の國である。劃一的な機械的な試驗が一齊に行はれて、點數ですべてが計算される。點數に依らなければ、兒どもの人格や才能が、教育者には見拔けないのか、言ひ現はせないのか。ラスキンの意見にかういふのがある「教育の眞の目的は、兒どもをして自身固有の特性を悟らしめ、それを益々力强からしめんとするところにあらねばならぬ。決して兒どもを叱咤して己れよりも明白に秀れてゐるものどもと空虛なる競爭をせしめんと强ふるが如きところにあつてはならぬ」と。

ところが、點數を重んずるの結果は、その點數が如何程に兒どもの才能なり人格なりを象徵してゐるかといふ根本のところに神經を働かすことを忘れて、ひたすらにたゞ、點數そのものゝ扱ひ方だけを數學的に正しくしやうとのみ努めるやうになつて、噓のやうな、滑稽で而かも最もシリヤスな過誤に墮ちたりするのである。

たとへば、一學年に三回の試驗を課しその三回の取り點を平均してその學年終了の場合の成績を造り出すといふが如き數學的には正しい取扱ひか知らぬが、教育の効果の考査としては如何にも不思議なやり方ではないか。眞にこの試驗が、その兒どもの才能なり人格なりの表象を得んが爲めに行はれるものであるならば、何故に最後の試驗の成績を以て修了の場合の成績とはしないのであるか。何でそれをずつと過去のものと差引して平均點を出さねばならぬのか。元來教育者は、兒どもの向上の步みを一日一刻でも一所に停滯せしめずに進めるのがその本務である。從つて最近のところでその成績を見なければならぬわけではないか。何故に半年もそれ以上もの前のものをかつぎ出す必要があるのだ。要するに、點の數に重きを置く結果、知らず識らず數學的の正義に誤られてしまつてゐるのである。

この平均點を割出すといふ數學的正義は、現に私自身にかういふ經驗をさせたことがある。今より十數年前のことにはなるが、私は病氣の爲めに中學校の四學年の終りから休み始

め、引き續き二學年の第一學期を全部缺席し、從つてその學期の試驗を受けなかつた。依つて私は、その學年中、三回受くべき試驗を二回しか受けなかつたのである。その結果私は卒業の成績として、二回分の取り點を三分されて平均點を出されたのであつた。何といふ滑稽な正義だらう。數年の學校生活から點の一點でも多いのを誇りとするやうに教育されてゐた私にとつては、これは隨分情けないことだつた。然しながら、中學校に於ては未だよかつた。なぜならば級友も親達も多少は私の平生を知つてゐてくれたので、その二回分を三等分された點のみに依らないで私といふものを見てくれたからであつた。然るに私はその後、一人の知己もゐない私立早稻田大學といふ專門學校にはいつた。その入學願書に中學卒業の場合の成績證明書を添附して出せといふのだ。ところで私の出た中學校の成績證明書なるものには、その二回分を三等分した成績表が掲げられてあつて、その證明書には備考といふ記入欄が設けてはあつても、そこに一言の附記もなかつた。そのまた成績證明書なるものを、早稻田大學のMといふ英作文の先生が大いに參考して、最初の一二ケ月はその點數に從つて或る者は優遇され或る者はひどく輕蔑されるといふ具合だつた。

　こんな經驗は、私一人の經驗だけである筈がない。これらは、馬鹿らしいにもなんにも話にならぬほどのものだが、それがまた眞正々銘の事實だから驚く。

　然しながら一體、修身の點と讀方の點と數學の點と體操の點と何々の點とを引きくるめて平均すれば、その兒どもの成績乃至才能人格の表象が得られると思ふのか、てんで馬鹿らしい錯誤ではないか。そこに露ほどの個性尊重もなく、獨創力に對する憧憬もない。こんな馬鹿らしい錯誤的取扱ひを以てデリケートな感情的な兒どもの心に激烈な一喜一憂を感ぜしめることは、兒どもの心靈に對する暴虐なる脅喝であつて、その害惡の及ぶところ眞に果てしがない。

　この點取り式試驗は、今や上中下あらゆる學校の入學者選拔の試驗法として採用せられ、その害惡極度に達し、最も徹底的に兒どもの心靈の虐殺を行ひつゝある。

五

　然しながら、學校に於ける兒どもの心靈虐殺は、かういふ取り扱ひの上に於てばかり行はれるのでない。もつと根本的な方面、教育者の所謂精神陶冶の方面に於て、或は道德觀念涵養の方面に於て、更に一層甚だしいと言へるのである。試みに、今日文部省が編纂特輯して全國の小學校に專用せしめてゐるところの國定教科書なるものを通覽して見るがいゝ。

　そこには、すなほに兒どもの心靈を伸ばし眞にその幸福なる生活を導くやうな教材は極めて僅少で、一部大人の都合に依

つて彼等に不當な犠牲を拂はしめ、從つて兒どもの心靈を虐殺する結果に陥ちざるを得ぬやうな教材のみが徒らに多いのだ。

修身書、讀本、歴史教科書等に於てはそれが殊に甚だしい斬つたり、殺したり、蹴つたり、打つたりの、殺伐殘忍な流血的鬪爭の教材が、多數を占めてゐる。しかもそれらの大部分が、封建領主の利己的な乃至は無意味な鬪爭の斷片的であつて、人道的な愛の精神の如きは、殆ど皆無と言つていゝ。封建領主の爲めに無意味な非人道的な犠牲を拂ふことが、何で人間の常道であらう。況してや、どうして純潔なる兒どもに理解の行く道理であると言へよう。ざつと一瞥したところでも、尋常小學讀本中に、次ぎのやうな、馬鹿らしい、また恐ろしい、また有害な教材が取入れられてある。

尋常科一學年用のものゝうちには「ベンケイ ガ ウシワカマル ニ マケマシタ」といふ文句附きで、獰猛な大男が少年に向つて大薙刀を振り廻してゐる殺伐な繪がある。六七歳の兒どもに斬り合ひを遊戲化して見せるこの恐ろしさを、多くの大人達が感じ得ないといふなら、それは既に教育に依つてその心靈を虐殺されてしまつてゐるからであらう。また、加藤清正といふ封建武士が虎をば「タツタ 一ツキ デ ツキコロシマシタ」と言つて、野蠻極まる繪がある。何の意味でわざ／＼こんなものを教示せねばならぬのか。

尋常二學年用のものゝうちには「八ちやうじらう」や「のみのすくね」など〻題して、斬り合ひや蹴り合ひが出て來るまた「瓜生保の母」と題して、封建領主の無意味な鬪爭に喜んで幾人もの自分の子を死なせようとする母親のドエライ物語がある。この母親の心が、よし道徳的なものであるとしても、どうして七歳八歳の子どもにその母親の心が了解されよう。殺伐の奨勵以外何の效果も期待することの出來ない物語だ。

尋常三學年用のものゝうちには、梅ぼしが「いくさときいたその時は、いさむ兵士のお供して、みくにゝつくすこのわたし」と自讃してゐるところがある。遠洋航海とか探險旅行とかにお供して「みくにゝつくすこのわたし」とでも言ふべきところだ。何んで、戰爭ばかり持ち出すのであるか。また「かめわり柴田」と題して戰爭の智慧を讃美したものがある。「そが兄弟」と題して、親をころされたの、かたきを討取つたのといふ殺伐なのがある。また「豐臣秀吉」と題して「日本中の大名で秀吉のいふことを聞かない者はないやうになつた」ので「今度は朝鮮を通つて明國を討たうと思つた」などゝいふ模範的侵略主義の物語が、無反省に掲げられてゐる。また牛と熊とが殘忍にも流血の格鬪をするのを、人々が人山を築つて見物するといふ、殺伐無意味な而して全く嘘にきまつた話が取入れられてある。

尋常四學年用のものには「ちゑだめし」と題して「大國の王樣がとなりの小さい國を攻めようと思ひました」などゝいふ侵略主義公許の世界の物語がある。また、日本紙と西洋紙とが自慢くらべをして旗色の惡い日本紙が最後に「ソンナニイバッテモ、アノ神ダナの御札や御幣ニハナレマイ」などゝ言ひ出して暗に勝利となつたらしい、滑稽至極なそして愚劣有害な國粹主義が恥かしげもなく出て來る。

尋常五學年用のものゝうちには「我が陸軍」と題して軍備狀態のほこらしげな說明があるが、それには軍備の目的に關する何の斷りもない。なほ「齋藤實盛」と題する殺伐殘忍な奴がある。

尋常六學年用のものゝうちには「我が海軍」といふのが出て來るが、同じくその目的に關する合理的な說明はない。殊に「鳥居勝商」と題する一文の末段に於ては、鳥居といふ封建武士の意氣を敍述した筆を轉させて、『昔調伊企儺は新羅と戰ひて新羅の將に捕へられる。其の將伊企儺をして日本に向つて「日本の將我がしりを食へ。」と號ばしむ。伊企儺卻つて「新羅王我がしりを食へ。」といひて、幾度責めらるれども改めず、遂に殺されたり。古今勇士の意氣甚だ相似たらずや。』と讃歎してゐる。こゝに至つて人道精神も四海同胞の精神も世界的精神もあつたものでない。どこに愛があるのだ。どこに協同があるのだ。なほ「日本の女子」といふ一課がある。これがまた、多くの婦人諸君に是非とも改めて讀んで頂きたいシロ物である。

而して、これらの殘忍殺伐な爭鬪物語の殆ど唯一の辯護的口實は、それらが、日本が有する有難い國民的傳說だからといふにあるらしいが、さりとは呪はしい傳說なるかな。これではまるで封建制度下の兒どもの教育でもあるかのやうである。封建時代に還らせられてはたまつたものでない。須らく兒ども本來の愛の精神を生かし、その心靈を十分に伸びしめるやうにせなくてはならぬ。その爲めに妨害となるならば、國民的傳說だらうが何だらうが、遠慮なく拒否せなくてはならぬ。純眞に生きる生命の生長を措いては、傳說も何もあつたものでないからである。

六

そこで私は、痛切に思ふのである。抑も日本の小學校は現に多數の女教員を有してゐる筈である。而して婦人と兒どもとの關係は、男子と子供との關係よりも、遙かに運命的であり、從つてその間の愛情は精神的にもまた感覺的にも事實のところ男子と兒どもとの間のそれよりも勝つてゐるのである。然らば、よし男子の教員が學校に於けるこの種の心靈啓發

を甚だ苦痛としないでゐるとしても、女教員だけは少なくもこれを平氣で看過し得る筈がないではないかと、いつも私は、なほ世の不純に染まず逞ましい愛の精神に燃えてゐる筈の年若い女教員が、このやうな殺伐殘忍な教材を提げて、七八歳の幼い男女兒を前に、果してどのやうな教授を行ふものであらうか、果してそんな教授が出來るものであらうかと、不思議におもうてゐるのである。私は切に、若き婦人達の間から兒童教育改善の眞の叫びが起つて來るに違ひないと期待してゐるものである。

尤も、この如き教育が學校に於て行はれることは、國家の制度の根本精神に原因が存し、國政の衝にある者が大いにその責めに任ぜねばならぬものであり、從つて何よりも先づ制度の根本精神に大改革を加へねばならぬものである。これらの點に關しては、既に幾度か述べたこともあるし、また今後も大いに述べるつもりであるが、こゝにはただ、兒どもの心靈が教育に依つて虐殺されつゝあるといふ事實を指摘するに止めて、一先づ筆を擱くことゝする。

なほ、中等學校に於ける懲罰法、わけても退校などゝいふ方法が、如何に兒どもの心靈を殘忍に虐殺するものであるか、また社會教育などと呼ばるゝものに依つても如何にそのやうな結果が現はれてゐるか、それらに就いての事實も、舉げて見たいのであるが、紙面の都合もあり、他に用事を控へてをる關係もあり、割愛することゝする。

ウエルスは、その近著『文明の救濟』のうちに、教育は年々大いに擴張されつゝあるけれども教育の觀念は決して發達しつゝあらないといふやうなことを言つてゐたと記憶するが、今や眞に吾々は、兒童教育に關する觀念を全然一變しなければならぬ秋に際會してゐるのである。教育者も教育者でない者も、共々に大いにこの點に最大限の聰明と努力とを投資するのでなければならぬ。

（十二年三月三十日）

子供の藝術欲をどう助成するか

小供に敎へられよ

中川紀元

○吾々は先づ小供は敎へられるものだと云ふ偏見をなくしなければならない。彼等はそれ自身に何等かの芽を持つてゐる。大人の親切はたゞこれを「助成」してやれることに止まる。小供には智識や經驗が乏しいから大人はこれを馬鹿にするが、良き精神良き感覺に於ては彼等に降參しなければならないことが多いだらう。

大人は小供の進步したものではない。小供は大人になる準備の人ではない。小供は大人とちがつた人である。小供には小供の生活がある。吾々は小供の時に持つてゐた澤山の良いものを失つてゐる。そしてそれは何うにも取返しのつかないことであるのだ。

○近來學校でも家庭でも小供の藝術敎育に就いて注意するやうになつたのはいゝが、變に凝つて小供を弄り物にしないやうに願ひたい。下手に敎育されるより寧ろ野生のまゝに放つて置かれた方がいゝ。個性は自分の力でそれを見出す努力のうちに進展する。敎師のまた親の親切は小供の苦しみを小供だけに負はしめる我慢を伴はなければならない。

大人と同じ社會に雜居するために小供は隨分ひどい目に逢つてゐる。大人が小供を見てやれるのは外面の事だけであるとさへ考へられる。大人の粗雜な感じや常識を標準にして小

供の内面にまで立入つて世話をやくことは恐ろしいことだ。

○私は小供に向つて「大きく自然をつかめ」と云ふ。人がある景色の前に立つて「あゝいゝなあ」と感ずる時は、その自然の全體が同時に一しよになつて吾々に迫つて來てゐるのだ。そこに三軒の家があり松林をへだてゝ海が見え沖の方に帆船が浮んでゐるといふやうな個々の觀察を離れたものである。子供の描いた繪の中に大人の常識でだまつてゐる譯にゆかないやうな色や線や形やがあるとする。「この建物の柱は曲つてゐるね、もつと眞直に描かなくちあいけない」と注意されて子供は成程と氣がついてそれを描きなほす。この時子供の注意は單に柱といふ「部分」だけに向けられて「全體」を忘れてゐる。大人も子供も最初の曲つた柱の方がもつと正しくもつと必然なものであつたといふことに氣が附かないのだ。かう云ふ事はいくらでもある。

○今日では最早臨本教育によつてよい指導が出來得ると信じてゐるやうな人はあるまいが、これに代へるに寫生の方法を採らしめるとしてもなまじいな指導では結果は五十歩、百歩に止る。ある型を以て物の看方描き方を規定する愚かさは避けられなければならない。私は小學校で小供を敎へてゐた時一年間の後に級中の生徒の字體が自分のに似て來たのに驚いた事がある。その時は先生といふものは如何にも恐いことをしてゐる人間だと考へた。

子供は一面始末に終へない模倣性を持つてゐる。一度ある型が浸込むと際限なくそれに引きづられて行つて新しく自分の眼で自然を見なほす事が出來なくなる。これは多く周圍の惡い感化に依ると思ふ。よき訓練を要するのはこゝだ。

○巴里のある畫商で世界各國の小供の繪を集めた展覽會のあつた時、そこに並べられた私の出品した日本の小供達の繪の十數枚が恰かも同一人の描いたもののやうに他のものと異つて見えたことを思ひ出す。それは油繪の中に日本畫があるやうな相違であつた。同じ東京のうちでも各小學校にそれ〴〵の特長（もしくは型）がある。惡い型を壞して行くことは仲々容易なことではない。

○敎師は先づ威嚴を去れ。小供の相談相手であり手傳人であると思へ。「物」の學問と異つて藝術的な事柄に就いては小供に及ばないところが色々とあることを知る人こそよき敎師である。自分はすこしも分らぬものとして兒童に對せよ。小學校でなまじ繪の描ける先生が却つて生徒を毒してゐる例は澤山にある。私は嘗て自分の生徒の作品を大勢の人たちに見せた時座にあつた一人の日本畫家が「なるほど小供にしてはうまく描けてゐますね」と云つたのにひどく腹を立てたことがある。こんな人間こそ世の中で一番藝術家でない者であると思つた。

○小供をどう扱つていゝか分らなくなつたと云ふ歎聲を屢

く聞く。その人は既でに教育法に就いて一歩進んで來たのだ。誰に訊ねてもどう考へても（これでよろしい、これさへあれば）と云ふ指導法はない。始終凝つたり迷つたりして苦しんで行く間に教育者の進歩がある。人はかう云ふ教育に不安を感ずるかも知れない。しかしこれは仕方のない事である。人間が人間を導くのであるから。

小供に解釋を與へる必要はない。よき問題を與へよ。それで充分だ。

○子供の繪の尊さは純な感情が無遠慮に溢れてゐるところにある。そこでは最早技巧や常識的な物の看方やは問題でない。小供の人間性そのものゝ表はれである。うまいもまづいもない。それは良い惡いを絶したどうにもならない子供の全體であるのだ。（しかしこれは子供に限られた事ではない。大人の藝術の場合に於てもすこしもかはつてゐないのであるが――さて實際は！）

大人の趣味を小供に強ひてはならない。小供の表現慾はそんな生温いものではない。生活がそのまゝに藝術にされて美醜の問題を超えて機械でも物質でもがそのまゝに子供の心に活きてゆく。

子供は感じを表すためにはどんな方法でもとるものだ。材料の性質なぞ考へてゐる暇がないやうに見える。ある場合吾々はその無謀に驚き入つてしまふ。その無謀さが何時も人を驚嘆させる強い表現を結果するのである。

○鉛筆、クレイヨン、水彩、なぞの材料はそれぞれの特長と缺點とを持つてゐる。どの一つでも完全なものはない。出來得るならばすべての異つた種類を與へて隨意にその場合の選擇に任せたい。材料の拘束が表現を妨げたり鈍らせたりすることは實例に乏しくない。

文部省の新定畫帖なぞの採つてゐる年齡によつて寫生の對象物を更えてゆく方法にもあまりこだはる必要はないと考へる。尋常科一年生には簡單な茶碗一つをあてがひ高等科のものには混入つた風景を描かせるといふやうな差別は要らない。百軒の家のある復雜な風景でも幼年者にはその年齡に應じた單純な看方があり上級者には石ころ一つでも充分に復雜な觀察もあり得る。小供だつて何に感心してもよい筈である。その感心が小供らしいのが尊いのである。

○繪の教育に先づ基礎的の修練（たとへばデツサン）を經た上に自由な各自の創作をさせるといふやうな事もよく云はれたりする事だがこれも誤つてゐる。これは繪の普遍的妥當性をのみ重要視する短見である。この點文部省の小學圖畫科の要旨としてある「物體の正確なる觀取をなさしめ兼ねて美觀を養成する」と云ふ愚案を願下げにして貰ひたい。

すでに何う看なければならないと定つてゐない、どう描かなければいけないと決まつてゐない。兒童の試みる一枚々々

の繪は上手になる修業ではない。その時々の小供の內生の表はれである。何うしても生きた人間を機械扱ひにしないことだ。

○子供を知ること――子供を分ること――これが敎育の要諦であらうと私は信ずる。子供を知ることは軈てその繪を解することゝなり、繪を解することは更にその小供を知ることゝなつて行く。この意味で私は小學校に專科敎員を置くことに贊成出來ない。技術を敎へるのでないから受持の敎師が他の諸學科と有機的な關係を持たせながら全體的に兒童の「人間」を作るべきである。幾級もの大勢の生徒を掛持ちにしては何うしても個々に親切な注意をくばり切れないし、受持の敎師としても圖畫のやうな重要な科目を他手に任しては本當の敎育の成績は得られまいと思ふ。

○小供の成績についての批評は充分に愼むべきである。粗雜な評點なぞで出來不出來を律しないことだ。生徒自身の相互の批評も必要であるし、また一方に樣々な繪を見せて觀賞させることも怠つてはならない。同程度の他校の生徒の作品もよし古今の畫家の作品もよし、なるべく廣く亘つて一に偏しないやうに氣を附けなければならない。或小學校で若い敎員がセザンヌの繪の寫眞版を敎室の壁一パイに張附けてゐるのを見たことがあるがこれも時々に他のものと代へるのでなければ困ることである。

○繪と習字と聯關して小供の習字について一寸云はして貰ふ。私は御手本を與へることを廢したいと考へる。これは繪の方で臨本を與へることに反對すると同じ意見からである。たゞ字は吾々の約束であるからその形と書方の順序だけは敎へる必要があるから活字を示して說明する。あとは全く各個の勝手に書かせたい。そして平素に色々な良い字を觀賞させて置くこと繪の場合と同じにしたらよい。かくして字も間違なく立派な個性の表はれを示すものとなる。

○小供に敎へられよ。小供のえらさを充分に分れ。さうしたらきつと如何に子供に對していゝかも分るにちがひない。千百の細目をつくる前に一つの大綱を握れ。繪具の混ぜ方や遠近の法則やそんなものは抑も、末である。

小供の音樂と舞踊に就て

本居長世

　人間と云ふものは、酒に醉ふた時には、誰しもが、野性を發露する、從つて多くの人が聲を揚げて歌ふとか、手足を振つて踊ると云ふやうな事をやる。之れは畢竟人間が愉快を感じた時に、假面を脫した、したいまゝの狀態と言はねばならぬ。斯かる狀態を吾々が見た時、吾人は全く其醉人が子供のそれと同樣である事を常に思ふものである。子供と云ふものは喜ばしい時には大聲を發して歌を唱ひ、或は手足を活潑に動かして踊る、跳る、時としては言葉をも成さないところの譯の判らぬ歌を出放題に創作して唱ふやうな現象は數々見受けられるのである。しかし此の場合の其の無茶苦茶な言葉や、歌或は踊りなど云ふ事を吾々は仔細に觀察して見ると、此の無茶苦茶なと云ふ意味の中にも、吾々は其の個所々々に或る律動的な即ちリズミカルな或る物を發見せずには居られない。子供の性格と云ふものは、全く大人のそれと違つて、知識とか何んとか云ふものに誤られないで、甚だ自然と合致したリズミカルであると云ふ事が常に言はれる。斯う云ふ風に大人も亦醉拂つた時には其の手足を動かし、或は聲を揚げて唱ふ。斯う云つた事が、要するに人間本來の要求であつて、之れを精練する事に依つて、そこに藝術は生れて來るのである。さうして此の今述べたやうに人間の純な感情の一番橫溢して居るところの小兒時代にあつて、此の歌、踊りと云ふものが、殊更に自然的に要求せられて、又それが必要である事は言ふ迄もないことであるが、之れを單に野生の儘放置して置かないで、所謂秩序的形式に發達せしめ又良い材料を與へて適當に教導すると云ふ事に依つて子供は易々と立派な藝術家に成り得ると私は信ずるのである。

　斯うして子供を藝術的に仕立てると云ふ事は、子供の將來の人生の陶冶上に何れ丈けの效果があるか、之れは今更言ふ迄もない事である。然らば如何にして其の秩序的教導をするかと云ふ問題になるが、私は現在自分の子供に就ても、其の時と場合に依つて種々なる方法を用ゐて試みて居るが、未だ迚も決定的に斯う云ふ方法を推奬しやうと云ふやうな確乎た

る方針も今日の所では得て居らぬ。唯、私が今迄に試みたところで、効果のあると思はれた所の二三の事項を述べやうと思ふ。子供を音樂的に仕立てると云ふ事に就ては、要するに其の小兒時代から耳の教育を先づ第一にしなければならぬ、技術と云ふものは音樂に於ては常に二の次のものであつて、音樂の根本になるところのものは音其のものを聽き分けるところの耳其のものでなければならない。子供の生れつきに依つて全く音を聽き分ける耳のないものも百人中に一二人はあるけれども、私が考へるのによく此の子供は耳が惡いから音樂の方に向けぬとか何とか言はれる子供を見ても、仔細に觀察して見ると必ずしも其の子供の耳が、徹頭徹尾惡いものばかりでないやうに思ふ。之れは畢竟其の小兒時代に耳の教練と云ふものを親なり又、其の環境のものが忽諸にして來たが爲にさうなつて來たのが多からうと思はれる。要するに色盲に對する音盲とでも言ふやうなものも、それが生れつきのものも時に一人や二人ないこともないであらうが、此の音盲でない限り器官が普通に整ふて、又高低の音を鑑別し得る程度の耳を持つて居る以上は、幼少時代の其の教育法の如何に依り、確かに普通人の持つ耳と同樣の程度に發達せしむる事が出來るものであらうと私は信ずるものである。普通の親達は子供の他の器官即ち口を利くとか或は動作の上に於ては其の幼兒に對して可成り注意深いところの眼を見張つて之れを敎導することを忘れないが、今日迄の所では耳の教導と云ふことに就ては餘り世間の親達は深く子供に對して考へて居なかつたやうに思はれる。之れは甚だ遺憾なことで、私は音樂者としての立場から考へて、兒童の爲めに、其の幼少時代から耳の教育と云ふ事も是非心掛けておいて欲しい問題であらうと思ふと云ふのは、耳の教練を忘られたところの子供は要するに音樂を終生解する事の出來ないものになり、たとへそれが專門家になるのでなくとも萬人が美と感ずるものを感じ得ざる人間に終るとしたら之程憐れむべき事はないのである。

それで子供の中に耳の教育を何う云ふ風にしたなら宜いかと云ふと、私は此の點に於て何うしても蓄音器といふものゝ利用を推奬せずには居られない。昔は――蓄音器のなかつた時代に於ては子供の耳に始めて這入る所の音樂と云ふものは所謂母親なり子守などの子守唄其のものであつて、此の子守唄に夢路に導かれて行く所の子供の心持ちと云ふものは實に美しい、柔らかなものであつたに相違ない。子供は此の子守唄と云ふものに生れて始めて音樂的の恩惠を受けたのである。然しながら其の母親なり子守の唄ふ所の子守唄其のものが假りに非常に調子の外れた拙いものであつたら、子供は何う云ふ感じを受けたであらうか、それを朝晩に聽かされると云ふ事は、確かに子供の將來に音樂的の耳を作る上に於て大なる障害を持ち來さねばならぬ筈である。尤も母親の中には非常

に唄の上手な、調子の正しい、聲の良い人もあらうが、さう云ふ人の子守唄に依つて寢かしつけられた子供は確かに音樂の方面に於ても幸福兒であると言はねばならぬ。然しさう云つた音樂的の歌を唄ふ母親を何處の家庭でも要求しても、それは無理な要求である。そこで近來蓄音器は何處の家庭にも殆んど備付けられるやうになつて、今日其のレコードの數も種々の種類に亘つて出來た。それで此の蓄音器を利用するにしても、其の蓄音器もよく選擇して良き演奏者に依つて、佳き歌曲を吹込まれた所のレコードを選んで、而も音響其のものゝ餘り大に過ぎない事に注意して、さうして子供を寢かしつける所の道具に供すると云ふやうな事は先づ幼少時代の子供の耳を養ふ所の基礎にすると云ふ方法として面白からうと思ふ。それから子供が稍々成長して歌らしいものを唄ひ出すと云ふ時期は何の子供にもあるものであるが、其の時期は其の子供の性質如何に依つてさまぐ\あるが、先づ大概は三四歳位の時に斯う云つた現象が始まるのである。此の時代が大切な時代であつて、所謂子供が歌其のものを自分から要求して居るのであつて、自發的に音樂と云ふものを欲求するのであるから、其の場合に適當な所の教導と、又適當な材料を聽かすと云ふ事は甚だ效果のある事で、此の場合にも極めて簡單な童謠のやうなものを毎日反覆して聽かすと云ふやうな方法も宜しい。それには其の曲もさう云つた種類のものを幾枚か集めて、さうしてそれを子供に反覆して聽かして、其の中の如何なる種類を子供が好むかと云ふ事を他から考察して、其の好む所の歌曲を子供に判る迄で毎日聽かす方法が非常に面白いと思ふ。此の子供の好む所の方法を考察すると云ふ事は、畢竟子供に各曲を比較研究せしむる意味になるので、此の比較研究の爲めに子供の耳と云ふものは非常に緻密に働いて來るのである、さうして其の一枚の歌其のものが飽きる場合に又夫れより難かしい高級なる所のものを與へてさうして比較研究させると云ふやうな方法を取る。斯う云ふ教導に依つて、子供は毎日反覆させられる事に依つて、其の歌曲をたとへ歌の文句は覺えられないにしても、其の節の大體を覺え込むものである。さうして段々に發達せしめて行くと、僅かの日月の間に子供の音樂に對するところの鑑賞力と云ふものは非常な勢で發達して行くものである。さうして總て子供が學齡に到達して學校に入るやうになる時代には可成り音樂的の難かしいものをも聽くやうに發達するのである。さうして終ひには歌の父たる音樂から切り放して、今度は純器樂なものを聽かせる。さうして其の名人の奏でた所のヴアイオリンの麗はしい所の音、乃至吹奏樂、高尚なる所のオーケストラ迄でも、階級的にやさしいものから難しいものと、仔細に選擇して與へて行くやうにする。斯う云つた方法を以てすると子供の時代に於て、現在の大人の一般の人が持つて

居る所の耳、其れ以上に迄で發達せしむる事が出來るのである。さうして聲の練習と云ふ事も、技術の練習と云ふ事も、先づ私の試みた所では、五歳位から立派に始め得ると思はれる。

家に樂器が備へられて居る所の家庭であるならば、其の蓄音器で覺え習つた歌を母親なり兄弟なりが、ピヤノなりオルガンで彈いてやる、さうして同時に子供夫れ自身に愉快を與へしめると云ふ事に依つて子供は非常に興味を覺えて來る。さうして又歌の方と同時に、前に述べたる如く子供と云ふものは、其手足を動かしてリズミカルな運動をしたい欲望を持つて居るのであるから、或は蓄音器をかけてそれに合せて、唯單に足並を合せて屋内を歩ませて見ると云ふ事から始めて、簡單な動作をそれに附け加へて行くと云ふ風にして子供を遊ばさせると云ふ事は子供自身にしても音樂に合せて行動すると云ふ事は非常に愉快で、非常に喜ぶものである。斯う云つた事は亦、非常に子供の體育上に良き効果を與へるものであつて、兎角運動嫌ひであつた子供が、樂器に合はせ蓄音器に合せて運動を奬勵したが爲めに非常に健康上良い影響を齎したと云ふ實例を私は知つて居る。

それで童謠の方は近頃盛んで佳い歌曲も澤山材料が出來て居るが、之れを兒童にやらせる遊戯方面、舞踊と云ふやうな方面は童謠に比して未だ夫れ程進んで居ないやうである。之れには今少しく研究せられて良き材料を豐富に作る必要があらうと私は思ふ。さうして出來得べくんば入學初年度に於ては、彼の無意味なる體操と云ふものを廢しても、此の音樂的律動と云ふやうなものを科して行くと云ふ方が遙に子供も喜ぶであらうし又それと同時に耳の發達をも補け、藝術の鑑賞力をも補けると云ふ意味になりはせぬかと思ふ。で前にも述べたが、蓄音器の利用に就ては餘程愼重に考へなければならぬと思ふ。子供と云ふものは純なもので、非常に記憶力が發達して居るもので、如何樣にも其の教養のしやうに依つては如何樣な色にも染まり得る性質を持て居る、其の時代に環境のものが、不注意から惡い歌曲を聽かせると云ふやうな事があつたならば、それは子供の將來の上に恐るべき害毒を流さなければならぬ。又其の蓄音器をよく世間である事であるが無暗に回轉數を多くし、或は高調子でかけると云ふやうな事は、子供の耳の上にも惡い影響を與へ子供の神經に刺戟を與へるから、是れも害毒を流す所以である。又餘り大きな音で蓄音器をかけると云ふ事も甚だ宜くない事である。故に子供の教育上に蓄音器を利用する事に就ては、レコードの選擇、回轉數の制限、音量の制限、此の三つの大切な要件を念頭において大切に取扱つて戴きたいと思ふのである。

幼なき者の詩

北原白秋

一

日本のお母さん方、殊に小さな子供たちのお母さん方に、私は今夜――外ではしめやかな春の小雨が聲たててをります、この私のみみづくの家の孟宗籔や白い桃の花に。波の音や川瀬の音もきこえます。さうしてどこやらに月あかりがこもつてゐさうな、斜丘のあちらこちらにも町の灯がチラチラして、物温かな親しみのふかいよい晩です。――かうした詩の芽生についてのお話を書きつづるよい時間を得たことを幸福に思ひます。

あらためて私は、この白い羽根の鵞ペンをとりあげます。さうしてその尖をたつぷりと青インキ壺にひたして、さてしづかな點滴の音に耳をかたむけながら、何かのよい端緒がほぐれて來る、このしばらくの樂しさを今すこしく味つてゐたくおもひます。

日本のわかいお母さんたち、あなた方は今の日本の子供たちが、どれだけの鋭さで自然を觀、自分を觀てゐるか、繪畫として、文章として、歌謠として、詩として、それらをまた、どれだけの自由さで表現しつつあるか、さうした子供としてのほんたうの、さうあらねばならぬ生活に子供ながらに生きつつ、また光りかがやいて來つつあるかといふ事を、もうとくにも御承知のことと思ひます。自由畫がそれです。綴方らしい綴り方がそれです。童謠、自由詩がそれです。かうした自由な藝術教育によつて、初めて日本の子供たちはほんたうの自分たちの詩の世界で解放されたのです。私にしても童謠、自由詩の提唱者の一人として、いささかでも此の機運の開發に與つたといふことを思ふと、まつたく心から感激せずにはゐられないのです。實に今の子供たちは驚くべき自己の天分をいよいよ自由に素朴にあらはして來ました。まるで霜をあける下からころがり出る眞紅な林檎のやうに。なんとい

ふ新鮮さとか。

日本のわかいお母さんたち、もう私たちの勝利です。童謡や子供の自由詩のみについて云つても、もう時世はすつかり新装して了ひました。何を今日學校で歌つてゐますか、何を子供は作つてゐますか。何をまたかうした童謡の隆盛は語つてくれますか。

とにかく、この藝術教育の大波は今さら堰かうとしても後から後からとなだれ打つて來るばかりです。頑迷な姑息な誰がまた之を阻止することが出來ます。大人の心と型とに強ひて子供を偽らせ肖からせ、押しつけ、はめ込まうとした永い間の舊式教育は今や根柢から揺りくづされようとしてゐます、また〻ねばなりませぬ。

翻つて、ここで私は何故に子供に詩を作らせるか、何故にその詩作を奬勵して來たか、と云ふ事について、簡單に――これまで幾度も書いて來たことですから、それに實は小さな子供、學齡以下の子供たちの童謡について、つまり詩の芽生について、いろいろ書かしてもほしく、例詩もしたく、また御同意も得たく思ひますから。――ひとまづ前提としてその理由だけを明らかにして置き度いと思ひます。

日本のわかいお母さんたち、今でもかうした無智な奇問を發する人の多いのに驚きます。

A、何の必要があつて、子供に童謡や詩を作らせるのか。

第一、外の課業をなまけて了ふ。輕浮になる。

B、凡ての子供が超世間的な藝術家たり童謡詩人たるべく教育せられた後日に於て、次の時代の社會萬般の現實的方面の振興には誰が果して任じ得るのか。

C、いつたい何の必要があつて、今の詩人や音樂家が童謡などを作つて子供に歌はせねばならぬか。

これに對しては左の如く答へねばなりません。

A

私たちの藝術教育の提唱は子供をほんたうのいい子供として、純一に眞に生かさうとするからであります。本來、子供は生れながらに詩人です。で、子供に童謡や詩を作らせるのは大人にとつて必要とする功利的な何物をも大人は考へてはならないのです。また子供自身にとつて彼等が詩を作ることに於て何の必要があるなぞと疑ふことそれだけでも子供を侮蔑した言葉です。子供が詩を歌ふことは子供としての本然であつて、必要以上の事です。それを疑ふことは彼等の呼吸を疑ふことであり、これを阻止することは彼等の呼吸を阻止する事です。繰り返して申します。子供は本來が詩人なので

す。清淨です。無邪です。天眞です。鋭敏です。不思議を不思議とし、驚きを驚きとし、喜び悲しみを喜び悲しみとし、怒りを怒りとし、愛憐を愛憐とします。眞實です。僞りません。佛性そのままに光り輝いてゐます。さうして彼等は常に觀、感じ、歌ひ、躍り、叫び、遊び、片時としても自己を自己としてゐない事はありません。有りのままです。あの遊びほれてゐる無心な二つ三つの幼子の片語の一つでも聽きのがさないでゐたら、それがみんな一つ一つに詩の玉を吐いてゐる事に驚かずにゐられますまい。

こゝを考へてほしく思ひます。これは實に彼等そのものが詩そのもの詩の發想體そのものだからではありますまいか。彼等は透明です。直接に何物にもびたびたと觸れずにはおきません。詩そのものを遮る邪念から彼等はまだ何の目かくしもされてをりません。幼ければ幼いほど彼等は無垢で有り得ます。かうした彼等の日常がまた詩で無いと云へませうか。むろん、彼等がかくある事は極めて自然であり、本質的のものでもあります。ただ彼等は彼等自身の詩を詩として意識しません。ただ歌ふに自身をまかせてゐます。またそのお母さんたちも多くは聽きのがしてゐます。然し聽きのがしてはならないのです。（この事については後で委しく例證します）

學齡に達して以來の子供たちもまた意識する事無くして彼等自身の詩を歌ひつづけてゐたにちがひありません。在來の教育はその詩をも認めなかつたばかりか、ほとんど彼等の口をふさいで了つて、代ふるに大人の詩（いや詩とも云へない大人にとつては極めて利己的な教訓歌や無味乾燥な觀念詩）を強ひつけ、子供の一々の個性をも凡て一樣の鑄型にはめこみ、いよいよその自然の成長を押し曲げるといふ風の事にのみ沒頭してゐました。これはおそろしい冒瀆であり、罪惡であり、子供に對してあまりに不遜であり、壓制であり、また眞實の意味に於ての愛と親切とが少くとも缺けてゐたものと見ねばなりません。

で、子供をさうした首枷から解放し自由に自然と本來の彼等に還らしめる事が第一、彼等の意識せずして歌つてゐた詩そのものを、詩として新に意識させ、いよいよ彼等の個性を成長させ、發揮させ、表現せしめる事が第二の問題となります。つまり私たちの藝術自由教育も此の一大事の理由によつて提唱されたのであつて、現在私たち詩人が兒童自由詩の宣傳なり開拓に努めてゐるのも全く此の爲めに外ならないのです。

既に自分を少しづつでも知り、自分の詩に對する自覺のつ

いた子供たちは、その周圍——天體天象、郷土、動植物、金石、人間とその社會相等——に對してもいよいよ驚異の心と觀察の眼を深めてゆく事は極めて自然のことであつて、その度ごとに彼等の純眞性は統一され、感覺感情も練磨され、美と正しさを愛する心、幻想と永生への憧憬さうしたものがどれだけ彼等自身の中に深められてゆくか知れないのです。かうして眞の人間としての愛と叡智とを幼いながらにその本體から彼等は彼等自身の力で光り輝かして行くことになります。さうして子供は子供としてのほんたうの生き力を生かすに相違ありません。

子供が詩や童謡やに執すると懶惰になるとか、輕浮になるとか觀る事は、藝術とか詩とかを根本から穿きちがへた人の言葉であつて、子供としての智情意を引つ括めた自己の美的陶冶はかうした詩とか音樂とか繪畫とかに據らしめる外無いとさへ私たちは信じてゐます。また或る小學教師からかういふ言葉も聞きました。兒童に詩を作らせると頭腦が粗雜になる、綴り方に堪へられなくなると。これも詩を知らない人の云ふ事で、恐らくその人は兒童たちに間ちがつた觀念を與へたにちがひないのです。たとへば童謡とか自由詩とか云ふものは、何でも巫山戯たもの、滑稽な句調、おもしろい見つけもので人を笑はすものといふ風にです。童謡開發の初期はほとんどさうした子供の機智的な作物で埋まつたのは事實です。然しこれは指導者の謬つた暗示が主因で天眞のユーモアとそれらとの區別がはつきり子供たちにのみこめなかつたのです。今でも邊陬の地方では一途にさう思ひ込んでる向きが少くありません。現今の進んだ子供の詩は周密と愛ある觀照、生活感情の純な眞實の表現を以てして、その確かな描寫や調律は世の詩人たちの雜駁な或種の作よりもどれだけ傑出してゐるか知れないのです。

B

これもあまりの謬見で驚きます。正しい詩は人間の生活をより高くより美しくより豐かにこそすれ、單に現實離れのした架空の世界に人間を飛ばせ、活社會より逃避せしめ、虚飾者若くは優柔不斷の性格を造り上げる爲めのものではないのです。詩の心はただあらゆる高貴な圓滿を社會萬般の種々相に必要とします。ここが次の時代を建設すべき今日の子供たちに對して藝術教育の必要な一大眼目に外なりません。既に子供として眞におのれを生かし得る子供ならば必ずその將來に於ても、大人としての立派な大人として生き得るにちがひありません。また同じく子供として眞に子供としての詩を

解し作り得た者ならば必ず大人としての眞の大人の詩を作り得るにちがひありません。私たちの趣旨は彼等を單に專門的の詩人なり、童謠作家を造るためでは無いのです。趣味廣く詩情高く愛あり勇氣あり德あり意志强き上に於ての各種の各科の有爲ある人物を以て光輝ある新世紀を將來せしめやうとするのです。詩は人生の香氣であるからです。

C

私たちが童謠を作るのは、一には自身の童心より發した純然たる藝術としての童謠であり自身の爲めのものであるが、この私なら私によつて生かされた純眞性はまた他の大人や子供たちにも共鳴し得るにちがひない。で、自然子供たち本然の事情を外に誘導し暗示を與へる事に於て、相當の貢獻はあるものと信ずるのです。ただ私自身の非力を耻づるのみでありますが、兎に角幾多の傑出した童謠作家と童謠と童曲の提供はどれだけ子供たちの滋養になるか、子供たちの生活をどれだけ幸福にすることかと思ひます。殊に童謠復興の新運動以前に於ての日本の子供たちの不幸を省みなければなりません。彼等は少くとも彼等の心より喜ぶ彼等の謠ひものを、彼等の小學校では充分に與へられてゐなかつたのです。私はこれについて在來の小學唱歌なるもののほとんどを不可とします。非藝術とします。で、どうしても小學唱歌に代るべき藝術的新童謠の必要を痛感します。而していよいよ私たちの勝利をも。

簡單にと云ひながら可なり私のこの序論は長くなつて了ひました。

二

日本のわかいお母さん方、ことに幼い小さい子供たちのお母さん方、あなた方の爲めに、改めて私は御勸めします。さうして切に御同意を願ひます。それは家庭に於ても始終詩としての藝術教育の趣旨を充分に取入れてほしい事です。

子供はまつたく凡てが詩人です。現に學齡以上の子供の詩は既に驚くべき進步の道程にあります。ですが五六歲の子供たち幼稚園以下の子供たちの詩的天分はまだ充分にはその母親たちに認められて居りません。これは何が故でせうか。或は單に幼い者の無意味な隻語として多くの場合聽きそらして了ふ母親たちの不注意からではありますまいか。

靜かに心をとめて、聽いてゐて御覽なさい。どんなにあなた方の子供たちが傑れた詩句の流露者であるかを、驚異と感謝とは必ずあなた方を心から涙ぐませるでせう。さうしてど

れだけあなた方はあなた方の幼いベエビイさんから教はるところが多いかを。さうしてどれだけの幸福な微笑と接吻とを以て酬ゐねばならぬかを。あなた方はきつと今以上にその子供たちに謙虚ないいお母さんになられるでせう。

例證して見ます。

はだかの
もうもうがゐるよ。

これは三歳の男の子が牧場の牛をのぞいて、その母親を顧みた第一の言葉です。これは詩です。片語のやうではあるが、この中にどれだけの無邪な驚異と愛情と憐愍がありますことか。つくづく考へてほしいと思ひます。ああ、はだかのもうもう。空は晴れ草は幽かに青み初めても、まだ風は寒かつたでせう。さうしてその田舎の景色もその幼い者には何とも云へず珍らしく感じられたでせう。」

おちち

おちちはいいこ、
あしたまたのんでやる。」

×

おちちはいいこ、
かあちやんぼつぼにねんね、」
ねんねのおちち。

これも自然に出た幼子の言葉です。何といふあどけなさか、愛情のわかい。これを聽いて微笑しない母親はありますまい。立派な童謠です。さてこの子は四歳です。

迎へ火

あつちでも、こつちでも
火をたく、火をたく、
ほとけさまの迎へ火だ、
道をあけよ、道をあけよ、
ほとけさまにぶつかるな。

この自由さと、詩としての整齊と。まつたく自然に起承轉結の法にもかなつてゐます。一寸見てもこれが五歳の子供の詩とは思へないでせう。さうして盂蘭盆の宵の哀情と子供心の天眞も脈打つてゐます。

ゆふやけ

ゆふやけこやけ、
トマト色のゆふやけ。

この清新さ。

ころぎ

ころ。

ころ、
ころ、
ぎよ、
ころ、
ころ。

これはこほろぎの鳴く聲を聽いてそのまま口に眞似したにちがひないのです。それがいかにも生き生きしてゐます。

　とんぼ

豆がぱつちりぱつちり
とんぼにげたり、またきたり。

この田園の秋景、ややいそがしく陽はかげるらしい。

　鹿の角

鹿の角の上に
手拭か何かかけといたら、
かはくでせう。

これは機智的に見えてさうではありません。實際に見たまま成したゝまなのです、でそれが自然のユーモアになつてゐます。

　グツトナイ

エスサアマ
　オヤアスミ　グツドナイ。
パパサン
　オヤスミ　グツドナイ。
ママサン
　オヤアスミ・グツドナイ
オブドウモ
　オヤアスミ　グツドナイ。

これは三歳の男の子。オブドウモといふところがいかにも葡萄に未練がありさうでかはゆく微笑させます。ルソウの懺悔録に、燒肉さんさよふならといふ彼の幼年時代の一齣があつて泣かせますが異巧同曲とでも申しますか。

　はる

鷄コと鷄コとけんくわした。
花コと花コとおじきした、
お日さま一人コわアらつた。

これは五歳の男の子。東北なまりの鷄コ花コが何より鄙びて可憐にきこえます。さうして春らしい情趣も充分にこの三行で云ひ盡せてゐます。

　キシヤポツポ

ボーヤトオヂイチヤント

キシヤポツポヘノツテ、
オオフナデ、サンドウイツチヲカツクトキ、
セイヨウカント、デンシンバシラガ
ミエタ

これは四歳の男の子。まるでアンリー、ルツソオの風景畫でも見るやうではありませんか。

ツガハハ
　サムイツガハノマチ
サムイサアムイ。
ユキハ
フルフルフウル
フユハ
ナガイナガイナアガイ。

これは六歳の男の子、實にいい童謠です。北國の津川といふ町の寒い白い、さうして永い冬を堪へかねた子供心の寂しさが何よりも暗く暗く響いて來ます。傑作です。

　きしや
きしやはえらいな、
とうちやんよりえらいや、
かあちやんよりずつとえらいよ、
ぼうやがきしやにのつたらば
もうちろいろみがみえた。

これは五歳の男の子。汽車と父母とを比較する突拍子な無邪氣はとても大人の思ひもつかぬ事で、思はず破顔されるではありませんか

　ツキミサウ
ドテニサイタ
タツタ二ツノ
ツキミサウ、
ダアレモミナイ、
シリモセヌ、
キシヤガ
ミテハシツタ。

これは六歳の女の子。夏の淺宵の川土手の涼しさが目に見えます。それに女の子らしい抒情味が含まれてゐます。

一一擧げればまだ相當にすぐれたのがいくらも手元に毎月集まるのですが頁數の超過をおそれます故これくらゐにうち切ります。ただ、如上のものほど特選したのでなく、普通程度のものを少々御參考までにお目にかけたいと思ひます。

さうして小さい幼い子供たちの極めて自然な時の心と言葉の

働きをよく觀てほしく思ひます。さうして確かに何かをあなた方の子供たちの中にもそれと似た同じものを見出されるにちがひないと思ひます。拙くともおかしくとも、兎に角みんな詩です、童謠です、「うた」です。

お月さま（三歳の男の子）

けれえ（奇麗）な、おちきさま（お月さま）
おちきさまあ、おらんどろ。（おだんごだ）

オトケイノカホ（四歳の男の子）

オトケイノカホヘヘンナメダナア、
ナガイシタペロデ、コトリコトリ。

春風（三歳三ケ月、女の子）

もつとふけ、もつとふけ、
あつたかいから、もつとふけ。

註。雨上りに外へ出た時私がおお好い風だことと云つたのを聞きかぢつて無心に唄つた言葉です。姉より。

ミナチャン（三歳、男の子）

トウチャン　チエンチエイ、
カアチャン　オクチャン、
ヤブチャン　チョツチエイチャン、（齊生さん）
ネエヤ　デヨツチユウチャン、
ボーヤ　オジコーチャン、（おりこうさん）

ヘイ（三歳、男の子）

テンジヤウデ、
ヘイガネンネシテキル
ナツノパン。

評。これは期せずして俳句らしくなつてゐる。

鳩ぽつぽ（四歳、男の子）

鳩ぽつぽ、かはいい鳩ぽつぽ、
お手々ないのかよ、
鳩ぽつぽ、お手々あげよかよ。

アメ（四歳、男の子）

アメガフツテ
オンモガドーロドロ、
ボチヤノアンヨガドーロドロ、
ボクノゲタモドーロドロ。

はばかりのくも（四歳、男の子）

うんちやい（便所）の　がに（蜘蛛）は
ばあーばいよ、（きたないよ）
ううども（大きいのも）ちうんても（小さいのも）
ばあばいよ。

註。この子はこれをうたふのに初めのばあーばいは長く云ひ、後のばあばいは短かく云ふのだと家の人に教へました。（母より）

鵞鳥（六歳、男の子）

裏で鵞鳥が草たべてた、
僕はつかまへようとかけてつた、
鵞鳥はびつくり逃げてつた。
僕はあとから追つてつた。
鵞鳥は川へ落つこつちやつた。」
あらあらかはいさうだ。

ユキ（四歳、男の子）

アラアラユキガフツテ
ウエキバチガボウシヲカブツタ、
ウエキバチノボウシハ
マツシロボウシノハイカラボウシ
ボクノバケツモカブツテル。

これらは皆六歳以下の子供たちので、七歳になるとずつと進んだものが多く、それ以上尋常科になるともつと程度が高くなるのです、兎に角、これらは子供たちが無心で唄つてゐるのをそのお母さんやお姉さんたちが、よく氣がついて傍から寫し取つて置いたものなのです。

三

日本のわかいお母さん方、かうした幼い子供たちの日常の言葉そのまゝが詩であるのは、その生活が詩であるから、いや、子供そのものが詩人であるからだといふ事が如上の例證で可なりの點まで御了解下すつた筈だと思ひます。

右は一般の投書、たとへば「赤い鳥」や「藝術自由教育」や「コドモノクニ」や、さうした雑誌の投書の中から借つて推奨したもの、豫選のまゝ、或はそれ以下で没書にしたもの等を取りまぜて並べて見たものですが、興味のふかいのは却つて藝術的價値にすぐれたものよりも、拙い、をさない、ととのはないものの中に、どうかするとほんとうの自然さがかくされてゐることも考へて下さらなくてはなりません。

子供たちは、その何でもない有りのままの自然さの中にいつも詩をうたつてゐます。

○

タカチヤンモオカホヲアラフノヨ、
ダカラオミヅヲクンデウクレ。（五歳）

コツプのなアかで、サイダがはねてる。（五歳）

○

ア、スズメガ
オレノハウヲ
シツカリミテ、
上ノハウヘトンデイク、
上ノハウヘトンデイク。(五歳)

○

とうちやん、おかアいり、
おみいや、ちやうだい。(参歳)

○

パパ、グンカンキジシマ (霧島)
トホイトホイ
ボッチヤン、ハイチヤイ、
アクチユチタ。(握手した)(四歳)

かういふ通例の會話や獨語でも、よく注意してさへ聽けば、みんな詩としてのリズムを持たないものは無いと云つてもよいとおもひます。

雨がふつて來た時

タイヘンダ、タイヘンダ、
アメガフツテキタ、
ナンデモナンデモヌレテシマウ。(四歳)

金米糖を持って畑に出てゐた時

こんぺいとうのたねをまいたら
も一つ、
あかあいこんぺいとうと、
あをういこんぺいとうと、
しろういこんぺいとうと、
なるね。

お八つのとき

おうまやおうま、くたびれたでせう、
さあさあおでんたうをたべませう、
おうまやおうまくたびれたでせう、
さあさあ、おほうびをめしあがれ。(三歳)

日の出を見てゐて

ウミノ中カラオテントサマガ上ツタ、
アカイシズクガタレソウダ。

ですから、その子たちの天分の厚薄といふ事は決して念頭に置かないで、ほんたうでさへあればいい、その子たちの個性さへ眞實に表現したものなれば、それがほんたうの詩だと思つてほしいのです。何も幼い者に役者の子や踊者のやうな

特殊な藝當を求める必要はありません。また上品な意味に於ても、強いて、いい詩、いい童謡を性急に創造させやうと焦る必要もありません。無理をすれば歪みます。押へれば曲ります。結局するに折角の藝術教育も誤れば從來の壓抑的な個性否定の不自由教育と、別な意味に於て同じく兒童を壓迫する事になります。自由でなければなりません。

ただ、周圍のよい保護とよい誘導とよい暗示と不斷の注意とが、いつもそれらの幼い者の詩の芽生の上に日光となり微風となり、また今夜のやうなこまやかな春の小雨になつてふりそそがれねばなりませぬ。

選擇されたよい童話や童謡を時にふれて最も自然な狀態のもとに讀んできかせるとか、自然科學について、子供たちに何かの疑問が起れば少しも胡麻化さずに、それでゐて幼い者にもわかるだけの答をして、少しづつでもその知識を廣めてゆくやうにするとか、自由に色鉛筆を使用させたり、音樂をきかせるとか。いくらでもよい誘導の方法はありますでせう。

ただ、童謡について申しますと、決してその創作を初めより強ひてはならぬことです、それより子供たち自身から歌ひ出さずにはゐられずして歌ひ出すまでのより自然な誘導が大切です。

それから決して調子を強ひてそろへさしてはなりません。自由なリズム、そのままの呼吸を重んじて何でも思ひどほりその口ぐせどほり、その感情の動くとほりの表現であればよいと思つて欲しいのです。これが自由詩の行き方です。またどんなに自由にやらせて見たところで、決して子供たちのは散文律にはならないのです。それだけ純粹で、感動が常に生きてゐるとも云へます。

ここで一つ面白い挿話を入れます。今の詩壇に詩と散文の問題が、私の口火で可なり一時八ケましくなりましたが、恰度その頃、名古屋の義兄の方で讀賣新聞を見てゐたので、私の書いた「散文が詩といへるか。」といふ小論文を子供たちが見つけ出したのでした。それからといふものは、一番下の今年五歳になる貞三といふ子が誰彼となくくつてかかる時にはいつも「散文が詩と云へるか」。大笑ひです。とにかく子供は散文はきらひです。ことに詩の無い散文と鹽煎餅は。

さて、もう一つ御注意したいことは、たとへばいかほど拙く、口調がととのはず、訛が多くても決して大人の手で添削したり、訂正したり、飾つたりしてはならないことです。有りのままで無ければ木地としての尊さも親しさもありませ

ん。またそれは子供たちに對してあまりに失禮でもありません。大人の手で訂正されて或は表面的には美を增したやうに見えるかも知れません。然しそれは虚飾であつて、却つて本然の美を汚すものだと云はねばなりません。

それからもう一つ終りに最も大切な事を申しあげませう。ある質實なお母さん方は、さうした童謠やその他に於ての誘導は、都會の、殊に藝術的な香氣の高い、趣味の廣い、また富んだ、西洋館の生活や、ピアノの一臺でも無い家庭でないと充分には效果をあげ得ぬものと諦めてゐられる方がありさうに思ひます。これは非常にまちがつた事です。

私の見地よりしますと、なまじさうした家庭の子たちはさうした空氣に刺戟され過ぎてゐます。で、普通の子以上に神經質で才氣や機智や表面的の美にのみ謬られて、加ふるに外部からの影響を吸收するのに追はれて、自分の内にこもるものを自分で温め自分で孵かすといふ落ちついた素朴なよい時間とよい考察の暇を持ち得ません。ですからその童謠や詩も線香花火のやうに目まぐるしく、また万華鏡のやうに華美でもあり、または翡翠のやうにすばやく鋭く、更に機智にも幻想にも富んでゐますが、かういふ子たちは案外に早く神經疲れがして了つて、後がつづかず、いつのまにか怪しくなりがちに思はれます。

それよりも山間僻地の貧しい家庭の子供たち、田園の百姓の子たち　さうした生活の中に育ち、郷土と青空とに抱かれて生ひ立つてゆく者には、眞實に自分自身の内から起る靈の聲を自分の「うた」とします。詩とします。「赤い鳥」あたりの童謠を査べても、都會の子は目先ばかりおもしろくて才氣ばかりなのに反して、信州甲州茨城あたりの子たちのは實にほんたうの自然を見、ほんたうの生活感情を歌ひ上げてゐます。眞實です、眞實にこそ正しいほんたうの美はあります。子供は自然のふところで充分に豊かに、またほんたうに、力強く、自由に育ちます。ピアノが無くとも、どれだけの音樂がそこには滿ち溢れてゐますか。

日本の若いお母さん方、もう夜がふけました。雨の音のこまやかなこの春の一夜も、どこかに月明りがまだありさうでゐて、いつかしら更けて來ました。それではこれで私もペンを擱きます。どうか、あのこまやかな春の小雨のやうに、あなた方の母親としての愛情をその御子たちの上に、幼い詩の芽生の上にふりそそいであげて下さいまし。



藝術の二道

長與善郎

　藝術は美を愛する心情と、物を製作し度がる人間本能との合の子である。美を愛する心情はひたすら美を目標として意識し、美を、美をと追求して製作する場合もあり、又強いて意識しては美を追はず、唯、藝術的、又は廣義での美的（エステティツシュ）な心情が表現さるゝを以て足るとする場合もある。即ち、製作に當つて、作者の美、意識、又は現はさんとする内在美の表現と云ふ事が動機の主なるものとなる場合と、製作本能その物が主となる場合である。素よりその邊の區別は然く判然としたものではなく、いかに美意識や美感が多くあつても製作本能が動いてくれなければ製作は出來ず、又製作本能が動く後ろには、苟もこれが藝術的と呼ばれ得る製作であるならば、意識的であれ、無意識的であれ、必ず何かの審美が働いてゐるにちがひない。作者は強ち美しいものを作らうとする氣はなくとも、醜いものを作らうとする氣の尚ほ更無い事は無論であらう。唯、意識的の持ちやうに於て、飽く迄も美を目標とし、直接に美の法則に叶へるものを製作しようとする、純美的な製作動機――（それとても嚴密に云へば相對的な類別ではあるが、どうせ製作本能が動いてゐる事は無論の事であるから）――と、もつと自由に、直接には美と云ふ觀念に拘束されず、作られたものが必しも美しくなければならぬとは考へずに、自分の（廣義での）藝術的氣持ち、主觀を主としてそれを現はす事で滿足する、と云つた場合との二つに分ける事が出來ると思ふ。換言すれば前者の場合はより多く客觀的態度であり、後者の場合はより多く主觀的態度である。勿論前者の目的は裝飾にあり、後者の目的は生の享樂にある。此二つは兩極端であつて、其間になほ幾多の場合がいろ〳〵の調合程度で介在し得るのは云ふ迄もない。而して、それらの總體を、更に、客觀的に見れば、主觀的態度の製作も、客觀的態度の作品も、凡て、美を愛する心情の産物である。苟も藝術的製作と他の製作との相違

は、美に對する愛から生れたものかどうかと云ふ事である。

一體「美」と云ふ觀念を明かに確立し、之を以て藝術と文明との理想目的を觀たものは希臘人であらう。美に對する憧憬は希臘文明に到つて始めて意識的に觀念化されたもの丶如く思はれる。而して希臘人のこの偉大な卓見は常に正しい。文化の精華である藝術が常に意識して美を追究し、其表現が美の律に叶ふ事を條件とすると云ふ事は確かに本道である。藝術は本質に於て、正しく美的なるもの丶中での美的なるものでなければならない。併し美的なるものとは素より所謂綺麗なものと云ふのみの意識ではない。美的なるものは常に藝術的であるが、同時に藝術的なるものは常に美的である。而して吾等の生活内容が雜多なる文化の波によつて洗練され、複雜となり、趣味が進めば進むほど、吾等は天地人間の中に實に樣々な美味を見出し、その範圍は廣汎を極めて來るのである。かくて美に對する觀照意識の複雜な吾等近代人は、美の觀念の創立者である希臘人よりも、藝術觀が擴大されてゐる丈け、遙かに擴大されたる視野に於て、種々なる美を見るのである。又種々なる美を欲するのである。吾々は希臘人及びそのアカデミックな後嗣者達が醜と觀じ、奇怪と感ずるもの丶中にも屢々或る進んだ藝術的感じを認め、從つて又そこに何等かの時には驚くべき美を見るのである。

しかし自分は玆で、その無限な廣さを持つ藝術的感じの種々について說かうと云ふのではなく、特にその高等な方面に於て、卽ち、製作者自身よりは鑑賞者の趣味が優れてゐるが故に見出される場合の如き消極的な美や、單に傳統に依る民俗や民衆の無意識な美的表現の魅力や、人間の工藝その物が自から持つ愛らしい小藝術の味等についてではなく、もつと積極的に個人の藝術意識のうかゞはれるもの、個性的主觀、精神の現はれたものに於て、二つの根本的な行き方について語り度く思ふのである。卽ち、一は「文は人也」と云ふ主觀的本位、人格本位のもの、一つは美の法則に則る表現の客觀的價値の爲めに才能を必要とする天才主義のものである。

今自分の前に梅道人の畫いた竹の圖があるとする。又顏輝の畫いた仙人の畫があるとする。吾々がそれらを見て先づうける感じは何であるか。美であるか。否、それは決してルーベンスやティチャンのものが美であると云ふ意味に於て同じく美ではない。しかし其らの畫家のそこに現はさうとしたものは美であつたのか。否それは又ルーベンスやティチアンが現はさうとした如き美が目的でなかつた事は明かであると云つてよからう。しかもそれは吾々に與ふべからざる立派な藝術的感銘を與へて盡きない事をそれらの畫家は知り拔いてゐた事を吾等は信ぜざるを得ない。然らば其藝術的な感じは何であるかと云へば、實に、精神の生きてゐる感じである。見てゐれば見てゐるほど恐ろしい程に生きてゐる或る藝術

的な力である。そしてそれはオリムポスや、所謂美の世界とはちがふが、それにもまさると云ひ度い程別な幽玄な高峯の上へ、無限の境へ吾々の魂を誘ひ、引き上げて行くのである茲に希臘主義と全く行き力を異にする一つの藝術の根本々道がある。そしてそれは東洋に於て、此上なく發達しぬいた一つの境地である。

美と、無限。此二つへの追窮は窮極の高所に於て一致するであらう。只その道程に於て一は天才主義の直接さを取り、他は人格主義の間接さを取る。人格主義の求めるものは精神にして、天才主義の求めるものは美である。求めるものが精神であり、生命感であるならば、例へば造形に於て、強ち畫や彫刻に依るを要せぬ。書でも、篆刻でも可なる譯である。客觀美を製作の標準にすれば、それを現はすに主觀の實感丈けでは足りない。修練丈けでは足りない。專門の才能が要る。併し精神があればよいと云ふのであれば、修練は要るが、それ程に多くの才能技巧を强ひて必要とはしない。達人が書けば手紙一本書いても、一字の中、會話の中へすらもおのづからその人の持ち味、人物風格がしのばれて、一種藝術的感興を人に與へるものがある。之れ即ち人格の味、人格の藝術であり、人格の藝術は生活に即す。その人の生活ぶりその物が、既に藝術であると云ふ境地である。

此意味から推して、支那で書畫骨董抔と云ひ、之等のものを本質的に區別せず、皆藝道に於て同性同質のものと認めてゐるのは當然となる。藝術の目的は人類の文化的事業の一つとして、人工の塔を築く事ではない。人類を祝福する美神の降臨をそこにむかへる爲のピラミツトを築く事ではない。そんな人類的野心を捨てゝ、ひたする此地上での生活をたのしみ、謂はゞ小乘的に自らを樂しめばよい。併しそれは他人に迷惑をかける事を意とせぬ不倫な自己享樂ではなくして、一種の大人君子として身を持し、生活を淡白素朴にして、他人及び天然風物と健全な樂を偕にする事にある。もし藝術を善くせんと欲するならば、心を正しく持ち、俗事と肉慾に束縛されてはならない。彼等とても酒は盛んに嗜んだであらう。隨分出鱈目の放題もやつたであらう。併しそこに實に無邪氣な、淡白な風があつたであらう。對世間、對人の小心翼々たる野心、所謂俗氣紛々たる處は少かつたであらう。彼等ほど俗を賤しみ、仙を尊び、小人を蔑んで大人の風を愛したものは世界にないであらう。小人とか大人とか、之れ實に彼等獨特の造語である。精神が浩然の氣を呼吸して造化の心と合し悠々超脫の域に入れば、おのづから善き藝術は生れる。素より一概には云へないが、大體から云つたやうな主義が、東洋の、殊にその代表者なる支那にはあるやうに思はれる。

此隱遁的な趣味から云つて、支那人は露骨に人工美の現はれる事をつゝしむ傾きがある。即ち美として直接に人の心を

打つて來るものよりは、魂として味はつてゐる中にだんだん奥床しさや、氣韻生動の醸はれて來るものが好きである。つまり美よりは味を愛するのが東洋人の癖である。（かく云ふのは素より一見人目を奪ふ艶麗なものがないと云ふ意味ではなく、華麗なるものゝ中にも只華麗なるのみには畢らずして、矢張り掬めども盡きぬ味、餘裕をそこに求めると云ふ意味である。）その味はひ主義は東洋人の大陸的な餘裕の産物である。餘裕なしには味樂しみ得ぬものである。「春眠不覺曉」とか「日高ク睡足ッテ猶ホ起クルニ慵シ」とか云ふ暢氣さの産物である。其暢氣さ、隱遁的享樂主義の道徳的是非を糺すのは茲の用ではない。其中に在る支那人の生活味とその藝術との關係が自分には今問題である。「採菊東籬下悠然看南山」とか「獨座幽篁裡彈琴復長嘯」とか「晋陶淵明獨愛菊」とか云ふ簡單な句の中にうかゞはれる藝術と生活との一味境、何とも云へぬゆつたりと俗離れのした床しい人物の風格の味、生活に對する温かく、しんみりとした愛――悠々自適して天然の生を樂しむと云ふ此生活に對する温和な愛こそは東洋獨特の三味である。

吾々は大雅堂の書を見て、その生活のよきを想像せざるを得ない。そして大雅が人として實に温かいなつかしみある善い人であり、君子であつた事を想見せざるを得ない。同時に書もきつとよかつたらうし、文章もいゝにちがひないと云ふ氣がする。そして事實さうだつたのである。大雅の書を見れば又氣の故もあらうが、誰もよからうと思はれる。書畫一致と云ふ語があるが、それは畫面の調和の必要上のみで出た言葉ではなく、實際あゝ云ふ藝道に於ては必然に或る點迄一致するのである。即ち一つの根本精神をしつかと把捉し、體得して了へば一人として色々の道に達する事が出來る。達人は多能と云ふ事になる。西洋でもダヸンチの如き例もあるが東洋の行き方ではなほさう云ふ人が多く有り易い譯で、弘法の如き蘇東坡の如き、本阿彌光悦の如きもさうであり、孔子は六藝に通じてゐたと云はれる。之れ即ち一技に秀でた特殊な才能を主とするに非ずして、精神を主とするが故である。

而して元來がかういふ自然主義で、天然風物を有りのまゝに愛し、樂しみ、味ひ、活かす事を以て特徴としてゐる上に、佛教の禪や、その簡素趣味が加はつたのであるから、露骨なる華美に對する見解は益々禁慾的となり、出來る丈け節約簡素の中に美的要素を樂しまうとした處に又一段と質に對する觀照の發達を促し、含蓄に於て、澁さに於て、世界に類のないものと進んだのである。禁慾は屢々内質の進歩を促すものであるが故に、丁度茶道の節約主義によつて、日本の建築、造園、調度の趣味が著しく枯淡な澁いものに發達したやうなものである。

此東洋の美の質的であり、内面的であるのに比する時、西

洋のそれは著しく物質的、量的に見えて來る。餘りに美を美をと直接に追求する結果が、その表現上にも、鑑賞上にも手つ取り早い一種の實用主義、巧利主義を誘致する事は自然の成り行きである。例へば花なら花を愛するにしても、その花の美の享樂と最も直接な效果、巧利的な效果を求め、さう云ふ效果的な鑑賞し方をする。ダリヤとか、薔薇とか、カーネーション等の如き、露骨な綺麗さ、一見してすぐパッと刺戟の來るものを花弄としてゞはなく花丈け切つて眺める。故に活花の事を西洋では只フラワーと呼ぶ。花弄全體の面白味枝ぶりや、葉や、蕾や、花の落ちたものゝ如き非實用的な美は裝飾にならぬものとしてすぐ捨てゝ了ふ。風情とか、風味とか、風流とか（之等は西洋にはない字であらうが）のない事夥しい。小泉八雲は日本人は蛙の聲にも詩を見出してゐると云つて驚嘆した相であるが（芭蕉や蕪村等は馬の尿にさへ詩を見出してゐる）實際日本人がその淋しい土色の仄暗い床に枯すゝき等を活けて床しとながめる氣持ち等は西洋人の簡單な趣味では見當がつかないにちがひない。又それは其筈である。美術の目的はキレイに飾る事にのみあると思つてゐるのであるから。一體東洋のものは人の眼に止まらず、從つて、愛玩も鑑賞もされねばされないでそれで滿足し、認めなければ認めないでいゝと云つたやうな一種の諦め、悟り、超越がある。只分つた人にのみ眼を止められて、靜かに味はつて眺められてゐる中に「あゝいゝな」と囁ばれゝばそれで本望である。併し決してそれをあてにはしない、強いて求めもしない。元來が對人的の爲めのものではなくして、自ら樂しむ獨樂のものである。東西の此傾向の著しい違ひは風俗習慣人情のあらゆる方面に一々現はれてゐるが、例へば展覽會に入つて、忽ち衆目を惹く如きものを作ると云つたやうな對人的競爭的な感じは東洋のものには殆んどないと云つていゝ。少しでも早く人の目を奪ひ、パッとした華やかさや、畫面の大仕掛け、老大さによつて人を驚かし、それでも驚かなければなほ刺戟を强烈に〳〵とする爲めに殺人とか戰爭とか云ふ如きあくどい刺戟的な材料を選び、これでもか〳〵と强いる。作者はあてこみに忙しく觀者も亦忩がしい。悠々閑々と酒を嗜み作ら一幅の畫、一面の額の前に、半日を過ごす如き悠長な風流人はどうせないのだ。疾風の如く自動車で驅けつけて來て、迅雷の如く一覽して歸る間に鑑賞は濟んで了はなければならない。凡て之れ餘裕のない生存競爭の感じである。競爭がはげしければ激しい丈け、藝術も魅力を實用的に手つ取り早くしなければならない。魅力の效果を覿面にする爲めには彌が上に挑發的な刺戟を强めなければならない。奥床しい、滋味なぞを享樂してはゐられない。

生活の萬事がかうである。女は出來る丈け男の情慾をそゝる姿態を競ひ、音樂は、樂隊となり、飲み物はコーヒーや、

紅茶となり、香料は香水となる。花のやうな自然物ですら何だか、對人的な色氣に充ち、人に媚びる俗氣がある。さう云ふものが愛されるからである。かゝる東西人の趣味の違ひは藝術に盛る材料の選び方でも分る。支那では畫題と云へば大抵山水か、人物か、花鳥であつて、さうでないものでもその三つの混合變化したものにすぎない。鬪牛や、誅殺や、淫らな女の亂舞する酒場や、强姦や、殺戮のシーン抔は畫材の關係もあるが、靜寂好きな支那人には藝術の材料として考へも及ばぬものであらう。支那人の考へによれば藝術は激情的であるべきものではない。興奮劑であるべきものではない。反對に沈靜劑である。生活で苦しむでも、のた打ち廻つても其處へ行けばホッと息をついて心が鎭められ、安靜に落ちつくべきものである。

故に此動的、物質的、競爭的、刺戟的、純現世的な西洋人の生活の中にはドラマチックな刺戟が常にあり、刺戟が强いから人は興奮して、情熱的となり、爭鬪的となる。而して此對人的な競爭の結果、元來才能主義な彼等の藝術觀はなほ更才能を尊ぶ事となり、かくて文學に於ては、ドラマチックなものが發達した。東洋はドラマチックと云ふ事を厭つた結果、又藝術に要求する目的が異なる結果として敍情詩は發達したが、戲曲や小說は發達しなかつたのである。詩は詩人肌の人間に詩興が湧けばさしたる技巧を工風せずにそのまゝ作れるが、小說や戲曲となると、多少の波瀾曲折の綾を交へて人の興味を操る特殊の才能が要るからである。そしてそのやうな面白いものを作る事は支那人は、强ひて望まなかつたのである。無論小說稗史の類もないのではないが、それは幼稚なものであるらしい。彼等の得意な方面ではなかつたから。

西洋はその點に行くと、純文藝として實に發達し拔いてゐる。シエークスピアにしろ、スコットにしろ、ルーベンスにしろ、モッアルトにしろ、例を擧げては限りがない。そして天才の作つたものであれば、すぐ「いゝな」「綺麗だナ」「面白いナ」と云ふ刺戟的な感じが來ても、又そこには多少の巧利主義があつても、それ故にそれを低級なものと云つて斥ける事は出來ない。吾々はその豐麗な美を見て、矢張り精神を打たれない譯には行かない。其代り、凡才の作品になると、幼稚な綺麗さや面白味を狙つた野心丈けが眼について、東洋には一寸見當らない程甘つたるい低級なものになる。

併し乍ら人類は生活即藝術「文は人也」式のみのものでは滿足しない。一方更に進んで人力の高翔したもの、發展しぬいたものを求める。美を愛するの心はやがて美を創造する心である。主觀美は客觀美とならなくてはならない。此創造の爲めに人類は天才を尊重し、天才主義を要求する。人類にのみある天賦の力、精神、才能を極力發展せしめて創造した產物、人間の抽象的創造物、美の殿堂、人工美のピラミッド

を捨てる事を要求する。人類は自らの力がどれ丈けあるかを見て、自ら悦び度いのである。人類は主觀丈けでは滿足は出來ない。かくて、西洋の人工主義の中には、あく迄も現世的に鬪つて、自然を征服し、創造し、發展しようとした努力の中へはいかに多くの危險性と、短所とがあらうとも、ゆるがせない實在性があるのである。それは實に人類の意志であつて、吾々は此意志を尊重しなければならない。

東洋的の行き方で精神が下らないものであつたら此位つまらぬものはなく、西洋の行き方で美がなかつたら此位下らないものはない。併し才能が豐かにあつて、精神が深く偉大であれば、之れ東西の美の合致したものであつて、最も大なるものと云ふべきである。そして、眞に一流の藝術家にあつては、東西の何れの國人であるを問はず、自から斯の如き綜合美を持つたものである。所謂才德兼備であつて、レオナルドや、ゲーテや、ダ・ギンチの如きはさうである。そして文明は必然的にどうしてもそこ迄行くものである。故に東洋にあつても素より人格主義のみには止まらず、生活全體の文明が進むにつれて、東洋式なりに藝才の力にも發展し盡し、唐、宋、元、明、及び日本の爛熟した時代を産むだのである。

吾々は此東西兩洋の文化が、兩つ乍ら人類の意志であり、美である事を知つて學ぶと共に、兩者の長短を公平に批判して、吾等の今後執るべき道を發見しなければならない。

東洋人が西洋人の反對に野心（アンビション）――個人的にも人類的にも――を卑しむだ結果は、又西洋にない野狐禪の臭みと云ふものがある。仙骨の無飾素朴を尊び、俗を厭つた結果、俗にはならなかつたが、覺つかな道學的思想と、悟りの爲めに科學、哲學、文學の確實な發展をはゞんだ處がある。西洋はそれ程俗を厭はぬ現世的民族であるから、超俗の氣韻には乏しいが、その代り緻密な科學的認識と、哲學的思索とがあつて、優れた人の場合には悠々甘く、通俗に墮する事を防いでゐる。ルーベンスや、沙翁も支那の天才に比ぶれば或る飾り氣と俗臭はあると云へるが、その代り人生全般に對する視野の廣さと、其藝術に取り入れ力の自由さ豐さに於て優つてゐるとも云へる。そこに奔放になりすぎる弊害はあるが、奔放な空想力によらずば生れ得ぬロマンチシズムの美なぞは又西洋でなければ生れ得ぬ特殊の進んだ美である。天然の風物をそのまゝに味ひ盡した東洋人は、餘りに自然主義に執した結果多くの深い發見をしたが、人工的創造力の飛躍と科學の發達に俟たなければ生れ得ぬ音樂は殆んど西洋とは比較にならぬほど發達の後れたものである。

以上は、凡て支那をして東洋を代表せしめての議論であつて、東西文化の精を拔くに最も都合のよい適地にあり、そして事實支那にもどこにもなかつた特有の藝境を發達せしめた日本については論を避けたのであるが 自分をして今日日本の

文藝を簡單に論ぜしむるならば、その平凡なる自然主義傾向の流は、啻に歐洲から輸入した自然主義には止まらず、實にそれとよく符合する「文は人也」生活即ち藝術主義の傳說であると思ふ。日常生活そのままの相、些細な平凡な出來事それをそのままにして飾らず、天才的想像を加へず、人工的才能の露骨な現はれをひかえて書くと云ふ主義は、實に自然主義と一致するものであつて、平凡な手紙一本でも達人が書けば藝術であるといつた行き方の名殘である　そは天才なく熱情なく、想像力乏しき凡才にとつて實に都合のよい狡るい逃げ道――と云ふと語弊があるが　唯一の道である。そは敢て飾らざるに非ず、天才的想像を加へざるに非ず、才能の現はれを控えたに非ずして、飾る能はず、想像を加へ得ず、才能なきに依る。しかも、どんな日常の記事にでも多少の感じはあるべき筈であるから、多少の技巧の修練によつて、その表現のコツを飲み込めば、いかなる凡才と雖も、何か一寸した感じのあるものは書けるのである。そは藝術の積極的意味に於て精神もなく美もない、ゼロなものなのであるが、立派に藝術的精神（イデエ）があるが故に、深い客觀的觀照から故らにその内容に相應はしい素朴なる表現を以てとゞめたものゝ似て非なる脫け殼である。自分は敢てかゝる文學の存立を排斥するものではないが、餘りに一般の傾向がその偏道に傾く時、そしてそれが眞に内容ある過去の本物と同一の價値を持つ如き一物あり氣な狡猾な顏をするのを見る時嫌惡と寂寥とを感ぜざるを得ない。

元より問題は形式の如何にあるのではない。それから先きの内質の如何にある。それから先きのものがあつてこその東洋主義であり、又西洋主義である。自分としては自分を小說家、脚本家を以て任ずる上、兩方の長に學ばうと思ふ。吾々の生活の表面は靜かである。そしてその平靜のうちにのみ味はれ活かさるべき處の幾多の美がある。そは實に東洋的なものである。併し、小說や脚本に於てはその深い寂境を表現するが爲めにも、多少の動搖波瀾を扱はなければならない。餘りに露骨にドラマチツクな感じや、ロマンチツクな感じは自分の生活から考へて、遠ざかるのが自然と思へるが內面的に壓搾して含蓄した感じで多少は取り入れる事が必要であり、その點は西洋のものに學ぶべきであると思ふ。要するに吾等の行く道は、東西の根本的な兩特色を夫々攝取して、新しい生命感のうちに包括し、世界的な新領土を開拓して行く事にあると思ふ。吾等の前にその道の門は開かれてゐるのである。

戯曲

愛すればこそ

谷崎潤一郎氏の大名著

本書は明治、大正の藝術壇の代表作として不朽の神品と稱せらる。 三角關係の深刻なる戀愛を描いたもので、人間愛慾の悩みがいた〳〵しいまでよく表現されて、讀む人をして一氣に藝術の殿堂へと引ずつて行く、眞に名人の名作で、千古に光輝を放つ快著だ。

本書は大正文壇の藝術的代表作として國民文藝賞を授與さる

定價壹圓六拾錢
送料拾五錢

第八十版

東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二番

武者小路

□豫約募集□

武者小路實篤氏の全集を刊行します。此天に冲する喬木の眞の高さが明らかにされる時が終に來ました。日本の文藝界及び思想界に於ける氏の功績は今更喋々する迄もない。氏の價値は今や既に立派に世界的です。間もなく世紀的にさへなるでせう。古きもの亡びて未だ新しきもの創られざる現代の混沌の中にあつて、人類永遠の理想の灯を高くかざしながら、眞の意味の個性の自由と人類の成長とを獅子吼してゐる氏の姿は、永く人々の感謝の的となるでせう。

□締切切迫　五月十日限□

實篤全集

本全集の特色

一、署名。第一卷と第十二卷との扉には武者小路氏みづから署名します。

二、番號。各卷悉く、記念出版の意味で番號を附します。番號の若きを望まるる方は成可く早く申込んで下さい。

三、續刊。武者小路氏の今後の著作は、此全集の續刊として同じ裝幀の下に、此全集の豫約者にのみ頒ちます。全集の意味を徹底するために。

四、裝幀。岸田劉生氏の苦心の裝畫を高見澤遠治氏が卵黄色總羊皮に一冊々々木版手摺筆彩色を施したもので、未だ曾て世界に類例のない美本です。此くの如きは到底他の出版者の企て及ぶところにあらず。かう云ふ書物がどうしてこんなに廉價で頒ち得るかと諸君は驚嘆されるでせう。

處女作より近作『楠正成』『或る男』に至るまで氏の小説、脚本、感想、日記の全部を網羅す。

豫約規定

一、本全集は豫約者のみに頒ち分賣せず。

二、體裁。特別版。洋裝總羊皮。天金函入。總紙數九千頁

三、刊行期間。本年五月末より毎月一冊宛刊行し十二ヶ月を以て完了。(全十二册)、

四、豫約會員を二種に分つ。

(甲)一時拂―金五十圓(十二册分)申込同時に拂込の事。

(乙)每月拂―金四圓六十錢(一册分)「甲乙共に別に送料を要す」

五、申込金。乙種每月拂會員に限り申込と同時に申込金四圓六十錢を拂込みの事。但し申込金は最終の月の拂込金に充つ。

詳細は內容見本によつて知られたし。

內容見本

申込次第進呈

申込所 東京市外中澁谷八六八(藝術社) 電話青山一六四一 武者小路全集刊行會

發行所――曠野社――藝術社――

長與善郎作

四六判　布装

定價貳圓　書留送料十七錢

小説 青銅の基督

第五版

純潔な室咲きの花の蕾とも紛ふあでやかな娘の姿に魂をも打ち込んだ青年が失戀の苦惱と遊里の妖艷な美人との歡樂境の交錯せる戀の物語のうちに姉を思へる弟や信仰ふかき情熱の父や求道者の一團をめぐれる悲痛な人生は繪卷物のやうに展開されて妙技神に入る「青銅の基督」が聽ては身の破滅となる奇しき運命の物語は如實に描き出されて深刻悽愴の氣人に迫るの感がある。附するに著者會心の作「陸奥直次郎」外二篇を以てす。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

…ト全集

ことを欣ぶものである。生の哲學が生のみにて世界觀及人生觀を確立し得るか、否かを批判したものが本書である。隨って讀者は本書により て多樣複雜なる現代の流行思潮たる生の哲學の諸傾向の根本思想を知り、そして其處に理想の

熊谷一彌著

定價貳圓
送料拾七錢

後

義も又重大であると云はなければならぬ。

第一編　ローン・テニスの歷史的考察、第一章　ローン・テニスの起原、第二章　ローンテニスの技術上の變遷、第三章　世界各國に於けるローン・テニスの發達と

長與善郎作——四六判——定價貳圓

內容

其概況、**第二編** 總論、**第四章** 本質的事項、**第五章** 庭球用具、**第三編** ストローク **第六章** ストローク、**第七章** フオアー、ハンド、ストローク、**第八章** バックハンド、ストローク、**第四編** 打球による球の性質、**第九章** 球のツイスト、**第十章** ドライブ、**第十一章** チヨツプ、ストローク、**第五編** 打球の種類、**第十二章** サービス、**第十三章** グラウンド、ストローク、**第十四章** ヴオレー、**第十五章** ロッビング、**第六編** フット、フオルト、**第十六章** フット、オルト、**第七編** ダブル、ゲーム、**第十七章** ダブル、ゲームの要領、**第八編** **第十八章** 練習上の二大要件、**第十九章** 體育的效果、**第九編** 著者の實驗、**第二十章** マッチ・プレー、**第二十一章** 軟球より硬球に入るに就て、**第十編** ローン、テニス競技の規則、**第二十二章** 規則及び範例、**第二十三章** 審判者の心得可き玉條 **附錄** 第一回の比律賓遠征△第二回の比律賓遠征△國際オリンピック選手權大會參加△デービス、カップ國際競技參加

第二編 **野球** 三宅大輔（五月上旬發行）

第三編 **競走** 金栗四三（五月中旬發行）

第四編 **登山** 槇有恒（六月上旬發行）

第五編 **擋球** 山田浩司（六月中旬發行）

發行所 東京芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 改造社

日本婦人の體格美

醫學士　岡田道一

日本婦人の美の今昔

『この國にずこやかの子の滿ちあふれ世を美しうかざらむねがひ』とは小著『女子の衞生』の卷頭に掲げた私の歌である。私は常に思ふ。今後の日本婦人の美をしてますます向上させようとする爲めには美容術、美粧法等の進歩發達に依つて作り上げるよりも大に體育衞生の思想を宣傳して其實行を期さなくてはならぬと。

段々多くの女子が學校生活をするやうになつたお陰の一つとして、體育思想も普及されて來たのは事實で其爲め健康美といふものが粉飾美よりも勝つて來て現在女學校に居る人々の身體は段々美くしくなりつゝあるのは慥かである。又小學校時代から體育を最も熱心に行つた女子は脊もすらりと延びて姿勢もよいといふのは事實である。

その他今日の女學生の中には舞踏とかテニスとか登山とかの運動熱の盛んな事は驚く可きことであるとは内務省衞生局にこの統計が示されてある處である。こんな事は昔には夢想だにも及ばなかつたのである。

昔の美人といはれる女子は常に室内に於てのみ生活して日光より遠ざかつた者で今迄の日本婦人の美は一に粉飾の美であつた。そして室内の立居を以て美として居た。外氣中に裸體となる美、即ち本當の裸體美を賞するものは無かつた。換言すれば日光に親しむ美人を描いた畫は今迄の日本畫にはないと云うてもよい。大抵の美人畫は室内の美人畫である、即ち日光を受けない榮養不良の女を衣服や周圍の飾で美しく描く事につとめたのである。其故日本繪では裸體の醜を現したものはあらうが裸體の美を描いたものはあまり外國程に目に觸れない。よく海女の仕事を畫いた日本繪などを見る事があるがそれでもその仕事を描いたのに過ぎないので特に裸體そのものゝ美ではあるまい。どうしても裸體の畫とか彫刻とかは外國には及ばない。それは外國のものにはいかにも健康の美といふものが充ち溢れて居るからであらう。以上は繪の力には

盲目な私の獨斷の批評であるがともかくも私は今の婦人は昔の女と異つて段々運動熱の盛んになるにつけて肉體の美を養ひつゝあり且それらがやがて日光や外氣中に於て充分發揮されつゝあると信じて居るものである。

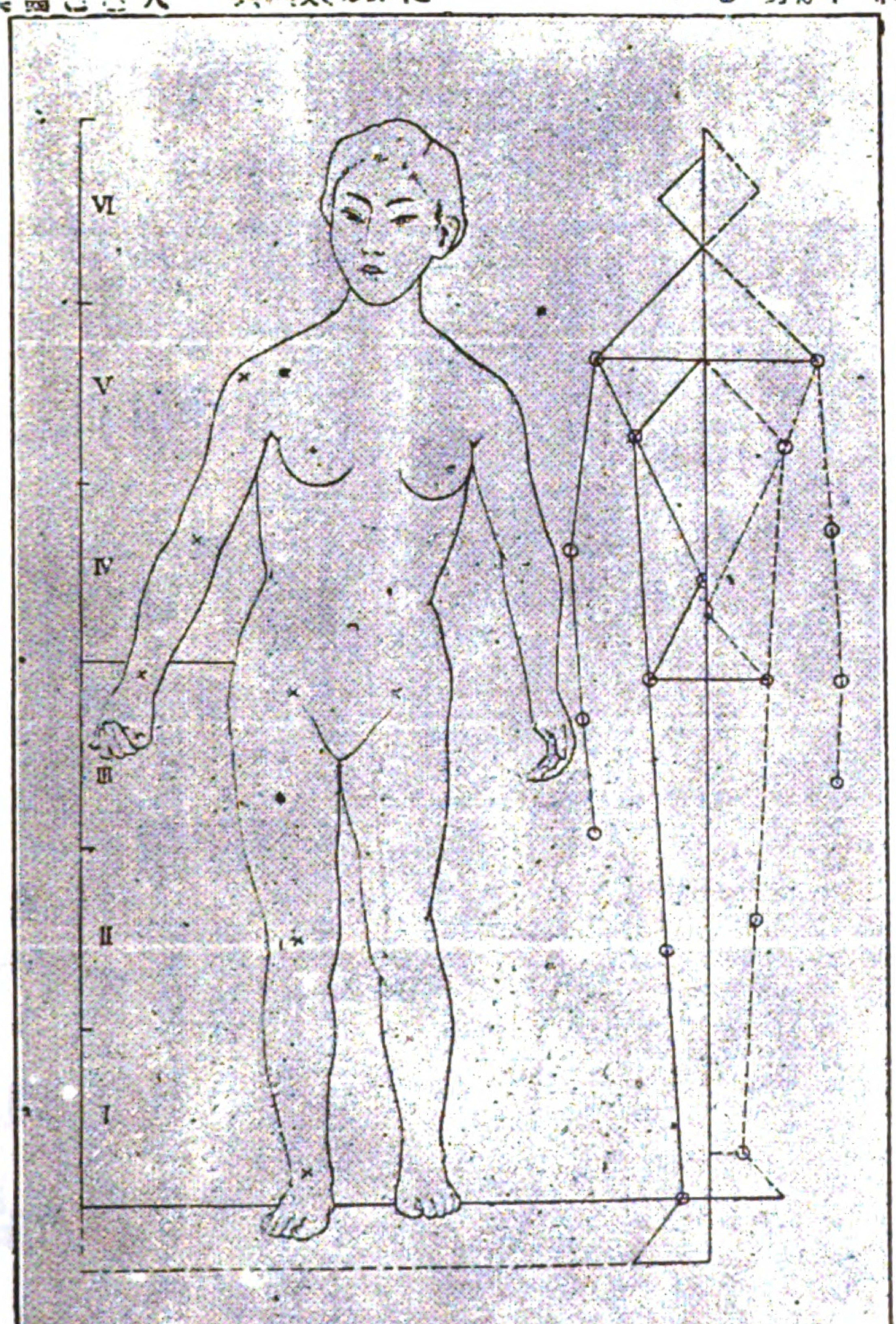
日本婦人の姿勢及體格

ベルツ氏は已に多數の日本人に就て外國人との比較の數を擧げた。其平均數に於て

	日本婦人	外國婦人
身長	一五四—一六三	一五五—一七三
肩幅	三三—三六	三五—四〇
腰幅	一九—二一	一九—二四
臀幅	二九—三三	三三—三六

即日本婦人は身長に於ても其他すべての幅に於ても外國婦人に劣るのである。

又醫學博士田口和美氏は日本及外國婦人の實際に就て測定されて次のやうな數を發表された。

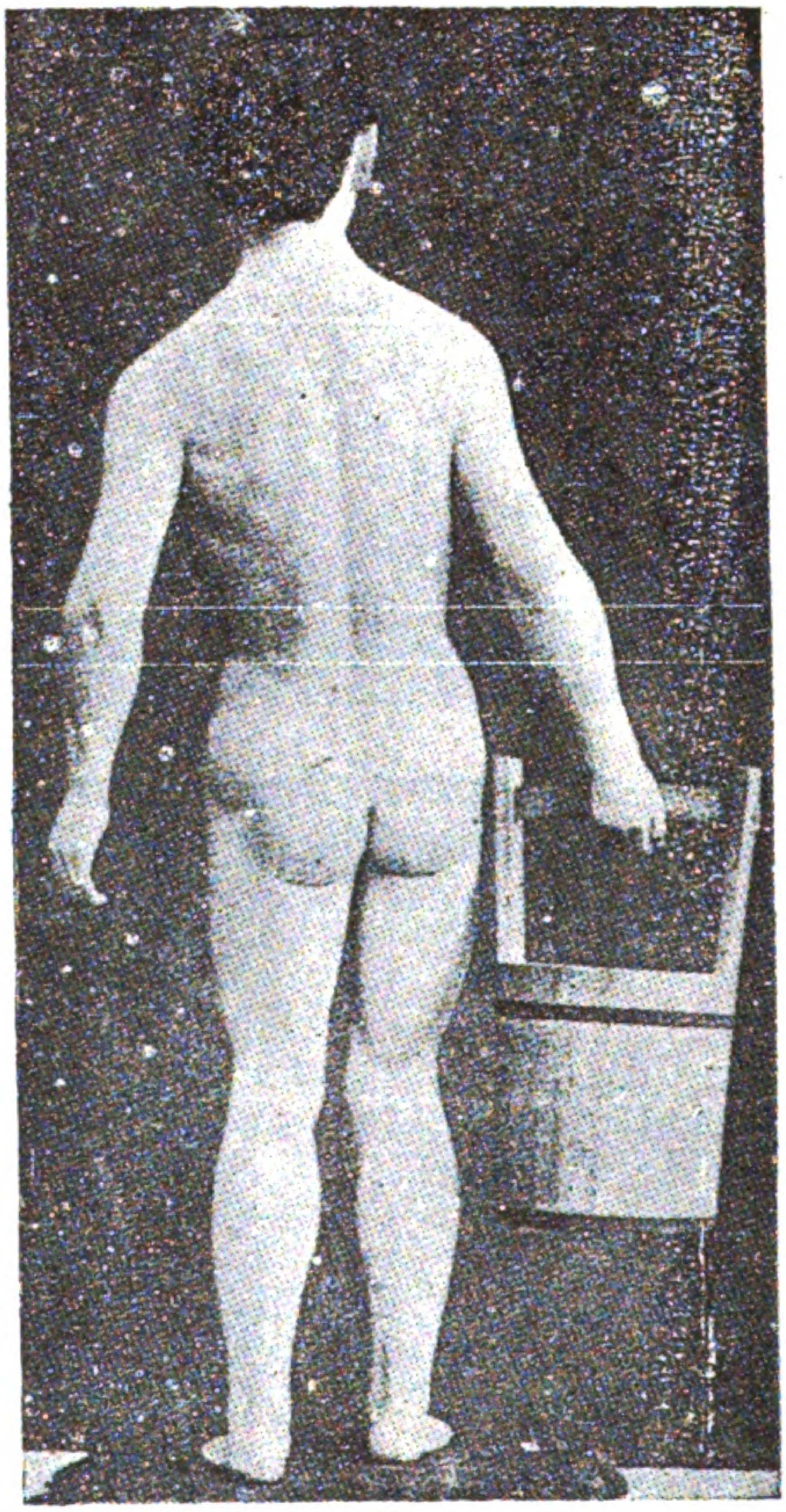


	日本婦人	外國婦人
全身長	四、八四尺	四、九〇尺
頭高	〇、七一六	〇、六五六
上肢	二、一八九	二、一五五
下肢	二、四四八	二、七一六

即日本の女は外國婦人に比して頭骨は長く下肢は短かいそれは丁度フリッツ氏が人體の美の標準を定めた權衡論から云へば(1)圖中の右の線畫の中左の半分はフリッツ氏の標準圖で右の半分の點線は本圖中の女を測定したもの)即頭の高さの七倍半が全身長なるべきに日本婦人では丁度六倍位になつて居る。又殆んど上體と下體とが同じ長さである是で見ても日本婦人は何れも頭が長くて下肢が短かい、

これが日本婦人の特徴であり且つ美を遠ざかる點である。即外國婦人の體格は强壮に見えると云ふのも皆下肢が長いからである。然るに日本婦人では支へられる頭が大きいのに支へる下肢が殊に短かい。即いつも物に壓しつけられてるやうである。

又日本婦人の姿勢は猫脊即脊柱彎曲が多い。これは既に小學校に於ても男兒よりも女兒に脊柱後彎が多いのである。其一例として私が實測した所の東京市麴町區の兒童五千五百八十五人に就ての調査に依つても男兒では百人に一二、五人しかなかつたのに女兒にては二〇人の彎曲者があつた。その他誰れの統計を見ても男兒より女兒に彎曲が多いのを觀る。この原因は日本古來の習慣としては女兒は俯向き勝に歩く。即始終、叩頭をして居るやうに教育されて來て其上裁縫とか琴を彈くとか茶の湯を習ふとか下を向く仕事が多いのに遠因し近くは女兒が不活潑で男兒と比して運動不足であるからとも云へやう。西洋婦人を觀察するに椅子にかけた時よくそのもたれによりかゝるやうに脊を延して居るが日本の女のはそれと異つていつも脊中と椅子との間が、二寸も三寸もあいて居るやうに腰掛けて居るのである。それらは一つの習慣とも云へやう。



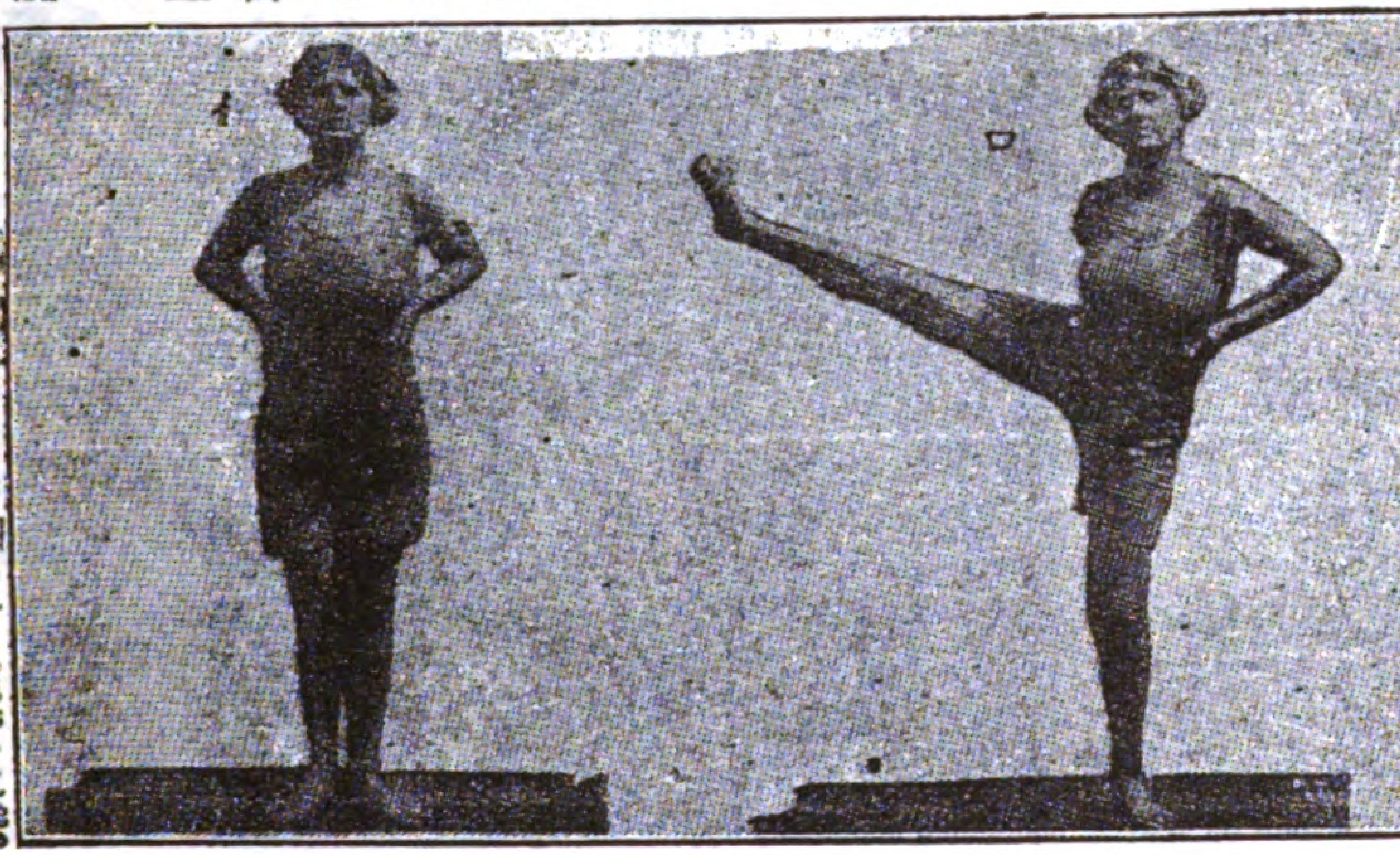
今後の日本婦人の體格の改造

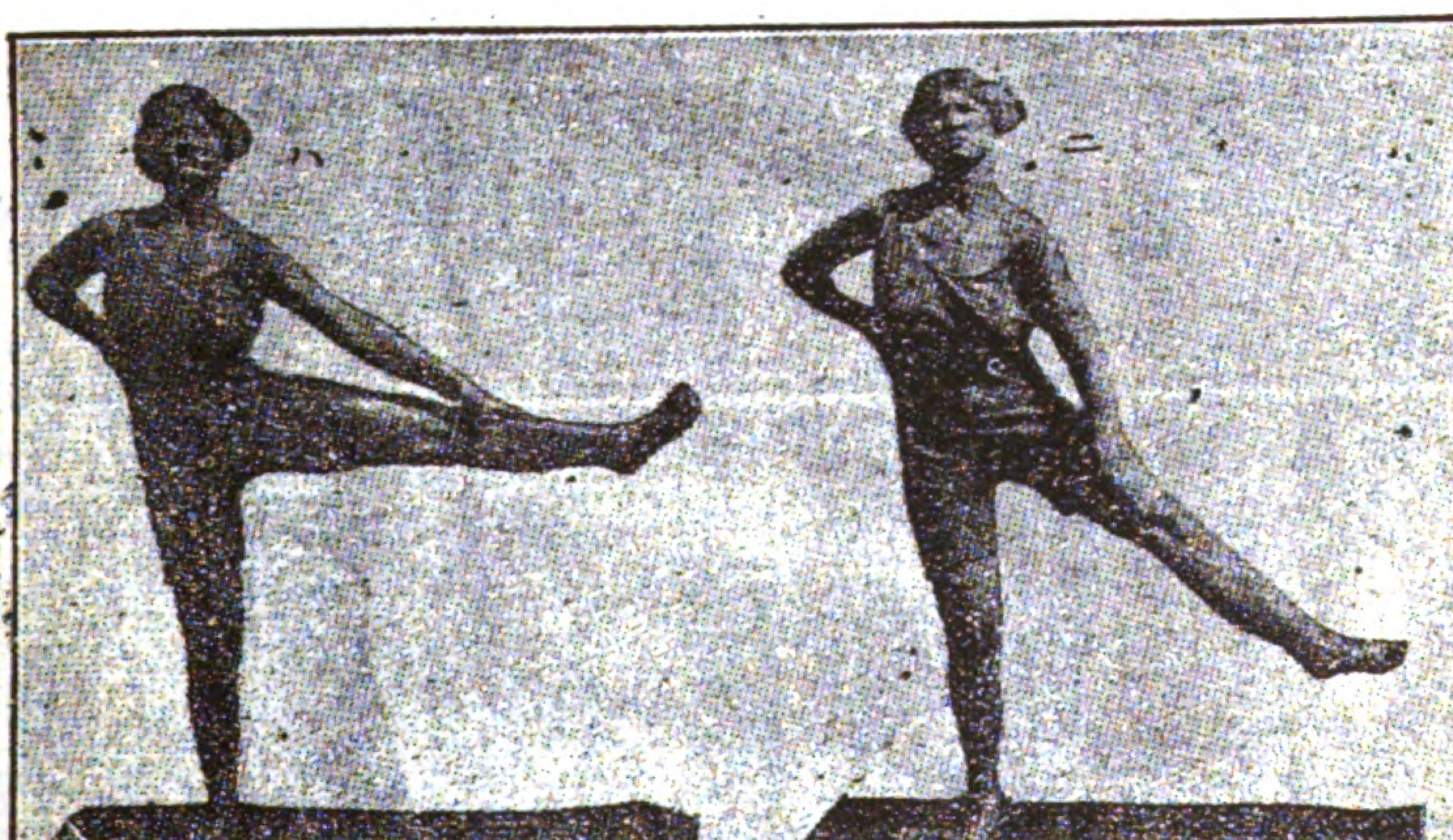
さらば今後どうして吾人は外國婦人と同じやうな美に近づく事が出來るであらうかそれが問題である、要するに下肢の發達と云ふ事がまづ考へられねばならぬ問題である。即日本人の體形の美を害ふものは脚の短きとであると思はば第一に脚の長くなる方法を考へるべきである。それには日常の注意としては

（一）洋服を用ふる事
（二）椅子に腰を掛ける事
（三）足を用ふる運動をなす事

等が必要である。即すべてを洋式にする生活改善を行へばよいので日本の服裝では脚力を發達させるよりは其發達を防止する樣に出來て居る。又常に足を折りまげて用ゐぬといふのもいけない。それには多く足を用ふる運動をなすのがよいフートボール、舞踏などが一番に理想的である。

日本婦人の下肢の著しく短かいのは坐る事が一大原因をなして居る。これには然らずと云ふ說もあるが、新潟の産婦人科病院長高橋辰五郎氏は大正五年迄の二十ケ年の徵兵檢査の成績に就て研究されたのに一人に付約五分二厘四毛宛身長が增加して來たのを知りこれは全く學校教育の進步、運動の





奬勵、坐位の減少にありと斷言し進んで身長一尺に付膝以下の下脚の長さは娼妓では二寸九分〇七であるのに高等女學校の生徒では二寸九分九八である事を定められたのであつた。これで見ても坐位をなるべく廢する事が先づ必要であることは明瞭である。

更に一歩を進めて果して女子の肉體美を發揮して健康を進める運動は何がよいかと云へば今日其は小學校女學校に於て益々盛んになつて來つゝあるスヰーデン式體操を行へばよい即體操は身體各部を平均に動す事を努めるのである。其故に體操の如きは成べく在學中も亦卒業後でもこれを熱心に行ふ必要があるのである。

其他近頃流行の各種の強健法はどれを行つても效果があらう。ミユレル氏が定めた浴後裸體で行ふ摩擦體操の如きは美容上にも效果が多いものである。

然し體操の如きはよいとしても一つの娯樂としてこれを行ふ迄には可成りの修養を要する。其故もつと他に然る可きものを發見しなくてはならぬそれには今日方々の女學校で實行して居るものに就ての私見を述べよう。

(イ)登山

近頃急に方々ではじめるやうになつたが、脚を延す運動としては最もよい。其他肥滿者が瘦せたいとか脚を丈夫にしたいとか思ふ人には至極適當な方法である。

(ロ)水泳

水泳をする女は脊がすらりとして脚の長さも長くどことなく釣合が取れて居るのが多いのを見るであらう。これは水泳のため上肢下肢共均等によく發達することが出來るからである。然しこの運動は登山よりも一層疲れが多いから成べく多くの休息を採つて短時間に行はなくてはならぬ。



(寫眞は昨年の夏私が監督の下に催した調布多摩川に於ける麹町區夏季林間學校の水遊場(多摩川)で入校兒童の附添ひに來校し共に水泳された熊谷梅子孃(十七歲)を權衡のとれた美人の例として撮影さして貰つたのである。

(ハ)テニス

テニスは婦人に適當した運動で、近頃では各地の女學校に流行して居る。嘗てドクトル島村育人氏が庭球者非庭球者とを比較して身長や上肢の長さがいづれも庭球者の方が大きいことを測られたことがある其他胸廓に及す影響とか體重の發達の工合は庭球をして居るものはいづれも良好であるといふ。

(ニ)羽子突き遊び

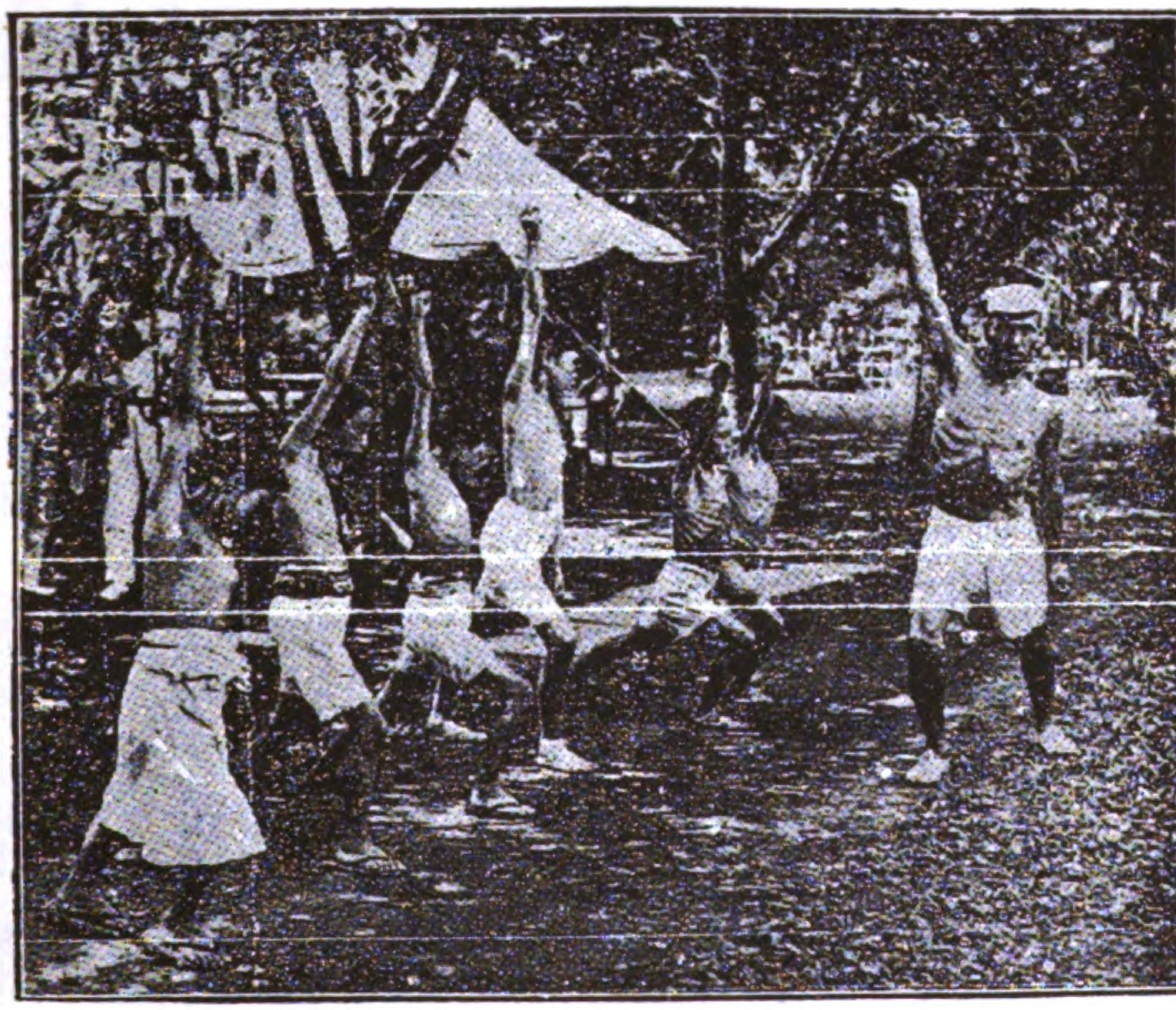
羽子突きは正月の行事であるがこれは近頃テニスのやうに競技として應用されてテニスと同じやうに女子の運動として體格の發達を計るものとして奬勵されつ〻ある。まことに結構なことである。

(ホ)律動的遊戲及舞踏

外國人の姿勢運動の美は其特徵を最も良く舞踏に現して居る。即人體の藝術の極致はのび〳〵とした下肢によつて現

はれるといふ點はとても日本人には見られない。又それが進んで肉體美を造る手段として音樂に合せて下肢を動かすといふ事が疲勞を忘れしめて體操を續けてすると同じ結果になるのである。

次に姿勢の改良であるが、これは脊柱彎曲の强度のものにはどうしても矯正醫療體操を施さなくてはならぬ。自分が脊柱の彎曲を知らずに居て矯正體操を受けてから大に胃の工合がよくなつたとか病氣が治つたとかよく聽く話であるが其は實際さうあるべきである。脊柱彎曲者は自分で分らなくても其結果自然に胃や腸や肺を壓迫してどうしても故障を起し易いのである。（寫眞は矢張り昨年度の麴町夏期林間學校に於ける脊柱後彎者の矯正醫療體操）其故早く學校醫によく檢査を受けて其等の缺點を見出す事も必要である。其他輕度のものの治療や又は豫防策としては脊筋を練習して之を强める。其爲には肋木や適當に懸垂運動をさせたり水泳の胸泳ぎなどをさせるのもよい。又机腰掛や採光にも注意を忘れないやうにしなければならぬ。それから又日本の女子は手工とか裁縫とかを習ふものであるがこれ等の時でも時々は脊延びして仰向になると云ふことが最も必要である。（終）



メリー・イー・マーシイ夫人を憶ふ

紐育にて　市川房枝

△△△様――

先達、マーシイ夫人にお目にかゝつた事だけを一寸端書でお知らせ致しましたが、それから一ケ月もたゝないのに、此度は夫人の訃を御知らせしなければならなくなりました。

夫人は去る十二月の八日過つて、のまれた毒薬のために、遂うなくなりました。或はあなた様の方にはもうマーシイ氏から御通知がいつてゐるかも知れませんが、私は寄宿地にゐながら、やつと去る金曜日の夜、それを知つたのでした。

それは丁度K學校の廊下での事でした。私がミセスニヤーリングの室から出て來ると、兼てから知りあひのクラスの一人が突然私の腕を引張つて

『マーシイ夫人がなくなつた事を知つてゐますか』

と聞いたのでした。その時の私の驚きはどんなでしたでせうか。私は折返して

『何時?』『どうして?』

といきをはづませて問ひ返しました。彼女は

『それは凡そ二週間ばかりの前の事で、故意か過か知れませんが毒薬を呑まれたのださうです。』

と答へました。『毒を呑んで…』の言葉は一層私の心を驚かせました。もつと詳細をと思つたのですが、お互に次の講義を持つて居たのでその場はそれで別れてしまひました。然し教室に這入つてからも私の頭は

『それは事實か知ら?…あゝもし事實だつたら!…あのチカゴでの面會が最後だつたのか…』

と初めて會つた時の光景から、二人で秋の郊外を散歩した時の忘れられない思ひ出、さては最後の抱擁の時の夫人の眼の涙等が走馬燈のやうにそれからそれへと繰り返され、講義は何にも耳に這入りませんでした。歸りの電車中も家へついてからも同じ思ひで満たされ、はては

『なぜ紐育に來てから一度も手紙を書かなかつたのか、あんなに書くやうに云はれ切手をはつた封筒まで下すつたのに。』

と悔まれるのでした。然しさういつた中にも

『それは或は間違ひかも知れない、たゞあの人から聞いたゞけだから』

とも疑はれ、さうあつてほしいとも祈るのでした。さうしてともかくその實否をマーシイ氏宛で早速問ひ合せました。

がその一縷の頼りもとう〳〵切れました。マーシイ氏からの御返事を待つ迄もなくそれは事實でした。

私は昨夜と一昨夜、學校の圖書館と市の圖書館に出掛けて、最近の勞働問題や社會

主義に關する雜誌、新聞をづつとくつてみました。若し夫人がなくなつたのならどれかに出てゐない筈はないと思つて。

此の豫想は不幸にして適中し、一日の The Labor Herald の最後の頁から次のやうな記事を見出しました。

『我々はメリー・イー・マーシイの死を記載する事を非常に遺憾に思ふ。その報知は丁度本誌の最後の締切間際に來た。彼女は多年の間勞働運動就中左翼の勞働運動のために盡力した事によつて知られ、非常に尊敬されて來た。彼女の多くの著書及パンフレットは幾千萬の勞働者の心に非常な感化を及ぼしてゐる。彼女の訃報は彼女を知つてゐる總ての人々を驚かせるであらう。』

又十二月二十三日の The Industrial Solidarity をくつてゐると『日本に於ける勞働運動』といふ見出しが眼についたので、一寸讀みかけてみますと偶然にも『最近に死去したメリー・マーシイ……』とありました。すれば十二月十六日のには詳細に出てゐるのに違ひないと探したのですけれど、それはとう〳〵手に這入りませんでした。然し前の『日本に於ける勞働運動』の記事は私にはなつかしいものでした。それはマーシイ夫人がこの雜誌の主筆に出された手紙を引用したもので、その手紙の日附は十一月二十八日になつてゐます。すればなくなる十日ばかり前に書かれた譯です、その手紙の中には次のやうな意味の事が書かれてありました。

『……私は東京……といふ一人の若い印刷工から最もいゝ新聞の名を知らしてほしいと云ふ手紙を受取りました。書中彼は『日本に於ては組合勞働者殊に產業組合勞働者は共產主義者のために苦しまされて來た、さうして運動は殆どつぶされてしまつた』と書いてゐました。私はソリダリテイがよからうと云ふてやりました。どうぞ一部送つてやつて下さいませ〳〵。これは彼地の運動を非常にたすける手段になるかも知れませ、日本は今にえくり返つてゐます。產業主義者と共產主義者とはどこでも見るやうに同じ問題で闘つて居ます。私は彼に正しい報告をしてやりたいのです。

：私は前の日本の青年に政治的及產業的オーガニゼーションについての私の考を詳しく書いてやりました……』

尚十二月十二日の The New York Call には『パイオニヤ社會主義者死す』として次の記事が出てゐました。

『メリー・イー・マーシイはあやまつて呑んだ毒藥のため十二月八日彼女の家で死んだ。彼女は十一月中彼女の最近の著書 Rhymes of Early Jungle Folk が子供へのクリスマスの贈物として非常に賣行のいゝ事から、今後は次の時代をかたちづくる子供の心に、簡單な形で彼女の理想をうゑつけるやうにしやうと非常に喜んでゐたのであつた。

メリー・マーシイは多年の間社會主義に關する書籍を出版してゐるチャールス・エチ・カー會社と關係し、又彼女の夫であるレスリー・エチ・マーシイ及カーと共に The International Socialist Review の[illegible]記者の一人であつた。又社會主義の立場から子供の教育の事を書いた數冊の本を著してゐる。』

チカゴの日刊新聞ではやつとチカゴトリビ

ーソ紙だけ見出したのですが、それも日が揃つてゐなかつたり、頁がかけてゐたりして全部見る事が出來ませんでしたが、十二月八日の紙上で夫人を『社會主義上で權威者』といひ十二月四日毒を呑まれた事、それから病院に入院して今危險狀態にある事、警察側では誰れかが故意に夫人にのませたものとして犯人を探してゐる事等を見ました。そして夫人の寫眞も若い時のと思はれるのが出てゐました。

もつと探したら外にものつてゐたでせうが、もうこれで夫人の死を疑ふ餘地はなくなりました。突然の然もさうしたあやまちからの死は、夫人自分もどんなにか不本意だつたらうと思ふと一層涙がにぢみます。私の心は昨日今日すつかり悲しみにとざされてゐます。さうしてまたチカゴで御目にかゝつた時の思出を幾度もくりかへしてゐます。『どうせ生きたものなら死ぬにきまつてゐる』と片附けてゐた問題がまた新らしくよみかへつて來ました。私は今此の悲しみを一人でかみしめて附るのに堪えられません。誰かにあの夫人の面影を傳へたいのです。私の夫人についての追憶を聞いてほしいのです。どうせあなた樣には御知らせする義務もあるからと、あなた宛に筆をとりました。

といふものの私は主人に就いて多くを知りません――尤もあなたには御知らせする必要はありますまいが。又御目にかゝつたと云ふのもあとさきで二度に過ぎません。從つて夫人の全部を御傳へする事の出來ないのを遺憾に思ひますけれど、今は唯私が夫人を御訪ねした時の樣子を御知らせして、ありし日の夫人をしのぶだけにとどめます。

あなたから『夫人の著書で日本で譯されてゐるのもあるし、可成わかつた人のやうに思ふから一度訪ねてみて御覽なさい、私から手紙を書いておきますから』と夫人の所書を添へた御手紙をいたゞいたのはたしか今年の春頃でしたね。

然しその當時は實はマーシイ夫人に就いては何にも知りませんでした。又言葉も出來なかつたので、もう少しあとで御伺ひしやうと所書きだけしまつておいて、遂う秋まで打過ぎてしまひました。尤も此間夫人がどんな方か、またどんな著書があるかといつた事は心にかけてはゐました。さうして片山潜氏の『日本社會主義運動史?』に序文を書いてゐられる事、勞働者の間にはわけてもラヂイカルの方面には可成の崇拜者を持つてゐられる事等を一寸耳にしました。又此の夏歐洲から來た友人と一所にI・W・W・の本部を訪ねた時、ここで夫人の著書

Shop Talks on Economics. The Right to Strike. Industrial Autocracy. Why Catholic wakers should be Socinlisls. といつたのを見出したので、早速それを買つて來ました。が實はそれ等の本は頁をメクツてみた位でトランクの底に入れてしまつたのですが、然しそれ等から私は夫人を素的に頭のはつきりした、意志の强さうな方に想像してゐました。

九月の末ミシガンの田舍を引上げて再びチカゴに歸り、それからニューヨークに發つ迄の一ケ月間は、今迄見殘した所等をみたりしらべたりするのに費しましたが、夫人を御訪ねするのも此間のプログラムに這入

つてゐました。さうして或日の午後、いただいたアドレスのカー會社をさがしてまゐりました。御承知のやうに此處は書籍出版の會社でマーシイ夫人はこゝにはゐられませんでした。然しここから電話で自宅にゐられた夫人と御話する事が出來ました。私はあなたの御名をいつて御目にかゝり度いと申上げたのですが、夫人は非常に喜んで、

『いつ來ますか。電車はあなたの所からならこうこう……』

と丁寧に敎へて下さいました。

ここで私は一寸しるして置き度い事があるのです。それは來た序と此の會社から出版されてゐる書籍をみてゐる中、エンゲルスの The Origin of Family の本が眼につきました。開けてみたらそれは古本で然も表紙の裏にはマーシイ夫人の署名がしてあり、書中には所々にアンダーラインが引いてあり批評が加へてあるのです。

『これはお賣りになるのですか』

と事務員にたづねましたら

『えゝ賣りますが、それは古いのですから新らしいのを御持ちなさい』

と出して來てくれました。然し私には同じ定價でも古い方がほしいからと持つて歸りましたが、理由を知らない事務員は變な顏をしてゐました。此の本の事はあとでマーシイ夫人にお目にかゝつた時にも話しませんでしたが、今はなつかしいかたみになりました。

マーシイ夫人の御宅と、私の住んでゐた所とは殆どチカゴの北南のはしで、六時半に家を出ながら約束の八時はもう電車の中で來てしまひました。終點で降りてから暗い街を電話で敎へられたやうに行つた積りでしたがいつの間にか墓場へ出てしまひました。これは間違つたと引返し途をとほる人に二三度たづねて、やつとポーマンビルの通りには出たのですが、暗くて番號がよく見えません。きつと燈のついてゐる所に違ひないと、そこへ行つてはしらべまた先へ〱とまゐりました。さうしてやつと見付けました。そこには表の窓の所にローソクがつけてあり、奥の方では二人の婦人が何にか縫ひ物でもしてゐられるらしいのが窓越しにみえました。ベルを押して待つてゐるとやがてドアーがあき、背のあまり高くない、やせた、中年の婦人の姿がつと眼に入りました

『これが夫人か知ら？』

と考へる間もなく、いきなり兩手をにぎつて、

『待つてゐましたよ、分りいゝやうにとローソクをともして置きました。……よく探して來ましたね……』

と外套をとつたり帽子をとつたりして下さいました。私は約束の時間よりおそくなつた事を詫び、間違へて墓場へ出てしまつた事を話して笑ひました。――御弊をかつぐとこれがもう夫人の死を暗示してゐたと云はれるかも知れません。食堂に案內されて、さつき外から見た一人の五十位の婦人に、

『これは元のチカゴ美術館長だつた方の夫人です……』

と紹介されました。

夫人は別にあなたの事も私の事も聞かないで、刺繍をしたテイブル掛をつくろひながら

『今日は午後洗濯をしてコテをかけたんですよあなたがもつと早く來るとコテをかけて

もらふんだつた。」

などといひながら、此度は私につくろひ物を渡して

「お茶をいれませう」

と臺所に立つて行かれました。始めて行つて一寸面くらつたのですけれど、そのへだてない、もう十年も知己のやうな扱ひは私に非常な心安さを與へ、落ついて上手でもない針を運んでゐました。

やがて紅茶を持つて來られた夫人はチャイニスソース（醬油）を入れるとおいしいとて少し私のお茶碗にさして下さいました。

「日本では普通には何にも入れません」

と申しますと

「では入れかえてあげませう……」

と強いて臺所に行きタンジユリン（日本のみかん）と一所に持つてきてすゝめられました。さうして

「カタヤマを知つてゐますか、カタヤマがチヤイニスソースを入れる事を敎へてくれましたの、クローを知つてゐますか、カタヤマと一所にゐた靑年で、今サイベリヤの方にゐるでせう、カタヤマの娘さんを知つてゐますか、こちらでダンスの稽古をしてゐましたが……」

と話しかけられました。勿論私は片山さんもお孃さんもお名を知つてゐる位に過ぎませんが

「お孃さんは今日本に歸つてゐられるやうですが、お父さんが社會主義者だといふのでダンスの先生をしやうとしても生徒がないんださうです。それでかどうか或時お父さんに「何ぜ社會主義なんかになるんですか」と手紙を出しなすつたら、「馬鹿！そんな事いふものはおれの子でない」といつて來たさうですが、矢張それからでも時時手紙がくるんださうです……」

と新聞でみた事をそのまゝ話しますと、それは面白いなんてしきりに笑はれました。

こんな間も私は針の手をやすめないでゐたのですが、それはエバーラスティンの仕事だからもうよせといひ、臥で編物をしてゐられる友人に

「Isn't she wonderful! Isn't she nice!」

なんてしきりに云つてゐられました。何がワンダフルなのかナイスなのか、わからず、一寸赤い顏をせざるを得なかつたのですが、そこへまた一度ならず二度三度迄抱きしめられ少なからず恐縮してしまひました。――さうしていふ事になれない日本人ときてゐる所へ、不相變きたない樣子をしてゐますので、むしろ先方に氣の毒な氣がして。果せるかな暫くしてから夫人の寢室につれて行かれ、髮を直され香水をふりまかれました。さうしてまた幾度も抱きしめられ

「私はあなたを私の娘にアダプトーしませう。アダプトーしたのはこれが初めてです」

といひ

「フサエ、フサエ」

と呼んだりされました。

私は此のルームでビユーローの上にあなたの住所の書いた古カードが一枚出してあつたのを見ました。

途中の時間がかゝるから歸らうと云ひ出しても、も少し／＼と遂う十一時迄とめられました。さうして此間寫眞や此度出版する原稿だといふのをみせてもらひました。この原稿は今から思へば賣行がよかつたといふ

Rhymes of Early Jungle Folk だつたと思ひます。又私の名をカーペットに書くから日本字で書いて呉れといはれ、どういふ意味かわからなかつたのでしたが、いつもの通り投り書きしたりしました。

一年近くもチカゴ近傍にゐながら今迄來ないなんて Make me mad! としかられましたが、私もこれならもつと早く伺へばよかつたのにと悔まれるのでした。然しともかく發つ前に今一二度は必ず御訪ねすると約束して、寒い夜道を電車迄送られて別れたのでした。その時の赤いやうな色の外套の襟を立てゝ電車道に立つてゐられた姿が、今もはつきりと目の前に浮びます。

二度目に御たづねしたのはそれから一週間程たつてからで、私がニューヨークに發つといふその日の午後二時頃でした。此度こそはおくれまいと急いで、が然し香水をつける事は忘れないで出掛けました。丁度私が夫人の家の前まで來た時、私は夫人が裏庭で近所の子供等と何か話しながら花を手折つてゐられるのを見出しました。

夫人の家は二階建の木造の小さいハウスで表にも裏にも五六坪位の庭があり、そこには色々の草花が植ゑつけられてゐました。

私はベルを押さないで裏にまはり、一所に臺所に這入つて、夫人が花をグラスにさゝれるのを暫く見てゐました。花は日本でいふニンジン草のやうなので、夫人は

「いゝにほひでせう」

等と二片三片むしつて私の鼻の先へ持つて來たりされました。

此日は恰度マーシイ氏も在宅で、お目にかゝる事が出來ました。氏は背は高いのですが矢張やせた方で、髪は眞白く、一寸佛蘭西人といつた風の方でした。

「今晩發つて？　まあゆつくりしてゐらつしやい、チャプスイでも一所に食べませう。」

とお二人からすゝめられましたが、もう今夜は他に約束があつたので、それを御斷りし、

「御飯はあとで炊いてみませう」

と申上げたのでした。それはお二人とも非常に米がおすきだけれど、どうもうまくたけないのださうで、私が一度たいてみる事に此前御約束して置いたからなのです。

「それなら仕方がない、まあ然しゆつくりしてゐらつしやい、今日は若い男の方も來る事になつてゐますから…それからいゝものを見せますから一寸待つてゐらつしやい」

とて夫人は地下室から一枚の大きな紙を持つてこられました。何かと思つたらそれは此間私が紙切れに書いてあげた私の名を擴大したのです。すつかり私の書いた通りであるのに感心させられましたが、又これでカーペットに書くと仰有つた意味がわかりました。

「日本のカードが澤山ありますよ」

とてマーシイ氏が出して下すつた富士の繪葉書を三人でみてゐる時、若い男の人が來訪されました。それはさつき話のあつた令甥でした。

この人は繪を勉強してゐられるらしく、自分でかゝれたといふペン畫のやうなのを三四十枚も持つてこられました。マーシイ夫婦はこれがいゝ、それがいゝ等と私にも見せては批評してゐられました。その中夫人は或一枚の人物畫をぬき出して

「これは大變よく出來てゐるから私にくれ

ませんか」

とサインを求めたりされました。

一通りこれを見終つてから、夫人と私とは、引續いて日本の繪葉書を見てゐられたマーシイ氏と令嬢とを殘して

「いゝお天氣だから散歩しませう」

と外套のかはりに夫人の長い毛糸の肩掛をかけてもらつて外に出ました。

ボヴマンビルの通りは市内とはいふものゝもうすつかり田舍で、家屋も軒並みでなく、街路の中央には草が生えてゐる程でした。北の方へ少し行くと人家は稀れで、赤く黄く色づいた雜木林が續いてゐるのでした。私達は腕をとつてその間をゆる／＼話しながら足を運びました。

家を出てから間もなく「ハロー、ミセスマーシイ」と呼んで行く子供二三人に出會つた事から、夫人は

「私は子供が非常にすきで、お菓子や果物があると、近所の子供にやるので、皆ミセスマーシイーと呼んでは來るんです。子供は可愛いですね」

と語り、又路側の古い家を指さして

「この老夫婦はここに長く住んでゐるのです。お百姓をしてゐるのですが、よく野菜物を持つてきてくれます。近所の人達も皆いゝ人です。」

と仰有るのでした。丁度さういつてゐられる時、六十を越したと思はれる婆さんが中から出て來ました。さうして夫人を見るや

「ハロー、ミセスマーシイ、よつてゐらつしやい」

と呼ぶのでした。夫人もにこやかに

「ハロー、――今日は友達と一所に散歩に出た所ですから」

と答へてゐられました。

夫人は此度は、さつき來られた令嬢の事に話しを移し

「さつき來たのはマーシイ氏の兄弟の子なんです。まだ十八なんですが結婚して今繪を勉强に來てゐるんです。兩親に離れてゐるので、あゝして頼りにしては時々遊びに來るのです。繪はまだ下手ですけれど、まづいといつては勵みが出ぬのでいゝ所をみてはほめてやるのです。形は惡いけれど影はいゝとか、影は惡いが形がいゝ等といつて……」

と私を顧み、更に

「ねー、私達の一番大切な事は愛なんです。皆んなを愛する事です。よくこれをおぼえてゐらつしやい」

とつく／＼仰有るのでした。

誰をもへだてない夫人の態度、さうしたやさしい心づかひを私はどんなにうれしく敬虔な心持で聞いた事でせう。きゝあきてゐる愛の教も社會主義者としての夫人から聞いては、また別の感激にうたれます。此前の訪問の時に感じた多少の不快の念――それは戯談が多いやうに思はれた事に對して――はもうすつかり取り去られて、何かある特別の親しみを感ぜずにはゐられなくなりました。

「大戰中は殊に隨分迫害されました。從つて手紙を書く時には――にしてゐるのです」

と聞いては、

「何ぜ思つたまゝさへ書けないのか、自由に往來が出來ないのか、その問題に關係がなくとも遠慮しなければならないなんて……」

とはがゆくも、いきどほらしくも思はれるのでした。

綺麗だと色づいたどうだん？の一枝を手折つて貰つて歸途についた時、勢よく駈けて來る男女の乘馬者にあひました。

『あなたは馬に乘つた事がありますか？』『あなたは？』

とお互に聞き合ひましたが、夫人は二度あるとて其時の樣子を面白く話されました。その話の中『體があんまり丈夫でないので』と仰有つてゐらしたのですが、――それは一寸お會ひしただけでも察せられますが、これが一つは此度のやうな事になつたのだと思ひます。

私共が家に歸りついた時、令甥は約束があるとて歸つてしまはれました。そこで三人で再び卓を圍み、茶をのみながら

『いつ日本へ歸りますか』

『働く時レフアンレンスがゐるのだつたらいつでもあげますよ。私の家には子供がないけれど家で一ケ年子供の守りをしたとでも書きますよ。』

『日本は主義者を隨分壓迫するさうですね』

といつた事から、あなたの所の社會主義研究が毎月來てゐるけれど終りの英文だけしか分らない事、夫人の著書で日本譯になつてゐるものの事、此間も一つ翻譯したいと頼んで來たけれど、するなら英語のよく出來る人に間違なくしてほしいといつた事等を話し合ひました。さうしてつい一兩日前矢張日本から手紙を貰つた、この人を知らないかと手紙を出して來られました。名は私には初めての人でしたが、その要項は

『マーシイ夫人の著書を讀んで非常に敬服した。こんないゝ本は今迄讀んだ事がない、どうぞ夫人の著書全部を知らしてほしい』

といふのでした。夫人は

『澤山方々から手紙を貰ふけれど、かういふのは初めてです。日本へ歸つたらたづねてみて下さい』

と仰有るのでした。

こんなうちに逢う五時も過ぎました。

『とうとう御飯をたく時間がなくなりました。おいとましなければ』

と腰を上げました。

『一所に夕食をして行くといゝけれど仕方がないですね。時々手紙を下さい。家の方の住所は――會社の方の住所は……』

と切手を貼つた封筒迄下さいました。

『私のニューヨークの住所は着いてから』

と申上げて、しばらくの御別れの言葉を交して戸口の方に進みました。さうしてこゝでまた二度三度御別れに固く抱擁した時、思はずほろりとなりましたが、夫人の眼も涙にぬれてゐました。

幾度もふり返り、夫人の注文でライスとチャプスイを買ひに出掛けられるマーシイ氏に途中まで送られて歸りました。

あゝそれは暫しの別れでなくて、永久の御別れになつてしまひました。

かうして思出を繰り返す時、私の前にはあのやさしかつた夫人の面影が浮びます。それは社會主義者としての夫人としてよりも、只の一人のなつかしい婦人として私の心に深い印象を殘してゐます。

私達はお互に思想上の事を實際運動上の事を話し合ひ指導を受ける機會を殆

ど持ちませんでした。——それを期待して何つたのでしたけれど。これは誠に遺憾の極みですけれど今になつては、殘された夫人の著書による外途はありません。尤も思想としては或は婦人に全然同意する事が出來ない個所を見出すかも知れませんが、それは私が夫人を尊敬する心には何の影響も及ぼしません。

夫人の面影は最もなつかしかつた人の一人として終生私の心から消える事はありますまい。

以上で筆をとめる積りでした所、昨日マーシイ氏から返事がありましたので少しつけ加へます。マーシイ氏からの手紙の中夫人の死に就いては次のやうに書かれてありました。

I hope you will always remember the Sunday afternoon you spent with us not long ago. Mary took a dose from the wrong bottle of medicine. She left us on December 8.

We had the best doctors and best nurses that money could hire.

I am mailing you a copy of her best book to-day.

前からもう承知してゐるものの、また新らしく涙を催します。なくなつた夫人を惜しむは勿論ですが、こうして手紙を拜見してゐると一人殘されられたマーシイ氏が御氣毒でたまりません。mary left us の句をどんな心地で御書きになつたでせうか。『私達は幸にもお互に愛し合つてゐます』とは、かつて夫人が私に語られた言葉でした。

マーシイ氏が送つて下すつたといふ本はまだ届きませんが、あの Rhymes of Early Jungle Folk だらうと思ひます。

私は最近夫人の著書を今二册書店で見出しました。それは

The Stories of the Cave People

A Free Union (A Comedy of Free Love)

です。後者の方は早速讀んでみましたが、表題通りの喜劇で思はずふき出しました。所謂自由戀愛を諷刺したものです。外のも今讀みかけて居ます。



三越と婦人

流行獨裁者としての三越

室伏高信

○三越の社會的職分は流行の獨裁者であることとである。無論そこは一つの商店であらう。商品を賣買する意味で三越が一つの商店であることに疑はない。法律上にはそこはたしかに商店である。しかしそれの社會的職分はたゞなる商品の賣買ではない。そこでは呉服を賣る。帽子を賣る。洋服を賣る。鮨や蕎麥をも賣る。しかしその呉服、洋服、帽子、鮨、蕎麥と雖もたゞなる商品ではない。それが三越で賣られる限り商品以上の一つの社會的職分をもつてゐる。三越は商品の場所であるとともにまた一つの社會的職分の主體であるからである。流行獨裁者であることがこれなのである。

私は三越が呉服、洋服、帽子、鮨、蕎麥を賣ると云ふたが、こうしたものはたゞの商品としては三越以外のどこでも賣つてゐる。三越でなければならない理由はたゞなる經濟上の理由からは存在しない。しかも人々は一反の呉服地も三越で買はねばならぬ。一つの帽子も三越で買はねばならぬ。三越が安價であるからではない。品質がよいからではない。三越で賣るからである。三越で賣る限り價格の高低は第二の問題である。品質の如何は問ふところではない。人々がその戀人を批評する時は最早や戀の冷却した時である。三越に集まる人はそこで善き商品を賣るかどうかを批評的に考へてはゐない。三越の前には人々は無批判である。三越のマアクの貼りつけてある限り善き商品である。たゞなる商品ではなくてそれ以上のあるものである。三越にとつては凡ての賣品は利潤

の目的物であるが、買ふ人々にとつては利潤の問題は舞臺の中央には登つてこない。三越で善いといへば善いのである。三越で買つたと云ふだけで善いのである。どこかの商店で買つてきて、それに三越のマアクを附けただけでもいゝのである。人々は商品を買ふことから離れて三越を買ふのである。商品は有限であるが三越は無限である。三越は有限のものを賣るとともに無限のものを賣るのである。水天宮がお守りを賣り、聖人が懺悔を賣り、政治家が人民を賣るがごとくに、若しくはチチコフが亡靈を賣るごとくに、三越は三越を賣るのである。こゝに商店の精神的機械作用が成立するのである。三越は經濟の世界から出でゝ精神の世界へと結合するのである。三越は經濟的存在であるとともに一つの精神的存在なのである。經濟の場所としての三越は一つの郵船會社、一つの電燈會社にも及ばないであらう。しかも三越がこれ等の經濟的關係を離れて今日の社會に重要な位置をもつてゐること一つの電燈會社、一つの郵船會社の比ひでないことを疑ふものは一人もないであらう。それは三越が經濟以上のある存在であることの裏書でなくて何んであらう。三越は經濟の世界に生れた。經濟の世界にのみ生れうるものである。しかも今日の三越の效用は經濟以上のところにある。今日は經濟の作用が三越を作るのではなくて、三越が經濟を作つてゆくのである。こゝに經濟の世界の作用が精神のメキヤニックを製造するのである。三越は精神のメキヤニックを人間の社交のうへに押したてゝゐる。このメキヤニズムの中樞に三越が立つてゐるのである。流行獨裁者としての三越の位置はこゝに築かれてゐるのである。

流行は貨幣經濟の世界の現象である。貨幣經濟以前においては流行は存在しない。そして貨幣經濟がある程度の發達をとげたところではそこに必ず流行の存在を見る。流行はある學者（ヴエブレン）の言葉でいふと Pecuniary cultur の表現であるにほかならないからである。

それは最初は着物のうへにあつた。そして無論今日においても流行の最も中心的な運營者は着物なのである。着物の發明されたことは流行の發明されたことだと云ふのではない、流行は着物の進化のある段階に達した時に生れたものである。しかも着物の發達の歴史は流行の歴史であるべく存在し、そして着物の發明それ自身が流行のきたるべき先驅者であるべく生れてゐるのを見る。人は生れながらにして着物を着る動物ではなかつた。着物の發明されたのは人間の歴史の發達のある段階に達してからである。しかもその着物の發見されたのは實用のためではない。實用のためには人間は着物を必要とはしなかつた。また人間が裸體であることに羞恥を感じたから着物を着るようになつたのでもない。羞恥が着物を造つたのではなくて着物が羞恥を製造したのである。繰返

していへば人間は着物を着る以前には羞恥なるものを知らなかつたのである。そして着物を着る習慣ができるとともに羞恥を知るようになつたのである。着物の目的は裝飾にある。裝飾のために着物は生れたのである。それはサアタア・レザアタスの説であるばかりではなしに今日の社會學者の通説なのである。裝飾には裝飾の進化がある。最初には人人は着物を着ると云ふだけで裝飾になつてゐた。それが後にはからだに合うことが要求される。着物自身の價値（市場）の問題が要求される。貨幣經濟の發達とともに着物の効用はこれに應じて變つて來る。着物の哲學がこゝから生れることを可能にされてくる。着物は本來裝飾の目的に出てゐる。裝飾はからだに合ふことを必要とすることは勿論であるが着物を裝飾とすることはたゞ肉體美を發揚することではない。肉體美は却つて裸體である時に發揮される。着物が裝飾用であるためにはたゞなる調和の要求に滿足してゐることはできない。それ以上のものがそれによつて表現されなくてはならない。自己裝飾の極致は自己のうちにもつてゐる最高のものの表現である。牧師には牧師の服裝があり、武士には武士の特有の精神がその着物のうへに表現されるごとくに、金錢時代には金錢價値が着物のうへに表現されなくてはならない。今日は金錢價値が着物によつて表現される時代なのである。その時代には人々は着物が自己に調和するかどうかを問ふのは第二義である。着物の市場價値が第一義の問題である。ブルヂョア人の着る着物は彼の財産——それがブルヂョア人の世界觀の中心である——を縮寫するものでなくてはならない。若しくはそれによつて財産の亡靈が表現されなくてはならない。善き着物を被てゐることは財産あることである。少くともしかく判斷される可能性がある。ブルヂョア時代は隣保生活の社會ではなくて彼の近隣は外國人である。彼等の關係は金錢のメヂアムによつてのみ繋がつてゐる。從つて人々はその近隣を若しくはその社交取引結社の相手方を金錢によつて判斷する。その判斷の最初の舞臺に現はれてくるのが着物である。着物はクレイディイット（信用）である。着物の效用はたゞなる裝飾から一つの金錢的裝飾即ちクレディットへと變つてゆく。今日のブルヂョア人の着物の效用はクレイディイットであることとである。月給取と稱する借家階級は着物がしば〳〵その所有する財産の全部である。それが彼の唯一の若しくは主たるクレイディイットなのである。それによつて彼は總にブルヂョア人の末席に列なつてゆくことができるのである。彼が借財しようとする時に抵當の用に立つものはたゞこの着物だけである。質屋の發達は着物の發達と相伴ふてゐるのを見よ。そこでブルヂョア人が着物を買ふことは彼のクレイディイットを買ふことである。また從つてそれがただなる裝飾欲望を滿たしうるや否やが問題であるのではない。その着物の市場價値が成るべく高いことが必要なのである。若しくは眞にあるよりもより高價に見えることが必要なので

ある。言葉を換へていへばそれが誰にでも買へるものであつてはならない。成るべく他人に買へないものでなければならない。自分にだけ買へる着物が最高の着物である。何故ならそれが最高のクレヂイツトを代表すると考へられるからである。中世紀には襯衣は貴重な着物であつた。一枚の襯衣をもつものは十三世紀には滅多になかつたと云ふ。この時代には襯衣は人々の着物欲望の中心をなしてゐた。それが本質的に價値あるものであるからではない。それが容易に買ふことのできないものであつたからである。即ちそれが高きクレデイツトを代表してゐたからなのである。今日になつては襯衣は何のクレイディツトをも代表しない。從つて襯衣そのものは中世紀よりも發達したにかゝわらずそは人々の着物欲望から閑却されなければならなくなつたのである。

こゝに流行が生れてくる。流行は人間の好新性からくるのではない。人間性は寧ろ保守的である。特權階級であればあるほど人間は保守的である。しかもその特權階級であればあるほど衣裳のうへに流行を追ふのは何のためであらうか。流行が謂ふところの Pecuniary culture を表現するからである。あるものが流行することはあるものが善きものであるからではない それが善くても惡くてもいゝ。それは現にあるものから違つたものであることが第一の要件なのである。違つたことの必要であることは新らしいことが要求されてゐるからではない。新らしくても古くてもいゝ。人口の大多數のものが容易に手にすることができないものであることが要求されてゐるのである。勿論それがあまりに高價であつてはならない。ダイヤモンドのやうなものはどんな金持でも始終取りかへてゆくことはできない。あるものが流行となるためにはそれが特權階級の人々にとつては時々變へてゆくことのできる程度のものでなくてはならない。即ち國民中の特權階級の人たちにとつて時々取り變へてゆくことのできるとともに人口の大部分からは容易に接近することのできないものでなくてはならない。人口の大多數の人たちが手にすることのできるものであつたとしたらそは殆ど何等のクレデイツトをも代表することがないからである。從つてブルジョア人の金錢的裝飾の用にたたないからである。

それにもかかわらず流行は一般化を要求する。特種のかわりに一般化を要求する。三人や五人の人が何を身に纒うとも流行とはならない。流行の本質はその一般化の性質のうちにある 着物の流行は着物の非人格化である。甲の人が甲の人に適する着物を着、乙の人が乙の人に適する着物を着てゐる事の代りに、甲も乙も丙も丁も同一流型の着物を着ることが流行なのである。勿論それは前に述べた通り人口の大部分とは没交渉である。人口の大多數が及びつく事の出來ないものでなくては流行となることはできない。其意味において流行は眞

實の意味のデモクラシイではない。近代的意味におけるデモクラシイである。即ちブルジョア・デモクラシイなのである。ある種の經濟階級内における一般化なのである。こゝに流行の着物は着物の人格主義から着物の機械主義への進化を意味する。それは近代生活における一切の機械化を人間の社交的生活において脊負つてゐるものであるにほかならなぬ。

　流行はどこからくるか。一見しては流行は風のやうに何處からか譯の分らぬところからくるもののやうに見える。近代生活の一切の機械化の場合のやうにどこからか分らぬところから生れてくるやうに見える。またどこからくるか分らぬやうに見えるところに流行の本質が存在するともいへるであらう。何故ならそは如何なる個人の創意からくるものでもなく、如何なる天才の考案からくるものでもない。流行の世界、機械化の世界は天才の世界ではなくて非人格の世界であるからである。しかも流行が一つの機械作用であることは流行が忽然として天から落ちてくることを意味するのではない。却つてその逆である。機械作用は必然作用なのである。自由の代りに必然なのである。その必然は何人がどうしなくても出てくる必然である。しかもそは全然人的要素を排斥すると云ふ意味でないことも勿論である。機械的人智はその間にあつてまた一つの働きに餘地を與へられてゐることは勿論である。それは本質的な人間の力の發揮でもなくまた如何なる創造でもないが、そこに機械化によつて機械化の一作用にまで墮した人智の働くのを見るであらう。そは機械化の作用に微妙なる位置を占める。ボタンを一つ押すとベルが鳴るやうに流行の世界でもベルを押すものがある。それが流行の司掌者である。しかも流行は先にも述べたとほり一般化である。一般化は同時に集中作用である。流行の司掌者の需要は流行の獨裁者の需要へと導く。流行の時代には必ず流行の獨裁者が存在する。それが三越の職分なのである。

　流行の司掌者はしばしば一人の人氣ある女優であるがごとく見える。若しくは社交界の女王がしばしば流行の製造者のごとくに見える。しかもそは舞臺の表面だけを見てゐる人々の淺猿さである。女優の背後に、社交界の女王の背後に控えてゐる王中の王がある。それが流行の眞實の獨裁者なのである。それがその流行の元賣捌である。流行の女王、社交界の女王とはただこの獨裁者の傀儡であるに過ぎない。否、しばしば流行の女優、社交界の女王自身でさへこの流行の獨裁者の製造であることをも忘れてはならぬ。その獨裁者こそ今日の日本においては正しく三越である。この意味において三越は日本のブルジョア社會になくてはならぬものである。そして其は最早たゞなる商店ではない。たゞなる賣買の場所ではない。ブルジョアの精神、pecuniary culture の中心なので

ある。こゝに三越のほんとの職分がある。そはブルジョア社會の存續するかぎり存續するであらう。三越をして思ふ存分その職を果たさしめよ。曰く黎明のきたるまで。

人マネ小マネは止せ

生方敏郎

まだ越後屋といふ暖簾をかけ廻し間口も廣く奥行も深い角店だつた時代も、さう古いことではないが、その頃からあすこは東京の婦人達、殊に上流の婦人たちを華客として吸收してゐた。一間置き位に火鉢を據して日陰の白瓜のやうな色白の番頭さんたちが居並び、小僧に反物を運ばせて前の婦人のお客を對手に商つてゐた。

あんなに舊式に見えた家が、俄に西洋館に建て替へられた時には、まだその頃には西洋館といへば裁判所と警察と銀行と學校くらゐのものだつた時代だから、貞淑にして内氣なる日本婦人は恐れをなして近寄らないかと危ぶまれたのに、いよ〳〵新館が落成し名も三越と變へられて(越)の商標を貼り付けた包紙にお買物をくるんで出すやうに成ると、婦人の客は前よりも何層倍と殖えて、全く前の杞憂を裏切つた、白瓜のアツトラクテイーブ・フオースと西洋館くらゐには怖けぬ貴婦人たちの膽力とは、ここに明かに證明せられた、三越もこれに味を覺えて呉服店はデパートメント・ストーアとなり改築又改築、とう〳〵今のやうな廣大なものとした。

男の客はそこへ行くと案外保守的なもので、五年も十年も食べに行つた蕎麥屋でさへも、改築して小綺麗になると、もう行かない。「あすこのそばも近頃まづく成つたよ」といふ、天ぷら屋が繁昌する。大店の旦那さまらしいのや、智識階級らしいお客さままでがちよい〳〵見えるやうに成つたからといふので、大に立派に改築する。すると客足はパッタリ止まる、男の客は何でも店が大きく成つたり綺麗に成つたりすると、驚いて怕れて反感を持つて近付かなく成る。三越も若し男の客ばかりを相手にするのだつたら、改築は禁物だ。增築は猶更禁物だ。男といふ奴は案外氣が小さくて大建築物に壓倒される。そこで三越も考へた。そんな事の無いやうにと女店員

の愛嬌を景物にして逃げさうな保守的傾向ある男の客をも吸收した。

『女店員ですと、御婦人のお客さまがお買物を遊ばし宜うございますので』

とは表かんばんで、實は女の客には白瓜がいい。白瓜を解雇して全部女店員にしてみたまへ。婦人客は何を苦しんで朝からかかつておめかしして、平生は簞笥の奥深く藏つて置いて愛兒に一寸汚れ物をかけられでもすれば恐らく氣絶するほど大事の大事の命から二ばん目の第一公式を着て出かけるものか？

『まさか三越の番頭さんに見せるために第一公式を着やしないわ』

と婦人たちはいふであらう。いかにも然だ。これは私の言葉が過ぎた。

しかし乍ら、その第一公式は主人に見せる目的を以て着られたのでない事だけは明かだ。何となれば、奥さまのお供を仰せ付かる場合はともかくも、奥さまお一人で女中をお供に外出遊ばされる場合には、アダムは定つてお留守居番だからだ。若し主人に見せるための晴着であるならば平生家にゐる時こそ着て然る可きであるのに、イブは家にゐる時はお粗末な装であるくせに外出するとなると、必ずやおめかしをする依之觀是イブの第一公式なるものは、アダムのための第一公式ではない。

既に三越の番頭さんが問題でなく、又アダムがその目的の對照でないとすると、では彼女は誰のために粧ふのだとの結論に歸着する。

三越へ行く迄の間に出會ふ人々に見せびらかすためか？　電車の中の乘客に見せびらかすためか？　そして三越に到着すれば、そこに彼女を待つ者は店員以外には品物と客とがあるばかりだ。さうだ。客かも知れない。

客には凡そ三種ある。男客、女客、及び小兒の客だ。

だが男の客に見せるためとは考へられぬ、萬一私の考へとちがひ、彼女が男性の客に自分の着物——第一公式を見せびらかさうと思ふならば、それこそ非常な心得違ひである。いな大なる勘ちがひである。

男は呉服屋の番頭さんでない限り、着物に對する鑑識眼を持たない。男の中でそんな事には敏感らしく見える小説家先生にあたつてみたまへ。彼等の多くはめいせんと糸織との區別すら知らぬ。友禪といへば「あゝメリンスか」と早合點するところはまだ上の部で、一樂も市松も同樣に思ひ「一反の反物を八たんとはこれいかに？」と驚異の眼を見張るのが常だそれもその筈、まだ日本の學校教育では呉服太物の智識を詰め込むまでには手が屆かぬ。中學生は代數と幾何と英語と忠君愛國の暗誦とに日も之れ足らず、大學生は專門の職業教育と卒業後の月給あり付き法との研究以外に手を伸ばす暇がない。そして日本の男子が學校で教へない智識を如何にして持たう。日本の男子は在學中に購買した智識を死ぬまで變更さ

せずに持つてゐるのだ。若し多少なりともそれをモディファイし若しくはそれを擴大するなら、それは社會への反逆者だ

日本の男は小間物屋の番頭さんでない限り、女の髪の物に關する智識を持たず、下駄屋の番頭でない限り履物に關する智識を持たぬ。三越ブラの客といはず電車の乘客といはず、男たちが女を見る時に、視神經にハッキリ映るものはただその顔容ばかりなのだ。女の眼なり鼻なり口元なりソバカスなり笑くぼなり、さうした雜作を見るばかりだ。

さう詮じ詰めてみると、後に殘るは女客ばかりだ。さうだ三越へ行く時の第一公式はたしかにお仲間の婦人同志見せ合ふ爲めだ。語をかへて言へば見せびらかし合ふためだ。そこで着物を試合させて、誰子夫人に優勝旗が贈られるわけではないが、他人と比較研究して自分の衣裳の方が勝てば心ひそかに微笑むのだ。

「品はいゝけれど 柄が流行遲れだわ」と前に行く夫人を見て悦び、更に横に並んで歩く娘を見ては「柄もいいし色も流行の色氣だけれど、近く寄つて見ると蟬の羽根だわ。矢張、安物なのね」

と安心する。

結局、着物合戰勝負の標準も、この「安物だわね」の他にはない。

これは穴勝婦人のみの勝負決定法ではない。男子も物の優劣を金錢の價格で決定する。我が日本國の風俗として。

「何うだ。この時計は」

「なんだ。君にも似合はない。ニッケルなんか持つてゐて、御人態にかかはるよ」

「バカ、白金だよ。プラチナだつてことよ」

「どれ、まあ、見せ給へ」と乙は手に取つて見て

「ははあ、成程、この鎖も重みがあるね。何匁だい」

その匁で以て價値がきまる。指輪とても同じこと。兜町へ出入する輩の遊手浮食の徒の細い指にからむ太い分厚な見つともない形の指輪の如何に重いかを見たまへ。

指輪の價値はその細工でも形でもなく、潰しにした時の貫金の相場で決定される。

それだけならまだしもいい。人間の價値をすら、決定するものは常に金めだ。何匁だ。

「あの男の月給はいくらだい」

「百圓さ」

「たつた、それつきり」

大學出の前途有望の青年の價値も、この「たつたそれつきり」なのだ。彼の胸にひそむ燃ゆるが如き人類愛も、彼の頭に秘められてある社會救濟の經綸も、學識も才幹も、價値の計算の中へは加入せられないのだ。

男一疋の價値を決定するにすら、ただ月給である。財產である。

だから、着物の價値を定めるに、時價で値ぶみすることを以て、婦人のみを責めるわけには行かぬ。

値段の高い着物を着たものは貴婦人であり、マーケット價

見切り反物を仕立てて着たものは見切り婦人である。男の價値が月給と財產とで決定せられるごとく、女の價値は着物の價値に依つて決定される。

　この通り、女の命から二番目にしてゐるものは、この我即ち良人であるとか、この情人たる拙者で候などと、已惚れる勿れ。總ての女が命からこの二番目にしてゐる物は、着物である。自分の價値の九分通りを決定するところの着物である。

　神は女を創造した。併し乍ら三越は貴婦人を作る。恰度それは、神は惡人を作つた。併し乍ら金錢は彼を華族にした。といふのと同じ樣に。

　だが又、恁うも言へる。神は美人を作つた。だが三越は美人を作る力を持たぬ。三越の作るところはただ貴婦人に止まる。とも。

　現代の資本主義――などといふ口吻を洩らすと社會主義くさく成つてその筋から睨まれては危險であり、何んでも自分を危險にするものは之れ即ち危險思想であるが故に、そんな拙い文句でなしに、金錢はだ。金錢は惡人から華族に作ることを前に言つたが、實はそれどころぢやあない。金錢は惡人から善人をさへ作る。ここに至つて神業以上である。そこで三越も、娼婦から貴婦人を作るだけでなしに、更に醜婦から美人を作り出しては何うだ、といふのだ。若しそれに成功すれば三越も亦た神以上だと云はれよう。

　だが　それには今まで通りのやり口では覺束ない。いかにも昔から馬子にも衣裳といふ諺　さへあつて、馬子も衣裳を着せれば殿さまに成る。河原乞食も新聞記者に札ビラを切れば藝術家に成る　なんて脫線して憎まれ口は利かぬことにして、兎も角も着物は下女を令孃らしくし娼婦を貴婦人化する力はある。

　ただ　現在のやうに、今年は市松が流行るといへば猫も杓子も市松を求め、今年は大島絣が流行るといへば又々猫も杓子も大島絣で、彼女自身の若々しいのも老けてるのも色の白いも色の赤いも黑いも青いも黃色いもといふと五色になるけれども　五色どころぢやあない、實にいろ〳〵の色合の婦人、いろいろの職業身分の婦人が何れも之れも同じやうな柄の同じやうな色の着物を着て、何うして皆が同じやうに美人に成ることが出來やうぞ。

　品のいい位のある人は、位のあるやうな柄を採り、意氣な形の似合ふ人はその意氣を發揮するに適した柄を採り、愛嬌で行かうと思ふものは何處までも愛嬌的な着物を選擇してこそ、それ〳〵ちがつた方面に於いて美人と成ることが出來るのだ。眼細鼻高櫻色、と美人の形を極めたのは王朝時代の昔のこと、今は一つの型を破り、各自の個性を發揮したところに却つて自然の美が顯現される。甲が髮を七三に分けたから

とて、乙も七三であらねばならぬ道理はない。四六でもよければ八二でもいゝのだ。乙が辨天さまのやうに長い毛糸のショールを首の周圍から懸けたとて、內もさうせねばならぬいはれはない。電車の中の欠伸ぢやあるまいし、さう眞似るにはあたらないことだ。オペラパツクでもパラソルでも同じ道理で、各々自分に似合ふ色氣の似合ふ形のものを選べばいゝ。日本婦人にさうした個性の眼覺めが來ない中は、到底三越が美人を製作するわけに行かぬ。吾人は女性諸君が一日も早く個性に眼覺め、大に美人に成られんことを希望して止まぬものである。

末筆乍ら、或る人は「近頃、女學生は用も無いのに、家族と一緒でなく友達と三越に出かける。之を女學生仲間で三越へ張りに行くといふ相です。大方何者かを物色するのが目的らしいです。何卒、之れを貴下の辛辣な筆にて筆誅したら何うだい」とのことだつたが、男子だつて、張りに行く心理は同じである。張りに行くといふと甚だ穩かでないが、美人とすれちがへば注目するのは同じことである。

籠の中の禽として家庭にまた寄宿舍に囚はれの身の女學生たちが、たま〳〵の日曜に三越に張りに行くのをまで筆誅するほど私は冷酷ではない。況んや、その張りに行く目的物は恐らく彼女たちを貴婦人化するところの、否、令孃としての本分を發揮する可く役立つところのキモノの他に無いであらうものを。

私は筆誅なんぞしないから、是非諸君は個性に眼覺めて自分獨特の美を大に〳〵發揮して頂きたい。美人と賢士とはいくら殖えても何處からも苦情は來ない。何うか、猫や杓子に見倣つて市松のキモノと毛糸の長いショールばかりをかけるやうなチピカルな服裝ばかりしないで、活々した個性を發揮して頂き度い。

私はもう日本の男子の何事にもチピカルなのに呆れてゐるオイツケンが流行ればオイツケン、トルストイがはやればトルストイ、タゴール爺さんが來るといへばタゴール爺さん、社會主義無政府主義米騷動普通選擧、ラツセル、アインシュタイン、この頃では舶來の音樂家の送迎、何一つ深入りせずに上滑りして流行を追ふて行く不誠實さ加減は、呆れるの他はない。

婦人諸氏も男子のチピカルな考へ方に倣ふ勿れ、兄さんの本や姉さんの本なぞマネして讀む勿れ、少くとも、自分の服裝と自分の讀む本くらゐは、自分自身で選定せよ。他マネばかりすること勿れ。私たちは子供の時分ですら人マネをする子を見れば

「人マネ、小マネ、酒屋の狐、酒のかす喰れて、おン出せ。」
おンだアせ」

と囃立てたではありませんか！

（了）

三越に於ける婦人の犯罪

藤村鷹穂

一日平均二萬から、二萬五千位の客を吞吐してゐる三越の本店では、品物を見に出かけるよりも、人間を見に出かけた方が面白い程さまざまな恰好をした人間が、さまざまな顔附をして動いてゐるが、その中で、異様な眼を光らせてゐる、日に五人や七人の萬引をする男や女がきまつて潜んでゐる。萬引は三越のみではなく、白木屋、高島屋、松坂屋等、どこのデパートメント、ストアでもあることだが、その巧妙な手段は店員の監視だけでは防ぎきれずに、近頃では各店共に競つて刑事上りの警務員を雇つて、萬引豫防につとめてゐる。その中でも最も被害の多いのは矢張三越であつて、最近六ケ月間に三越で檢擧された萬引の件數は次のやうな數字を示してゐる。

月別	男人	女人
七月	一四	十五
八月	十六	十九
九月	十四	九
十月	二一	三〇
十一月	二八	二八
十二月	九三	六六
計	一八六	一六六
男女總計	三五二	

是に依ると、女よりも男の萬引の方がいくらか多いことになつてゐるが、數ケ年間の統計を調べると男と女とは殆ど同數で、寧ろ女の方が幾分多いやうな傾向である。今この女萬引百六十六人の年齡別をあげてみると、

年齡	人員
十五歲以下の女	五人
二十歲同	二一人
二十五歲同	三六人
三十歲同	三六人
三十五歲同	二〇人
四十歲同	一三人

四十五歳同	一七人
五十歳同	一三人
五十五歳同	二人
六十歳同	五人
六十歳以上	四人

であつて、その中既婚有夫の女九十七人、未亡人十五人、未婚者五十四人、計百六十六人である。統計にあらはれたやうに、二十歳から三十歳の婦人に最も多いことや、既婚の婦人が多數を占めてゐることは、その年頃の女の心理狀態を表白すると共に、結婚生活の墮落と不幸を裏がきするものである。女二十五歳から三十歳と云へば、内的生活にもそろ〳〵統一が出來て、理智的にも目覺めてくる年頃であるが、同時に彼女達が、散る花の名殘を自分の肉體の上にも感じて、名殘の春を彩りたい一種の焦燥が、冷かな理智の反面に、却つて嬌態的氣分を誘ふ、言ひ知れぬ内的生活の齟齬から生れた犯罪である。

それではこれらの萬引女の多くは、何れの階級に屬してゐるかといふに、官吏の妻、女教員、家庭教師、會社員の妻（これは比較的多い）會社員の母、圖書館員、書記、醫師の妻等で、比較的智識階級の婦人に屬してゐることも注目すべきことの一つである。彼女がどうして流行の半襟をくらまさずにはをられなかつたか、吾子に似合の紅入友禪に手をかけずにはをられなかつたか、その犯罪の原因、動機には憎むべき常習的なものもあれば、憫むべき哀話のひそむもの面白半分に犯すものなど樣々であつて、彼女達を誘惑する動因は一樣ではないが、そのうち最も鮮明に流れてゐる根强い力は、彼女達自身の虛榮心である。家庭にゐては優しい妻であり、賢い母と云はれる婦人も、三越の何となく挑發的な雰圍氣の中に卷きこまれ、ちか〳〵と眼先を眩惑する色彩の中をそゞろ歩いてゐるうちに、いつか人妻らしい眞心や、人の母らしい分別までが拔けだしてしまつて、呪ふべき虛榮の興奮狀態の中に、自分の本心を見失つてしまふのである。而して彼女達の輕薄な虛榮心は、女性自身が孕んだ愚な罪惡ではあるが同時に男性が孕み、時代が孕み、社會組織の缺點が孕んだ罪惡であるとも云ひうるのである。

一二の例をあげてみると、最近三越で行はれた萬引實話の中には次のやうなものがあつた。

碧い空の色も何となく春らしい光澤を含んで、眞白な、梅の花がポツ〳〵咲き出す頃になると、三越の吳服反物部に集つて來る女の顏も、急に生々してくる。春の力におされて今迄死にかかつてゐた女の魂が急に目醒めたわけではなくて、衰へた自分の肉體にも春を模倣する着物を物色する心に緊張してくるのである。

色々な顏の女が、色々な手つきをしてせか〳〵と吳服物を

いちくつてゐる三越の春の一日、年の頃廿二三になる一人の女が、伊勢崎銘仙と、銘仙絣の二反を萬引したといふので、恰も出張中の警官にあらく\/しく檢擧された一例がある。彼女が萬引した二反の反物の中、一反は彼女の夫に似合の柄合であつたし、一反は姑に相應しい縞物であつた。

その夫といふのは、某會社の庶務課に勤めてゐる俸給生活者で、ほかに姑と三人きりの寧ろ安樂な生活であつたが、利かぬ氣の姑は、新しく自分の家に寢起をするやうになつた若い彼女の顏を見る度に、何とはなしに心憎く「ほんとにまあ甲斐性のない嫁さんだよ」と罵らずにはをられなかつた。彼女はその度に、口惜しくてならず、何時かは姑の言葉を、たたき返してやるやうなことがしたいと念じてゐるうち、ある秋雨の降る日日本橋通りへ出かけた序に不圖三越へ立寄つて、あちこちを見廻つてゐるうちに、ぐん\/彼女の眼をひきつけていつた一反の織物があつた。

女はその前に立迷ひながら、その反物を袷に仕立て夫に着せた姿を想像し、それから懷の財布のことを考へて、思はず歎息を洩らしながらも立去りかねてゐる時、ひよいと傍にゐた店員の視線が横にそれた。その瞬間彼女は旣に法律上の罪を犯してゐたので、夫に似合ふ反物をいきなり風呂敷にくるんで歸つてから、早速仕立て着せると、姑も夫も、反物を手にいれた理由を深く質さうとはせずに、唯「結構だ」と言つて喜んでゐた。其時が彼女の犯罪のはじめであつたが、それから後一ヶ月程した冬の日に、肩掛にくるまりながら外から歸つてきた彼女の風呂敷包から、

「これをお姑さんのお羽織に」と言つて、又一反の反物がとりだされたが、その時姑は、忽ち笑顏をつくつて、「お前もなか\/甲斐性者になつたね。ほんとに偉いよ」と言つて賞めたさうであるが、その後幾度も萬引を重ねて、家人に喜ばれてゐるうち、遂に最近になつて檢擧された彼女の憫むべき萬引の原因は實にたゞ姑に對する無念晴にすぎなかつたのである。

又中には、十數回に渡つて、二千餘圓の反物其他を巧みに萬引しながら、それを賣却するでもなく、仕立て自ら着るでもなく、人に分つ譯でもなく、その儘全部簞笥の中へ仕まひこんでゐたところを露現して檢擧されたといふ、思ひきり大膽な萬引女もゐるが、彼女の心の中では恐らく萬引は、面白半分の遊戲に等しいものであつたのだらう。

×

自動車の中からおり立つ鳩胸の旦那樣や、花のやうにしなやかな貴婦人達が萬引をなさる疑ひのないのは別に賞めたことではないが、女工とか、勞働者の內儀さんなどに比べて、比較的知識もあり、生活も樂な中產階級の婦人に、最も犯罪者の多いことは、彼女達の虛榮心を露骨に表現したものには

かならぬのである。私は日本の女性が一日も早く、物質に對する慾望を正しく精練し、高めることを期待したい。そして途方もない媚を呈してゐる三越の流行品は、その實日本の女性の低級な趣味と、愚な慾望とをからかふ爲に生れたものであることを判然意識して貰ひたいのである。

性問題に對する三越の社會的意義

槿田保之助

一

最近我が國に於ける資本主義的自由主義の發展は、社會生活の上に著しい變遷を齎すに至り、一方には舊い政治的階級の羈絆を脱した國民に、其の才能を發揮せしむる路を招いたと同時に、他方には斯くて解放された國民によつて作られた補充兵により、而してこれに依つて資本利潤の獲得を利せんとする有產階級の技巧によつて、個人の收入は相對的に減滅し且つ職業離脱の不安に脅かさるゝことゝ成つた。何人もが其の舊き階級的拘束より開放されると夫々の才能によつて、社會に於ける優越階級に自己を高騰せしむることが出來るといふ此の自由主義の時代に於ては、斯かる才能を他の人々をして、特に有產者階級をして識認せしむるに足る目標が必要に成つて來る。「才能によつて自己の位置を上昇せしむる」と云ふことは、甚だ理想的に聞えるけれども、其の『才能』といふ事それ自身が已に問題となるのである。それは唯だ單なる絕對的意味に於る『才能』ではなくて、現代資本主義的社會より見たる『才能』なのである。絕對的の意味より云つて、極めて優秀なる『才能』であつても、今日の社會より云へば、三文の價もないものもあり得ると同時に、絕對的には何等の價も無い『才能』でも、今日の社會から見て、最も貴い『才能』として信價せられるものもあり得るのである。であるから今日の自由主義時代に於ては、人間は其の資本主義的標準より見たる才能によつて、其の社會的境遇の高下を決定し得る自由を有するものであると云つた方が最も適切であると云ふことが出來る。

斯う云つた意味の『才能』を識認せしむる目標を掲げるには、色々の手段方法があるであらうが、今日に於て現代人に與へられ、又許されて、しかも最も確實で、最も普汎的な方法は「學校」を出ると云ふことである。そして成る可く高い程度の學校を卒業すると云ふことである。「學士樣ならお嫁をやろか」と云ふ標語が語つてゐる樣に、「大正〇年〇月東京帝國大學〇學科卒業」「大正〇月〇日大學卒業」と云ふ一下りが履歴書に書かれてゐると云ふことが、今日の社會に於ける『才能』を語る一番確かな事であるといふは、何人も異議の申し立て樣があるまい。

男性に於ける斯る傾向は、女性の側にも沒交渉ではあり得ない。「理想」が分る樣な、「趣味」が解せる樣な、「文化の意味が呑み込める樣な、片假名で書く單純が日常家庭の會話に表はれても面喰はない樣な女性が要求される。「高女卒業眉目端麗諸藝堪能方紀二三」と云ふ條件が高砂社の名に於て、新聞紙の案内欄に掲載される現代である。

教育の發達と進歩とには、色々な原因があらう。其の中には以て喜ぶべしとなす動因もあらうし、又中には喜ばしからざる原因もあるであらうが、現代的『才能』の目標を染め出さねばと云ふ以上叙べた樣な最も切實な原因の存することも否み得ないことであると考へる。それは現代に於ては善いことゝか惡いことゝか、喜ぶべきことゝか喜ばしからざることゝか云ふ批判を超越した極めて森嚴な事實なのだから仕方が無い。然しながら其の結果は婚期を晩くすると云ふ社會現象を隨伴し來ることは、どうも止むを得ない事柄である。男性も、又女性も……

所が唯だそれ丈けではない。と云ふのは斯かる現代的『才能』の目標を掲げる人々が年々歳々に多數世の中に現はれて來ると云ふことである。物の價格が需要供給の關係で定められる經濟主義の世界に於ては、殊に物が多數にあるか少數にあるかによつてのみ、物の價が貴くもなり低くもなる現代資本主義の時代に於ては、現代的『才能』の標幟を掲げる人がいよ／＼多數に輩出すると云ふことは、斯かる『才能』を標幟とする人に取つては甚だ都合の惡い、不利なる事柄であると云はねばならぬ。即ち其の結果は現代的『才能』の價値穢減を呼び起すことゝなるのである。而して其の價値穢減は直ちに貨幣價値の低落を結果するのであつて、つまり斯かる『才能』を所有する人の收入が相對的に減少し、支出に對する收入の不足を呼び起すに至るものである。のみならず斯かる『才能』を所有する人々が多數に存在し、且つ次から次へと作り出さるゝと云ふことは、已に其の『才能』によつて職業――生活の唯一の道を獲得しゐたる人々の脅威となる。學校を卒業したと云ふことが、卒業證書を所有してゐると云ふことが、それ丈けでは最早自分の生活の唯一の資である職業

を安固ならしむることに役立たなく成つた。斯くて相當の年月を經て、其の職業生活の間に相當の自己を發見することが出來るまでは、其の職業に依據した生活に對する確信が立たなくなる。「三十家を成さず」といふことが歎を成した時代は過ぎ去つて、今はそれが歎と成らぬ程までに、一般的妥當性を有する樣に成つた。

女性にあつても、唯だ學校の卒業證書を手にせんが爲めに徒らに婚期を遷延せしめたのみならず、相當の「家」を維持して行くことが出來る爲めの收入の道を確立して置かなくてはならなく成つて來た。以前は嫁入の資を得る爲めに、箪笥と着換へとを作り上げる爲めに職業を取つた女性も、今日では嫁入つて後に於て「家」を維持して行くことの出來るだけの――郎君の收入と殆んど同額の收入を得る確信を懷き得るだけの職業に對する確固たる位置を必要とする樣に餘儀なくされる樣になつた。

晩婚！　現代資本主義的自由主義はかくて多數の男女をして、晩婚の狀態に置くに至らしめたのである。

二

此の婚期を餘りに不自然に晩らしめられた現代の男女性が四六時中從事しつゝある職業生活は、然らばどうであらう。以前の職業生活は家庭生活と極めて緣の深かつたものである。否な職業生活が家庭生活の裡に自己を發見しつゝあつたと云ひ得る。斯くて假令未婚の青年男女にしても、尚ほ其の職業生活に於て、異性の温か味、異性の賴もしさに接する機會が常に賦與されてゐるのである。

然るに今日にあつてはどうであらう。其の日々の職業生活は漸々家庭を離れ、否な全く家庭生活とは絕緣してゐる。其の職業生活は工場の事務所の中に發見され、會社の事務の机の前に發見され、お役所の室内に發見され、出札口に發見され、電話交換臺の前に發見され、タイプライターの音の中に發見される。其處にたまには異性が發見されるが、それが嬉しさに共に笑ひ、悲しさに共に泣く異性ではなくて、業務の故に交渉を持つ異性たるにすぎない。それは性的生活――廣い意味の――に於ける異性ではなくて、單に職業生活に於ける異性たるにすぎぬのである。

現代の男女性に對して切實な意味を有する職業生活の斯かる離家庭化、斯かる沒異性化！現代は實にかくて其の職業生活の間から、性的生活に於ける對象としての異性を抹消しつゝあるのである。男性に對しても又女性に對しても……

三

近世資本主義は人類の歴史が曾て經驗したことの無かつた人類の大集合生活、卽ち「大都市」を作り出した。實に都會

生活は現代人のみが痛切に味ひ得る特權である。

其處には人と人とが唯だ漠然と寄り集まつてゐるといふだけの靜的現象があるばかりであつた、人と人とが摩擦し合ひ、人と人とが刺戟し合ふ動的現象が展開されてゐる。音響に因る刺戟もある。光線による刺戟もある。色彩による刺戟もある。嗅覺を通す刺戟もある。味覺に訴ふる刺戟もある。觸覺を通す刺戟もある。一般感覺を經る刺戟もある。都會生活とは實にありとあらゆる刺戟の綜合から成つてゐるものと云ひ得やう。

現代の男女性は已に不自然に婚期を晩からしめられてゐる、而して其の免るべからざる現實である職業生活は已に說けるが如く性的生活の對象としての異性から隔絶されてゐる。此の狀態に置かれて、强度の音色味嗅の刺戟に取り捲かれてゐるが、此の際最も强い、生命の深奧を突き刺す刺戟は異性より受くる刺戟である。都會生活とは、性的成熟を遙かに超過し然かも滿されざる性的狀態に置かれたる男女性が、異常なる刺戟の裡に蠢きつゝある世界である。此の時、異性が與ふる刺戟は惱ましきまでの興奮となつて、現代の男女性の胸底に燃え上るのである。

四

貴族的階級國家の沒落と自由主義的資本國家の發生とは、自由主義と個人主義とに道を拓くものである。斯くて禁慾主義と階級尊重主義の哲學は破綻を來して、自己擴充主義と沒階級主義の哲學の誕生を見たのである。

嘗ては性的慾求を壓伏することを道德と見なし、戀を思ふ前に身分を考へ、戀を感じて後に階級を顧みたのであるが、今日に於ては性的慾求を性的慾求として見ることに躊躇せず戀を思ふ前にも、それを思つた後にも、階級身分を考ふることを爲さゞる狀態に置かれてゐる。

斯くの如く解放されたる性慾と、自由視された性的道德との世界に住み、然も社會經濟生活の狀態は不自然なる晩婚と職業生活に於ける沒異性化と、刺戟强き都會生活に於ける異性が與ふる異常なる興奮とに惱まされて、現代の男女性は深刻なる性に對する惱みを懷かざるを得ぬことゝ成つて居る。性に對する惱み、それは過去の何れの時代にもあつた。然しながら過去の時代に於けるそれは時代生活の各種の原因より陰性のものとして現はれて居た。然るに現代のそれは以上の如き解放された性的道德の上に、陽性のものとなつて出現し來つたのである。

五

然るに性に對する惱み――しかも陽性なるその惱みに對して、之を消滅せしむる手段に二つが考へられる。其の一は性

慾に對する生理的充足であり、其の二は性の惱みに對する精神的滿足である。

而して結婚せざる男女性に許された性慾の生理的充足としては、自慰と買淫又は野合とが考へ得られる。自慰と野合とは暫く措く。買淫は殆んど多數の女性には許されて居ないのであつて、今日の男性にのみ特に許されてゐる機能の如くである。

然しながら此の買淫は、所謂敎育を受けて特殊の位地に置かれてゐる人々の多數に取つては、之を行ふべく甚だ不都合の狀態に置かれてゐる。藝妓は已に有產者階級の占有する所となつて、財力に乏しい人々には到底經濟的負擔の埒外にある。娼妓私娼に對しては、其處に赴くといふことに對する一種の體面上の顧慮と、病毒に對する恐怖と、トラディションに對する面倒と從つて其の爲めに生ずる不滿足とに加ふるに、此處にも同じく經濟的負擔の點に於て、到底今日の敎育をうけたる人々の多くを滿足せしむることが出來ない。

此處に於てか性の惱みに對する精神的滿足てふ方法が問題となるのである。

六

カフエーが繁昌する、活動寫眞が歡迎される、銀ぶらが喜ばれ、音樂會が大受けで、ダンスが流行する。此等は皆、以上のことを根據として考へることが出來ると思ふ。無論そればかりではないが、此の事を除去したならば、夫等の現象を說明すべく、餘りに大なるものを缺くことになるのである。

カフエーに赴く者が皆、其處にゐる女給と性的關係を結ぶことを目的としてゐるとは思はれない。活動寫眞館に行く青年が其處の案內女との性的關係を豫期し、又は觀客たる女性と特殊の關係を結ぶ爲めだとは云はれない。銀ぶらだつて、音樂會、ダンスだつて又同樣なことが云ひ得ると思ふ。

勿論多數の人の事である。中には異性との性的關係を目標として夫等に赴く男女性が可成りあるかも知れない。けれどもされぱとて、夫等に赴く青年男女性の全部が此の異性との性的關係を豫期してゐるものであると云ふことには肯首することが出來ない それは寧ろ性的成熟を遙かに超過し、其の日常の生活からは性的充足からは極度に隔離され、しかも絕えず異性の刺激に惱まされてゐる今日の人々が、享樂氣分の附に日常の社會生活、職業生活から暫し離れた男女兩性によつて作り出されてゐる一種の快き生溫かき雰圍氣にひたらんが爲めであると解する方が正當であると考へる。異性の多數が狹い範圍に群集してゐる、そして其處には日常の職業生活によつて事務の手助けであつた器械化された異性を見出して、人間としての異性がゐる、かくて作り出された雰圍氣の快感は、性の惱みを懷ける現代の男女性に對して、精神的滿

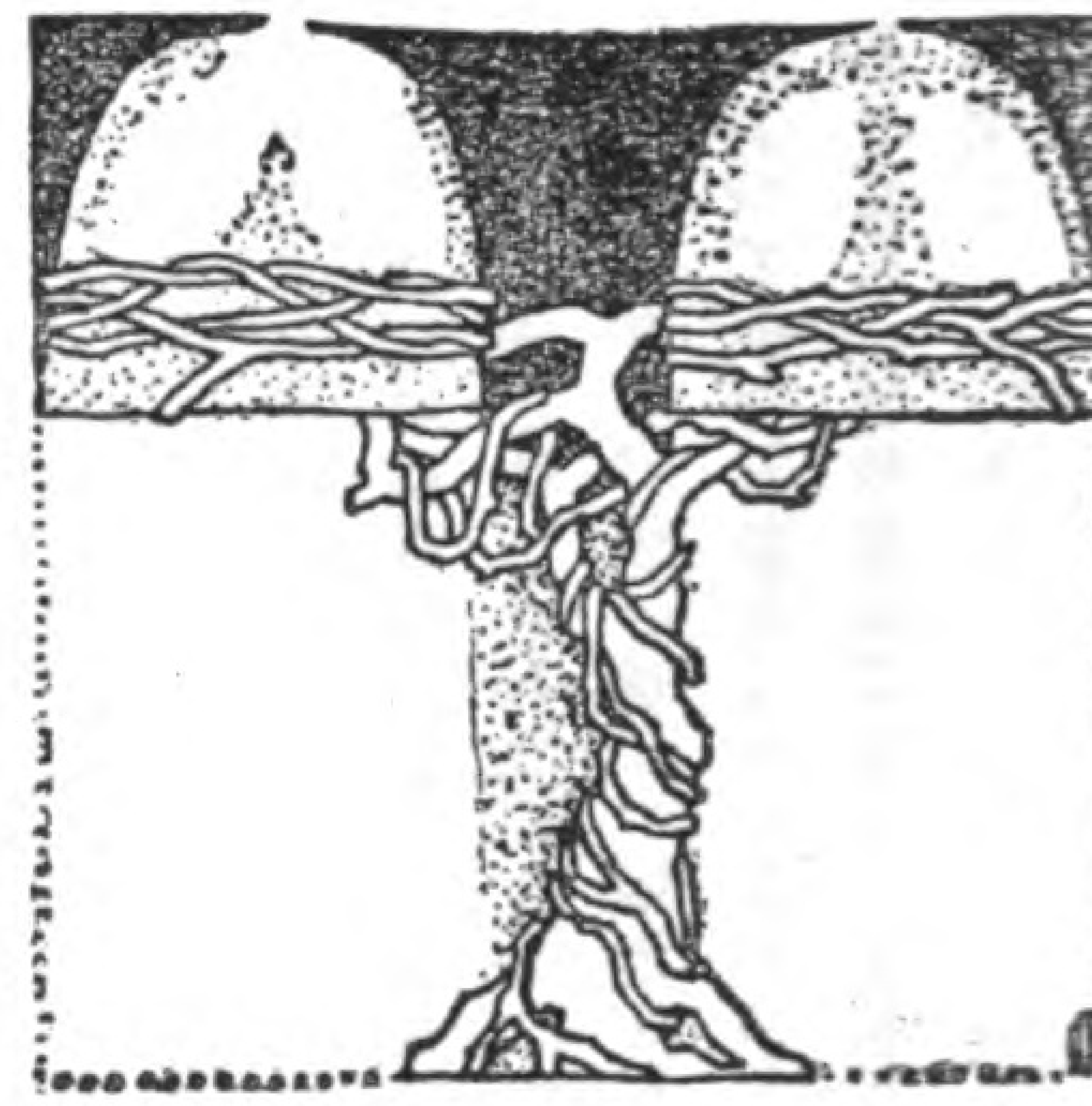
足の方法となるのである。更に俗な言葉で云へば、「異性の臭ひを嗅ぐ爲めに」カフエー、活動、銀ぶら、音樂會、ダンス等が現代の男女性に重い地位を占むると云ひ得やう。而して私は其の延長の上に「三越」を考へやうと思ふ。今日の性の惱みを懷く男女性に對する斯かる意味に於て、性問題より見たる「三越」を考へたいと思ふのである。

七

世の中には、其處にゐる女店員を目標として集まる男性や、男店員をはる爲めに赴く女性を「三越」に於て發見すると云ふ人がある。さういふ男女性が全然ないとは斷言し得ない、否寧ろ其の樣な可能性があるのかも知れない。けれども私は「三越」に赴く多數の男女性を全部其の爲めだど解することは當を得てゐないと考へる 私は寧ろ、五彩陸離たる 快い色調の味に、餘りに明るすぎないモデレートな光線の下に、何處とも知れぬフレッシュな感じのする氣分の裡に、柔かくて足觸のいゝ絨氈の上を輕やかに步みながら、女店員、男店員、そして性の惱みを懷いた多數の男女のお客樣が、一種の享樂氣分で群がつてゐる其處に、何とも云ひ得ない一種特別な雰圍氣が作り出されてゐるその處に、今日の性の惱みを懷いた男女性が、淸新な感動的な一種の快的興奮を經驗せんが爲めに、「三越」の半日を送るものだと解し度いのである。

資本主義的經濟組織は、其れに卽した商業經營の一表現として「三越」を建しめた。而して資本主義を基調とする社會生活によつて作り出された現代多數の靑年男女の性の惱みを此の「三越」によつて滿足せしめてゐる。其處には餘りに奇しき因緣の存することに驚かるゝであらう。「三越」は斯くて現代靑年男女に對する性的生活の一綠地である。而して此の綠地には、社會經濟生活てふ熱沙を辿り來つて性に對する極度の渴に惱める若き男女性が、水のせゝらぎを聞いて暫しの凉を納れてゐるのである。

それにしても斯かる綠地を作ることが、否な斯かる綠地を作り出さねばならぬ樣にされたことが、人間の生活に取つて果して結構なことか、果して誇るべきことか、それは私には解らない。（大正、一二、三、三一夜大阪にて）



三坪の土あらば

鳩の家をも

荻原井泉水

「三坪の土なれば」といふ設問に對して、私は自分の居間を見廻した。床間も緣側もない六疊の座敷、三坪である。是だけの土が自分の自由に使へるものとしたならば、どれだけ幸福であらう、と先づ考へる。

隙間もなく秋草を植ゑやう。芙蓉、薄、萩、女郎花、男郎花、桔梗、水引、鷄頭、雁來紅など、脚も踏込めない程、ぎつしりと亂れ咲かしたらば、どの花がどの枝から咲いたのかも解らぬやうで、草花の生命の簇がりが色彩の錯綜したリズムとならう其中に蟋蟀、鈴蟲、松蟲などを澤山に放たう、こゝにも亦彼等の生命の哀樂が、土から響き出る自然の階調を作るであらう。然し、これは秋の僅かな間の感覺を喜ばせるに過ぎない、それだけの爲めに狹い土を限るのは惜しい。

庭一面に芝を植ゑやう。芝が芽ぐむ時の綠の色は實にいき／＼としてゐる、其上に柔い雨が降る時、結晶のやうな露滴を殘して晴れる時、共によい。涼しい日が蔭る頃、疊み椅子を持ち出して靜かに本のページを切る心。冬になつて枯れた時のオレンジ色は平和な暖みがある。蜻蛉もゐなくなり、蝶も見えなくなつた靜かな日の午後、ほか／＼とする日光を身體一杯に浴びて、ごろりと横になつて、眞青な空を仰ぐ心、然し、是は土を絨氈で包んでしまふやうなものだ、土をしてなまの土で置きたい。

蔬菜畑を作らう。畝をきつて自分の好きな三ツ葉とホウレンソーとネギとを植ゑる、柴を立てゝキウリとソラマメとをからませる、鍬を執つて土を鋤きかへす面白さ、素足でぢかに土の冷かさを踏む快さ、此感覺に私は饉えてゐる、たとへ瘦せた葱の幾筋でも、曲つた胡瓜の一本でも、それが自分の創つたものであり、土から與へられたものだと思ふと、ほんとうに有難い。實に小さな感謝ではあるが、斯うした小さな感謝の心になる事すらも、私

の乾いた心には望ましい事に思はれる　而して、私に少しの贅澤が許されるならば、端の方の日當りのよい所に小石で斜面を作つてイチゴを植ゑる。小石が日光を吸つて、長く温みを保つてゐる事を利用して、春の始めに苺を熟させる事が出來やう。苺こそ土から生じる一番貴い紅の實玉である。

お丶、私は愛すべき友達を招く爲めに、此土を用ふる事を忘れてはならない。私は鳩の家を建てたいのだ。それは一つの太い柱の上に、幾つかの圓い窓をもつた圓筒形の箱を置けば足りる。彼の無邪氣な目、彼の甘へるやうな聲、人なつこい足どり、彼ほどドメスチツクな鳥はない。私と彼とは、私が漸くよちよちと歩けるやうになつて、近くの社へ米の袋を提げて彼を訪ねに行つた頃からの實に久しい友達である。

こんな風に想像して行くと、私の計畫はなかくに盡きない。けれども、惜しい事に、私の想像に與へられた土は僅かに「三坪」である、而して惜しいことに、與へられた原稿紙も亦僅かに「三枚」である。

野草觀賞

杉浦翠子

土あれば草木を望み草木あれば花ひらくを望む、は人情であります。園藝書などの序文を見ると、園藝は趣味と實益を兼ねる、とありますが、私は趣味や實益よりもつと深い敎へ、神秘的な敎へや節操的な敎へや、とても人間業でない、深い造化の機密をまで、植物によつて敎へられることの多いのを經驗して居ります。植物位正直なものはありません。人間ならば好きもせぬ醜男でも地位や財産によつては袖振りかねる、といふ例もありますが、植物は決してさうした妥協をゆるしません。

厭な者は厭と申します。嫌なものは嫌ひと頭を掉ります。私の庭の牡丹に或年始めて幾個かの蕾がつきました、私は嬉しくて早速こやしをやりました、にも係らずこの蕾はすこしも脹らんで來ません、とうとう時節が來ても開かない蕾はそのまゝに委縮して、その春は葉ばかりの牡丹を見てしまひました　肥料さへやれば良いと思つたのは、私の不明でした。時季でない時、つまり厭な時にして貰つた恩澤には反つて牡丹は憤つてしまつたのでした。また私の庭に三坪ばかりの花壇を作り、ダリヤを植ゑました。こやしも相當にやつて居るのに、伸びも惡く花つきが惡いのです。

或日專門家にきいて見ると、日當りは如何だといひます。何のかげもなく太陽は毎日眞直に直射して呉れます。では、風通しが惡くないかと、きかれた時、私は始めて思當りました。私の庭は非常に樹木が多いので、殊に夏の青葉は鬱蒼として庭を狹めます。さう思ふとあそこに高い櫻の木が、このダリヤ畑とかなり距離が隔つて居ると安心して居たのも心抜かりでした。太陽が西に傾いて、光線が斜めになるときに、はからずもこの櫻の葉かげが、ダリヤ畑にまで長い影を及ぼして、葉の上に花の面にさむざむと暗いものを落すのでした。それをダリヤは私たちの感じない先きから、ちやんと感じて居たのには驚かされてしまひました。かやうに園藝性の植物は園藝として多く人工的の栽培を要します、野草は野草だけに荒療治をしても立派に花がつくといふことを知りました。折から矢

が「非水百花譜」を編纂するに當り種々な花卉を庭に植ゑ花を咲かせて、寫生したものですが、どうも園藝的の草花よりも野草の花の方が雅致あり趣味が深いと、申しました。また私にしても「ダリヤの花」「ヒヤシンスの花」といふ花名を歌に入れるよりも「月見草のは」な」「梅鉢草の花」の方が短歌に仕組む語態からも、落ちつきが良いやうに思はれて、眞に園藝視されて居る西洋草花を全々造らなくしましたが、その代りに夫は毎日郊外に行っては、山野路傍の自然草を根こぎにしては、この庭に植ゑつけました。春から夏にかけて咲いた花々は「さぎごけ」「じふにひとへ」「をどりこさう」「やぶかんぞう」「むらさきけまん」「いちりんさう」「くまがいさう」「のげし」「をきなぐさ」「あかつめぐさ」「くさふぢ」などを覺えて居ります。夏から秋へかけては「あきのたむらさう」「いしみかは」「みづひきぐさ」「ゆうがきく」「うめばちさう」「ちだけざし」「うばゆり」「きつねのかみそり」「ほととぎす」「われもかう」などですが、園藝植物のやうな絢爛さはないけれど、微花幽草の深いあはれさをなつかしむ人は、必ずかうした野草を觀賞せずには居られないだらうと思ひます。

人の手のひゞあかぎれを土に見せて
　庭のこけむしろ霜にひゞらぐ。

冬は堅い土のむく／＼と脹れ上つて、水晶のやうな霜柱の立つては崩れるのを、つく／＼と眺めませう。自然が自然に移り變はるのを自然のまゝに眺め入る。私は、意味の深い、此の上もない長閑かな消息が其の中にあると思ひます。

二つの案

五十嵐力

二つの案があります。一つは無爲にして化する萬物生々の機微を樂しむので無精式、原始的な神樣任せのやり方です。此の流儀にある場合に、私はその三坪をきれいに均平して放つておかうと思ひます。そして春は霜くづれのブク／＼した土が春雨に固まつて、やがていろ／＼な草の芽がピン／＼と生え出すのを見て樂みませう。夏は澤山の草の中から、面白い奴だけを殘しあとはきれいに拂つて、朝夕打水をして、日ましに苔の乘つて來る其の間に野趣のある草ッ葉の生長して行く姿を眺めませう。

ひまもなくむしりむしれど生ひなほし
　おひ出でなほす雜草あはれ。

秋は靑い波を打つた芥が霜に裂かれ風に剝がるのを痛ましく眺めませう。

第二の案は算盤勘定と胃の腑の要求とから割り出した大慾張の計畫です。此の流儀に從ふ場合に、私は其の三坪に十二本乃至二十本の南瓜を植ゑます。そして其の一隅に二本の糸瓜を植ゑ、周圍には若紫、夏秋蕗、夕日山と云つた類ひの食用菊をあしらひます。そして少なくとも五十個の南瓜と五六本の糸瓜とビール大瓶に數本の糸瓜水とを得たいと思ひます。「得たいと思ひます」は罪のない素人法螺のやうですが、しかしこれは私共に取っては空想でなくて理想です。一種の實驗に土臺をおいた眞面目な希望です。昨年私共は疊一枚弱の細に二本の南瓜を植ゑました。そしていろ／＼な自分の考へた肥料を施しまた。其南瓜がずん／＼と伸びて、大きな葉が簇生しやがて大きな黄色い花が咲いて、可愛い實が五六個なつた時で、ありました。丁度六月の

初め頃であつたでせう、懇意にしてゐる埼玉の老農の子息さんが見えまして、之れを見てくれて申しました。

「これあ可けませんね。から蔓を伸ばし放しにしちあ駄目ですよ。私共黒人の作り方は、本葉が三四枚出た所で、心を止めるんです。すると其所から三本の枝がさしますが、それに生るのがしつかり育ちます。其の一枚に一個、卽ち一本三個といふのが百姓の標準收穫で、それも入梅前に實が固まらなくちや皆落ちてしまひます。から申しちや何ですが、明日々々入梅といふのに、生花がやつと咲き始めてるんぢやありませんか。御氣の毒ですが、とてもいけますまい。

と言はれましたが、其の小さい實はこの豫言の通り、すつかり梅雨の中に落ちてしまひました．私共はこれを見ていささかがつかり致しましたが、しかし物は試しと思つて見放さずに肥料などやつて愛育して居りますと、土用になつてから咲き出した生花が片ッ端から止るではありませんか。そして秋の末には十個といふ、しかもパチ〳〵と實の入つたのを取つたではありませんか。それにもう一つの驚きは、八月になつてから根本から葉（ひこばえ）が出ましたが、九月になつてそれに實が二つなつたので、助けておくと、それが十一月になつて、少しは水つぽかつたが相應に食へるやうになり、其の時分八百屋の店に並ぶのよりは寧ろうまい位になりました から ね。此の傳で行くと、三坪からは少なくとも五十個以上は收られるといふ自信があります。尤も地に這はせたり、普通の棚を作つたりしたのでは駄目でせう。私共には丸太直立式といふ空間を利用する特別な試みがあるので、これはそれによつた御目出たい勘定でそれからつい彈むのを忘れましたが其の年の秋の末に埼玉の若農君がまた見えた時に、この結果を見て貰ふと、驚きましてね、百姓なんて舊い型に囚はれて仕様がないもんですね。ぺえい　と云つて居りましたよ。

糸瓜を植ゑて二本から數個を取るのはわけないことですが、これも空間を無駄にしない爲一本の長い丸太にからませます。糸瓜水の效能は大抵もう御承知の事でせうがこれは感冒の藥として非常に效能があり、又化粧用アレどめ用としてもこの自然の作つた瓜の水の效能は利慾本位にと薄め弱められたキレイ、ホーカー、ネージュなどいふ文化液の遠く及ぶ所ではありません。しかも二本の糸瓜から、タワシの網糸瓜を數本取つた上に、買ふとしたら十圓二十圓に値する水を取ることが出來るのですからたまりません。

菊は上品な美觀に目を娛ましてくれた上に、仙人式の俗ばなれした奘味を與へてくれます。これは南瓜の外側に垣のやうに植ゑるものです。

しかし、よく考へて見ると、これは廣い畑の眞中に三坪を占領する場合の案でありました．軒下くれ際のせゝこましい三坪は、同じ三坪でもすつかり趣を異にしませう。素人のおめでたい妄想を笑つて下さい。

土いぢり

茅野雅子

三坪の土があがつたら、私はそれをどんな風にしてたのしむでせうか。

一體私は土いぢりが好きですとは云ふもの、實はほんの氣まぐれであつて、少しも研究的に秩序を立てゝ試みたことはないのです、唯其時その時の氣分で花を植ゑたり、種を蒔いたりしてゐましたので、斯う改めて考へてみると、非常にむづかしいことに思はれます。併し人一ぱい花の好きな私は、斯んな風にして花をたのしむことが出來ればどんなにいいかと思ふやうな心持を、この御たづねのお答にします。

三坪の土は勿論狹いものですが、どうか一年の内少しでも多く花を咲かせて、季節の推移に親しみたいと思ひます、それ故に奇抜なものを撰ぶよりも、出來る丈け手數の少ない誰にでも扱ひ易いものを主として植えたいと思ひます。

土地全體の三分の一を斜に三角のやうに隅の方を除し、あと全部に純白なチューリップの球根を植ゑます、そして三角の形に殘された隅の一部分に芥子の種をまきます、(尤も球根は初冬に植えるのです)チューリップは植ゑる時ほんの少し肥料をした丈けで、霜よけさへしておけばひとりでに花が咲きます、其花の咲く三月の終り頃、一方の隅にまかれてあつた雛芥子が芽生えてゐますから、その芽を損じないやうに其の傍の空地に五六球紅ダリヤの球根を植えたいと思ひます、其球根を植ゑたあいまに、撫子、月見草、などの種をまき、五月梅雨前にチューリップの根を片づけたあとへ、雛芥子、撫子月見草と雜然と植ゑてみたいのです。芥子の散りすがれたあとへは、數株の折枝ざしした野菊、水引草など、とりどりに移し植ゑるのもいいと思ひます。もう其頃はダリヤの花がびらうどのやうにますます咲きほこる頃となるでせう。

土なくもがな

辻　潤

御尋ねで恐縮します、元來、都會生れの私は傳統的にも立派にディレッタントの素質を備へてゐるところから、かなりな趣味性を少年の頃から持つてゐました。芝居、寄席、繪畫の鑑賞は申すまでもなく、親父が骨董をいぢくつてゐた爲めに、その方面の智識をいつの間にか養はれて、今、思へば不愉快な位に少年らしくない趣味に沒頭してゐました。御蔭で．快活な運動や、所謂、土に親しむ機會はスッカリ閑却され、その代り、甚だ柔弱な體質を造りあげさせられて、今頃になつて、意識だけはかなりなプロレタリヤでゐながら肉體の方はスッカリデケイして、誠に遺憾でなりません。

都會に生れた者の園藝趣味と申しますと、先づ縁日の植木屋の花卉、盆栽から養はれる位なところで、それ等のものから、僅かに大自然の植物美に接する位なものであります。

しかし、今の私には落付いて園藝を味はつてみようなどと云ふ心持は毛頭ありません。好きな書物を入れる本箱をさへ一ッ持つてゐない自分は、先づ園藝を始めるまへに、自分の書齋に對する趣味に沒頭するのが順序です、ですが僕にもその趣味が全然ないと云ふわけではありません。なぜかと云ふと、昨年の博覽會に僕はたつた一度出かけて見ましたがその時．第一會場の右側の盆栽を並べてあるところを通つてゐるうちに、フト自分の眼を惹いたものがありました。それは銀杏の盆栽で、若し、僕にそれを買ふだけの金があつたらキット即座にそれを買つたにちがいありません。しかし價格付を見ると、三百五十圓としてあるので、如何とも手の出しやうがありまんでした。でも、僕はその前に暫時、

停んで、ボンヤリ眺めてゐたことを今でもハッキリ憶ひ出すことが出來ます。

僕は花なら、どんな花でもたいてい好きです、しかし、西洋の草花より、どちらかと云へば、日本の花の方が好きです――これは、僕の食物に對する趣味とまつたく同一であります。――秋の七草などは少年の頃から好きでした。

僕は今、旅にゐます、廣島によつて、柳の新芽のうつくしさを久しぶりで見て嬉しい氣持がしました。東京にゐると日本の美しさがわかりませんが、一寸踏み出せば、今更ながら、自分の國のが山水の綺麗さに感服させられます。

僕には大きな屋敷を構へ、廣い庭園を持たうなどと云ふ考へは今のところ微塵もありません。旅をしてゐると、至るところの山水や草木、花卉が自分のもののやうに思はれます僕はそれ等をただ、無意識に眺めて充分な滿足を覺えてゐます。三坪ばかりの土地などを持つたところで、それがなんになりませう。僕の住んでゐる川崎の裏長屋には、一坪の庭さへもないのです。呵々。（三月二十九日博多の松原で）

梧桐を一本

佐藤春夫

二三の親友と一冊の愛讀書と猫の額ほどの庭と――これがむかしのエピツクユリアンの贅澤であつた。全くこの上もない贅澤だ。親友や愛讀書などは、どうして！　さうやすやすと得られるものぢやない。三坪の土だつてそのとほりだ――ことに我々、近代の都會生活者にとつては。そんなことを言ふよりは先づ、方三尺の日ざしが家のなかにあるかどうかさへ問題だ。フランスでは窓一つ持つために税金がいくらとかかゝるといふことではないか。まるで日光と空氣とを買つてゐるやうなものだ。ところで僕は、三坪の土を與へられるよりさきに、方三尺の日ざしが欲しい。それさへあれば三坪の土の方はあとまわしにする。寢ころんでその日向でいろいろな花や木や水のことを空想するのだ――折にふれていつかどこかで見たことのあるものを。

折角、土があつても三坪ぢや何とも仕方がない――今夜の僕の氣持ちでは。少くとも三十坪はなけれや、さうさ、さうすれや僕は天下の名園をつくつて見せるがね。三坪ぢや全く仕方がない――必ずしもさうではないのであらうが、今夜の私には滿足し兼ねる。といふのがそもそも私の途方もない贅澤で、それといふのもまだ年が若く、それに足腰も立つものだから自由にそこらをほつ突き歩けるのでそんなといふのだらう。實際、正岡子規が病中、自分の庭を眺めて書いた小品を見ると涙を催すほどである。あれは中學校の教科書にもあつたが、そんなもののなかにあれが雜つてゐるのは、沙原に野菊が一本ある氣がする。

もしどうしても三坪の土しかないといふなら、僕はそこへ梧桐を一本植ゑる。僕はあの樹が好きだ。春が來ると茶色の羅紗のやうな芽の出る時も、大きな葉が重つて茂る夏もいい。舟のやうな形の實が落ちるのも、音を立てて枯れ葉の散る日も、冬枯にあの掘屈な枝ぶりを見るのもいい。あの木は見かけはぼかんとしてゐるがあれでなかなかデリケートに四季の音づれを知らせるのがうれしい。やさしい樹だ。支那風の氣持もいい。故鄕の父の家にはあれが三四本あつて私はそれをよく見て知つてゐる。懷しんでゐる。實際あの樹のかげに机を置くと春夏秋冬を感ずることはすばらしいものだ。階前梧葉云々の詩句の面白味は、あの樹の下に机を据ゑると始めて本當に味へる。

三坪の土に、私は、たゞ一本の梧桐を植ゑよう。その下が一面の青苔ならばなほうれしい。西洋草花の花壇は三坪の土にはあまりに「文化的」でいけないよ。それならばいつそ菜畑にするのだね。

色魔の研究

ドン・ファンと不良老年

安田徳太郎

「女性といふものはドン・ファンの胸にいだかれたがる。」とオットオ・ワイニンゲルが書いてゐます。女を罵倒するためにのみこの世に生れて來たやうな若い哲學者ワイニンゲルの言葉は、幾分割引を必要とするやうに考へられますが、わたし達の社會にひつきりなしに起こるいろいろの事件を照し合せてみますと、この言葉は謎のやうな女の心の一部分を見事に剔抉し盡したやうに思はれます。若い娘達が色魔だと認められてゐるドン・ファン、即ち女たらしの胸の中に吸ひ込まれて行くのを見、棄てられ踏みにぢられてもなほその男を忘れかねる風情を見るにつけ、わたしはワイニンゲルの言葉に微笑を禁じ得なかつたのであります。ドン・ファンは女の心を惹くあらゆるものを具へてゐます。彼は女性が男に對して夢みてゐる理想型を示してゐるやうであります。「驚くべき大膽、策略力、敏捷、冷血、愛嬌」とスタンダアルが申したやうに、彼は實に美しい魅力を以て女性の心臓を波立たして行くのであります。しかしながらドン・ファンの求めるのは、女性の愛ではなくて、女性を自分の胸に吸ひつける迄の經過の興味であります。吸ひつけた瞬間に彼は何の躊躇もなしに女を棄てて踏みにぢります。彼は「戀の質」といふものより「戀の數」を求めてゐるのであります。彼は利己主義者であります。彼は惡魔であります。彼は故意に女を不幸に陷らしめる者であります。

性解放とか戀愛至上をはきちがへて、物眞似のやうな、何等心の深みから滲み出たやうでない、性の歡樂と享樂が現代人によつて謳歌されて來ました。それが「文化」といふ美しい假面を冠つて、舞踏、洋樂、わけがみ、耳かくし、洋装、其他草草の美しく新しい象徴を伴つて、ブルヂョア階級の空氣をほんのりと薫じてゐます。「女は眞實に對して興味を持た

ない」「女は孤獨でをられない。女は寂寞の愛すべきを知らない。女は社交を愛する」「性的のみである女といふものは、自分が性慾そのものであるために、無性のやうな顔をしたがる」(ワイニンゲル)ドン・フアンはかくのやうな女の群を悦ばし感激さし恍惚とさすために、彼の魅力を奮ふのであります。文化と社交はドン・フアンの出現によつてより華やかにより纖細にされて行くのであります。

露西亞の生理學者パヴロオヴはその専門とする消化の生理から出發して「食」といふもの程人生に意義のあるものはないと考へました。墺太利の精神病學者フロイドはヒステリイ患者の分析から出發して「色」といふもの程人生に意義のあるものはないと考へました。二人の出發は決して間違つてゐないのであります。即ち色食といふ二つの要素はわたし達の社會に於いて常に大きな力を持つてゐ、この色食の二つの本能を充分滿足さすことが「人類」の究極の目的であるやうに考へられてゐます。ところが現代社會では色も食も常に金といふものに還元されてゐます。即ち富さへ贏ち得れば色食の本能は十二分に充し得るといふ組織になつてゐます。だから富あるものは同時に色食の勝利者となつてゐるのであります。

ある政治家の夫人が自分の夫の色魔ぶりを擁護して「英雄は色を愛す」と申しました。この言葉を味つてみると、社會的に樞要な地位にある人なら少々ぐらゐ性的に亂暴してもかまはない、寧ろ亂暴する權利がある、權利どころか特權だといふことになります。又ある偉い人が申しました「一夫一婦などは新人か西洋崇拜者の泣事だ。我々東洋の覇權を握らうとする者は女の四、五匹は蹂躙しなくては駄目だ。」と。これも誠に豪傑らしい景氣のよい言葉であります。即ち色魔がドン・フアンの素質がないとこの大日本帝國ではとても偉い人になれない事實を語つてゐるのであります。かういふ思想は傳統的に日本人の頭に染込んでゐるやうであつて、偉い人なら平氣で妾を蓄へたり、女中や小間使を口說いたり、若い娘に[illegible]ひかかつたりしても差支へない事になつてゐます。たまたま問題が惹き起こるらしい時は金錢で以て示談で事濟むやうになつてゐます。そして偉い人のする事なら誰もあまり糺彈しやうとしないし、よし勇敢な人があつて糺彈しても、あべこべに「妬いてゐるね。」とか「あの人にはそれだけの腕があるのだ。」とか「それ程腹が立つなら偉い人になりたまへ。」とやつつけられるのが普通となつてゐます。偉い人、即ち特權階級の人は性的にも特權があるといふ事になります。

併しだれでも希望通りさう偉い人になれないものであります。偉い人になるためには富とか敎育の上に、なほ種々の美德、要領とか背景とか掛引とか追從とか軟化とか去勢とかいふやうなものを必要とします。ゲエテの「ヴエルテル」の中

に、ある官吏がヴエルテルにかう言つてゐます。

「青年よ。戀するといふ事は人間らしい事だ。ひたすらに人間らしく戀しなくてはいけない。君の一日の時間を二つに割いて、一つは勉強の時間とし、一つは遊びの時間として娘さんに捧げ給へ。君の資産を勘定して不時の用意に貯へ、娘さんに贈物をするのもあまり度度であつてはいけない。まあ誕生日とか祭日にね。」ゲエテはこの官吏の言葉を蹴とばして熱烈放奔にロツテを戀して病氣になりました。ゲエテは天才だつたから戀愛事件に現になつてゐても、格別學業が下つたり高等文官試驗に落第したり出世が遲れたりせずに、とんとん拍子に偉い人になつて行きました。日本でなら青年時代にゲエテをきめこめば、忽ち落伍者の仲間入をしなくてはなりません。日本ではヴエルテル型よりもドン・フアン型の方が偉い人になれる可能性を持つてゐるのであります。

時々新聞に色魔だとかいつて男達がやつつけられてゐるのを讀みます。又教育家とか思想家とかいふ人人が色魔に就いて娘達に警告を發したりします。併し新聞などで騒がれる色魔は大抵小色魔であります。世間の人人は大色魔が政治にたづさはつたり、法律をこさへたり、その外天下の樞要な地位にふんぞりかへつてゐるのに氣がつかないのであります。不良少年の流す害毒に比べると、不良老年の流す害毒はもつと恐ろしいものであります。小色魔が麻醉藥などを應用して小細工をやるに反して、大色魔はもつと大仕掛にもつと巧妙にその色魔的本能を充すのであります。現代の社會制度は色魔の跋扈を都合よくしてゐるのであります。國家といふものは野性そのままのエ・ロ・チイクを自由に充し得る一つの機關のやうなものではないでせうか？

イシユ・ワアル博士がかう書いてゐます。「一夫一妻は人生の健全な形式である。男女の數はほぼ等しいからだ。一夫多妻は社會制度の缺陷の結果である。だから性教育によつて一夫多妻を欲する本能を無くするやうにしなくてはならぬ。人はおのが本能を理性の監視の下に統御しなくてはならぬ。たとへ絶えず女性を欲しやうとも、野性の發情に任してはならぬ。一夫一妻の結合、即ち結婚に於てのみ安寧が輝いてゐるのだ。」輝いてゐる安寧は一つの理想にすぎないのです。ドン・フアンや色魔でなくては社會で大きな顏の出來ない現代では、いくらわめいても彼等の彌漫は防ぐことは出來ないのであります。今後とてもなほ多數の娘達が誘惑されたり踏みにぢられたりされるだらうし、ドン・フアンになりきれない善良な多數の男達は不良老年に荒された女性のおふるを拜領したり、不良老年の種とも知らず自分の子供だと可愛がる皮肉な出來事にも接するでありませう。

二、三の色魔の輩出によつて俄かに周章てさわぐのはブルヂヨア文化の滑稽な手ぬかりといへます。自分のドン・フア

ン振を棚に上げて、自分の子供達のために色魔に對する豫防法を構ずるのはブルヂョア文化の滑稽な破綻であります。小色魔をこづきまはすのを知つて、大色魔に遠慮してゐるのはブルヂョア階級の卑劣さを證明してゐるのであります。ドンフアン色魔の跳梁を無くして美しい一夫一妻の理想を現出さすためには何をさておき、現代の社會制度を根本的に改造しなくてはなりません。婦人達はヒステリックな黄い聲を張りあげるのを罷め、靜かな理性にたちかへつてかやうな惡の存在が許される現代の社會制度をまづ檢討して下さることを希望します。理想の王國を建てるためには小色魔よりも大色魔の根絶をはからねばなりません。（一九二三、三、二五京都にて）

選にもれたヲス犬どもの叫び

武林無想庵

世の中には權力といふものがある。金力といふものがある。美貌の魅力といふものがある。この三力に對しては、いかなる女でも、殊に處女だつたら尙の事、百發百中、必ず誘惑される。男がよくて、金持で、大臣で、博士で、華族だつたら、はじめつから强姦などにはなりつこない。さうして、その位の資格の具つた男子は 今の世の中には腐るほどある

◇

政治の要訣は、威嚇と買收だと、ナポレオンが云つたさうな。やはり權力と金力だ。但し美貌だけは政治には必要がないと見える。そのナポレオンがセントヘレナでせつせと書いた手紙は、マリイ、ルイズの眼に觸れたかどうか、彼女はいい心持で俳優を引率して、歐羅巴中を遊んで歩いてゐたといふ。權力と金力との外に、彼女にはその上に美貌が必要だつたものだらう。緣雨の時代にも、靑春の夢はナポレオンと丹次郎だつたさうだが、今だつて異りはない。

◇

生れて女に惚れられる位、男子にとつての本懷はない。權力と美貌とはさて置いて、せめて金力だけでもあれば、よし本心からでなくとも、大部分女の心を左右する事が出來る。先づ、要求どほり身のまはりを飾らせる。帝國ホテルの支配人用のやうな、何とかいふ乘心地のいゝ自働車に乘せて、行きたがるところへは、どこへでも連れて行つてやる。全國の

温泉廻りなどをはじめる。蘇州、杭州、秦淮などへもゆく。印度へも行く。パレスタインへもゆく。ニース、モナコ、巴里、倫敦、紐育、ブエノス、アイレス、とう〳〵世界漫遊になる。それに必要な大ヨットを建造する……金力だけでもあれば、それ位の事は出來る。

◇

鬼も十八といふ。番茶も出花といふ。××××××××××××。殊に男子が三十九ぢやもの花ぢやもの、などとウナされる年齢を越すと、越せば越すほど、いよ〳〵もつて、身もだえして、細胞そのもののドン底から、さうした×××××××やうになる。『皆様がさう仰ッしやいます。』といふ、かのアラベチなるものが、待合業者の莫大な收入になるところを見てもわかる。年増のいゝのは若いうちだ。一人前のブルジョアになると。×××××××××××『×××××××××』にかぎつて來る。

◇

大野博士がどうしたとか、柴山なにがしが怪しからんとか、世間では、この頃、もつぱらこれ沙汰ださうな。さうして、そのこれ沙汰が、こんなのどかな、到るところ白梅の咲き誇つてゐる、三千年前の老子に喜ばれさうな、鷄犬相きこゆる、かうした梅澤の、海岸の、空屋同然の他人の別荘へまで、不思議と影響して、何でもいゝから、さういふ社會現象に對して十枚ばかり、といふやうな結果となつて、即ちこの感想だ。感想も何もない。頼まれたをいゝ幸ひの原稿かせぎだ。かうなつて來ると、大野事件も馬鹿には出來なくなる。さしあたり原稿料になるのだからネ。

◇

××××××、子供が出來る。その位あたりまへの事はない。大野博士が魔睡薬を用ひたのは、少女の意志を尊重しなかつた爲めではなく、少女の純潔な心を蔽ひくらます、間違つた社會道德から、取りあへず脫却させる方便だつたにすぎない。然らば、少女の純潔な心とは何ぞや？　曰く、××××××××××××××。××××××××××××××、×××××××、×××××××××××××××××。

◇

新聞へ出た寫眞で見ると、大野博士は一寸いゝ男ぢやないか？博士號と美貌だ。とにかく女のコロリとまゐるものを二つまで持つてゐるのだ。それに元來が醫者の事だから、手に入れようと思ふ女の取扱ひ方にかけては、恐らく素人にはわからぬ巧妙さを有してゐるに相違ない。茲で若し、親だとか、兄弟だとか、赤の他人だとか、兩者の××××とつては全く何等の關係もユカリもないものどもから。若しかれこれと岡焼されずにすむ世の中が來たら、××××××××××××××××××××、×××××××××

××××。それから墮胎も同じ事だ。これも全然社會道德と稱するものゝなす業だ。何も苦んで、男が女の墮胎を行ふ必要が有らう？墮胎といふものは、本來女子自身の要求から來るのが自然だ。十月子供を腹の中へ置く必要のない、一寸自由さうに見える、その實空虛な、男子の生活に對する、下らぬ欲望から來るのが元だ。だから、大野博士が職業柄にもなく、舊式な器械など用ひて、そんな事を敢行したとすると、博士がいかにその少女の愛に溺れてゐたか、それだけの行爲だけでもよく分る。

◇

犬の××××××××、選に洩れたオス犬どもがやかましくキヤン〳〵吼え立てる。まことにあさましいものだ。見苦しいものだ。あんな事を問題にする奴は、さうしたオス犬だ。一匹のメス犬と一匹のオス犬××××××××××××××××ないちやないか？犬ならそれでいゝと云ふかも知れない。人間なら尙の事だと答へたい。

◇

が、さうは云ふものゝ、世に嫉妬欲望より恐ろしいものはない。『舜何人ぞや 我何人ぞや。』――立派な嫉妬心だ。共和主義者のプロレタリアの前衛の、何のかのと云つて、レーニンはやツぱりクレムリンへお神輿を据えたちやないか？ルーヴル宮はそれでも出ず入らずの博物館になつてるだけゴマカシはきく。それにも拘らず、無政府主義者が遠慮なくモナシルストになつて、デユック、オルレアンを押し立て、もう一度フランス王國にして見たい連中が澤山ゐる。

◇

マダム・ド・ポンパドウル、マリイアントワネツト、さう云つた女を女房とか妾とかにするには、王樣になるにかぎる。モナコのやうな小國の王樣でも、王樣となると、女は全く自由自在なものだ。だから、我輩も今度生れ代つて來たら、どうしても王樣になる。さうしてサルダナパラスやネロやカラカーラのやうに大きな××でも何でも建てゝ、天下の美女どもをその中へスツ××にして、思ふ存分フザケちらす。凡そ男子と生れたら、出來るものなら、一生に一度、誰だつてあゝした身分にもなつて見たいちやないか？

◇

大野博士や柴山なにがしばかり、さう殘酷にいぢめたまふな。彼等は何れでも我々の××××、××××××××、××××××××××××××。さうしてそれにして見たところで、伊藤博文だとか、桂太郎だとか、大倉喜八郎だとか、もつと古くてよければ德川家齊だとかいふのに比べたら、その緋々程度は殆んど問題にはならなからうと思ふ。

――時に、話はちがふが、あの『人肉の市』とか何とかいふ本はよく賣れますね…一體どんな事が書いてあつて、あゝ素晴らしく賣れるのです？

――さア、僕もまだ讀まないから分りませんが、試に小賣店にきいて見たら、かう云つてゐました…

――何てね？

――色と慾とを赤裸々に取扱つてある本なら、何にかぎらず必ず賣れるツて…

――なるほどね。」

この原稿を賴みに來たＳ君と、落日を後にして、ザク〳〵海岸の砂を踏みながら、そんな問答した。

◇

原稿なんて書いてるのが、つく〴〵馬鹿らしくなつた。」

金がほしい！　金がほしい!!　金がほしい！！　さうしてその金を持つて、滿天下の少女を悉く誘惑して歩きたくなつた。

色魔は憎むに足らず

色魔第一世武林男三郎の追懷

堺利彦

新聞紙の社會欄に於ける『色魔』第一世は武林男三郎君であつたと思ふ。彼は有名な漢詩人野口寧齋の妹そえ子に戀し野口家に遺傳する悪疾からそよ子を免かれしめる爲、他人の『臀肉切取』を敢てし、遂には寧齋を殺したと云ふ事になつてゐる。

それはモウ十五六年も前の事だが、私としては特に其の事件を記憶してゐる理由がある。私は寧齋君を善く知つてゐたばかりでなく、男三郎其人をも古くから知つてゐた。私が昔大阪の天王寺小學校で『英語の先生』をしてゐた時、彼は實に私の生徒であつた。のみならず、彼が死刑の宣告を受けた後、私は彼と同じ獄中に居て、廊下などで合つた事もあり又彼の染筆を受取つた事もある。彼は獄中で、そえ子さんが小さい娘を抱いてゐる畫をかき、御看守さんの印肉を盜んでそれに赤い彩色を施し、窃かにそれを我々の仲間の處に送つて

來た事もある。

斯樣に私は色魔第一世と種々な因緣を持つてゐる。色魔に關する評論を求められた今、私はこの事に言及せずに居られない。殊に其の色魔が、傷害殺人の大罪を犯したと云はれるに係はらず、私に取つては、矢張り親しむべき只の人間である事を云はずに居られない。彼は實に可愛らしい男であつた。

然らば彼は何故に色魔と呼ばれたか。思ふに彼は、婦人の心を引きつける一種の魔力を持つてゐたに相違ない。彼の容貌、彼の性質、彼の言語、彼の態度は、そゑ子をして深く彼に戀着せしめるに足るものがあつたに相違ない然しそれが彼れの罪であつたらうか。

ルソウの自傳の中に、彼が少年の時、しば〳〵娘子にちやほやされるので、いつとなく自らの容貌のすぐれてゐる事を自覺する所があつたと記憶する。少し好男子だと云はれるほどの人は、恐らく皆それに似た經驗を持つてゐるだらう。そして其の自覺が生じた以上、今度は意識的にその効果を豫想して、自ら進んで働きかける事になる。凡そ男性は女性に對して、女性は男性に對して、皆多少の魔力を持つてゐる。それが好男子もしくは美人に在つては、甚だ大きな魔力として現はれて來る殊にそれが効果を豫想して意識的に働きかける事になれば、そこに色魔の要素が生ずる。然しそれはまだ罪と目するには足りない。異性からさういふ意識的の働きかけを受ける事は、多くの場合、危險であるに相違ない。殊に婦人としては、さういふ男子を色魔として警戒する必要があるには相違ない。けれども、それだけではまだ其の男子の行爲を罪と目するには足りない。

兩性關係から離れた他の場合を考へて見る。例へばかりに多少音樂の才を持つた男があるとする。初めは彼は只自然に歌を歌つたりして樂しんでゐる。

所が、追々に人がそれを賞める。成程、自分は歌がうまいのだなと自覺しはじめる。さうなると今度は、一つ奴等を感服させてやらうといふ意識を以て歌を歌ふ事になる。曾てあそこの節まはしでヤンヤと來た事があるから、又あそこで一あて當ててやらうといふような企みをする事になる。それが更に一歩を進めると、俺のこの聲で、俺のこの喉で、一つあの女を參らせてやらうなどと企らむ場合もあるだらう。彼れの音樂はさういふ事の爲に墮落するかも知れないが、まだそれを罪と目するには足りない。

又、こゝに非常にすばしこい、身の輕い、手先の器用な少年があるとする。或る時、道ばたの石の上に止まつてゐる蜻蜓を見つけて、ソット忍びよつてそれをつかまへた。外の少年もやつて見たが、一人もつかまへ得る者がなかつた。前の少年は二度も三度も奇功を奏して喝采を博した。彼はさういふ點に於いて特殊の技能があるといふ自信を得た。或る時、戯むれに友達のポケットにはさんである萬年筆をソッとすり取つて隠して置いて「オイ、君は萬年筆を落したな」と威かして喜んだ。その後、彼はしばしばそれに類似した敏捷輕快な

行爲を以て友達を笑はせて喜んでゐた。或時は集會の席上で、巧妙な手ずまの一曲をやつて大喝采を博した。斯ういふ少年には、他日スリになる素質があるには相違ないが、以上の所では只敏捷を誇りとする無邪氣な遊戯に過ぎない。

又ここに一人、骨格の偉大な、腕力の強い少年があるとする。何かのはづみに人中で喧嘩を起して、數人の友達の先頭に立つて散々先方の奴をヤツつけて、大いに功名手柄を現はしたとする。彼は自然にさういふ事に誇りを感じ、自分の腕力を恃みにする。その後、彼はしばしば人の難儀を助けた事もある、亂暴者を取りひしいだ事もある、わざわざ喧嘩の仲裁にはいつてうまくそれを納めた事もある。それが半分は見えであるにしても、親切と義侠とに相違ない。然しさういふ少年に、他日羽織ゴロになるべき可能性があるとも云へる。

斯樣に、人には皆それ〲多少の特長がある。そして其の特長が特に著るしくなると、そこに自覺が生じ、誇りが生ずる。從つてそれを自分の利益の爲、愉快の爲、名譽の爲に行使する事になる。然しそれだけなら一向差支へのない當り前の事だが、それが更に數歩を進めて職業的となり、人の利益を犧牲とする事になれば、即ちそこに羽織ゴロが生じ、スリが生じ、色魔が生ずる。

故に色魔といふ者が決して特別に不可思議な怪物ではない社會に生活困難といふ現象がある以上、人がそれ〲に自分の特長を利用して生活の便宜を計る事になるのは、止むを得ないわけである。

男三郎君の場合について考へて見るに、彼が果して自分の生活の便宜を計る爲にそえ子をたぶらかしたか否かは明かでない。私としての感じから云へば、彼は色魔の要素を備へた青年であつたには相違ない。從つてそえ子が深く彼に戀着したには相違ない。然し彼としては又、深くそえ子に戀着してゐたに相違ない。自分の生活の便宜を計る爲よりも、寧ろ自分の生活を忘れてゐたかとさへ思はれる。其の意味からすれば、彼は決して色魔ではない。

けれども、彼が若し有らゆる意味に於いて色魔であつたとした所で、彼の親しむべき男である事に變りはない。そえ子に取つては愛する夫であり、其の娘に取つては愛する父であり、私に取つては矢張り一個の友人である。私はスリ、窃盗、强盜、詐欺師などの中にも、多くの愛すべき男を見てゐる。ゴロツキ類似の男の中にも、多くの無邪氣な人物を知つてゐる。本統に憎むべき人間といふ者が、減多にあるものではない。色魔も決して深く憎むには足りない。

要するに、色魔といふ社會的現象は、大して特別な事柄ではない。其の素質から云へば、音樂の才人が現はれ、敏捷な手ずま師が出て、偉大な腕力家が生ずるのと變りはなく、其の社會的事狀から云へば、スリ、ドロボー、ユスリ、カタリが生ずるのと同じである。そしてそれらは皆、××××××××××××××××××××××××ゞ消失すべき犯罪者である。



地球を墳墓として

—日本の娘よ、私はおまへを見捨てはしない—

賀川豊彦

おまへを戀することは、白百合の蜜をなめるよりも善いことだ。日本の娘よ、私はおまへを見捨てはしない。

嘗て、私はアメリカの女と嬉しい時を送つたこともある。アイルランドの女と善き時を持つたこともある。鶯のような聲でアイルランドの女優が私の爲めに一時間半の長きに渡つてトラヴエドールを歌つてくれたこともある。またスキデンの娘がその親切な面持ちで私を愛してくれたこともある。支那の小娘が肩を街頭に賣つてくれたこともある。金が無い時でも、無産者の娘達は隨分私には親切であつた。然しそんな時でも、どうして私は日本の小娘が忘れられようか？梅子さんよ、百合子さんよ、櫻子さんよ、それは日本に咲いた花では無いか！

ラフカヂオ・ハアーンの縁を借らなくとも私は日本の女を崇仰する工夫を知つてゐる、外國を多く知れば、知る程私は日本の女の讃仰者となる。英國の女を力強き柱に譬ふれば日本の女はそのキャピトルのようなものだ。日本の女は少しも英國の女のように強くは無い。然しそれは力の上に据えらる可きキャピトルである。

親切な女を尋ねんとするなら、日本にそれを探ねるが善い。古傷を深く癒して貰ひたければ、日本の娘を戀するが善い。日本の女の戀は太平洋の水よりも深くそして廣い。犧牲の女を妻に持ちたければ、日本の女に戀するが善い。その小柄の組立の中に霞よりも深い愛着を持つてくれる。

日本の地に永く住めば住む程、私は日本の女の偉大さを知る。私は義理の祖母の顔に嘗て憎惡の暗雲が通過したことを知ら無い。絶えざる犧牲に貧民に仕へ、勞働者に仕へ、窮乏の中に報酬なき奉仕を厭はず九つの冬を我等と貧民窟に送つてまだその光芒を失は無い。日本の女性は例へば眼に見え無い星のようなものである。或はまた光なき星のようなものであらう。それは天上に實在しないのでは無い。それはそこにある。たゞ表面に現れて來ないだけだ。日本の女は發見するに暇を取る。それは肉體の眼だけでは見え無い。心の眼で見なければならない。私は日本の偉大なる女を日本を廻つてゐる中に多く見た。彼等は少しも美人では無い。然し彼等の魂は世界の何者よりも尊いものを持つてゐる。彼は深く魂の中に教養を保ち、廣く愛することを知ら無くとも深く愛する工夫を知つてゐる。彼等は沈着で彼等は苦難を塵芥の如く思ふてゐる。日本の女を愛することを覺えたものは西洋の女を愛することは出來ない。西洋の女は甘やかして置かねばならぬ。殊にアメリカの女ほど甘やかしを好むものは無い。日本の女は眞劍である、眞實である。彼女は思ひつめると、日高川ナ蛇になつて渡る。

日本の女が美しく無いと云ふ人があるかも知れぬ。それを私も許容する。日本の娘は北になる程美しく、南になるほど美が薄らぐ。私の見た中で東北地方ほど輝いた女の多いところは無い。あの東北の瘠地に日本娘が牡丹の花の如く咲いてゐる。南に美しい女が無いでは無い。然し稀である。然し南の地方でも少しも失望する必要は無い。美貌の無い時には彼等は必ずその補ひをその魂の中に藏してゐる。

日本の女は日に美しくなる。私は東京の女學生に會つてみてそれを感ずる。東京の女學生は三年見ぬ間に變つて行く。私はまた東京の女の言葉の讃美者である。東京は醜くとも、東京の女の言葉は美しい。その澄み切つた歯切れの善い言葉附はフランス語よりも美しい。女に愛せられるなら東京語で愛せられることは此上なき幸福であらう。小娘の東京語は恰も櫻の花を形造る曲線のようなものである。それはまるみを持ち無限の餘韻を持つてゐる。女の東京語は日本の新しい發明である。

日本の女は今日まで西洋の女が知らないお茶と、花と、作法とを習つた。お茶は日本座敷に於ける精神の衛生である。簡素なことの渇仰であり、簡易生活の福音である。たゞ今日では昔の心持から離れて行つたようであるが、一抹の茶を啜り作ら靜かに安心することの工夫を敎へられることは實によろこびである。それは酒を呑むことよりどれだけ美しきことであるか知れ無い。西洋では酒の配合の工夫を敎へられる。酒に關する作法がある。然し私は日本の娘にそれを敎へたくは無い。私はあの簡易な、素朴な綠の茶の中に無限の法悦を持つことを日本の娘に敎へたいものである。

『花道』の美に到つては世界の何處を探したつて、私は花を好愛すること日本のように自然的である國を知ら無い。西洋の花に對する趣味はたゞその強烈な色彩と輪廓に對する憧憬にしか過ぎ無いが、日本の娘はあの眠れる柳の枝に美を附加

する力を持つてゐる實に奥ゆかしいのは彼等の曲線美に對する發見である。「花道」に對する趣味は高擧した魂のみが會得する高踏藝術である。そして日本の娘はそれを敎へられた。

私はアメリカに數年を送り、歐洲の多くの國民と交つて、彼等がまだ新しい國民であることをつくづく思つたのであつた。彼等は自然を征服をすることを知つて、自然を日常生活に取入れることを知ら無い。彼等は海草を食ふ工夫を知らず、櫻餅と蓬餅を樂しむ工夫を知ら無い。日本の娘は自然を人間と調和せしめる工夫をする。正月には藁と「しだ」と炭と、櫛柿の色彩を調和せしめて門先に吊る工夫を知り、三月は桃を雛壇に飾り、五月には鯉幟を屋外に飾り、屋根には菖蒲を飾る。七月には笹を飾り、九月には菊の節句を祝ふ。私は西洋のあまりに人工的生活に慣れて行く程、日本の女が保存してくれる自分と人間の諧調を嬉しく思ふ。日本の娘の心の底で自然と人間が完全に調和する。

急行列車が、東から西に走る。東海道の急行列車は日本の最も美しい所を見て通る。箱根、御殿場、富士、興津、濱名湖、伊吹山、琵琶湖、その他數限りも無く眼前に開展する景色はみな我等の腦底に深く刻まれた勝景である。私は過去六年間に日本を廣く見て通つた。北は北海道から、南は臺灣まで。そして、日本が如何に美しい國であるかを知つた。

私は瀬戸内海を幾度か周遊した。そして、瀬戸内海は私に多くの美に就て敎へた。佐多岬の尖角も、鳴門海峽の渦巻も私にはインスピレーシヨンであつた嘗て私は明石で四ケ月間その海面を見守り乍ら瞑想した。來島海峽の美觀に醉ふたのも一昨年のことであつた。糸崎海峽の水の色に惚れ〳〵したのは去年のことである因ノ島の美に引かれて私はあすこへ三度行つた。

今年は尾ノ道から島々の間を呉近くまで小蒸汽で行つた。あのあたりの美しさと云へば何ものにも譬へることが出來な

い。高松城の白壁が海面に映る。それは恰も龍宮のようである。播州の小さい港灣の美しさよ。私は多くの河川の美を見た。私は阿波の吉野川の流域で育ち、美しいその自然に抱かれ育まれ今猶その恩恵を感謝して居るものである。日本は一つの大きな公園である。日本アルプスに登つて私はその感を強くした。あの僅かな地積の間にあんな大きな景色を神が置いたことが既に一つの奇蹟である。

日本は公園である。日本では人間と自然とが完全に調和して居る。

然し此處にまた日本の危險性がある。日本の男子が進擊性を缺き、日本の女子が因襲を破り得ないのは、その自然があまりに美し過ぎるからである。そこにヂッとして居ればそれで善いと安心して了ふのだ。彼等は大平原の美を知らない。急行列車で二日走つてもまだ一つの平面を走つてゐる支那の河南の雄大を知ら無い。日本人は公園に住んでゐる。彼等は地球を見ない。彼等は公園を見る。彼等は地球精神を持た無いで、公園精神を持つ。彼等はあまりにおめでたい國民である。地殼の變動も、海濤も暴風も、公園の松の木を折らなければ善いと考へてゐる。

私は日本を愛する。私はその美しい自然とその氣高い女を愛する。北米に二年八ケ月放浪した私の廿代に、私は富士と蘆ノ湖が戀しくてならなかつた。私は漆器の椀で淡い吸物がすゝりたくて困つた。私もまた櫻咲く國より永くよう離れて居られない人間であらう。

然し、私に取つては、日本はあまりに小さい。それは遊園地のやうなものだ。私はこの狹い日本で手と足とを縛られて住むことを一つの自己に對する侮辱と考へる。で、もし私に神の呼び聲がかゝれば、私はいつでも日本を捨てる。地球は小さくても、日本よりは大きい。私の墳墓は地球そのものである。何人も私の爲めに墓標を立てる必要が無い。太陽系の

一角に、私はそれを立てる。

私は地球より脊延びする。私は永遠に成長する爲めに、太陽系をも見捨てる。——

あゝ然しその時でも、私は日本の娘を見捨て無いであらう。小娘等よ、日本の娘は北極を征服する。日本の娘の魂は私の胸に深く釘を打つた。

私は廣くも無い地球をまた逍遥してくる。それは別に私に新しいものを抓へることもあるまい。たゞ私は更に深くおまへを愛する爲めに——日本の娘よ——あゝその爲めに、私は世界を周遊して來よう。日本は私には狭過ぎる。日本の精神は確かに、日本そのものより大きい。日本の娘の魂は確かに富士の山よりは美しい。その爲めに私は日本を離れて、直徑七千八百哩の球體を一周してくる。

『さらば』と云ふのもあまりにおかしい。『暫く』と云ふのもあまりに傳統的だ。私はおまへら日本の娘に、無言のまゝ立去らう。それは離れるのでは無くして、延び上るのである。

日本の娘よ、おまへもまた延び上るが善い。かぐや姫が月の明るい晩に富士の山より更に高く飛び上つた如く、おまへも高踏するが善い。私は無言のまゝ日本を暫く離れよう。それは更に汝を愛する爲めに、おまへを更に引上げる爲めに。

日本の娘よ、高く飛べよ、月の夜に、かぐや姫の如く。私はおまへの飛ぶ手助けをしよう。（一九二三―四―三、）

探偵実話

上流家庭の或事件

岩井三郎

小生の探偵事務所で取扱ふ事件は、悉く絶對秘密を要するのであるから、これから此處に書かうとするものも、其の人物、場所等は假名を用ふるの止むを得ざることを豫め御承知置きを乞ふ。

四月の始めと云へば、兎角事件が重つて來て、眩ぐるしい程忙がしい日が續くのが例である。

其日も私は、早くから事務所に出て、配下の者に豫定の手配りを命じてから、數十通の來書に眼を通して居る時、不圖眼に留つたのは、一通の筆蹟も見事な女文字の手紙であつた。裏を返して見ると、大阪市××公園地園田みつ子とある。封を切つて讀下して見ると、大體次のやうなことが書かれてあつた。

——まだ御眼にはかゝりませんが、御高名は兼ねがね承知致して居りました。私の叔父に當るＵ氏なども、度々あなた樣の御手數を煩はしたやうに聞いて居ります。また、私共姉妹三人ながら、あなた樣の精細な御調査のお影を蒙りまして縁組を致し、今日ではそれ〴〵幸福な身の上となつて居ります。

扨、私は東京の生れで御座いますが、大阪の○○銀行の頭取園田清太郎の許に嫁いで早十年にもなります。家庭は何一つ不足のない、それこそ世間の人様に羨やまれる程圓滿です。強ひて不足を申して見れば子供がない位ひのところでした。然るに近頃何うした事か、夫の擧動に就いて何となく腑に落ちない事が眼について參りました。只斯う申上げたばかりでは何だか御解り惡いでせうが、夫は毎月一回、東京にある○○銀行の支店に監督の爲に出張するのが例となつて居りました。それが、先頃までは僅か二三日で用事が足りて早々歸宅致しましたものを、近頃に到つては兎角用事が長引き勝で、早くて十日から二週間位ひ手間取ることが慣例のやうになつて參りました。留守を守る私の心持は、世間普通の女の嫉妬心からではなく、只、夫の地位、信用、引いては家名に傷つけるやうなことを出來して呉れなければいゝと、それこそ身も細る思ひで居ります。何卒私のこの苦衷を御酌みとり下さつて、東京滯在中に於ける夫の行動を逐一御調査下さいませ。先日大阪の方の事務所に電話をお掛け致しましたところ、近日御下阪の由、其節は親しく御眼にかゝつて色々御願ひ申上げたいと存じて居ります。御手數で御座いませうが御下阪の際は電報を賜り度く、何卒夫の名譽信用に障りなきやう呉々も秘密に御願ひ申上げます。尚電報も、何方近

拵で御座いますと舅や姑の手前も御座いますから、堺市××町吉川かつ方へ宛て下さいませ。私の手に落ちますやう心付けて置きますから——。

神戸、大阪方面に二三用件が重つて來てゐたので、私はその手紙を受取つてから四五日經つて下阪した。出立に際して岡田夫人に電報を發することは勿論忘れなかつた。

大阪堂島の事務所に着いた其日の午後、岡田夫人は來訪せられた。流石は大阪一流の銀行頭取の妻であると頷かせる程氣品のある、容貌の調つた、しとやかな若奥樣であつた。初對面の挨拶が濟んでから、夫人は大體書面にあつたことを繰返され、何卒、斯うして家内の恥を恥とせずに御願ひ致しますのも唯禍の大きくならない中に未然に防ぎ度いこと、夫に呉々も過ち無からんことを希ふの餘り思案の末に斯うして御縋りすること、此の事件は私とあなたとの間のみに於て無事に解決を告げたいこと、そして最後に、夫は至つて好人物で、兎角他人におだてられたりだまされたりされ勝である事等を細々と附言された。

私は岡田氏の上京される日、時刻、投宿旅館等を悉しく聞取つた後、豫め氏の顔を知つて置く必要もあつたので、其事に就いての打合せも濟ませて夫人と別れた。

翌日から、二三の配下の者を使つて、氏の出勤する際、銀行の重役室に執務する際、と種々の方面から、岡田氏の顔に見誤りのなきことを期して、よく注視させて置いた。

兼用等を濟ませて、私が歸京したのはそれから一週間程後だつた。歸京後數日を經て、『ソノダ　イマタツタ』と云ふ電報を受けた。夫を驛まで見送つた岡田夫人が其場で打つたものに違ひなかつた。時間を調べて見ると、岡田氏の東京驛着は翌朝の×時×十分である。私は早速、東京驛に張込む役目を部下の柳川に命じ、尾行の處から、時々の行動を逐一電話で本部に報ずるやうに手配をつけて翌日を待つたのである。

翌朝、時間違はず岡田氏は上京された。○○銀行支配人以下二三名の銀行員並びに旅館の番頭等の出迎へを受けて、にこやかに談笑しつゝ改札口を出た氏等一行は直ちに二臺の自動車を驅つて東京驛を出た。部下の柳川も遅れじと、直ちに一臺の自動車を驅つて、見失はぬやう、且つ覺られぬやうに追跡して行つた。

氏の自動車は神田駿河臺龍名館に到着したのである。入浴と朝食を濟ませて、午前十時半岡田氏一行は再び自動車を飛ばせて、日本橋なる○○銀行支店に向つた。銀行内に於ては當事件に關係ある手係りも得る筈がなかつたので、部下の柳川は、同銀行の近くに於て密かに氏の退出を待つて居たのである。

岡田氏が單身自動車で○○銀行を出たのは午後四時過ぎであつた。今度こそ何か手蔓が……と、自動車を追跡して再び東京驛に來た。四時四十分の小田原行が發車するのは數分の間であつた。慌たゞしく切符を求めさせて氏は同列車に乘込むだ。つゞいて柳川も車室を換へて乘込むと間もなく汽車は出た。何處までの切符か、岡田氏の切符を窺ふ餘裕さへ、此時はなかつたのであつた。停車する度毎に、柳川は車窓から首を差伸べて、降車客の中に若しや氏の姿が見出せたら直ぐに自分も降車する心意で居つた。

藤澤まで來ると、思ひがけなくも氏は降り

た。後醒した柳川は同じく降りて氏の影を尾行した。園田氏が開札口を出るや、一番の大丸髷を水々しく結ひ上げた、濃艶な化粧をこらした、派手作りの二十二三とも見られる容代稀れに見る程の美人が、眼元に笑を溢らせて氏に近付いたのである。見れば十八九の小間使風の女を従へて居る。二言三言挨拶を交して、三臺の人力車は、いづれも幌を深く垂れ籠めて、砂地の轍を音もかすかに鵠沼の海岸の方に走らせて行つた。僅かの距離を距てて柳川の車が追つた。漸く電燈の點りはじめた夕暮時であつた。

彼等の車が停つたのは、鵠沼の小松林の中に新築せられた風雅な別莊の門前であつた。早くも之を見留めた柳川は、直ちに車を捨てゝ、夕闇に紛れて、彼等の家に近寄つた。然るに、此時早くも彼等の這入つた家は固く門を閉して、忍び込むす分の隙も與へては與れなかつた。柳川は暫く周圍を徘徊して容子を窺つたが寂として人聲すらなく、只聞ゆるものは微かな波の音と松風のみであつた。

柳川は直ちに此旨を逐一東京の事務所に電話で報告して來た。私は、翌早朝其地に行くから近くの旅館に投宿して待て、と答へて置いてから、更に二三の部下を走らせて、その怪美人の身元、素情、來歴等の調査に骨を折らしめたのである。

部下の人達が手を分けて探知した處に依ると、此の怪美人は、東京吉原遊廓内引手茶屋巴屋の娘たね子と云ひ、女學校を卒業すると間もなく、其頃出入してゐた横濱本町の有名な貿易商隅田勝太郎氏に、器量望みで、金に飽かして貰はれたものであつた。生來の美貌は、横濱社交界に於ても評判の種であり、殊に、彼女は女學校も優等で卒業した位で、英語、ピアノ、ダンス、繪畫、書、等一つとして堪能ならざるはなく、派手作りの虚榮と、生活の餘裕と、美貌とを以て常に社交會の花形として出動して遊び暮してゐたものであつた。夫隅田氏の死後は、各方面の集會場に足を運ぶことといよいよ繁く、東京、横濱のダンスに場に出席して内外人を嫌はず親しみ、交際場裡のクイーンとしてもて囃されて居つたのである。此のたね子夫人に交際を求めんが爲に、そうしたダンス場に這入り込む紳士も決して少數ではなかつたと云はれる位ひであつた。園田氏は、帝國ホテルあたりで、横濱の某紳士の紹介で始めて彼女を知つたことまでが詳細に解つて來た。

更に鵠沼の別莊を調査して見ると、悉く檜造りの風雅な建物であり、離座敷、茶室から、目下は土藏まで建築中である。地所は約七百坪を有し、此の建築物と合せて、何う内輪に積つても五萬圓見當のものである。夫人の言葉を時折出入の商人が探聞する處に依れば、在來の遺産と、横濱の商館を賣却した金を合せて拾二三萬の財産を所有するが如きことと云ひ振らして居ると聞いて、直ちに横濱方面の故隅田氏所有の財産を調査すると、隅田氏生存中既に七十四銀行に五萬圓程の負債があつたこと、横濱の地所家屋を賣拂つた處で、何程も餘裕の殘らぬことを突留めたのであつた。

更に此の家の家族を調べると、此の女主人の他に老婆一名下女三名、下男一名と云ふ人數で、生活は實に贅澤をつくしたものであることも知れた。それで、どの方面から觀ても、此の鵠沼の建物は大阪の園田氏の手に依つて出來たものである。また、之れだけの

建築物を、まんまと占た裏には、必ず此の怪美人につき纒ふ男の影が他になくてはならない、と斯う見込をつけて、私は極力その方面の探索に調査の步を進めて行つた。此の前後に、隅田たね子が、株式仲買の外交員高橋政雄なる者の手を經て投機事業に手を染め初め、更に、岡田氏をも勸誘して次第に深く株の仲買を初め、然も、相當に利益を占めつゝあることが耳に這入つた。もう事情が此處まで判明して來れば、あとは鵠沼の別莊の內部に人を入れて、たね子の秘密を探るより他に手段は得られない。於是、部下の一事務員の娘を女中に仕立てゝ其の家に住込ませて、たね子の許にかゝつて來る電話、郵便、其他彼女と他の男性との一切の交渉を探らせることにした。斯うなると私供も非常な興味を唆られ、あらゆる方面の手蔓を求めて、一ケ月半の後に遂に此の事務員の娘はつ子を其の別莊に住込ませることが出來たのであつた。此の娘には、充分に腕を振つて効果を收めた揚句には、結婚費の大半を負擔する、と云ふ懸賞條件まで附したのである。此の懸賞が娘の心理に作用したか否か、其邊は私の審かにする所ではないが、兎に角、鵠沼の家屋は明かに岡田氏の手に依つた出來たものであり、尙株式賣買に對しても、岡田氏は十萬圓餘の證據金を出して居ることも間もなく知れ、其他、同女からの報道を綜合すれば、高橋政雄なる者は、株式外交の外に一つの大事業を企てゝ居り、其の資本金を岡田氏の手から仰がんとしてゐる事まで解つて來たのであつた。其の大事業と云ふのは斯うである。

茅ケ崎の海岸の松林、畑、山林を約三萬坪程開拓して住宅地となし、大文化村を建設せんとするのであつた。同地は、南は海に臨み、西は富岳を望み、東西の方は一面松林で理想的な別莊式の文化村を建設するには申分のない土地であつた。高橋はたね子を介して、此の三萬坪の土地は三十五萬圓で買へる、又、是を開拓し終るまでには更に五十萬圓の資金を要する。然るに今是を三ケ年の年賦で希望者に分割して賣渡すとすれば、結局三年を出ずして百五十萬圓にすることが出來る。然も這は一つの國家事業であり、利益も確實であると云ふ事等を岡田氏に納得せしめて出資を促すことに務めてゐた。岡田氏も、事業に見込さへあれば……と云ふ意向であり、高橋及びたね子と共に現場の實地檢分にまで出掛けた程、話はかなり進行してゐたのであつた。此の報告と共に、岡田の歸阪後に於けるたね子と高橋との關係が怪しい、と云ふことから、——高橋さんが御出になると、奥様はすぐ二人で二階の自分の居間に閉籠つて了つて、ベルの鳴らない限りは女中共は其の部屋に出入を禁じられてゐること、——又、現に自分も妙な動作にある二人を明らかに見た——と云ふ報告まで手に這入つた。もう是れだけで二人の間に醜關係のあることは明瞭である。殊に高橋と云ふ人物は年齡四十歲前後の好男子であり、常に粹を極めた商人風の服裝をなし、プラチナの時計までさげて居ると云ふことを聞き、一同全力を擧げて彼の人物を調査し初めることとなつた。次ぎから次ぎに手許に來る報告からおし計つて彼の人物を見るに及んでは、實に私も呆然たらざるを得なかつたのである。

彼は橫濱市本牧に居を構へ、自宅には六十餘りの老婆を一名雇ひ、小綺麗な、贅澤な暮

し向きをして居た。此の高橋方には、女中ともつかぬ、小間使ともつかぬ、所謂内證の娘と云つたやうな婦人が入替り立ち替り來ると云ふのが近所の人の話である。其の女も、或者は藝妓上りらしく、或者は娼妓上りらしく、又全然素人とも見える婦人もある、と云ふ風に、彼はそれからそれへと女を代へて、金品を卷上げ、金の切れ目が緣の切れ式に追出して了ふ、一種の不思議な腕を持つた大色魔であつたのである。更に調査を進めるにつれて、彼は以前は新派の俳優であり、窃盗、詐欺等の犯罪で前後五回も入獄して居る等、恐らくは彼のたね子さへ未だ知らぬと思はれる程怖ろしい犯罪事實が知れて來たのであつた。斯かる不逞漢である上は、園田氏は勿論、たね子も共に、今や彼の毒牙にかゝりつゝあつた事は誰しも想像に難くはない。此事が知れた間もなく、女中のはつ子から、次の樣な長文電報が屆いた。

「オクサンケフゴゴロクジカマクラエキデマチアワスヒトアリ、アイナニチウイアレ」

部下二三名は時を移さず鎌倉驛に張込んだ。

果してたね子は贅を盡した服裝で鎌倉驛に下車して、二等待合室に這入つた。間もなく到着した下り列車からは、見誤るまでもない彼の不逞漢高橋政雄が下車したのであつた。二人は人目も憚らず自動車を驅つて扇谷方面に姿を消したのである。わが部下は之を追跡して、彼等が亞山香風園に自動車を止めたのを突止めるや、同じく遊山客となり澄まして、部屋一つを隔てゝ投宿して行動を注視することゝなつた。

彼等は、入浴を濟ませ、夕食の膳に酒を取寄せて、談じ、且つ笑ひ興じてゐた。「此處ならば安全」と云ふ意味の言葉さへ彼等の口から洩れた。やがて三味線が運ばれ、靜かな爪彈きにつれて男の唄も聞こえて來た。

此處まで探索すればもう我々の任務は果せたのである。此處が我々の活動する最後の舞臺である。斯う落着いたら一擧一動悉く注視しなければならない。本部からの急電に依つて、私自らもその最後の檜舞臺に馳せ參じた。

滿月に近い月が中天に冴えてゐた。庭の小松の影が濃く砂地に印されて居るのを幸ひにして、部下の者一二名は、庭に出て松の影を步きわたりつゝ外部から彼等の室内を注意した。爪彈が止み、唄が止み、女中が食膳を取片附けに來た時分にはもう、月の影も暗くなつてゐた。

翌朝十時過ぎ二人は起きた。そして、今二人並んで緣先きで洗面してゐる刹那、私の懷中してゐた寫眞機‥‥機は正面に向けて据ゑて置き乍ら側面を寫すことの出來るもの‥‥で、其の實況をレンズに收めてしまつたのである。

彼等の醜關係の現狀、永遠に蔽ひ隱すことの出來ない現狀は此處に捉へられた。この一枚の寫眞を以つてすれば、如何に迷路を步んでゐる園田氏と雖も眼を覺まさずには居られまい。

斯う思つた私は、直ちに其日に下阪して、園田夫人に逢つて、今日までの探索徑路を報告した。園田夫人の驚きと、最後の悅びは非常なものであつた。

園田氏の常々信頼してゐる某老人を通して淳々と氏を說伏したのはそれから間もなく

であつた。最初は語を濁し、信を措かなかつた圓川氏も、その寫眞の前には最早一言もなかつた。斯くして漸く、圓川氏も全く迷夢が醒めて、自ら進んでたね子との手を切つたのであつた。

後に至つて高橋政雄が、たね子と共謀して、某辯護士を中に入れて、種々の難題を持込んで來たが、二人並んで洗面してる一葉の寫眞の前には、如何に辯論に巧みな辯護士でさへ、言論の餘地は見出し難かつたであらう。

それ以來圓田夫妻は結婚當時にも增して圓滿な家庭を結ぶことが出來た。そして、この事件における最大の功勞者たるおはついさんが懸賞を得たか何うかは、多數讀者の御推定に讓つておく

豫告

五月中旬女性改造主催で文藝講演會を開催致します。

一、講演者

廚川白村氏
有島武郎氏
久米正雄氏
（其の他は交涉中）

一、期日と場所とは追而發表致します。

女性改造編輯部

婦人生理學講座

性別の決定(上)

醫學博士　永井潜

以上、性別に關して其の區分を明かにし、根本的性別卽ち第一項性別が、附帶的性徵を喚び起す上に大切なる意義を有することを叙べたのであるが、然らば斯の根本の性別は如何にして起るのであるか、以下之に關して話して見たい。

今を去る百三十年も前に、ブルーメンバッハと云ふ獨逸の有名な學者が、其の著書の中に書いて居る所によると、佛蘭西のドレーランクールが、性別の決定に關する學說を公にした時、早く已に二六二通の假說が出て居て、自分のは其の二六三番目のものであると云つたさうであるが、是れに由つて觀るも、性別決定の問題が、古來、如何に多くの興味を以て迎へられ、而も其の眞相に至つては、全然雲を摑む樣なものであつたかが、想像するに餘りある次第である。

最も古くから信ぜられて居た說は、母體感應說とも名づくべき考で、之によると、一般に姙婦が外界からの刺戟によつて感動を受けると、夫れが母體を媒介して胎兒に影響すると云ふのである。例へば姙婦が火事を見ると、赤い痣のある子が生れるとか、朝夕美はしい畫像に向つて居ると美麗な顏色の產兒を擧ぐるとか、恐ろしいこと、悲しいこと嬉しいこと、凡て夫れが胎兒に感應を起すものである。支那や希臘の昔から今日に至る迄、胎敎を重んずることも畢竟斯る考が其の土臺をなして居るのである。そこで性別の決定に關しても姙婦の精神が若し男性に集注されると男兒を生み女性に傾倒すると女兒を產むと唱へるのである。併し斯る學說が、學問上正當の根據を缺いで居ることは、云ふ迄もないことで、假りに外界の刺戟に基く感動が、母體に一定の變化を起したとした所で、之れが其の儘胎兒に現はれることは、到底信ずべからざる臆說である。輓近の生物學は環境の爲に母體に起つた變化が遺傳して其の子に再現するとは否認されて居る。若し又姙婦の觀念が產兒の性に決定を與へるとが事實であるならば、大多數の場合に於て、母は己れの冀望する性の兒を設

くることが出來る筈であるが、併し事實は決して左樣でない。

次に又、傳統的に大なる權威を有つて居る說は、一對の卵巢が、左右に從つて性を異にせる卵を造ると云ふ考である。近時に至つても英國の醫家ドウソンの如きは、此の說を固守して、男性を造る卵は右の卵巢に於て生じ、女性になる卵は左の卵巢から出すると說いて居る。氏の言ふ所では、右の卵巢は左のよりも大きい。夫れ故に、男兒は女兒よりも稍數多く生れるのである。併し斯樣な說が一種の空想に過ぎない立派な證據としては、手術によつて一方の卵巢を取り去つた後にも矢張男女兩性の子が生れる事實を擧げることが出來る。

性別決定の問題が、學問上の基礎を得る樣になつたのは、兩性の生れる數の統計的調査であつた。而して之の調査の結果として得られたる大切なる獲物は大數の上から統計すれば雌雄男女の生產數は略相等しいと云ふ事實であつた。動物でも左樣であるが、之を人間に就て見るも、國によつて多少の相違こそあれ、先づ女兒の生產一〇〇に對して、男兒の生產は一〇三―一〇七の間に位し、吾邦に於ても、近時は女兒の一〇〇に對して男兒は一〇四人强となつて居る。例へば大正八年の生產數は、內地では男九十一萬四百人、女八十六萬八千二百八十五人で、女兒の一〇〇に對し男兒は一〇四．九人である。勿論個々の夫婦間に就て見れば、男女の生れる數は必ずしも平均はして居ないで、往々一方にのみ偏する場合があるのは言ふを待たない。

そこで此の統計的調査に於て兩親の年齡と男女兩性の生まれる比例とを比較して兩親の年齡が性別の決定に密接の關係があると說いたのは、ホーフアッケル及びサドレルであつた。此等は夫が妻よりも年長であると一般に男兒が餘計生まれ之に反すると女兒が比較的多く產まれる傾向があると說いた。此れ卽ちホーフアッケル、サドレル氏法則である。例へば四千の出產に就て調べた成績によると、夫が妻よりも若い場合には、男女の生產數は略相匹敵するが、次に夫婦の年齡が同じ場合には女兒の一〇〇に對して男兒は一〇二、七であり、更に又夫が妻よりも年長であると、女兒一〇〇に就きて男兒一〇五、七であると云ふて居る。併し此の考察も決して信用出來ない。スチーダや、ベルナー等の統計は、正反對の結果を擧して居る。

次にスタークウエザー及び其の追從者たるパン、リュイの說である。抑々兩親の中元氣旺盛なる者が、自己の性を子供に印銘すと云ふ考は、ヒツポクラテース以來夙に唱へられた所であつたが、之れが延いて現代に於ける勢力旺盛說を產んで居る。スタークウエザーによると、子供の性別は、元氣旺盛なる方の親によつて決定せらるるもので常に其の優勢なる親と反對の性を子供に喚び起すものである。而かも其の體の性質は、優勢なる親に肖よる。例へば母が父よりも元氣旺

盛である時には、其の子は男性で、而かも其の心身の性狀は母に似て居るものが出來る。

パン・リュイの說に從へば、生殖細胞と、夫れを宿せる個體との間には、反對の性質を具へて居る。卽ち精蟲は一般に女性を造るべき性質があり、卵は男性を喚び起すべき性質を有つて居るものである。そこで今若し比較的優勢である卵が比較的薄弱なる精蟲によつて受胎されると其の子供は女性となり而かも其の心身は父に似たものになる。隨つて又男性の子が出來るのは、優勢な卵が薄弱なる精蟲と合一する場合である。

斯の說に對しても多くの反駁が加へられる。第一には元氣が優つて居るとか劣つて居るとか云つても、心身の多くの性狀の中、何れが其の標的となるか頗る漠然として居る。或る性質は父が母に優れて居つても、他の性質は却つて母が父に勝つて居る樣なこともあるであらう。

次に又た動物に在りては、優秀なる雄が、他の雄に打ち勝つて、多數の雌の所有者となる樣な場合、其の子供には、專ら雌が産れるかと云ふに、決してさうでない。卽ち必ずしも優秀なる者と反對の性が、子供に實現さるゝものとは限らない。

勢力旺盛說に對する第三の非難は、双生兒に見らるゝ事實を說明することが出來ぬ點にある。双生兒には二通があつて其の一は、一個の卵が一個の精蟲によつて受胎されたものが、二分して、其の各から一個體が發育する場合である。斯る時には、双生兒は常に同一の性を示すものである。之に反して若し二個の卵が夫々二十四時間乃至一ヶ月位の範圍內で、時を異にして成熟し二個の精蟲によつて受精せられて、二個の個體に發育した場合には、其の双生兒の性は、必ずしも一致せずして一人は男性であり他の一人は女性である樣な場合がある。併し若し勢力旺盛說が眞理であるならば、斯る場合を說明せんが爲には、僅に二十四時間乃至一ヶ月間に、父と母とが、勢力旺盛の點に於て其の位置を顚倒したと云ふより外に仕方がない而も斯るとは到底考ふべからざることである。

次には所謂榮養說であつて、性別が母體の榮養の如何によつて決定せられると云ふ說が、先づ動物就中蝶や蛾の種類で行つた實驗成績から提唱せられ、人間に於ても亦これが適用せらるべきものであると信ずる學者が少なからずある。ウインナ大學の生物學教授であつたセンクの如きも、其の有力なる代表者である。氏の云ふ所によると、婦人が、受胎前に、蛋白質に富み含水炭素に乏しき食物を攝取し、同時に始終尿

を檢査して、尿中に少しも糖分の出ない樣になつた時始めて姙娠を許され、又姙娠中も約八週間は同樣の食餌を取る樣にすると、男兒を生むのである。

動物實驗に就ては蝌斗（蛙のオタマジャクシ）が屢々好箇の材料として用ゐられた。其の他、蝶や蛾の類でも、食物の如何によつて雌雄の生れる數に非常な影響があることが報告された。原來此の説の根據とする所は、女性の體は餘計の材料を體内に蓄積して、建設的の生理作用が破壞的の生理作用に打ち勝つて居るもので、そこで過剩の榮養物を供給すると女性の兒が生れ、之に反して榮養が不足勝であると男兒が生れると云ふのである。此の説を唱へて居る主なる學者は、ユング、キユネー、トムソン、ゲツヅ等である。

併し此の説も甚だ當にならない。先づ第一に此の説の主張が正しいとすれば、生殖細胞は全然定まつた性なき中性のものであつて、榮養の如何によつて雌雄男女何れかに變はるものと言はなければならぬ。併し夫れは輓近生物學の考慮と相反するものであつて、榮養の如何によつて、母の體に起る變化が、生殖細胞若くは胎兒に影響して、其の爲に性を決定するが如き考は、最初に批判を加へた母體感應説と大差ないもので、到底之を承認することは出來ない。斯く理論上より此の説を認容することが出來ないのみならず、事實上から見ても、亦た宛てはまつて居ない。若し常に榮養が性別を決定すべきものであるとしたならば、双生兒は常に同樣の性を示すべきであるが、事實は必しもさうでない。又動物の實驗成績に徵するも、近時キングが蝌斗につきて、愼重に、肉小麥、卵黄、混食等種々なる餌養の下に觀察した所によると食餌の如何に關せず、常に略同數の雌雄が生じて居ることから見れば、正に斯の説に反對せる成績であると言はなければならぬ。又た家畜は、同一種類の野生の動物に比して、一般に過度の榮養を受けて居る。然らば家畜は多く雌を産むかと云ふに、必しもさうでない。又た或る動物が新たに或る地方に入り込んで、長日月間を通して過剩の榮養物を以て惠まれ非常なる勢を以て繁殖を續けた場合、例へば、濠洲に兎が入り込み、亞米利加に英國の雀が繁殖した樣な場合に於て若し榮養が雌性を造ると云ふのであるならば、雌性の動物が餘計に生まれる筈であるが、事實は夫を語つて居ない。又人間に就いて、チユシングは、貴族や富豪には女兒が多く産れ、貧民には男兒が多く生れることを說いて居るが、併しパンネツトの浩汎なる統計的調査によると、反對の結論に到達して居る。

チュシングの如きは、榮養説に基いて、過度の榮養は常に女性を造ると云ふ考へから出立して、受胎せる卵の年齢が性別の決定に大關係あることを說いた。畜産家が往々唱へる如く、牝牛に發情時の初期に交尾を行はせると、多くは牝牛を生み、之に反して、其の末期に交尾さすと、牡牛を多く生むと云ふことは、全くチュシングの說の正しいことを裏書するものであつて、卵が、新しく成熟した初期には、榮養が、十分であるが、日を經るにつれて、夫れが不十分となる。そこで交尾期の初期に交尾が行はれると雌性が生れ、末期に交尾すると雄が多く出來ると云ふのである。併し此の說に對しても、前の榮養說に對する反駁を繰り返すことが出來るのであり、且つ又交尾と受胎とは必しも同時に行はるゝものでないことを考ふる時、其論據は頗る薄弱になつて來る。

要するに性別決定に關しては、斯く幾多の說を列擧することが出來るが、而かも何れも滿足なる說明を與へるものはない。然らば全然未可解のものとして此の重大なる問題を葬り去らなければならぬかと云ふに、決してさうでない。吾等は與へられたる此の大問題を解かんとする前に、先づ自然界に於ける大なる調節の現象として、雌雄男女の生產數は常に相等しいと云ふ動すべからざる統計的事實に著目する必要がある。而かも以上列擧せる諸說によつては、到底此の重要なる事實に滿足すべき說明は與へられないのであるが、獨り晩近遺傳學の立脚地より之を考察する時のみ、十分に之を釋明することが出來るのである。即ち性別決定の問題も畢竟するに遺傳の一問題たるに過ぎないのであつて、親の何れかゞ、其の性を子供に遺傳することによつて起るものと云はなければならない。以下之に就て述べようと思ふのである。



花よめさん（入選）

長野縣上高井郡川田小學校高一
大島さだき

家のお池の
ひごひさん
まつ赤なきれいな
ひごひさん
お前はお池の
花よめさん。

佳　作　三　篇

豊田登志子

○こびきさん

お山の中のこびきさん
じこ〳〵
どつこい切れたか。
まだ切れぬ。
赤い夕日が。傾いた。

岩尾光子

○蟷螂

かまきりさん
異人さん
異人のおばさん
かまきりさん
青い服着た
かまきりさん
薄いスカート
美事だね
グツドモーニング
かまきりさん。

芳村貞子

○なくしたまり

お家の二階のまど開けて
赤いお花のたんとさく
となりのお庭をみてゐたら
昨日なくしたごむまりが
お花のかげにみつかつた。
こツそりそツと行ツてみて
こは〳〵どもんをのぞいたら
小さなお家の入口に
いツもたツてるおぢさんの
黒いお顔がにいらんだ。

子女の家庭教育に對する學校側の希望

○ 成女學校　宮田　修

何にしても現今の學校教育たるものは、その制度組織の關係から子女の教育の全部を引受けられるものでない。知育に於てはやり方次第で完全の域までゆくが、徳育體育の二方面に於ては遺憾ながら十分の責任を盡し得るものでない。從つて今の學校教育は甚だ意氣地ない樣であるが、より多くの協力を家庭に待たなければならぬ。それには學校と家庭との教育の方針が全然一致しないまでも、少くとも齟齬してはならぬ、學校と家庭との間に挾まる子女をしてその歸するところを迷はしてはならぬ。仍て家庭は常に學校の教育狀態を探つて、少しでも疑念の有る場合は直に之を質す樣にしたい。但し此場合はいつも明瞭の態度で且つ眞劍であつて欲しい。匿名の手紙で匿訴訟をされたり、陰で惡口嘲笑を事とせられたりすることは、何の役にも立たずまた子女のためにもならない。

○ 高師附屬小學校主事　佐々木秀一

學校側からの家庭教育に對する希望を擧げれば、一般的にも、個別的にも澤山あります。これは家庭側から學校に對して澤山の希望を持つてゐられると同樣でありませう。

私は學校教育者－初等教育の範圍内での―として、第一に一般的希望の最も主なるものを擧げたい。

家庭教育の眞(シン)の使命と特質とを十分に理解してもらひ、又その理解の通りを出來るだけの犧牲を拂つて實現してもらひたいのです。

それは家庭教育は、子女の性格の基礎を造るところであると云ふこと、然も主として情意の陶冶を主とすべきであると云ふことです。隨つてその方法としても、出來るだけ實際的に、父母兄姉の實行、實際的影響を主として行くやうにありたいことです。假令智識や技能を授けるにしても、單に口で云つて聞かせたりして行くと云ふことでなく、出來るだけ實際實物に就いて理解させて行くと云ふやうにありたいのです。

まして情意の影響は、單に訓誡とか小言とか、又してしまつた後を叱責したりするなどでは、殆ど無效であるばかりでなく時には有害です。

この大方針を考へれば、今日の家庭教育は、實にその特質に遠かつて居るもので あり、殊に智識の詰込―それも受驗準備の詰込に汲々として居るのは、全く以て情ない次第です。

家庭教育は、飽くまで父母兄姉の實行、模範、實際的指導、暗示等に依つて遂行せらるべきものと思ひます。

學校教育もこの基礎の上に築かるべきものです。

この方針から割り出した註文は一寸簡單に擧げ盡くせません。

○ 豐島師範附屬小學校主事　井上宗助

子女の家庭教育に對する學校側の希望事項は多々ありますが、私は其の中の最も大切であると考へる一項を擧げてお答へといたします。それは教權を尊重し、教權を確立させていたゞきたいのです。世間大抵の子供は、先

生はえらいもの、尊敬すべきもの、學校はありがたい所と信頼して居ます。子供に此の尊敬心があり、信頼心があつて、はじめて教育が成立つのであります。子供のもつてゐる此の尊敬心と信頼心を破壞しないやうにすることは子女の家庭教育上最も肝要な點と存じます。若し家庭で子供の此の心を破壞したならば、既に學校の教育を破壞したものであると申しても差支ないと存じます。所が教師の教へたことや學校のやり方に對して、かれこれと非難する家庭が往々ございます。然も子供の面前で非難するのです。學校のやり方、教師の教へたことにはまちがひないとは申されませんから、非難そのものは強ち惡いとは申しませんが、子供の面前ですることは、却つて子供そのもののためにならないと思ひますから、控へていたゞきたいのです。學校や教師に對して批評すべきことがあり、注意すべきことがありましたら、學校へお出になつて學校當局者に直接お話していたゞきたいものです。子供の面前で非難することが度重なれば、子供の教師に對する尊敬心、學校に對する信頼心はだん〳〵に薄らいで行きます。薄らいで行くことは、やがて教權が破壞されて行くことです。子供の面前で學校の缺點を非難して一時得意がつた所が、それは結局子供の教育を漸次破壞しつゝあるのであります。可愛い子供の教育が大切であると思うたならば、こんなことは出來ない筈です。私は教權の確立を云々いたしますが、教育者としての修養をそつちのけにして教權萬能主義をふりまはし、子供に對して空威張をすることを主張するのではありません。相當の學識あり人格ある教師を標準とし、其の根柢の上に立つて教權の確立を主張するのであります。家庭の方々が教權を尊重し、教權を確立させるやうにして下さつたならば、兒童の教育は半ば成功したものと申しても過言ではありません。

○ [illegible]女高等女學校　沼田笠峰

教育の效果を擧げるために、家庭と學校と社會とが互ひに聯絡を保つて、その歩調を揃へなければならないのは、今さら言ふまでもないことですから、どこの學校でも家庭に對する希望を、入學式の時とか父兄會の席上とかで、具體的に申し述べもしますし、また適當な機會を見てこれを傳達することに努めて居ります。その細目は僅かな紙面に書きつくせませんが、私は特に次のやうな諸點を一般家庭に希望いたします。

先づ學業の方では、その少女が級中のどの程度にあるか、また學科に好き嫌ひがあるかどうか、といふことに注意して頂きたい。もし學科に出來不出來があるならば、よくその原因をしらべて、劣つてゐる才能を伸ばさせるやうにすると共に、優れてゐる能力をます〳〵發揮させたいと思ひます。

また家庭に於ける復習や豫習にムラのないやうに、常に同じ態度で勉強を續けさせてもらひたい。

それから心情の陶冶について、學校で訓示してゐることが、家庭で破壞される例もありますから、これは十分注意して頂きたい。

服裝のこと、辨當のこと、課外讀みものゝこと、文房用品などについても、學校の生徒として、その學校を標準にして頂きたい。家庭の富や父兄の地位を學校にまで推し及ぼして、贅澤なことをされると非常に困ります。

通學途上の出來事は、學校と家庭と雙方で注意しなければなりませんから、遲刻、早退などの際には、必ず學校へ通告して、もし不審な場合があつたら、適當に取調べてもらひたいと望みます。

○ 佛英和高等女學校

お答へする事柄は左の一項でつきて居ると思ひます

學校の主義方針をよく理解し家庭に於て常に此點に御注意あつて協力せられたいと思ひます。これに就ての御相談は學校でも喜んでお受けする處で都合よく出來れば何よりです

○　東京高等女學校開校長　和田鼎

家庭と學校との關係が極めて密接なことは言ふ迄もない自明のことで、一人の子女を眞に教育の目的に契合するやうに教育するには家庭教育が根本で學校は寧ろ其枝末であると言ふてもよい、言葉を換へて言へば學校は家庭の延長である。學校へさへ入れて置けばそれで教育が出來るものと思ふのは大きな謬りである。然もこういふ明らなことさへ何ほ事實に於て證明せられて居らぬのは遺憾の至りである、先づ學校過重の迷を覺すべきである。子女が學校に在るのは一日中僅かに五六時間で其他は家庭にあるので學校の感化は到底家庭の感化に及ぶべきでない。然も其五六時間も主として智育の方面に使用せられるので、練育の方はどうしても家庭教育の力によらねば駄目である。從つて學校から家庭への希望は一々擧げれば澤山あるが其要をいへば

一、學校の選擇に際しては單に世間の評判といふやうな外部的な不確實なものをあてにせず、其學校の教育の根本方針幷に其內容を精査して、それが家庭教育の方針と一致するものを營むべきである。

二、學校と家庭とは相互に總明な理解のもとに一つにならねばならぬ。

三、若し何か不審な點があれば陰で彼是批評せずまた匿名などで手紙など出さず直接學校へ來て話すやうにしたい。

○　日本女子大學附屬　高等女學校

一、お互に子女を家庭父母の私有物と考へたくない。敬虔で誠實なよい家庭教育の總てがこの根本から生れて來ると思ひます。

二、子女が私有物でない以上は、親や家の趣味利益を標準として教育すべきでない。たゞ子女その人の人格のためにしたいものです。

三、子女其人の人格を完成するためには、教育といふ意義性質要件限界等の十分な理解の上に立つた具案的なものでありたいのです。

四、方法を有效にするために、まづ子女の素質をよくつきとめてかゝりたい。單に常識だけでなく、心理學醫學の知識を借りられたいと思ひます。

五、同樣に社會と時代、殊に子女の住むべき將來の社會と時代とを顧慮せられたいのです。

六、同樣に又現代の學校といふものゝ性質能力、殊に子女の就學しつゝある學校の個性特色を知つて、互助的方法をとられることを望みます。

七、一齋教授、團體生活を主法とする現制の學校教育を有效に享受するためには、進取的積極的な自治自學の氣風を作るとが大切です

八、規律的な協同生活の氣分と習慣とを作りたいものです。學校生活を滑かにするのみでなく、節約能率公正責任の基礎を養ひます。

九、目前の仕事に專心して、他事に氣を散らさない注意の鍛錬と同時に、他人の生活を重んずる氣風の養成も必要です。

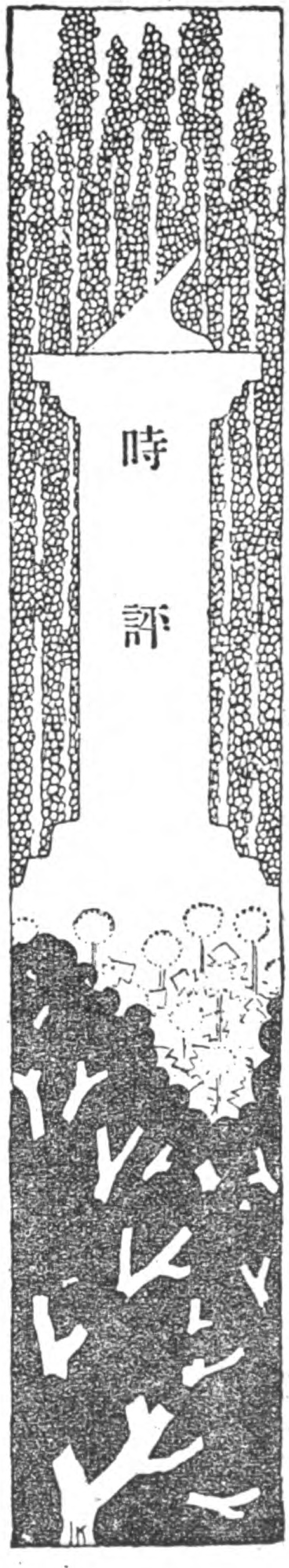
一〇、なるべく所有慾を刺戟せずに、創造慾を增長させる注意は、現在の爲めにも、將來のためにも極めて必要です。

一一、結果よりも過程、成績よりも態度、巧慧よりも努力、外形よりも內面に價値を發見させる用意が望ましいのです。

一二、教育途上、教師は親の延長、學校は家庭の擴大であるから、原理と權威とに於て、父母家庭が教師學校と共通の立場を取つて子女に對することは、子女の人格統一上最も必要なことゝ考へます。

以上家庭教育に對して學校から希望する事項としては、多少間接的なものもありますけれども、せめてこれ位の理解を持つて貰へれば、學校も仕合せであるから、要綱だけを擧げました。又この位の事はみんなに承知してゐると言はれるでせうが、必ずしもさうでないと思はれる事實に甚だ屢々出會ひますので、發音のやうでも書付けます。更に又私共の反省からすると、家庭の教育にまで希望を持ち出す餘裕はないやうな氣もしますが、暫く主觀を離れて御下問に應じます。

（右　渡邊英一記）



貞操蹂躪と貞操破棄

有島武郎

結婚生活が襲續的に、妻は無條件に夫に服從すべきものとせられ、又女自身もさう極めて居たのであるが、此の不滿に對する女性の無意識の自覺は、常に存在して居たのである。

四十歳から五十歳位までの婦人達の話を聞くと、彼女達は、屹度一度はヒステリーにかゝつたと云ふてゐる。その原因は大部分は夫に對する不滿、若くは夫に關係の人々（例へば、姑、小姑等）の不法な壓迫に基因してゐる。しかも彼女達は、恰もヒビの這入つた器を抱える樣な氣持ちであきらめと忍從とで、辛ふじて彼女達の生活を維持して來たのである。

最近に到つて婦人の自覺はやゝ鮮明となつて來た。彼女達は、その夫婦生活が表面的のものであつて、內面的には、夫婦生活の基調から甚だしく隔つて居ることに自覺しはじめた。新聞紙上に大騷ぎされて居る貞操蹂躪よりも、もつと悲慘な暴行が彼女達の內面生活に於て、殆んど平氣で行はれて居ることを考へる時に、彼女達は此の結婚生活に對して、深刻な不滿を、痛切に感ずるのである。然るに現時の社會樣式に於ては、婦人達に生活能力を與へて居ない。夫の手より離れることは、彼女達の餓死を意味するのである。彼女達は、彼等の力量と本能との餘りに甚だしい懸隔の爲めに、極めて曖昧不徹底の地位に居るのである。即ち生活の保證は夫に負はせ乍ら、本能の滿足は他に之れを求むるの餘儀ない行動に出るのである。此は實に已はしき、卑しむべき男女關係の破

綻ではあるが、事の成り行きとしては、止むを得ない現象である。此の悪現象を矯正する唯一の方法は、婦人が、その自覺と共に、生活能力の確立に努力することにある。婦人がこれまで進んで來れば、男子にも或る反省と覺叱とが必然的に起つて來て、茲にはじめて兩性關係の正しい調節が、今日よりも遙かに合理的になつて來るのである。さうでなければ、貞操蹂躙とか、貞操破棄の忌はしい現象は社會に絶えることはないのである。

最近婦人の讀書傾向

最近、婦人に讀書の傾向が際立つて旺盛になつたことは喜ぶべき現象である。米國の如きは「趣味を維持するのは婦人である」と言はれて居る位で、男子はたゞ、手から口にパンを運ぶ、これだけに精力の多分を費消し盡してゐて、趣味の維持を擧げて悉く婦人の手に委ねてゐる。劇の如きも、男子は常に婦人によつて、劇の筋書、觀照に就いての注意の如きを教へられてゐる。

婦人の智識欲は、婦人の欲求のうちの一つの大なる欲求であつて、私達は最近著しく目立つて來た婦人の讀書の傾向を喜び、且つその伸長を希ふものであるが、現今の日本婦人が果して如何なる種類の讀書傾向にあるかを考察する時、遺憾にたへない事實を發見する。

譬へば、現今の婦人に最も多く愛讀されてゐる各種婦人雜誌に就いて見るに、その内容極めて輕薄にして、たゞ暇つぶしの爲めにのみ讀むべき記事が滿載され、貧弱、空疎見るに耐えない種類の記事が誌面の大部分を塞いで居る。此の事實から考へれば、私達は現今日本婦人の讀書に對する態度に可成りの不滿を感ずる。

婦人のみに限らないが、現代のヨーロッパの思想は、必ず一度は、自然主義といふ大きな潮流の洗禮を受けて來て居るので、現代世界に於ける新文化創造にあたつては、これが偉大なる基底となつて居る。實に現代の科學的設計を徹底せしめたものは、自然主義の思想であつたのである。

自然主義の主潮は現に日本にも存在し、嘗ても存在してゐたのであるが、日本がこの主潮を乘り越すことの、他のヨーロッパ諸國に比して餘りに急速であつたが爲めに、自然

の思潮が却つて、もとのロウマン主義や、センチメンタリズムに逆行した。此の傾向は婦人に於て特に著しく、自然主義を濾過した現代ヨーロッパの思想を正しき理解を缺除して居るのが殊更に目立つて見える。歐洲の唯物主義の思想にはその根柢に於て常に精神的思想の潜在することを考察もせずに、只だその裏面の流れのみを淺薄に受入れて、男子は之れを物質主義に解し、婦人は之れを享樂主義と獨り極めにしてゐる。故に現時の讀書傾向が、この誤まれたる時流に迎合して、極めて曖昧となり、自己を内省し、自からを築くことに全然空疎の傾向を示し、ただ周圍の人々の見聞や、人の噂のみによつて、生の懈怠を慫むる傾向になつて居る。故に現代人殊に婦人は、現代の思潮をもつと靜かに正しく凝視めて、正しい理解の下に實人生の文化生活を確立してほしい。又婦人達の立脚地を安固に築きあげる主なる要素としても、より正確なる智識を有つ必要があると思ふ。

暴力團體の暴力行使に就いて

現代の生活内部に、相反する思想が對する時、民衆意志はこれ等の思想の綜合調和をはかることに努力する、そしてその綜合調和が成り立ち得ない時に、一つの思想は他の思想を破壞排滅する爲めに、あらゆる努力を費す。玆に、暴力團體の發生があり、その横行がある。

現日本の生活内容を分野する相反する幾多の思想は、これを綜合調和することは、本質的に不可能であつて、其處に幾多の暴力團體が發生し、相鬪爭することは、蓋し必然の現象であらう。

然るに日本現下の暴力團體が、その目的に於て、その構成要素に於て、極めて不鮮明且つ曖昧であることは、極めて遺憾である。抑々かくの如き暴力團體の非行を刺戟したものは、或る時代の政府當局者である。政府が思想運動に全然無理解にして、之れを危險視するの餘り暴力的力により防止せんとする思想力への誤算に基因して居る。卽ち政府は、彼等の所謂危險思想を鎭壓するに、團體力を必要とするの急なるの餘り、いかがはしき要素を取りあげて、暗に暴力を是認して、社會不安を鎭めんとしたのである。此の暴力團體は、政府の政策的見地より成立するが故に、團體それ自身の意志は極めて不鮮明であり、その熱情は極めて不純である。已に團體に

内部よりの目的なく、純正なる熱情なき結果は、社會安定の效果を收め得ず、却つて社會の不安を增大する悪結果を示して居る。此の悪結果に對する責任は確かに當時の政府當局者が負ふべきである。

已に一方に時代の社會相を認見して起つた之等の暴力團體があり、それに對して他の思想團體が防備の必要あるは、當然のことで、此の狀勢が、思想運動を驅つて、次第に社會の表面よりかくれて、密謀的形をとるに到らしめ、秘密的結社の傾向を大ならしむるに到つた。

此の事實は、日本の思想運動の爲めに悲しむ可きことであるが、此の狀態をもとにかへすことは、當分不可能のことである。

暴力對暴力の現象は、概念的には、勿論悪いことであるに違ひないが、當時の社會の實狀より考察する時は、或は止むを得ないことであらう。然し、社會は暴力による暴力の爲めにする人々に支配されてはならない筈であるが、暴力の行使が已に止むを得ないことだとすれば、それは正しい内部の目的に立脚した、純正の熱情を有する團體によつて行使されることが、現在の悪しき狀態を廓清する方法である。

短歌募集

六月號には短歌を募集しますから左の規約に從つて澤山御投稿下さい。

一、短歌十二首以内
一、なるべく連作形のもの、
一、〆切四月廿五日
一、入選一篇に薄謝金拾圓進呈、
一、宛名は女性改造編輯部

賀川豐彦著

空中征服

定價金貳圓貳拾錢　送料十七錢

四六版上製

第二十版

世界ユトピア文學の新彩を見よ

世界のユトピア文學に一つを加へたと稱せらるる本書、大正十一年度の一ばん面白い小說であると谷本博士が叫んだ本書「死線」以上に文學的價値を認められた本書、諧謔文學の第一線を承つた本書、諧謔は改造運動には必要であり、そして諧謔は未だ中間の樂しいチイタイムに値する誰か諧謔に於て人生の樂しい泉を發見せざる、本書は實に我々の缺陷の一つを補足し、そして我々にユトピア的興趣をそゝらしむる近代稀なる快著だ

本書に對する谷本博士の賞讚

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

創作



華族の子と百姓の子（家庭劇一幕物）

中村吉藏

登場人物

いと子　（柊木家息女八九才）
六太郎　（佐助一子、十才）
柊木伯爵夫人　（三十二三才）
百姓佐助　（三十五六才）
同人妻おあさ　（乳母、三十二三才）
甲谷一　（柊木家々従）
馭丁　傳吉

場所　東京近在

時　現代

舞臺上手寄りに一軒の百姓家、破れ椽の附いた座敷の正面は明放してある。佛壇と壁と、臺所口と隣り合つたのが見え、横手には神棚を吊り、上り口には黒煤けた障子が立て附けてある、緣無し疊に爐を切つて黒煙りの藥鑵がかゝり、椽先の串柿にさしかゝる秋の日が暖かく庭一面に滿ち、そこらには竹藪、雜木林、枯すゝきなどが背景となつて、チヨロ〳〵落ちる筧の清水の冷い音がひゞく、下手へ寄つては村の途が通じ、そこを小溝が流れて、うね〳〵と田圃の畦つゞきに次第に廣い田舍の景色が展開して、秩父の山々がかすんで見えてゐる。

おあさは仕事着で、横手の畑を打つてゐる、鵯の鳴き聲などが聞えて來る、そこへ、いと子が海老茶色の洋服を着て、帽子の縁から桃色のリボンの見ゆる可愛い姿で、ゴム靴つ足元活潑に歩み寄り

いと子。乳母ア、……乳母ア……私とう〳〵來てよ。

おあさ、（吃驚したやうに、鍬の手を止めて）。まア……まア……汝さま、眞實に柊木のお姫さまかね、野狐ぢやアなかんべえね？。

いと子。（ニコ〳〵笑つて）私よ……乳母ア。

おあさ。まア、おッ魂げた……何方とござらつしやつただね？。

いと子。私一人で來たのよ。

おあさ。エ、お一人で……あのお姫様が、お一人でこんな遠い所へ……嘘だんべえ、そんな事があるもんだかね？、

いと子。嘘ぢやないわ、乳母や、眞實に私、一人ぽつちなのよ。

おあさ。まア、眞實に……こんな遠い所へお姫様一人でござらつしやるなんて、何うした事だらう？お邸から此處までは二里もありますべえに。

いと子。私、乳母の家が好きなんだもの　始終來たくて〳〵仕様が無いのよ、學校から歸り途に來やうと思ふても保姆が叱るの、……でも今日は土曜日で午後からつひ來たくなつたので、默つて、一人で歩いて來てよ、足がくたびれちやつた、上つて休むよ……乳母も來でよう（と袖を引く）

おあさ。ハイ、ハイ……泥着物さわるだと、お着物が汚れますだよ……でもまアよくお一人で來られましたゞね、麥時くべえと思つたゞが、又明日の事にして、お姫様のお伽しますべえ、さア、まア、あつちへお上りなせへましよ（仕事を止めいと子を家の方へ誘ひ）ちよつくら手を洗ふて來ますだからね。（と裏へ入る）

いと子。ア、くたびれた……足が痛くなつちやつた。（靴をぬぎにかゝる）

おあさ。（手足を洗うて出て來り）眞實によくまア一人で來られましたゞね、……でもお邸の方ぢやア大騷ぎなさつてるかも知れねえな……まア　まア一寸御待ちなせへ、そこへ坐つちや汚うございますだよ。（周章たゞしく席を持つて來て、そこへ敷く）

いと子。（坐に上つて、足を投げ出し）ア、足が痛い。

おあさ。乳母がさすつて上げますべえ……矢ツ張、眞實にお姫樣が來てくれさつしやつたゞね、乳母の家がそんなにお好きでごぜへますか？　去年の村祭の時遊びにござらつしやつてから、丸一年にもなりますべえが、見違へる程大きくおなりなせへましたゞね、よく途を忘れねえで來られましたゞね？……でもお邸の方では誰も御存じねへのでごぜへますか？

いと子。（笑顔で）誰も知らないのよ。

おあさ。お姫樣、困りますだよ、……來てくれさつしやつたのは嬉しいけんど、お邸ぢやアえら騷ぎなさつてる事だんべえ……。

いと子。だつて家に居たつてつまらなくつてよ。私、乳母の家が一等好きなの、それに來る途の稻の匂ひがいゝ事よ、蝗がどつさり飛んでゐてよ、六さんと一緒に捕つて遊びたいの、六さんは何處かへ行つて？

おあさ。（心配顏で）お邸はえら騷ぎだんべえ。

いと子。乳母、心配しなくつても善い事よ、大す夫よ、私、家にゐて妾の子と一緒に遊ぶのが大忌ひなの、遊ばないでゐると、大勢で、いぢめに來て仕樣がないのよ、私を憎むのよ、

おあさ。まア、お姫樣が大人のやうな事云はつしやるだ。

いと子。眞實だもの、私、もう乳母の家の子になるの、いゝわね、乳母、いい事？。

おあさ。ホ、、、何を云はつしやるだか？華族樣のお姫樣が、土ン百姓の子になるだつて、戲談にも勿體ねえ。

いと子。だつて六さんだつて百姓の子ぢやないの？……六さんは今日は何處へ行つて？

おあさ。六は土ン百姓の腹から出た餓鬼でごぜへますもの、お姫樣と一つ口にや云はれましねえだ……あの子は今そこら

で騒いでゐましただが何處へ行つたゞか、今に歸つて來ますべえ……まア姫樣、ゆつくり休まつしやるが善えだ、草臥れなさつたゞんべえね（云ひつゝ起上つて）。何か甘え物上げますべえよ、お腹が減つたでねえかね？

いと子。否、…そんなでもないのよ、喉が乾くの、お茶をおくれよ。

おあさ。オ、打忘れとりましたゞ、もう溜からうが（行かけて立戻り）ちやが、お姫樣、臭え茶で飲めねえ事アなかんべえか？

いと子。私、乳母の處のお茶は好よ、去年お祭りの時も、ガブ／＼呑んで、乳母に叱られちやつたぢやないの？

おあさ。（笑つて）オ、然うでごぜへましただね、ちやア一ぱい酌んで上げますべえ。

（おあさ、茶を酌む、その中、いと子は、座敷をくる／＼見廻してゐる）

おあさ。さア、お姫樣、何卒お上りなせへましよ、善いお茶菓子上げますべえ、今朝、新田の太郎作の處から貰つたはた餅が取つてありますだ、黒砂糖がドツサリ附けてあるで、頬邊が落ちる程甘うごぜへますよ、乳母は朝飯食べてからそのぼた餅を七つぺロリと平らげましただ、お姫樣には珍らしい御馳走だんべえね。（と佛壇をのぞいて見て）アレ、まア……佛樣にお供へしといたぼた餅が一つも無えで、餡が少と許盆の緣に殘つてるだ、鼠が引いて行つたゞかな？……イヤ、頭の黒い六の鼠が引いて行つたのかも知んねえぞ……。

いと子。頭の黒い鼠つて何んなの？。

おあさ。ホヽヽ、乳母の家で一番惡戯する大きな、大きな大鼠でごぜへますだよ。

いと子。そんな大鼠がゐるの？私、見たい事、でも怖くはないの？。

おあさ。ホヽヽ、その大鼠がお姫樣のお遊び相手するのでごぜへますだ、今に歸つて參りますべえ……（思出したやうに）オ、神樣棚のものを眞實の鼠が引きやしめえな。（登つて見て、手に取り上げ、押戴き）。ある、ある、……眞實に私、まだ御禮云ふのを打忘れとりましただ、お姫樣有難うごぜへました、毎年のやうに、斯うしてドツサリお鏡頂戴しまして。

（跪まつて丁寧に叩頭する）

いと子。ソレ、何んなの？
おあさ。爲替の券でごぜへますだ、お姫様のお幼い時乳母がお預りしたといふのでお邸の奥方様から斯うして毎年贈つて下さいますだ。（取出して見せる）
いと子。紙片ぢやアないか、お見せよ（と取上げて）參……拾……圓……字許りなのね、私、ドツサリ奇麗な繪ハガキを持つてゝよ、千代紙もあるの、乳母の持つて來て上げやうか？
おあさ。有難うごぜへます、だがお姫様、大人にはこんな字が書いてあるのが要るんでごぜへますよホヽヽ」
いと子。ちやア私、書いて上げるわ、その繪ハガキに參……拾……圓……と、……五十圓、……百圓……と書いて送つて上げるわ、三拾圓より百圓の方が數が多いのよ、私もう六ツかしい字が書けるの。
おあさ。ホヽヽ、お姫様はやつぱり可愛い事云はつしやるだ、佛様だ。（云ひ〳〵件の封を神棚に直す）
いと子。（茶を呑みつゝ）乳母、そこの柿をおくれよ。
おあさ。柿だかね、あんなもの、お姫様のお口にや合ひましねえ。（笑顔で見てゐる）
いと子。合はん事はなくつてよ、私、一等好きよ。
おあさ。然うだかね、お小い時はこれがお好だつたけが、お邸へ歸らつしやつてから甘い物許食がるだで、何うかと思ふだがね。
いと子。大好きよ、キヤラメルや餅菓子なんかもう飽いちやつたの、大嫌ひよ。
おあさ。（ニコ〳〵して）それだとお易い事だ。
（干柿を取つてやる、いと子はそこへ坐まつて旨さうに食べ出す）
おあさ。お旨いだかね……ア、姫様、お着物が汚れますべえ、席の上へお坐んなせへよ……まア、まア、お口邊へ附きますだ（手拭を取つて來て）。それでお拭きなせへ、姫様……お着物が汚れますだ……
いと子。（無邪氣に笑つて）汚れたつて構やアしないわ。

おあさ。アレ、まア、あんな事を……構はねえ事がありますもんだかそんな立派なお着物を汚しちやなりましねえ。
いと子。これ着物ぢやアないわ……洋服よ、乳母。
おあさ。洋服だつても、同じ事でごぜへますだ、去年の祭にもそれ着てござらつしやつたゞね。
（いと子は頷きつゝ、干柿を食つてゐる）
子供の聲。もし、もし、龜よ龜さんよ……ストライキ……東雲の……禿げ頭、電氣は暗いね、てな事を仰いましたね。
（歌ひつゝ六太郎歸り來る、顏は眞黑に墨を塗られてゐる）
いと子。（起上つて）アラ、六さんが……。
おあさ。頭の黑い鼠が歸りましただかね。
いと子。鼠だつて!? アラ、六さん……アラ、まア可笑い、……乳母六さんの顏は眞黑なのよ墨を一ぱい、こんなに塗られててよ。
おあさ。左樣だかね、又惡戯して來ただんべえ（のぞいて見て）オラ、まア、何うしただ、コリヤ、顏の黑い鼠だんべえ。
いと子。六さん、何うして？……何うしてそんなに墨を塗られちやつたの……まア可笑いわねえ。
六太郎。姫樣、何うして來ただね。（走り寄る）
いと子。まア、可笑しいわねえ、何うしたの……誰にそんな事されて？
六太郎。姫樣……誰と來たのだかね？
いと子。（腹が捩れさうに）まア可笑い、乳母、あれを御覽よ。
おあさ。これが家の惡戯な大鼠でごぜへますだよ、あんまり家で、惡戯許りするで、他で惡戯されて來たでごぜへますだ、まア、汝、何うしただ？
六太郎。己、今、皆と學校事やつて、校長先生になつたんだよ。
おあさ。校長先生が顏に墨塗られて來るてえ事があるもんだか？

六太郎。ウンニヤ、己、學校事の時や校長先生で威張つてやつたけが、後でいろは骨牌を取つて負けて許居たんで、惡塗りこくられて來ただ、……ア、顔が引張るだ。

いと子。可笑いわ……私、聲聞いて六さんだと分つてよ。

六太郎。己、チョツと見たら姫樣だと分つてよ。姫樣、誰と來たんだかね。

いと子。ホ、、、六さん、分つてよなんていふのは女のいふ事よ、私は一人で來てよ。

おあさ。六……早く顔を洗ふて、姫樣と遊んで上げるが善えだ……待ちなよ湯でないと奇麗に取れつこはねえだ。(ブリヤ盥へ湯を酌んで、椽先へ持ち出す)

六太郎。(ぶら〱やつて、一寸赤ん眼して鼻の頭を指でこき上げ、妙に滑稽けた面を作つて)。姫樣、これひよつとこ面だア。

いと子。ホ、、、、可笑しいわねえ。

おあさ。(笑ひ〱)ホ、、、馬鹿な眞似するでねえだ。

(六太郎、又ぶる〱やつて、此度は眉を八の字に引下げて、舌先で鼻を嘗めやうとする)

いと子。アラ……又あんな事を……ホ、、、。

六太郎。これ、盤若面だよ。

おあさ。まだそんな馬鹿しとるだか?

(六太郎、又ぶる〱とやつて、此度は小指を口へ入れて左右に引張り、中高指で眼尻を抑へて赤ん眼見せる)

いと子。アラ、又あんな事を、ホ、、、乳母、可笑しくつてよ。

六太郎。これ赤ん眼だよ。

おあさ、そんな事をもうするでねえ、早く洗ふて了ふが善えだよ。

六太郎。何か甘い物あるだかね。

おあさ。甘い物つて大ていに馬鹿云ふが善えだ、私の知らん間に佛樣のぼた餅を皆食ふて了ふたでねえか?

六太郎。己、知らねえだよ。（頰邊にはまだ涙の痕が殘つてゐる）
おあさ。知らねえ事あるもんだか？
六太郎。ウンニヤ、知らねえ、知らねえ。
いと子。六さん、まだ黑ウく附いてるのよ。
六太郎。（濡れ手拭で、掻きむしるやうに拭きながら）何かおくれよー、お母……。
おあさ。喰べえ吐くから何んにもやらねえだ。
六太郎。噓を云やアしねえから、おくれーよー。
おあさ。だつても噓吐いてるでねえか？姫様に上げやうと思ふて、佛壇を見ると些ともありやアしねえだ、ねえ、姫様？
いと子。私、ぼた餅なんか要らないから、いゝ事よ。
六太郎。お母ア、姫様は何うして來たんだかね？
いと子。私、此家の子になりに來たのよ。
六太郎。噓ツ、そんな事があるもんだか？
いと子。噓ぢやなくつてよ、ねえ、乳母！
六太郎。お母ア、姫様は何うして來たんだかね？
おあさ。一人でござらつしやつただよ。
六太郎。姫様一人で……何しに來たんだかね？
いと子。乳母の處の子になりに來たんだつて云ふにね。
六太郎。噓ツ。
いと子。噓ぢやアなくつてよ。
六太郎。（次第に近づいて來て）華族様がそんな事出來るもんだか？

いと子。華族たんか、私、大嫌ひだわ。

六太郎。（怪訝さうに）華族様だから姫様はゑらいんぢやねえだか？

いと子。華族様がゑらいんだつて？

六太郎。ゑらいんだとも、本にも書いてあるんだ、華族は、くわうしつのはんぺいだつて……。

いと子。はんぺいだつてホヽヽ、可笑しいわねえ。

六太郎。（氣負込んで）眞實に書いてあるんだ、見せべいか？

いと子。ア、お見せよ。

（六太郎は座敷の方へ行つて本を持來りくり擴げて疊の上に長くなる、いと子もその横に長くなる）

六太郎。あつたゞ、…ツレ此處にあるだ、讀んで見べえか？

いと子。ドレ私にもお見せよ……

（やがて六太郎の聲高く讀み出す後からいと子もついて讀む）くわぞくはくわうしつのはんぺいなり、へいみんはこくかのいしづえなり、くわぞくはくわうしつのはんぺいなり、へいみんはこくかのいしづえなり……。

六太郎。…はんぺいなり……。

いと子。…かまぼこなり……。

六太郎。くわぞくはくわうしつのかまぼこなり……。

いと子。……くわぞくはこくかのはんぺいなり……こんにやくなり……金トンなり……キヤラメルなり……お汁粉なり……おだんごなり……。

六太郎。お母ア、お汁粉こさへとくれよ。

おあさ。（針仕事しかけながら）お行儀の惡い事云ふもんでねえ。

六太郎。姫様も食べるだから。（鼻を鳴らす）

おあさ。姫様食がるだかね。
いと子。ア丶…（と頷く）
おあさ。それぢやア拵へて上げますべえ、父さんが早く歸つて來ねえとお邸へお知らせする事も出來ねえだし、困るんだがな。
六太郎。お母ア、早くだよ。
おあさ。然う早く出來るもんでねえだ。
いと子。ぢやア遊んで來やうか、蝗捕つて來やうか？　六さん、面白くつてよ。
六太郎。フン、ぢやア遊んで來べえよ。
（いと子は靴を履きかゝる六太郎羨ましさうに）。姫様、己にその靴、貸して見せねえか？
いと子。六さんの足には入らないわ。
六太郎。入らねえ事はなかんべえ。
おあさ。汝、何するだよ。
六太郎。ちよつと履いて見るだ、……ア丶いけねえ、いけねえ、こんな小い奴ア駄目だア、
おあさ。馬鹿な眞似するでねえだ。
六太郎。（庭に下り立ち）姫様の洋服善えだな、己に何時か貸してくんねえか？。
（いと子紐きつゝ靴を履く）
おあさ。女の洋服着る馬鹿があるもんだか、汝も洋服着てるでねえか？
六太郎。これ筒袖だア。
おあさ。それで結構でねえか、あんまり遠い處へ行くでねえよ、お姫様に氣を附けるが善えだ、早く歸らねえといけねえぞ。

六太郎。お汁粉忘れちやいけねえよ。

いと子。乳母行つて來てよ。

○一人戸外に出る。

おあさ。（後を見送つて）お邸はえら騒ぎだんべえが……己、一人氣イ揉んでも仕樣のねえ事だ、お汁粉でも煮べえよ。

いと子。六さん、田に飛んでる蝗を燒いて食べるとお旨わねえ。

六太郎。醤油附けて燒くと頰邊落こちるやうにお旨いだよ。

いと子。ちやア澤山捕つて來ませう。

六太郎。捕つて來べえよ。

いと子。ちやア私も捕つて來べえよ。

六太郎。向ふの田の方へ行くべえ。

いと子。然うしますべえ、ホヽヽヽ。

六太郎白。人眞似しちやアいけねえだよ。

いと子。ちやア早く行きませう。

六太郎。そんなに早くつツ走るだと、溝ン中へ轉ろげ込んで了ふだよ。

いと子。大丈夫よ。

六太郎。こゝの田の畦滑べるだから、己手エ引張つて行つて上げるだ。

（二人手を取つて遁ざかり行く）

○

（入代つて百姓佐助淺黄の筒袖に股引がけ村田銃の先に兎を引つかけて歸つて來る）

佐助。噫ア、今歸つたぞ、見てくんろよ、今日はえらい功名やつただ。

おあさ。(臺所の方から)裏取れたゞかね、それは善かつたが、佐助さん、私汝を待つてたゞよ。…ア、懶い氣イ揉むと火まで付かねえだ。

佐助。何うしたゞい？何か用か？

おあさ。あのお姫樣が……柊木樣のお姫樣が一人でござらつしやつたゞよ。

佐助エ、お邸のお姫樣が……？何處にござらつしやるだ？

おあさ。今六と一諸に遊びに行つたゞよ、…早くまア此方へ廻つとくれ。

佐助。フーン、…己、合點が行かねえだ……お姫樣がお一人で……妙テケレンな事だ。

(云ひ〳〵入る)

○

(戸外では六太郎といと子が再び現れる。)

「もし、もし、龜よ、龜さんよ……」と合唱の聲

いと子。六ちやん、この溝にお魚が居て？

六太郎。ゐるだとも、鮒だの、泥鰌だの、ドッサリ居るだよ。

いと子。入つて捕つて見せておくれ？

六太郎。水が冷たくつて、足痲痺るだア。

いと子。六ちやんは弱虫よ、男子の癖に、

六太郎。己ア弱虫ぢやアねえ、加藤清正や東郷大將よりもゑらくなるんだぜ。

いと子。ぢやア入つて魚を捕つてお見せよ。

六太郎。もう魚ゐねえだ、夏でねえと駄目だア。

いと子。(水面を見入りながら)。アラ今何か走つてよ、大きな、黒い物が……

六太郎。ドレ、何處に？
いと子。アレ、彼方に……早く……早く。（と走つて入る六太郎もつゞく）

○

佐助。（くわへ烟管で出て來て、筧の下で土足を洗ひ）フーン、何んでもお邸ぢやアえら騷ぎだんべえが、己も今日は草臥れたゞこの足で二里の道を駈けつけるのも骨だで、まア一杯やつてからの事だ。
おあさ。（出て來て）何うしたら善かんべえかな？
佐助。飯でも食うてから思案すべえよ……折角の事だ、姫樣にどつさり御馳走でもして上げべえ。
おあさ。御馳走にはお汁粉でさへるだよ。
佐助。田舎のお汁粉なんか、お姫樣のお口に合ふめえと思ふだがな？
おあさ。（不平さうに）それぢやア何か他に、御馳走あるだかね？
佐助。ウム……あの兎煮て上げべえよ。
おあさ。ホヽヽ、そんな兎なんか、姫樣が上るもんだか？
佐助。（むくれて）何を馬鹿云ふだ、こんな旨い御馳走はねえだよ。
おあさ。そんな臭いものは百姓が食ふもんだ、お姫樣はお汁粉が大好きだよ。
佐助。（からかふやうに）汝のやうな百姓の嬶がこさへた汁粉なんか、百姓の餓鬼しか食やしねえよ。
おあさ。（癇癪で）百姓百姓云はんでも善えだ、自分が百姓の癖して。
佐助。汝こそ百姓百姓云つてるだ、汝が云出すが惡い…まア何んでも善いから御馳走くらべだ、何方を澤山と食上つて下さるだか、まア見て見ろ（兎をさげて臺所へ入る）
おあさ。（尻目にかけ）姫樣が一片も食らねえだと善い氣味だが……食りや大變だと云つてやるべえ。（そこいらを取片附けて掃除にかゝる）

（戸外より六太郎先に立ちいと子は洋服を濡らして慄へながら歸つて來る）

六太郎。お母、姫様溝ん中へおツ落たゞ。

いと子。乳母、冷たいのよ、折角取つた蝗も何も皆流しちやつたの、惜かつてよ。

おあさ。ハレまア、洋服の着物びつしより濡れたゞ、危ねえ事だ、お負傷はなかんべえね？

六太郎。姫様、魚捕るつて溝ツ畔飛び歩くだで惡いだ。

（いと子頷く）

おあさ。汝が氣イ附けて上げねえが惡いだ。……姫様、そのまゝちやア風引きますから、汚ねえけれど六の着物着てゐなさるが善えだ、爺が歸つて來ましたゞから、臺所の方へ廻つて、それをお脱ぎなさらねえぢやアね。（云ひ〳〵下り立つていと子を連れて入る）

六太郎。（座敷へ上り）「父は尾張の露と消え、母は平氏に捕へられ、兄は伊豆に流されて……」（を唄つて足をバタ〳〵させてゐる）

おあさ。（いと子に六太郎の一番の晴着を着せて出て來り）これ、男物だで可笑しいけんど、仕様がねえから着てゐさつしやろよ

いと子。ア、……。（鷹揚に頷いて兩袖を擴げて見て）。大きいのねえ。

六太郎。己の一番善えのを着たゞな、お母ア、忌だい。

おあさ。そんな事云ふもんでねえ、汝が溝ツ端へ連れて行つて、お姫様の洋服の着物汚さすだから仕様がねえだ、

六太郎。己許りこんな汚い着物を着てるだもの、己も溝ン中へおツ落ちて來りやア善かつたゞ。（鼻を鳴らす）

いと子。六ちやんも着物を汚したら、又善いのを着せるんだね、ね、乳母？

おあさ。そりや然うでござへますだ。

六太郎。ちやア己も行つて、溝ン中へつんのめつてやるべえ。（と立かゝる）

おあさ。コレ…コレ、わざくらそんな馬鹿な眞似する奴があるもんだか、そんな事したら學校の校長先生に云告けて、罰

食はしてやるべえ。……オヽお汁粉が焦げ附くかも知んねえぞ（と走り入る）

六太郎。先生に云付けるだなんて、お母、馬鹿だ……。

いと子。そんな事を云つちやいけない事よ、私の洋服が乾いたらこれは六ちやんに返すのだから、その間貸して頂戴よ、ね、善いでせう？

六太郎。（頷いて）ウム、貸してやらあ、…善い事がある、己のその着物とお姫様の洋服と取換こすべえか？

いと子。ホヽヽ、六ちやんは洋服が好きなの？

六太郎。ア、好きだ、この村で洋服着てるのは巡査さんと、學校の校長先生と二人だんべえよ。

いと子。ぢやア六ちやんも洋服をこさへて貰つたら善いぢやないか？

六太郎。父や母は、百姓の子ア異人さんの洋服着るもんでねえ、これが（と筒袖を擴げて見て）百姓の洋服だつて云つてるだ、己、百姓ア忌ひだ。

いと子。ぢやア何が好きなの？

六太郎。（小聲で）お姫様のやうに華族が好きだ。

いと子。私、華族は大忌ひよ、六ちやんのやうな百姓が好きだ。

六太郎。ぢやア華族と百姓と交換事すべえか？

いと子。それよかんべえね。

六太郎。アラ、又百姓の眞似するだねハヽヽ

（いと子も笑ふ）

○

佐助。（庖丁と爼板を持つて筧の下に來る）。お姫様、よくお出でなされましたよ、今に爺が、旨いもの御馳走しますだよ、澤山と食らつしやいよ。（洗つて入つて行く）

おあさ。(汁粉鍋を持運んで)さあ〳〵お好なお汁粉が出來ましたゞ、澤山とお上んなせえよ。

六太郎。己もお汁粉澤山と食べるだよ。

おあさ。汝にもやるだとも……がつ〳〵しねえでも善いだ。

六太郎。姫樣お旨いだかね?

いと子。お旨いだよ。(汁粉をすゝつてゐる)

佐助。(土鍋片手にもて來る)お姫樣は賢うごぜへますだね……お兎さんが煮えましたゞ、これ澤山召上るんだ。

おあさ。汝そんなに急いでまだ生煮だよ、それこそ毒を盛るやうなもんだんべえ。

佐助。何アに、斯うしてこゝへ懸けときや煮え過ぎる程煮えて了ふだ。

おあさ。姫樣、あんな臭いもの忌ひでごぜえますね、

佐助。(チビリ〳〵手酌でやりながら)馬鹿ア云へ臭いもんか、こんなにお旨いものはねえ田舍のお汁粉なんか無理强するでねえぞ。

おあさ。無理强なんかするもんかね、姫樣がお旨がつて、アレ、見なせへ、見なせへ、眼ェ細うして召上るだ、

六太郎。己にもお代りをくんねえよ。

おあさ。汝はゆつくり食べるが善いだよ。

佐助。(兎肉を皿へ盛り)ホーラ、煮えましたゞ、お姫樣、爺が捕つて來た御馳走だ、食べて見て下せへよ……何うだかね?旨かんべえ。

(いと子は忙しく箸を動かし頷いて見せる)

おあさ。ねえ、姫樣、お汁粉が旨かんべえ、ホーラ、これで三つ替へさつしやるだ。

佐助。コレコーレ、三つも上げては、お腹に善くねえだよ。

おあさ。だつても、少許上げるんだ…こんなに底の方へちよつぼり……。

佐助。ウム、そんなに少許えか？へ、、、それぢや數に入らねえだ、ホーラ、兎の肉、お姫樣旨かんべえ。（欲しいな杯を置いていと子がさし出す皿を取つて得意げに土鍋の蓋をあげる）

おあさ。（つゝけんどな調子）そんなに汝お姫樣に上らせては體の毒だべえよ。

佐助。汝も汁粉强いるでねえか？

おあさ。强るんぢやねえて云つとるのに。

佐助。だつて强いてるだ。

六太郎。父、お母、喧嘩しちや忌だア。

いと子。乳母、汝、怖くなるわ、爺も怒つちや忌よ。

佐助。（笑ひ出し）へ、、、何んでもねえ事だでござへますから心配しちやいけましねえよ。

おあさ。眞實に怒るんぢやアねえだからお姫樣心配しちやいけましねえ、今度は笑ひますべえ、爺さんもお笑ひよ。

佐助。汝、先へ笑うて見るが善いだ。

おあさ。汝から笑ふが善いだ。

佐助。ぢやア一緒に笑ふべえかへ、、、、。

おあさ。ホ、、、、

（四人、大笑ひに笑ふ）

（柊木家が從甲谷一、黑の山高帽、二重マント、白い口髭の下に、シガレットの烟を上げながら入來る）

甲谷。慥か此處に相違ない（つか／＼と歩み入つて）佐助の家は此處ぢやつたかな？

おあさ。誰だかね？

甲谷。少し聞度い事があつてワザ／＼尋ねて來たんぢやが……ア、暗いな。

いと子。（小聲に）甲谷だよ…私、居ないつて云つておくれ。（箸を捨てゝ表と奧の間の襖の蔭へ隱れかけてそこに吊つた衣服の裾に

頭を突込んでゐる、六太郎は首を縮めて笑つてゐる）

（おあさはマッチを擦つてランプへ火を點ず）

甲谷。（近寄つて）お邸のお姫様は此家へお來なさらなかつたかい？

おあさ。ハレマア…これは早、お珍しい事で。

佐助。（のめり出し）ア、お邸の旦那様でごぜえますか？これは何うも御苦勞さまでごぜへました。何卒まア此方へ…おあさ早く席敷くだ、膳片附けろよ。………

おあさ。何卒まア此方へお上り下せへまし、……汚うごぜへますけんど、まア何卒。

甲谷。（突立つたまゝ）マア、挨拶は後で善いが、お姫様は來てゐらつしやるのかい？

佐助。ハイ、ハイ、見えてござらつしやります、折角これからお邸に上るべい思つとりましたゞ。

いと子。（奥の方から）來ちやゐないよ……云つちやアいけないつて云ふに……。

甲谷。（座敷へ上つて奥の間を覗き込み）お姫様、まア如何遊ばしたのでございます？お一人で、皆に默つてお出かけ遊ばすもんですから、お邸中がもう大騒動、御親戚中を探し廻る、御友達筋の御家を尋ね行く、近所の川筋を見廻りますやら、派出所へ屆け出ますやら、それは〳〵もう大事でございますよ。

いと子。（返事をしない）

甲谷。姫様、如何遊ばしたのでございます？奥方様も大へん御心配遊ばして、八方へ人を立てゝお尋ねなさつてゐるのでございますよ、私には此家へ參つて見よと仰しやるので もう大汗になつて駈附けましてございます、路は悪し、途中で辻車には强請られる。サン〴〵な目に合ひました。

おあさ。（洋燈を持つて來て）お姫様何うなさつたゞ、ハレ、マア、お姫様、頭丈隠して蚤見てえな事なさつてるだね、ホ、、、、、。

甲谷。お姫様、お隠れ遊ばしても駄目でございますよ。

いと子。(つと出て來つて)云つちやアいけないて云ふに……乳母が居るなんか云ふから仕様がないのね?。(手を上げて打つ眞似する)

おあさ。乳母ちやアござへましねえよ。

(六太郎はニヤ〱笑つて見てゐる)

甲谷。姫様早く御歸り遊ばさないとお邸では皆大氣遣ひでございます、まアお召物は一體何うなさつたのでございます?。

(小腰屈めて小さい肩へ手をかけるとくるりと廻つて身を反らして)

いと子。何うしたつて善い事よ〱になんかに連れに來られたつて、私、歸る事ぢやアなくつてよ。(云つて爐邊へ正坐る)

佐助。まア、旦那様、お坐りになつて下せへ。

甲谷。(帽子も取らず外套のまゝそこへ坐つて又シガレツトを燻らしながら反身になつて)何うも早、このお姫様にも困るて……御召物は何うなすつたのかい?

佐助。少許汚れましたで、彼方に乾してありますだ、……、早速御報知に上るべえ思つてた處でござへますだが、嘸御心配でござらつしやつたんぺえね?

おあさ。何うも御苦勞さまでござへましたゞ。(と澁茶を酌んで出す)

甲谷。(見向もせず傲倖な態度で)。一たい何時頃御見えなさつたのかい?。

おあさ。何でもハア三時頃か、四時頃だつたと思ひますだが……。

甲谷。フーン(鼻で云つて煙草の烟高く吹出し)直ぐ知らせてくれると、こんなに大騷ぎもしなかつたのだが。

おあさ。へイ、濟みましねえ。

佐助。己が留守だつたもんだからね。

いと子。乳母私にもお茶をおくれよ。

甲谷。お姫様、もう御歸り遊ばすのでございますよ。

いと子。歸りやしないよ、もう歸るもんか！

甲谷。(切口上で) これはお孃樣何と御意遊ばすので。

いと子。私は此家の子になるんだもの、ねえ、乳母ア。

おあさ。早く御歸りなさるが善いだ、お邸はゑら騷ぎだんべえからね。

いと子。だつて、此家の子になりに來たんだもの。

甲谷。御戲談仰じやらないで、これから直ぐと御歸り遊ばせ。

いと子。(焦れつたげに) 歸らない事よ。

佐助。お邸はゑら騷ぎだんべえからね。

いと子。歸らないよ、歸つたつてつまらないんだもの…誰が歸るもんか？

甲谷。そんな事を御意遊ばさないで、直ぐとこれから甲谷が御連れ申ませう。

いと子。(癇聲で) 歸らないつて云ふにね、この禿げ老爺、うるさいよ。(立かゝつて甲谷の肩先へ武者ぶり附いて) 失禮よ、人の家へ帽子も取らないで。(云ひさま帽子へ手をかけてすつぱりと脱がす)

甲谷。(テラ〳〵光る禿頭をつるりと撫でて苦笑) 姫樣、お酷い事を遊ばす……。

いと子。酷い事はないよ。(小氣味善げに小さい鼻をしいかめて笑つて帽子の裏をのぞいて見ながら走り寄つて佐助の頭へ被らす) ホ、、、、、可笑しいわ。(小さい手を拍つて喜んでゐる六太郎も笑ふ)

佐助。これは何うも大切なお冠り物……(ふつと吹いて、恐縮しながら甲谷の手へ返さうとする、六太郎がこれを横合から取つて自分の頭へ冠るすぽりと口の邊まで入る)

いと子。ホ、、、、帽子のお化けよ。

六太郎。お化け！！。(といと子を追ひ掛ける、(いと子は甲谷の背中へ廻つて手をたゝく六太郎は間違へて) お化け〳〵 (と甲谷をのぞき來る)

甲谷。これは何うも怪しからん。(障子を引張ブツ〳〵云ひながら内外の疵を吹きハンカチーフで擦つたり嗅いで見たりする)

佐助。何うも相濟みましねへ。

おあさ。(叱つて)六、あんないたづらするでねえだ、日那様に詫るだよ。

六太郎はキヨロリとしてゐるいと子が甲谷の眼鏡を取りにかゝるその手をふわりと遁つて

甲谷。お姫様、もうお邸へ御歸り遊ばせ、奥方様が容易ならん御心配でございますから。

いと子。歸らないんだてば。(泣出立つ)

甲谷。一たい、如何遊ばしたのでございます？

いと子。歸らないよ、甲谷なんか大忌ひだもの、一人で歸つて了ふが善いわ、大忌ひよ。(と振り放す)

甲谷。何ういふ譯で、さう甲谷をお忌ひ遊ばすのでございますか？

いと子。大忌ひだよ、禿げ頭の狸老爺、汝なんかと歸るもんか？

甲谷。(禿頭を撫で廻しながら)これは又手厳しい御嫌ひ様でございますね。

いと子。汝なんか妾の子におべつかしたり、下の者を虐めたり許してゐるんだつて……私大忌ひよ、もう歸つてお了ひよ一人で歸つてお了ひよ。

佐助夫婦は顔を見合せて氣の毒がつてゐる

甲谷。(悄氣ながら)兎に角、お姫様が御無事でゐらつしやるといふ事を突留めたから私の役目は濟んだやうなもんだ。一應歸つてさう申上る事にせう、お姫様の事は頼んで置くぞ……お姫様、それでは何卒何處へもお出かけ遊ばさないやうにお願して置きます、誰かゞ御迎ひに上りますから。(狼狽してソコ〳〵に立出でてしきりに障子を氣にしながら)何んだか百姓臭くなつたやうだぞ(ブツ〳〵云つて入る)

佐助。(見送つた後で手足を伸ばし)ア、己ア、あんな日那方に來られると窮屈で仕様がねえ、それでもはア、これでお姫様の事報知に行かねえでも善いでまア一安心だ、これから一杯引つかけべえよ。

おあさ。これで私も肩の荷脱れたやうでホツとしたゞ、ぢやア兎肉持つて來べえ。（立上る）
佐助。姫樣も安心さつしやるが善えだ、今夜は乳母の家の子になるだね。
いと子。私、もう歸りやアしない事よ。
六太郎。己らと毎日、一緒に遊ぶべえか？
おあさ。（德利片手に出て來り酌をする佐助しきりと引かけて飲む）汝、まアそんなにギウ／＼ガブ飲しねえでも善いでねえか？
佐助、己らア、何んだか喉が渇いて仕樣がねえだ、一杯や二杯は水ウ呑んでるやうな氣持しかしねえんだ。
いと子。爺、何かお話して頂戴よ。
六太郎。爺は狐化されの話が上手だい。
いと子。狐化されつて……云つて聞かせて頂戴よ、
佐助。フム、……今にして聞かせて上げますべえ。姫樣、怖くはなかんべえね？
いと子。怖い事はなくつてよ（と前へ膝行り寄る）
おあさ。十八番のつくり話で、面白くも何んともねえでごぜへますだよ。
佐助。馬鹿ア云へツ　己が若い時、あつた話だ…エ、と…村の祭の晩でごぜへましたよ、お庄屋さんへ呼ばれて行つて、お土産の御馳走を手にぶらさげて、鎭守樣の眞暗な森の中を通りかけると、色の眞白な別嬪さんが石燈籠の處に立つてゐて、己を、來い／＼つて手招ぎしますだ、眞闇夜の中に、その眞白な顏がハツキリ見えるだから、眞人間ぢやアねえに定つてゐますだ……醉拂つてゐるので　けねえ、　…そこに氣が附きませんでな。（フラ／＼頭を振る）
おあさ。もう居眠りしてゐるでねえかね？
六太郎。父は醉拂つてるから駄目だい。
佐助。（眼をあいて）醉拂ふもんか？………そこで爺、眞裸體になりましてな……。
おあさ。もう呂舌が廻らないぢやアねえか？

六太郎。己ら眠くなつた……それよか父今日何うして米打つただかね。？

佐助。（生欠伸しながら）兎か？（烟管を持つて）己ら山ン中ア歩いてるだと、眼前へひよつこり、長い耳振り立て、飛び出したで、ズドンドン……とやつたゞ、四五間走ンてコロリと寝たゞ。（と横に臥る）

（この時いと子と六太郎は凭れ合つて眠さうに眼をシヨボ〳〵させてゐる）

おあさ。二人とも眠かんべえ、ドレ、寝床取つて上げべえ。（奥へ入りやがて歸つて來て）姫様お寝みなさるが善えだ。抱いて上げますべえ。（連れて入る）

六太郎。お母ア、己らも眠いや……。

おあさ。（歸つて來て）サア、來て寝るが善いだよ。（と連れて入り呼び戻つて）佐助さん、汝轉寝するでねえだよ。（と搖り起す）

佐助。眠りやしねえ、ズズズトンーとやつたゞ。

おあさ。ホヽヽヽ、何、寝惚けてるだね、

佐助。（小呼聲で唸り出し）今頃は半七さん、何處に何うしてござらうやら……。私といふものないならば、殿御さんも御通にめんじチヽン……。

○

この時戸外に車が駐まつた氣配柊木伯爵夫人お高僧頭巾に被布姿で下り立ち馭丁傳吉、提灯に道を照らして先導する

傳吉。御免なさい、

佐助。「御かんどうもあるまいもの……」

伯爵夫人。御免よ。

佐助。「思へば〳〵この闇が…チヽヽチヽヽン……

おあさ。（駈け出で）はツ、佐助さん、お客さまだよ。（と洋燈を持出す）

伯爵夫人。乳母……。

おあさ。アラ、まア奥方様。(ペタリと正坐り佐助を揺り起す)
佐助。(眼を小すり〳〵)誰方様だい？
おあさ。お邸の奥方様が……しつかりするだよ。
(佐助は平蜘蛛の如くなつて挨拶する)
伯爵夫人。……あの、姫が來てゐるさうだね、何うも御厄介かけたね。
おあさ。お見えになつてござらつしやります。
伯爵夫人。(笑顔で)。又私の聲を聞いて奥の方へ隱れに行つたのぢやアないかい？
おあさ。イヤ、もうお寢つてござらつしやるだ。
佐助。何卒マア……(と莚の塵埃を吹く馭丁が持つ縞毛布を取つてそこに敷く)
伯爵夫人。お構ひでないよ。(お高僧頭巾を取つて)何うも暫らくだつたね。
おあさ。何うもハア、御無沙汰許しましたゞ……奥方様、過日は何うもいろ〳〵頂戴物しまして有難い事でごぜへます。
佐助。誠にはア、御禮の申やうもごぜへましねえで。
伯爵夫人。否え、御禮なんか云ふには及ばないよ、毎度世話をかけてね……今日は少つとも知らない中に脫け出してなんか來るんだもの、眞實に大騷ぎしましたよ。
おあさ。左樣でござらつしやらうとも、今も御迎ひに見えさつしやつた旦那様と、御一緒にや歸らねえ云つて、ダヾ捏ねさつしやるだ、奥方様がワザ〳〵こんな處へ御來なさるてえ事、誠にはア、恐れ入りますだ。
伯爵夫人。此處の子になりに來たんだつて、甲谷を弱らせたさうだね、甲谷には今、途中で合つたのだよ。
おあさ。ハツ……お姫様はあんな事仰りますだ。
佐助。恐れ入る事でごぜへます。(ペコ〳〵する)
伯爵夫人。(愛嬌に)家でも折々、そんな事を云つてるのよ、つまらないから、乳母の家へ行く、六の處へ遊びに行きたいつ

てね。

おあさ。(笑顔で)さう仰りますだかね。

伯爵夫人。(小さいため息)イヤ、汝の處なんか眞實に氣樂で善いのね！夫婦仲よく暮らしてゐて、他に心配事と云つては無し……。

佐助。(おあさも顏見合せ)御戯談仰りますだ、こんな水呑百姓、少許も氣樂な事はありましねえだハヽヽ

おあさ。食うものも碌々ありましねえでホヽヽ(茶托を取り出し晩茶を酌んで恐る〳〵さし出し)何うも汚うごぜへますが……(縁先の厨丁にもやる)

伯爵夫人。結構だよ。……姫は奥に寢かせてあるんだね

おあさ。ハツ……六の傍に寢かせてごぜへますだ。……

伯爵夫人。(の聲)善く眠つてるのね……

(伯爵夫人はついと立上るお淺は周章しく洋燈を持つて案内する)

おあさ。(の聲)さうでごぜへます、神様のやうなもんで……

伯爵夫人。(の聲)六もよく眠入つてるのね、罪はないわねえ。(二人、奥より出て來る)

伯爵夫人。あんなによく眠入つてゐるものを起すのも可愛さうだしね……さう……乳母私も今夜、こゝへ泊めてくれないか？

おあさ。エ……何仰りますだか？

伯爵夫人。今夜、私をこゝへ泊めておくれでないか？

おあさ。エツ…ヘレ、マア、勿體ねへ。

伯爵夫人。厄介だらうが、是非泊めておくれ？。

おあさ。何…何うなさいましたど？

伯爵夫人。ね、善いだらう…爺…善いね？。
佐助。(キヨト〳〵して)はツ…はツ。
おあさ。汚ねえ處でございますだから……。
伯爵夫人。(室内を見廻しながら)善いよ、汚い事はありやアしない…何んだかこんな家へ一晩でも寢て見たくなつたからね善いだらうね……あの！夜具なんか構はなくても善いから……傳や……馬車の中に、まだ毛布があつたね、あれを持つてお來よ。
馭丁。へえ……へえ……ちやアあのお泊り遊ばすんで？
伯爵夫人。ア、……佐助、善いだらう。
おあさ。此方等は些とも構はねえでごぜへますが、汚ねえ處だからね、奥方樣。
佐助。恐れ入りますだからな。
伯爵夫人。(淋しげな調子)家へ歸つたつて……誰も……(急に活潑に)今夜は此處へ泊めて貰つて、明朝、早く歸るからね、傳吉はこれから歸つて、御苦勞だが、明朝又迎ひに來ておくれ。
馭丁。ハツ……畏りました。
伯爵夫人。毛布を持つて來て置いて、汝は直ぐ邸へ歸つておくれ、皆が聞いたら姫樣と一緒に、今夜は乳母の家に泊るのだつて、然う云つてね。
馭丁。はツ……(毛布を持來り)それではこれで失禮仕ります。(挨拶して歸る)
伯爵夫人。眞實に靜かで、ノン氣な生活だね(庭前を見廻し)あの森の邊がポツと明るくなつた、…月が出たね。
おあさ。ハツ……東京から入らつしやるだと寂しうごぜへますべえに。
伯爵夫人。ホ、、、、邸なんかゞ寂しいと云ふものよ、この家はノンキで靜かなんだもの。
佐助。へ、、、、ノンキ許りで仕樣がありましねえ。

伯爵夫人。佐助は淨瑠璃が上手なんだねえ、、、、

佐助。(頭を掻いて)へ、、、、恐れ入ります事で……

おあさ。日本一だと自慢してゐますだ、他にねえだとねえ、、、。

(奥の方で物に襲はれたやうにいと子の泣出す聲)

伯爵夫人。アラ、何うしたのだらう。(起上る)

おあさ。お姫樣だ、何うなさつたゞか?(これも起上り二人奥の間へかけ込むやがていと子を抱いて出る)

佐助。何うなさつたゞか?

いと子。(寝惚けながら)乳母の家が善い…乳母の家が善い、…歸らないてば。(泣喚く)

伯爵夫人。いと子、何うしました?…こゝは乳母の家ぢやアないか?

おあさ。姫樣、乳母はこゝに居りますよ、奥方樣も、……お母樣も、こゝに來ておいでゞごぜへあすよ……泣いちやいけません。

伯爵夫人。夢でも見たのだらうね?

いと子。(氣づいたやうに)ア、母樣……こゝは何處なの?

伯爵夫人。乳母の家ですよ、母樣も泊に來たのです。

いと子。(キヨト〱見廻し)ア、、乳母もゐる、爺もゐる……母さんもゐる…母さん何うして來て?

伯爵夫人。汝をお迎へに來たのですよ。

いと子。もう邸へ歸るのは忌、こゝに居ませうね……何時までも……ね、母さん?

伯爵夫人。ア、いゝとも……何時までも居りませうよ。

いと子。乳母、母アさまがア、仰るから、もう乳母の家の子になるのよ。何時までも……何時までも……

おあさ。(　って)よろしうごぜへますとも。

いと子。爺もいゝかい？。

佐助。ヘイ…ヘイ…何時までゞもおいでなせへましよ。

伯爵夫人。ホヽヽこの子は連れ歸された夢でも見て泣いたのでせうよ。

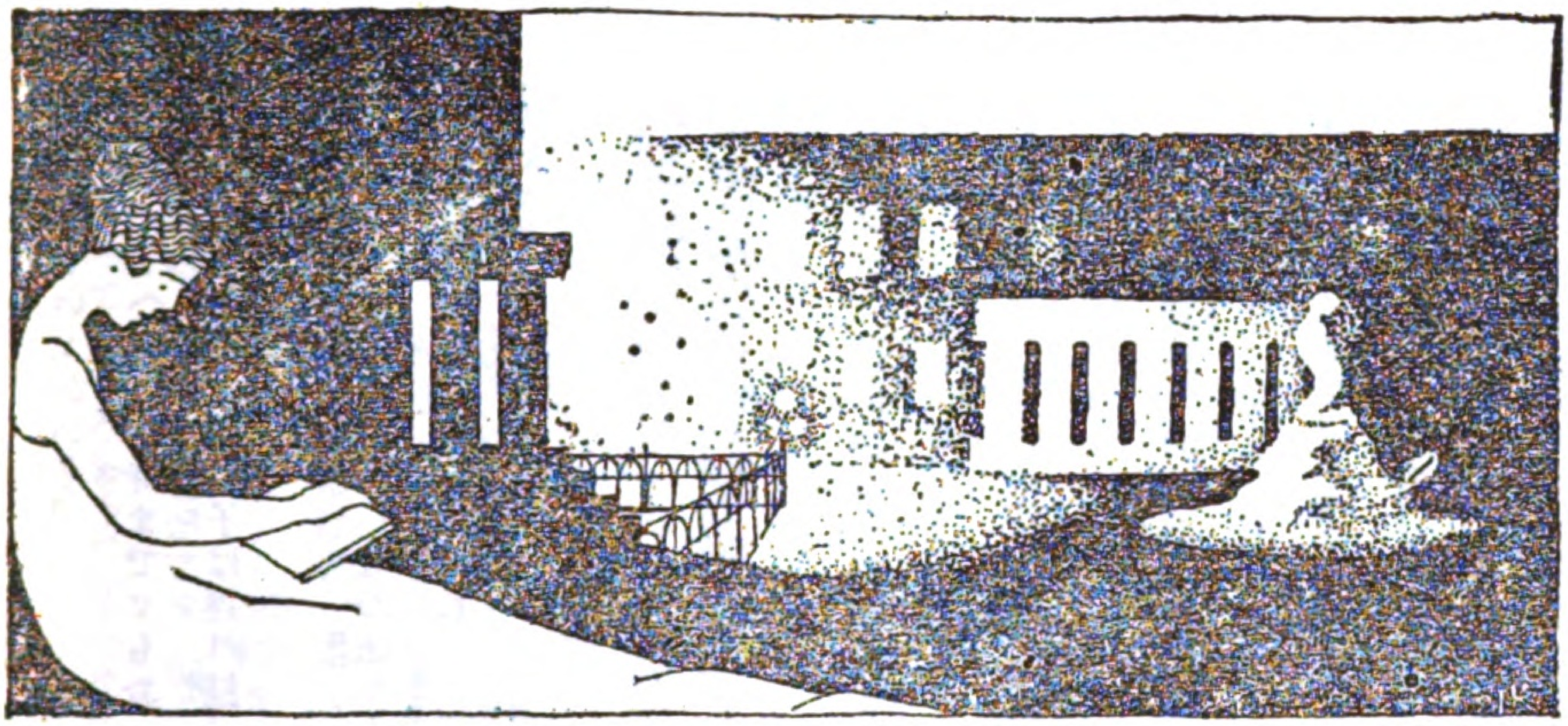
いと子。（頷いてゐる）

伯爵夫人。……もう安心してお眠りよ。（抱いて輕く背をたゝきながら）チと寒くなつたね。

佐助。もう夜が更けましたでね…雨戸入れますべえ、御免なせえ。

（佐助とおあさ起上つて雨戸をとざす月が枯すゝきの葉末にかゝつて蟲の音が一しきりしげ〳〵聞える靜寂な夜景の中に幕）

（新童話劇の試作をするつもりでさうした氣分を作る工夫をして見たが思ふやうに考が纏まらないそこで止むなく舊稿を改訂して約束丈を果す事にしたこれ他日新童話劇を書く機緣にはなるかも知れない。作者）



御先祖樣のお墓

正宗白鳥

祖母さんはお墓まゐりが好きであつた。太郎や二郎は祖母さんに連れられてよくおまゐりをした。「これが祖父さんのお墓」「これが叔父さんのお墓」「これが曾祖母さんのお墓」といふやうに、太郎は一つ〳〵のお墓の名をよく覺えてゐた。一本二本三本と數へて見ると、みんなで十五本も石牌が立つてゐた。背の高いのもあるし低いのもあるし、苔が生へて汚いのもあるし、手で觸つてもツル〳〵した奇麗な新しいのもあつた。

桃やいろ〳〵な草花を供へたり、煎香を立てたり、水を注いだりするのが、太郎にも二郎にも面白かつた。墓場はお寺の後の高い所にあつて、海が見えて眺めが美しかつた。春の彼岸の時分には墓場のうしろの山に桃や杏の花が咲いた。秋の彼岸の時分には、眞紅な幽靈花が墓場の緣に咲いた。何時來ても小鳥があつちこつちに啼いてゐた。

「家の墓場も狹くなつたから、今のうちに後の林を切つて地ならしをして置くといゝ」と、祖母さんが云つたことがあつた。

「僕はまだ死んだ人を見たことがないけど、祖母さんでもお父さんでも、僕の家の誰かゞ死んだら、此處へ持つて來て埋められるんだな」と、太郎は云つた。「今度は唯れが死ぬる番なのか知らないが、歳を取つた者が死ぬるのだと、祖母さんが云つてゐたから、さうすると、祖母さんが第一番に死んで、その次がお父さん、その次がお母さん。……それから僕だ―と、考へると、太郎はいゝ氣持がしなかつた。自分より二つ下の二郎や四つ下のおはなでも、自分よりそれだけ遲れて死ぬるのだからいゝと思はれた。こんな景色のいゝ、御先祖から代々揃つてゐるお墓場に埋められゝば安心だと、祖母さんは云つてゐたけれど、太郎にはお墓の中がいゝ所とは思はれなかつた。盆に燈籠に火を點けに來て見ると、お墓のまはりは淋しくつて怖かつた。蚊も澤山ゐるし、いろ〳〵な蟲がゐて、草の中から蛇が出て來たこともあつた。

「御先祖様はどんな人だか知らないから構やしないけれど、祖母さんやお父さんやお母さんや、二郎もおはなも、僕の知つてゐる家の者はみんな、何時までもお墓の中へなんか入つて行かないで、僕と一しよに生きてゐて呉れゝばいゝ」と、太郎は思つてゐた。

祖母さんに連れられないで、自分だちだけでお墓の方へ行くことは滅多になかつた。それでも、近所の友人に附いて、蟬を捕りに、目白や頰白を捕りに、お寺や山の方へ行つた時に、自分の家の墓場を通ることはあつた。祖母さんと一しよにお詣りをして、花や水を供へて、お時儀をする時には、自分の御先祖のお墓だといふので、何かしら懷しかつたり有難かつたりしたが、友人と一しよの時には、他所の家のお墓も自分の家のお墓も同じことで、其處らを馳廻る折には、ごちや〳〵と並んでゐる石牌を邪魔物にすることもあつた。

太郎が十歲で二郎が八つになつた年の秋、祖母さんが病氣で長い間寢床から起きられなかつた。ある日、「今日は叔父さんの命日だけれどお詣りが出來ない」と、祖母さんが氣にかけて云つたので、太郎が「それぢや僕が詣つて來ようか」と云ふと、祖母さんは喜んだ。

「太郎はお墓詣りが好きだ」と、お母さんは笑つた。

「僕は好きぢやないよ。好きぢやないけれど詣つて上げるんだ」

太郎はお母さんから前香とマッチを貰つた。二郎も隨いて行くことになつた。「家の庭には花がないから、お寺へ寄つて、樒でも貰つて供へるといゝ。水を上げたければ、お寺で桶を借りてお出で」と、祖母さんは寢床の中から差圖した。

何時も祖母さんに隨いて行つてるんだからそんなことは分つてゐると、太郎は思つてゐた。兄弟は急いで歩いた。よく晴れた温かい日であつたから、坂道を上つてゐるうちに、二人ともビツショリ汗を搔いた。山の方から樹を切る音が聞えて來たが、人間の顏は何處にも見えなかつた。太郎はセイ〱息を吐きながら、前香に火を點けて、叔父さんの墓へ供へてお時儀をした。二郎も眞似をしてお時儀をした。

「祖母さんは口の中でブツ〱云つて拜んだ。死んだ人に聞えるのか知らん」と、太郎が云ふと、

「叔父さんはこの土の下へ入つてゐるの?」と、二郎は尋ねた。

「そりや入つてるさ。死骸になつて入つてるんだ。僕が生れない前に叔父さんは死んだのださうだから、僕、叔父さんを見たことないんだけど、お父さんによく似てゐるんだつて」

「お父さんに似てるのなら、叔父さんもあんな大きな手をしてるの?」

「手が似てるんぢやない。顏が似てるんだよ。二郎の眉毛が叔父さんによく似てるつて、祖母さんは云つてゐたよ」

「嘘云つてらあ、僕死んだ人に似てやしないよ」

二郎は前香の煙が風のない空に漂つてゐるのを面白さうに見てゐた。太郎は考へながら、

「祖母さんは死ぬるかも知れないな。さうしたらここへまた一本お墓が出來るんだな。十六本目のお墓だ」

「祖母さんは寢てばつかりゐるから死ぬるんだな。何日したら死ぬるの?」

「そんなことが分るものか、今日家へ歸つたら死んでるかも知れない」

死んだらどうなるんだらう?。僕一ど死んで見たいな。祖母さんのやうに寢てばつかりゐたら死ねるのだらうか」

「叔父さんにでも訊ねて見ろ。」

「だつても、いつお詣りに來ても、お墓の中に居る人は物を言はないぢやないか。祖母さんはひとりで何か云つてるけれど、どのお墓も返事をしないぢや」

二郎の云ふ通りだと、太郎も思つてゐた。だけど、祖母さんは死んでも、外のお墓の人とはちがつて、自分たちがお詣りをしたら、物を言ふかも知れないと思つてゐた。そして、死んだ人が物を言ふのを、一ど聞いて見たいと思つた。

落葉はお墓のまはりに積つてゐた。兄弟は落葉を堆く搔集めて、マッチを擦つて火をつけたが、葉がよく枯れてゐたので、火は勢ひよく燃上つた。そこらに散つてゐた木片や竹の筒に差されたまゝ朽ちてゐた樒などをも面白がつて火の中へ抛込んだが、パチ〳〵と音を立てたり、シュツ〳〵と音を立てたりして、どれもみんな燃えてしまつた。火の氣が衰えたあとには、同じやうな薄黑い灰ばかりが殘つた。太郎は棒の先で灰の中を搔廻したが、すると、蟬の形をした小さな蟲が見つかつた。「可笑な蟲だなあ、何といふ蟲だらう」と云つて、手で摑むと、その蟲は潰れて、落葉や樒の葉と同じやうに黑い灰となつてしまつた。

先つきから切られてゐた木のドシンと倒れる音が後の山の方から聞えて來た。兄弟はビツクリして顧みた。墓の上の樹梢に休んでゐた鳥も音に驚いたのか羽音をさせて飛んで行つた。

兄弟は家へ歸つて、祖母さんにお墓の話をした。祖母さんはちつとも變つたところがなかつた。「火遊びなんぞしちやいけません。山火事にでもなつたら大變ぢやないか」と、祖母さんは云つた。

そして、祖母さんは四五日すると、床から起きて、不斷と變らないやうになつた。容易に死にさうでなかつた。太郎は

祖母さんが何時までも生きてゐて呉れるのを喜んだが、祖母さんが藥の中から自分に物を云つて呉れる時が、まだ〳〵容易に來さうでないのが待遠しいやうな氣もした。

蟬のやうな蟲が、蟲の形をしてゐながら、手で握ると灰になつたことが、太郎には面白かつたので、蜻蛉でも蝶々でも蜘蛛でも、目について手に捕れた物を、用捨なく火の中へ入れて灰にした。二郎も側で見て、兄のすることを手傳つた。かういふ蟲どもは火がついても何にも云はないで灰になるのだけれど、燒ける時には、どれも〳〵臭いにほひをさせた。「なぜ、そんな惡戲をする。生物を殺すといふことがありますか」と、一度お母さんに見つけられて叱られた。「殺生をすると罰があたるよ。虫けらでも殺した者を恨むだらうから、決して生物を殺すものぢやありません」と、祖母さんにも同じやうに叱られた。「何が面白くつてそんな事をする？。子供の時分から生物を殺したりする癖をつけると、大きくなつて惡人になるぞ」と、お父さんも同じやうなことを云つた。

「僕もこれからは生きた物を捉まへて灰にしない」と云つて、太郎はおとなしくみんなの戒めを守らうと思つた。惡人になるのはいやなやうに思はれた。……だけど、お父さんは家の鷄や他所から貰つた鴨なんかを、締殺して、藁を燃して毛を燒いたり、庖丁で料理をしたりして、祖母さんまでもさういふ者を齒のない口でモグ〳〵喰べながら、「おいしい〳〵」と云つてゐるのではないか。お母さんでも刄の光つてゐる庖丁で、生きた魚を切つてゐるではないか。

蜻蛉や蝶々を燒いて灰にするのが惡いといふのは、僕を子供だと思つて みんなが嘘を吐くのだと 太郎は考へ直した。

冬になると、野や濱で百姓や漁師が焚火をすることが多くなつた。太郎はいろ〳〵な物が燃えて煙になり灰になるのを不思議なことのやうに眺めた。そして、人に見られないやうにそつと、小蟲を火の中へ拋込んで、その姿の變るのを見ることもあつたが、次第にさういふ者では物足りなく思はれだした。「あの大な牛を丸燒けにしたら」「あの馬を燒いたなら」かういふ大きな强さうな者も、蟬や百足なんぞと同じやうに、手で摑んだら、潰れて灰になるのだらうかと、それを實際

に試して見たくなつたが、牛よりも馬よりも人間が、手で摑んだら灰になるのを見たくつてならなくなつた。あの丸々と肥つたおはなが灰の塊りになつたり、耳の後に大きな瘤のある二郎が瘤ごと灰の塊りになつたりするのを、考へてゐると、恐ろしくもあつたが面白くもあつた。

祖母さんは曾祖父の命日とかで、久振りにお墓詣りに出掛けて、太郎も二郎と一しよに随いて行つたが、もはや以前のやうに御先祖様のお墓が有難いものとは思はれなくなつてゐた。「叔父さんでも曾祖父でも、祖母さんの云つてることを聞いてやしないのに、祖母さんはブツ〳〵口の中で云つて拜んでる。獨言を云つてるんだから可笑い」と、二郎に向つて云つた。

「此間燒いたのに、まだ葉がたまつてらあ。マッチを擦つて燃さうか」と、二郎は云つて、兩手で落葉を掻寄せだした。

「こんな葉を燃すだけぢや面白かないな。ドッと一面に天まで屆くぐらゐな火を燃して見たいな。」

「山が燒けたら面白いだらうな。マッチで火をつけやうか」

「そんなことを云つたつて、二郎は火の中へ飛込めやすまい」

「飛込めらあ、僕火の中へ入つて見せようか」

「入つたら、えらいけれどな」

「兄さんが火を燃したら、僕直ぐに入てやらあ」

二郎は意氣込んで云つた。太郎は祖母さんさへゐなければ、山へでも火をかけて、瘤ごと丸燒けになつて、灰の塊りの二郎が出來るのを見たいと、夢のやうに考へてゐた。

祖母さんは一つ〳〵お墓の前へ行つては拜んでゐた。



黒谷夜話

中里介山

天野の四郎と宮城は蒼皇として逃げて行く鎭西の樂光房のあとを樓の上から見送つて大笑ひに笑つた。

笑つたあとで天野は、宮城のやり方が藥が利き過ぎると云つた。宮城はまたああして毒氣を拔いてやるのが却つて功德であると主張した。

『おれも東海道では一期のしくじりをやつてしまつたよ』

天野は忌々しさうに呟いた。尤もそのしくじりとても當の相手を熊谷次郎と知らずにやつてのけたしくじりだから、いづれ目に物を見せてやる時があるとテレ隱しを云つて、却つて宮城に笑はれてしまつた。

併乍ら、東から來た奴も、西から來る奴も、どいつもこいつも、目あてに行くのが黒谷の法然房とあるのが癪だ。細流盡く湖中に向つて注ぐやうに、今時の奴どれもこれも、薄い唇を飜して黒谷へ黒谷へと噪ぐのが齒痒い、天野は宮城を相手に此んな事を云つた。

『人間といふ奴は何か見つけては擔ぎたがつてゐるのだ、擔ぎたくつて擔ぎたくつ

て堪らないでゐるのが人間だ、清盛も頼朝も皆んな其の擔ぐ儘に擔がれてものになつたのだが、擔ぐべき偶像が見つからないと凄じい共喰を初め出すから、いつの世でも相當の偶像を當がつてやらなければならぬ。頼朝も御輿が据つたから、もう擔ぎ栄がしない、處で人心が戰爭には厭きてゐるから今度は一つ變つた處で擔ぎ手のありさうなのを血眼で探して漸く探し當たのがあの黒谷の法然だ、もと／＼人間といふ群集動物が相當の山師があつて糸を引きさへすれば自分の首でもくゝり兼ねない愚物揃ひだから、それ偶像が見つかつたとなると先を爭つて駈け出して身錢をきつて擔ぎ廻るのだ、結局は自分が下積になつて踏みつぶされるのを御承知でかゝるんだから堪らない。比叡山の坊主が山王の神輿を陣頭に振りかざして王城の地を壓迫し得たりと喜ぶのは罪がないが、擔がれて納まつてゐる奴の面を見るとキザで堪らない、擔ぐ馬鹿者よりも擔がれてゐる奴を挫いてやりたい』

天野の四郎はさも小癪にさわるやうなあんばいで、やはり苦々しい面をしてゐるが、宮城は多少の皮肉をやめる事が出來ない。

『でも擔がれる位の人はドコかにえらい處があるんでせう、何か取柄が無ければ人は擔ぐどころか振返つても見はしません』

天野は自分が人を食ひ物にしない商賣でもしてゐるものかのやうに餘憤何となく納まり難きものがあるやうだ。

『だから人間は皆んな山師の食ひ物になつてしまふのだ』

『よし、おれが行つて一つその黒谷の闇をおどかして見る』

と云つたが、その時樓の南椽で唄をうたふ女の聲がする。

峯のあらし、長閑にて、日影も匂ふ天地のひらけしも、さしおろす、さほのしたゝりなるとかや

それは西樓第一の美聲と聞えた若葉といふ遊女の聲だ。

つゞいて、かつこかつこと皷をうつ音が聞え出したので、天野もついうつとりとそれに耳を傾ける氣になつた、欄に凭れた宮城は手拍子を打つて歌と皷とに合せてゐる。やゝあつて横笛が入つてしめやかに賑やかな氣が漸く樓に滿ちわたつて來る途端に、どうしたものか氣の拔けたやうな面をして樓の暖簾を掻き別けた男があつた。それは例によつてとぼけきつた阿波の男であつた。この男はいよ〱とぼけた面をして笈を脊に負つて樓を出るには出たが途方に暮れて前後を見廻してゐるだけだ。

『鎭西の樂光房殿――』

と間の拔けた大聲で呼びながら歩き出したが一向の方針があつて歩き出したわけではなく、漫然と、もと來た道、卽ち涙の濱の笠松の方へとたどつて行くのに過ぎないらしい。

樂光房殿、わたしを置いて逃げてしまふのはあんまりだ、と多少恨めしげに此の男は、とぼ〱として涙の濱の笠松の下まで來て見ると嬉しや、そこに尋ねる人が待つてゐて呉れた。

『おゝ、御出家、よく待つてゐて呉れましたな』

『若しやと思ひましたけれど、斯うしてお待ち申してゐました』

『何だつて、あなたはまたそれほど、あたふた逃げ出しておしまひになつたのです』

『隨分ひどい目に遭ひましたよ』

『ヒドい目に――』

『はい、危なく命を取られる處でした』

『命を――』

『二度と、あんな怖ろしい處へは行けない、追手がかゝるとまた困ります、早く逃げ出しませう』

『それほど怖い處でもござるまいに、處で、わしはまた大切な鏡を――』
鏡をと云つて阿波の男は後ろさまに笈の中を指して
『あれつきり誰も買はうと云ひませんから此のまゝ持つて參りました』
『さうですか、却つてそれが幸でした、兎も角も急ぎませう』
待ち合せてゐた出家は、阿波の男に休息の暇を與へず、拉し去るやうに急き立てる。二人は逃げるやうに、ではなく、事實、這々の體で此の空津の町を逃げ出して行くのだ。若し、天野と宮城との二人が以前の通りに樓の欄に凭れつゝ見てゐたことなら、いよ〳〵腹を抱へて笑つたことだらう。
日數を經て此の二人が有馬の湯の町を通りかゝると又しても故障が起つた。
『これ〳〵、そこへ行く二人づれの旅の者、詮議の次第があるから立ち留まれ』
陣屋の前で呼び留められて二人は面を見合せた。
『御詮議とおつしやるのは』
『その方達は何處から來た』
『はい、拙僧は鎮西から參りました旅の修行僧でござります、これなるは――』
『やつがれは阿波の國から出て參りました』
『して、何れへ參る』
『拙僧は一先づ京都黒谷を指して參るもの、これなるは――』
『やつがれは、都の片ほとりに住居致す、娘をたづねて參るものでござります』
『所持の物品を一通り取調べねばならぬ、隱す事なく此れへ出して示すがよい』

『心得ました、もとより拙僧は樹下石上を路と致す出家の身、身につけたるものとては、まづ此の鉢と杖とのみでござります』

『えゝ、やつがれは多少の旅の用意を致して參りました、御覧下し置かれませ、此の笈の中にあるのが、やつがれの持てる物のすべてゞございます』

僧は一通りの身體檢査を受けたが、別段に怪しまれるほどのものを發見せられることなしに、阿波の男に移つた。阿波の男の身體檢査もまづ無事であつたが、笈の中を見ると、衣類だの短刀だのがあつた。その次に現はれたのは例の半双の鏡面であつた。鏡よりむしろ短刀が問題になればなるのだが、それは拵へから云つても中身から云つても、問題にならない程度の代物で、ほんの旅の護身のおまじなひとしか見えないから、一議に及ばず通過したが鏡は役人の注意を惹くこと尋常ではなかつた。

『この鏡は――』

『はい、それは、やつがれが國許から持つて參つた大鏡でございます』

役人は打ち返し〳〵その鏡をながめてゐて篤と離さうとはしなかつた。

『見た處なか〳〵古雅な趣があつて貴重な品と見える、その方達が持つて歩くには、ちとふさはしくないが――』

『はい、全くやつがれにはふさはしい品ではござりませぬ、云はゞ預かり物なのでございます』

『預かり物、して、誰から此の鏡を預かつたのだ』

『預かり物としても、預け主は他人ではござりませぬ、やつがれの娘から其の品を預かりました儀にござります』

『娘から――娘は何處にゐる』

『えゝ、娘は都に宮仕へを致して居りましたが、天下の大亂で只今は行方がしかとわかりませぬ』

『亂後、行方がわからぬと申したな、して其の以前は宮仕へをしてゐたと申したな、宮仕へとは、いづれに――』
『え〻、それは』
と阿波の男は、こ〻に至つて聊か云ひ淀んだ、今まで素直に返事をして來たのが、何か憚かる所でもあるやうに、もちもぢとして返答が躊躇すると、役人は改まつた嚴めしさを以て阿波の男をじろじろとながめた。
『娘の宮仕へしてゐた先は』
と推しつけて問はれたから、正直な阿波の男は堪へることが出來ない。
『娘の宮仕を致して居りました先は……それは小松殿でござりました』
『ナニ、小松殿』
『はい、小松内大臣殿の御前に仕へて居りました』
『さてこそ』
役人と番卒は其の返事を聞いて、ひとしく意氣込んだ、正直な阿波の男は氣を呑まれてわなわなしてゐる。云つてならない事を云はされてしまつたやうに惴々焉として罪を待つかの風情が哀れであつた。
一層嚴めしい眼をして鏡を打ち返して見た役人は
『さてこそ、此の鏡はその方達の持つべき品ではなかつたのだ、これ見られよ、鏡の裏には蝶が打ち出してあるではないか、最初から然るべき由緒の品と見てゐたのは僻目ではござるまい』
したり面に鏡を打ち出して例の雄蝶のすがたを指して四方に並ぶ同役や番卒に示した。成程、平家では蝶を家の紋にしてゐたさうな。こ〻で問題が鏡に集まつてしまつた。
『處で、それなる出家、そなたは途中單純な道づれといふことであつて見れば先づ仔細はない、そのま〻立ち去つて宜し

からう、併し、阿波の男、お前と此の貌とは、これからの詮議がいよいよ大事であるによつて、神妙に番所へ留まつて宜からうぞ』

『あの、やつがれは御番所へお引留めになるのでございますか』

『免れ難い公儀の御詮議ぢやぞ』

ぐづ〳〵すれば番卒の手によつて引縛られまじき氣勢であつたから、阿波の男はわなゝいて返事が出來ない、併し、この男はいつも、感激に乏しい面をしてゐるから、恐れわなゝいてもさほどに激動の體とは見えないこと例の如しである。けれども、同じく例によつて此のまゝには立ち去られないのが例の出家であつた。

『どういふ御詮議か存じませぬが、これまで連れ立つて參りました一人と、急に不慮の事で袂を分たねばならぬといふことは隨分心殘りになるものでございます、それにこの方の性質は拙僧が充分に呑込んでゐるつもりでございますから、信じて保證に立ちたい心持も致します、此の方の疑ひが晴れるまでは拙僧を介添にさし置いていたゞきたいものでございますがいかゞなものでせう』

『それは罷ならぬ、御身は素直に袂を分つて立ち去るが宜しい』

『是非もございませぬ、では、せめて此の方にお疑ひをかけられた仔細の程を一通りお話し下さいますまいか』

『宜しい、嫌疑といふのは北條殿からのお差圖で、平家にゆかりのある公達がまだあちらこちらに隱れてゐる、殊に小松内大臣の御血統のうち行方の知れぬ方が兩三名ござる、それを詮議がやかましい、丁度その折に、この男が小松殿に由緒ありげな巾立てと、退引ならぬ此の一品を持つてゐる以上は、我々役向の手前、等閑には扱ひ放しを致すわけにいかぬのぢや』

『成程、左樣な儀でございましたか、それでは是非に及びますまいがなあ』

僧は役人から事情を一通り聞いて、さういふわけではと諦めきれない諦め面で、阿波の男の面を氣の毒さうに見ると、感激の乏しい面に憂ひの雲がかゝつて、まぶしさうに僧の面を見上げながら

『これも亦、一つの災難でございます、以前の災難は貴僧樣に救つていたゞきましたけれど、これは此のまゝでは遁れ難い災難と存じます、いづれお上にもお慈悲がございませう、そのうち、やつがれの疑ひも晴れておゆるしの出るのは間もない事と存じます故、どうか、やつがれにおかまひなく、一足お先へお出でを願ひます　どの道目あては同じ都の地でございますから、あちらで悠くりお目にかゝつてお禮を申上げる機會があるでございませう』

『左樣ですね、重ね重ね飛んだ御災難ですけれど、今度は拙僧が代つてお調べを受けるといふわけにも參りますまい』

『えゝ、その通りでございます、それも一日や二日でお調べがつく事ならばお待ち申していたゞいても宜しいのですが、重いお疑ひにかゝつてゐるのですから、急には許していたゞけないと思はれます、どうぞ、やつがれにおかまひなく一足お先へ』

その間に早くも番卒が推し隔たつて阿波の男は番所へ拉し行かれてしまつた。僧は悄然として立つて見送つてゐたが、阿波の男が館の中へ送り込まれて姿の見えなくなつた時分に袖を夕風にひるがへして有馬の町を立ち去つてしまつた。

この出家はあとに心を殘しながら、沿道に托鉢して阪攝の間を越え山崎街道から京都の地へ足を入れることになり上鳥羽の小枝の橋にかゝる時までは無事であつた。

『何ですか、あの騒ぎは』

『あれは今平家の公達が六波羅の北條殿の手で探がし出されてゐる處でございます』

『この邊に平家の公達が隠れて居られたのですか』

『多分さうでせうと思ひます、さうでなければまた人違ひの人身御供に上げられた者があるのでせう、どちらに致しまし

ても氣の毒なことです、これぱつかりは時の威勢でどうにもすることが出來ません』

『といふのは一體どうしたわけなのですか』

『西海に落ちぶれなさらなかつた平家の公達が、あちこちに隱されておゐでになるのを北條殿が承はつて一々探がして罪科に行はれるのです、それが爲に、いとをしい公達が見るも無慚な御最後を遂げておしまひになります。中には鄙の子供でも、目鼻だちのうつくしいのを見ると、これは平家の公達に紛れもないと云つて、心なき士卒逹が首措し斬つて投げ捨てるのもございます、多分、このあたりで、今その公達がつかまつて、御成敗を受けてゐるのでございませう。今に初まつたことではございませんが、淺ましい事です』

『戰爭が濟んでからもう年が經つてゐるのにまだ左樣な暗雲が京洛の地から除かれてゐないのですね』

『益々濃くなつて行くやうです、美目のよい女や小供を持つてゐると、いつその犧牲に捧げられるかと附近の人が安き心もありません』

『困つたものですね』

『代官によつては、それを機會にして私の慾と怨とを晴らさうとする者さへあるとの事ですから危ないものです』

『訴へて出る處はありませんか』

『無いことはございませんけれど、地頭には勝てぬ譬への通りです』

『成程、子供の泣き叫ぶ聲がしますね』

『あれです、何處その美目よい子が捉まつて助けを呼んでゐる聲なのです、あの聲が已んだ時は、首を斬られて骸は川の中へ投げ込まれてしまつた時です。あとで聲を限りになげくのは、多分其の母親かさうでなければお附の乳母と云つたやうな人でせう』

『何處へ行つても情けない事ばかり聞くものです』

『見込まれた以上はのがれる事が出來ません』

『さうです、のがれることの出來ないやうに此の世の中が出來てゐるのです、あながち平家の公達の運命とのみは限らないのでせう』

『さう云へばさうですけれど、眼前の悲慘を見て、ただのがれ方ない運命と宣告するだけでは慘酷なものですね』

『若し、そののがれる道がありましたなら餘人ならぬ拙僧にお敎へ下さいまし』

『如何致しまして、あなたに敎へる事が出來る位なら、わたくし自身が飛び込んで參ります』

『ああ、さしも子供の泣く聲も聞えなくなりました、では仰有る通り犧牲となつて殺されたものと見えます』

『全く是非もない事です』

『日も漸く暮れて參りました、成程、つゞいて女子の泣く聲が物哀れに耳に入るやうです、多分その子の母か乳母なる人でせう、氣のせいばかりではありますまい』

『さうですね、絶え入るばかり泣く聲がたしかに聞えてゐます』

『南無阿彌陀佛――――こゝは一體、何處ですか』

『上鳥羽でございます』

『上鳥羽――成程、何となく物悲しい氣分が腸に沁み渡つて行きます、この夕暮の氣持が堪へられないやうです、おゝ、こゝにまざ／＼と人間の到りつくす屍を見せつけられる印があります、大きなものです、此れは何の塔ですか、傍らには高札があつて「東婦節女の墓」と見えますが、此の塚と墓とは別なものでせう、由緒ありげな塚であり、因緣のありさうな墓です』

「これです、これが鳥羽の戀塚なのです」
「鳥羽の戀塚」
「御存知はありませんか」
「寡聞にしてまだよく承つて居りません、併し戀塚の名は、拙僧の胸を打つて何となしに涙のこぼれるやうな響を傳へます」
「東婦節女の墓とあるのを御覽になりましたか」
「はい、よく目に留まつてゐます、けれども東婦節女の何者であるかは今考へて思案に餘つてゐる處です」
「あなたは高雄の文覺上人の事に就てお聞きになつたことはございませんか」
「高雄の文覺上人――あゝ、有りますとも、有りますとも」
「その文覺上人の報志でお立てになつたのが此の鳥羽の戀塚の東婦節女の墓なのです、回向なさるならば御案内を致して進ぜませう」
「これは思ひにつけない因緣です、それで鳥羽の戀塚もわかりました、東婦節女もよくわかりました、大へん有難うございました。今、拙僧は何だか身につまされて此の墓を素通りする氣になれなくなりましたから、幸ひこのお堂の中に今晩は參籠をして心ばかりの讀經を上げたいと思ひますが、別だんお咎めもございますまいな」
「御殊勝な事に存じます、誰がそれをお留め申すものですか、御充分にお經をお上げ下さいまし、不幸の女東婦節女の爲に不貞の女、袈裟御前の爲に」
「あなたは此れから京へお出でになるのですか」
「いゝえ、わたくしは八瀬大原へ歸る者です」

『歸りをお急ぎでなければ、こゝでもう少し話をしてお出でになりませんか、實は先刻から、ふと道づれになつたあなたのお話を聞いてゐるうちに引き入れられるやうなものがあつて、しん〱と心淋しい思がして、どうやら、あなたを離したくない心持です』

『さう仰有られると、わたくしも貴僧樣をお懷かしく思はれてなりません、御一緒に此處のお堂で暫らく御囘向をさせていたゞきませうか知ら』

『お差つかへなくばさうなさいまし』

二人は鳥羽の戀塚の堂の緣の前に立つた。

『御覽なさい、淀の河瀨の水車が六道の輪廻を見せるやうにめぐつてゐます』

『成程』

『東寺の塔のいたゞきを塒に歸る鳥が掠めて歸ります』

『何だか夢のやうな景色を感じて、うつし世にあるものとは思へない心持になつてしまひました』

『わたくしも悲しくなりました、けれども、考へて見ると、わたくしは歸らなければなりません、どうやら貴僧樣と御一緒にこゝでお通夜をしたい心持に迫られましたけれども、やつぱり人間の約束で、夢心地に現在を忘れてゐることゝのできない身です、家路へ急がなければなりません、殘念ながらこれで失禮いたします』

『さうですか、此の上お引留め申すことは出來ないでせうか』

『折角ですけれど』

『では、お大切に』

二人は遂にここで袂を分つてしまつた。二人とは云ひながら、この時まで僧は、自分と連れ立つて來た人の何者であるか

に心着かなかつたやうだ。男であつたか女であつたかにさへも氣がつかないで夢の國の中で人に導かれて此處まで來たものゝやうな氣がする、若し、女であつたら東婦節女の靈ではあるまいか。八瀨へ歸るとは云つたが、八瀨大原あたりに住む女か、それとも戀塚のあるじが幽冥の底から地上に現はれて旅僧を誘うて一遍の回向を求むるの戯れではあるまいか、彼女も淋しからう。戀ひ死なば我が塚に泣けと云つて求められる我は、御覽の通り見る影もない旅僧で宜しければ今夜はこゝで心ゆくばかりお通夜をして東婦節女の爲にお經を讀まう。

鎭西の樂光房は、この夜もすがら鳥羽の戀塚のほとりに幽冥の人をうつゝに呼び迎へて物語をした。

「申し、お願ひがございます」

その夜中に、思ひがけない女の聲が庵の緣の前で聞えた。

「どなたです」

樂光房は薄あかりに照らし見て、若しさいぜんの八瀨大原へ歸ると云つた女が立ち戾つて來たのでは無からうかと思つた。

「こちらにおいでになるのは高雄の上人樣の御緣のお方とお見かけ申してたつてのお願ひに推參いたしました」

息せきつて云ふ聲は正しく女ではあつたけれども、さいぜんの連の女ではない。別の人が別の目的あつて、この夜中に尋ねて來たのである。

「拙僧は高雄の上人にゆかりのあるものではございませぬ」

「それでも鳥羽の戀塚は高雄の文覺上人樣が袈裟御前樣のお墓をお立てになつた處と承はつて推參致しました。そのお墓をお守りなさる貴僧樣をお見かけ申して一期の大事をお願ひに上りました」

「それはお見込み違ひでございます。拙僧は――」

『左樣に仰せられず、何卒、わたくしのお願ひをお聞き屆け下さいませ、ことし七歳になる男の子を六波羅の北條樣のお手で只今召し捕られてしまひました哀れな子の母でございます』

『それはお氣の毒な』

『御存知の通り、平家の御公達の詮議が厳しうございまして、少しでも姿かたちの目に立つ子供は、それではないかとお上の疑ひの眼で見られてゐる今日の有樣でございます、無慘や、わたくしの大切の男の子も、何處が平家のお血統のどなたに似てゐました事か、あらぬ疑ひを受けて、さいぜん六波羅へつれて行かれてしまひました』

『おゝ、左樣な事を巷の噂で聞いて參りました。まことに時節とは云ひながら不憫の至に存じます』

『このお疑ひばかりは、どなたに縋つても解いていたゞく事が出來ませぬ。鎌倉殿の仰せを蒙つて北條殿が御奉行の上の御詮議ですから、一旦、お目にとまつた以上は、それが間違つてゐても、お免しを願ふことすらも出來ない有樣でございますが、こゝにたつた一つ、天下の鎌倉殿を動かすお力のある事を承はりました、それは餘のお方ではない、高雄の上人樣にお頼み申す事だと人が敎へて呉れました、けれども高雄まではこゝから遠いのでございます、遠いところを、お尋ね申しても貴い上人樣に、わたくし風情がお目にかゝる事は叶ひますまいと存じます、幸、程近いこの鳥羽の戀塚のお堂は上人樣がお立てになつたのだから、あのお堂のお堂守の方に傳手を求めたならば、上人樣にお目にかゝつてお願ひが出來るかも知れないと人が申しましたのを承はつて斯うして推參致しました。哀れと思召して、この便りなき母の子をお助け下さいまし、ひれ伏してお願ひ申します』

緣の前に跪いて女は僧に訴へながらわつと泣き伏した。

『まことにお氣の毒に堪へない御災難ですけれども今申す通り拙僧は高雄の上人に何のゆかりも無い、ほんの通りがかりの旅僧でございますから、何うもお返事が申上げ兼ねるのです』

「また、そのやうに仰有らずに――高雄の上人様は平家の嫡々のおはす小松殿の御子孫六代御前をも頼朝公にお願ひして助けておやりになりました。まして何の罪も咎もない、わたくしの子供、たゞ一言、北條殿へ上人様からお言葉がありさへすれば、わが子は救はれるのでございます」

「近頃、哀れにも亦迷惑なお頼みを受けましたものかな、拙僧は只今も申上げる通り、高雄の上人には何の縁もない通りがかりの旅僧でございますから………」

「またしても、左様に仰せられず、ほんの一言のお言葉添だけで母と子の二つの命が助かるのでございます、お勤めのところをお邪魔を致して何とも申譯がございませんが、この通り頼みます、一生のお願ひでございます、後生の善根でございます」

「何とお返事をしてよいか………」

「お頼み申します、御僧様――」

逆上してゐる女は伏し跪いて僧に向つて合掌した。僧には申譯をする途を與へないほどにたゞ信頼しきつてゐるのであつた。ほと〳〵困じ果てた僧は、返事の言句にもつまつて身を椽の上へ持ち出して、見ると、この女房は七つになる子供の母としては若過ぎるほどの淸らかな人に見ゆる。

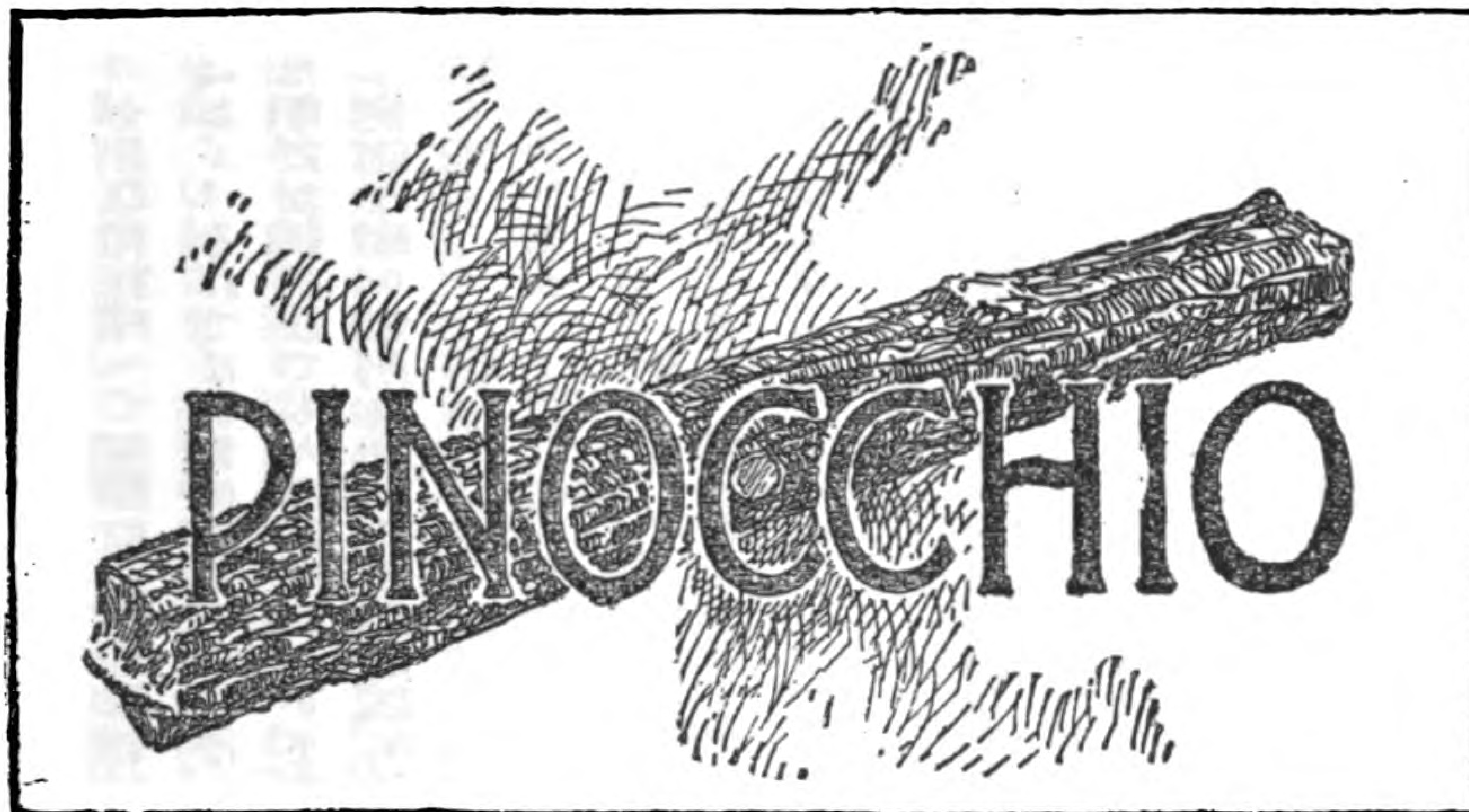
『あなたはお氣を鎭めなさらなければなりませぬ。落着いてよく、拙僧の申譯を聞いて下さらなければ困ります、拙僧は只今も申す通りほんの通りがゝりの旅僧であつて、高雄の上人から頼まれてこのお堂を守つてゐる者でも何でもありませぬ、いかさま、悲しみの餘りに前後を忘れてお出でになる、あなたとしては、その申譯がお耳に入らないのも御尤もですが、よく落着いて御覽下さい、拙僧は此の通り旅すがたをして居ります、こゝに網代の笠があります、あれに錫杖が置いてあります、そこには旅路に摺りきれた草鞋の脱ぎ捨てゝあるのをよく御覽下さいまし、それがおわかりになれば、折

角のあなたのお頼み、拙僧が情なくお斷りするものでないことがよくおわかりであらうと存じます』

女房の肩を押へて懇ろに云ひ聞かせた時に、やつと正氣づいた女房は、思ひ出したやうにあたりを見廻して

『おゝ、それでは、貴僧樣は、やつぱり高雄の上人樣とは何の御縁故もない通りがかりの旅僧樣でございましたか、あなた樣にお願ひしても人の命は助かりませんでした』

絶望の餘り女房の餘音には充分怨みを含んでゐる。



ピノチオ（童話）

佐藤春夫

操人形はどうやらかうやらに飢じさから救はれたが早いか、もう早くも新らしい足が一對ほしいものだから、ぶつぶつ言つたり喚いたりしだした。ゲペットは、惡い行ひの見せしめのつもりで半日の間はピノチオを泣かせて捨てて置いた。それから後でゲペットは口を利いた「何だつてお前は足をもう一ぺんこしらへよとせがむのだへ。いづれはまたその足でもう一ぺん逃げ出すつもりだね。」

「然うじやないてば、」と操人形はしやくり上げながら言つた「今度から僕、いい子になるんだよ。」

「どこの子だつて」とゲペットは言つた「おねだりする時にはきまつてそんなことを言ふやうだつたな。」

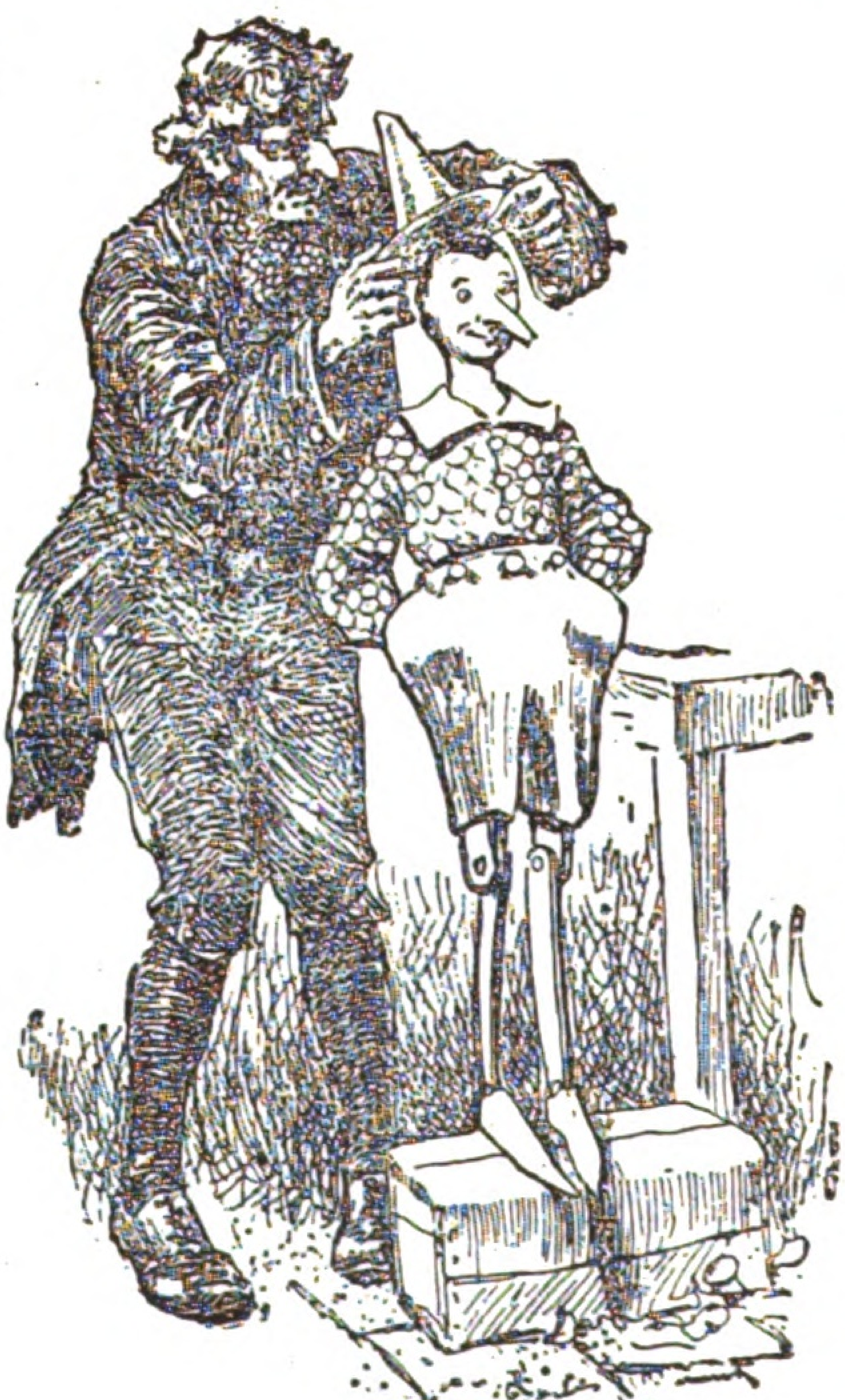
「然うじやないてば。僕、學校へ行くんですよ。勉強をしてえらい人になつて……」

「どこの子だつて、おねだりをする時にはきまつてそんな文句を述べてみるやうだつたな」

「でも僕はよその子とは違ふんですよ。僕は誰よりかも一番いい子です。それにいつだつても本當のことを言ふんです。ねえてば。お父さん。僕きつと仕事をならひます。さうしてきつとお父さんの手助けをして、お父さんがお爺さんになつたらお父さんのお世話をするんです。」

ゲペットは暴君のやうな顔つきをしてはゐたやうなものの、涙が流れてき出した。可哀いいいとしいピノチオがこんなはめになつてゐるのを見るにつけては胸のなかは煩みのこころでいつぱいになつて來た。彼は道具函と木片を二つ取り上げたとおもふと、側目もふらずに仕事にとりかかつた。

一時間とは經たないうちに新らしい足は出來上つた。それは實に變通自在な筋肉逞しい二本の足で、その出來の素晴しさと來てはまるで大藝術家が刻り上げたかと思はれるばかりであつた。そこでゲペットは人形に言ひつけた、「さあ、目をつぶつて寢るんだよ。」



ピノチオは目を閉ぢて寢入つたふりをしてゐた。その間にゲペットは少しばかりの膠でその二本の足を取り着けた。大へん上手にやつてのけたものだから、何處がつなぎ目だか誰にだつて見つけられつこがないほどだつた。足がくついたと見てとるとピノチオはもう早速跳ね下りてグル／＼踊りはじめてまるで嬉しさのあまり氣が違つたかと思へる。

「この御恩返しには、」とピノチオは彼のお父さんに言つた、「僕すぐにも學校へ行かうと思ひます。」

「感心々々、」

「でも學校へ行くには洋服がなくつちや。」

ゲペットはポケツトに一錢のお金も持ち合せないほどの貧乏であつたから、洋服はいちめんに花模樣のあるボール紙で素晴らしいのを一着、それから木の皮で靴を一足、古くなつたパン屑をつまみ上げて帽子を――こんな工合に新調してやつた。

ピノチオは自分の姿をながめたいばかりにさつそく水を張つた盥のところへ馳けつけた。自分の樣子を見て有頂天になつた彼は得意になつて言つた、「やあ!僕はまるで紳士だなあ!」

「さうだとも、」とゲペットは答へた「紳士だよ、よく覺えておくがいい。紳士といふものは身ぎれいにはしてゐるが、ぜいたくなんかけしてはゐないのだからね。」

「かうなると、」とピノチオがまた言ひ出した「學校へゆくのにまだ足りないものが出來て來たんだがなあ。」

「はあてね?」

「だつてさ、僕ABC讀本がないんだもの。」



「なるほどな。さて、どうすればいいだらう。」

「わけはないや、本屋へ行つて買つたら。」

「ところで、そのお金だて?」

「僕には無いさ。」

「わたしにも無い。」人のいいお爺さんはかうつけ足して、悲しげであつた。

ピノチオは、仕合せな子供であつたものを、やつぱり悲しげであつた。といふのは眞實の苦しさといふものは誰にだつて、子供にだつて感じられるものなのだから。

「待つておいでよ!」とゲペットは叫んだ――不意に立ち上りながら。つぎはぎだらけの上着をぬぐと手に持つて、彼は家から駈け出した。

しばらくすると、彼は手にABC讀本を持つて歸つて來た。上着はもう手に無かつた。氣の毒な老人は身にはシャツ一枚だし、外には雪も降つてゐる。

「上着はどうしたの。お父さん？」
「賣つたのだよ。」
「なぜ賣つちやつたの？」
「あれはあんまり暑すぎるからさ。」
ピノチオは立ちどころにこの答の意味をさとつた。するともう胸一ぱいの心持が抑へきれなくなつて、彼はゲペットに飛びすがつた。首のまはりに腕を投げかけると、顔ぢういちめんに接吻をした。

9

雪は止んでゐた。綺麗なうれしいABC讀本を小脇にかかへてピノチオは、學校へ出かけた。歩きながら路々ピノチオはいろんなことを空想して、數へ切れないほどの幻のお城を空中へ築き上げてゐると、それが次から次へとだんだん美しいものになつて行く。さうして、彼は自分を相手にこんなひとり言を云ひ出した。「今日は學校へ行つたら、僕はさつそく讀み方を習ひたい。それから明日になつたら書き方。明後日になつたら算術。それから覺えた學問で僕はどつさりお金を儲ける。ポケットのなか一ぱいにあるお金で僕はお父さんに新のいい洋服を一つ注文してあげるんだ。いいや、布の洋服なんてそんなものは駄目だ。金の洋服で、銀の飾をつけて、ボタンはダイヤモンドにする。僕のお父さんはそんなことぐらゐする値打は充分あるんだ。だつて僕にABC讀本を買つて下さるばかりに、この寒空をシャツ一枚でゐらつしやる。こんなことまでして下さるお父さんといふものはさうどつさりあるものぢやない。」



こんなふうにお喋りをしながら歩いてゐるうち、彼はふと何だか樂隊が聞えて來たやうな氣がした――ピーピーピ、ピ

ーピーピ、ドヽム、ドヽム、ドヽム。彼は立止まつて耳をすました。その音は、遠い路のはづれ――海の方にある小さな辻から聞えて來る。「あの素晴らしい樂隊は何だらう？困つちまふなあ、學校へ行かなけやならないのだ。だけれども………」そこで彼は思案にあまつて行きづまつた。學校へ行かうかそれとも樂隊を聞くことにするかどちらかに決めなけやならなくなつた。「今日は樂隊を聞きに行つてやらう。明日になつたら學校へ行くさ。學校なら何時だつて間に合ふんだからな」から言ひ放つて小つぽけな無賴漢は肩を聳やかした。

言ふが早いかもう、彼は路を引き返して精一ぱいで驅け出した。驅けるに從つて音はだんだんはつきりと聞えて來た――ピーピーピ、ピーピーピ、ピーピーピ、ドヽム、ドヽム、ドヽム、ドヽム。間もなく彼は一ぱい人だかりのしてゐる辻の眞中まで來てしまつてゐた。みんなは小さな木の小屋のまわりへ寄り集つてゐたが、その小屋にはさまざまな彩色で描いた看板がある。



「何の小屋でせう？」ピノチオは、自分のそばに立つてゐる子供を振り返つてから尋ねた。

「看板を讀めばわかるよ」

「讀めさへすれや文句はないのだがねえ。今日はそのどうしてだかちよつと讀めないのだ」

「間拔けだな！じや僕が代りに讀んでやるよ。ね、いいかい。そらあの看板に火のやうな字で書いてあるのは『操人形の大劇場』さ。」

「いつ始まるの？」

「今直ぐ。」

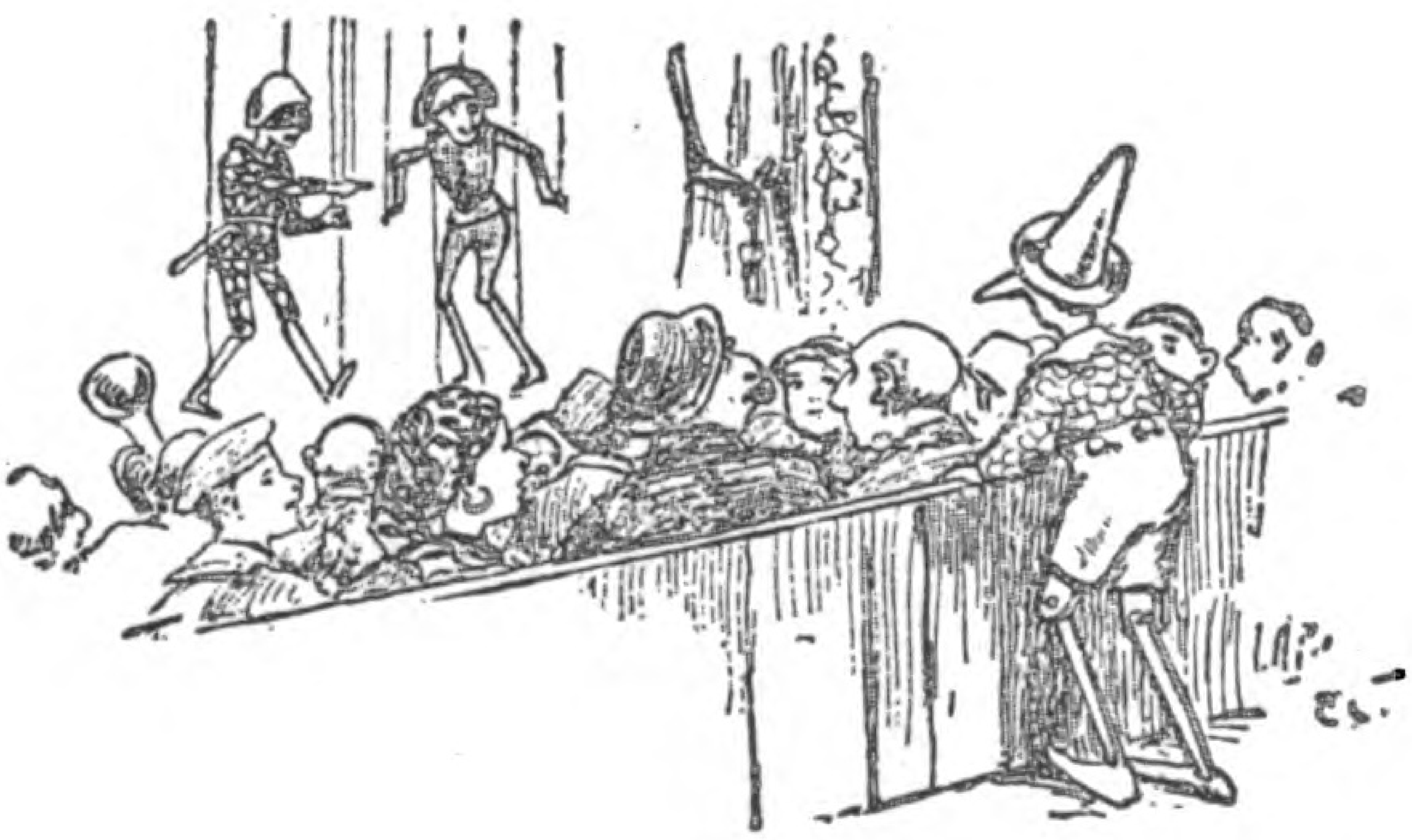
「木戸錢は幾ら？」

「四錢。」

ピノチオは珍らしいもの見たさでもう氣が立つて來て、さつきの立派な決心などはけろりと忘れて、今まで話しかけてゐた子供の方へ向き直ると恥かしげもなく言つた、「ね、明日まで僕に四錢だけ借して呉れませんか？」

「ああ、喜んで借して上げたいね、だがお生憎と今日は餘分はなかつたよ。」
「四錢で、僕、この上着を賣るよ。」
「そんなボール紙細工の上着なんか僕には役に立つものか。雨がかゝつたらバラ〳〵だい。」
「靴たら？」
「焚き物に持つてこいだい。」
「帽子なら幾らで買ふ？」
「やあ、大安賣！　パン屑の帽子だ！　鼠の御馳走にすれあ一晩だい。」

ピノチオはすつかり參つてしまつた。どうしたものだか判らなくなつて、ピノチオは突立つてゐた。彼は彼の持つてゐる最後のものまで賣りに出すだけの度胸はさすがに無かつたのだ、は彼はもじもじしてゐた。が、たうとう言つた、「このABC讀本を四錢で買はない？」「僕は子供だからよその子から物を買つたりなんかはしないよ」とその小僧は言つた――　操人形よりは分別もあつたから。



「四錢で、その讀本を私が買はうじやないか」今の會議を小耳に挾んだ古着屋の爺さんが口を出した。そこで讀本は忽ち賣拂はれた。忘れちやならないことには、家では、氣の毒なゲペット爺さんが息子にABC讀本を買つてやつたばかりに、この寒空にシヤツ一枚で震へてゐる。　（未完）



京子の身のうへ

徳田秋聲

下村が一番若い姉の家を訪ねたのは、彼が故郷のこの町へ歸省してから三四日たつてからであつた。

一體なら同じ母の腹から出た唯一人の姉なのだし、兄弟中で一番不仕合せな運命にゐる人でもあるし、又誰よりも一番人の好い——その意味は色々に解釋されるにしても、とにかくどんな場合にも自己を主張したり、運命に抵抗したりするだけの氣働きのない、ちやうど總ての人生に少しも動きのないこの町の氣分に最もふさはしい、氣の毒な彼女であつたので、どんなにその家が貧しいものであつても彼は先づそこに旅裝を解くべきであつた。

「今度いらしたら小木の姉さんの家へ落着いておあげなさい。姉さんも段々年を取つておいでになるし、貴方も氣がおけなくていゝでせう。」

母の法要のために故郷へ旅立たうとして、土産物などの荷造をしてゐた下村の妻も、さう言つてゐたのであつた。

そして下村も、それはさうした方がいゝと思つてゐたのであつたが、停車場へ着

いてみるとやつぱり兄の家へ行くのが當然らしく思へた。この兄の家も老人がなくなつてからは、行きいゝ家になつてゐたし養嗣子夫婦や孫も遠國の任地にゐるので、家庭はひつそりしてゐた。廣い庭に面した座敷の路次緣の板戸は、大抵締つてゐるくらゐで、二階の二室も明いてゐた。それに大阪で暮してゐた一番上の兄が最近に死んだので、この兄と下村の心には共通の寂しさがあつた。

「どうだね、お前んとこには部屋があるかね」

下村は停車場へついたとき、出迎へてくれた多勢の懐かしい人のなかに、小木の姪や甥の顔を見つけて、きいて見た。姉も傍にゐた。彼等一家はその頃住古した家を離れて、借家に移つてゐた。そしてそれも二度目の借家であつた。この甥も今は關西の方にゐるその弟も、ずつと以前には長く下村の家に來てゐたこともあつたが、產れつき頭腦がわるくて、下村がいくら氣を揉んでも物にならなかつたし、姪も二三年前、少し何彼に目を開かせてやらうと思つて、呼寄せてみたことがあつたけれど、東京の空氣に昵むことができないやうに、彼女は育てられてゐた。

「それあ有ります。そのつもりにしてゐるんですから。」

人の好い小木の甥は答へたが、下村は彼等の生活へ入つて行くのが、何となく擽つたいやうな怠屈な感じがしたし、亡つた兄の連合ひである姉も大阪から骨をもつて來て、兄の家にゐたので、打合せの都合もあるからといはれて、とにかく其處へ落着くことにしたのであつた。そこは家もひろ／＼してゐて、綺麗になつてゐたし、外の姉や甥たちもこゝを中心として、何かの相談に來ることにしてゐたので、坐つてゐても色々の人に逢ふ機會があつた。それに兄夫婦のためには養父であつた、ひどく長生きをした、老人が死んでからは、めつきり家のなかゞ明くなつてゐて、居心がよかつた。兄も十日も前から、一切の監督をしてゐる山をおりて、弟の來るのを待つてゐた。

「今日は天氣がいゝやうですから、これからちよつと方々まはつて來ます。」下村はその日兄と一緒に晝飯を食べるときさ

う言つて、それから少し話してから二階へ上つて出る仕度をした。二三日ゐるあひだに、無精な彼の身のまはりが亂雜に取りちらかつてゐたが、スウトケースのなかには、妻が用意してくれた土産ものが、そつくり其のまゝになつてゐた。彼はそれらの物を取出して風呂敷に包んで持出して行つた。

「車をさういひませう。それぢや貴方大變です。」はその包みを見て言つたが、それはさう重いものでもなかつた。

十月の半頃で、その日は天氣がよかつたので、町には輕い風がをり〳〵砂を捲きあげ、荷をもつた下村の腋の下から汗がにじむほどであつたが、二三町ほど歩くと、やがて電車に乘ることができた。彼は道順で、途中一人の姪の片着いてゐる家へ寄つて、荷を輕くしようと思つて、繁華なその大通りの中程へ來たとき、大略見當をつけて電車をおりたが、行過ぎたとみえて、その家を捜し當てるまでには、可なり無駄足をしなければならなかつた。古い茶器だとか、香爐だとか、鉢や皿などの並んだ店の右手にある入口から土間を通つて、薄暗い茶の間の上り口へ入つて行くと、怜悧さうな目や口をもつた誰よりも容色のいゝ姪が、そこに長火鉢の前に坐つてゐた。下村は別に更まつて挨拶をするほどでもなかつた。

「みんな留守なのや。家は今日は少し注文の品があつて、それをもつて行きました。」彼女はさう言つて、座蒲團をそこへ直してくれたりした。

下村はその邊の棚に詰つてゐる、この古い町の過去の敗殘の匂ひのする色々のものに目をくれながら、

「店には何にもないやうだし。」

「え、店には何にもおかんのや。ほんの私の内職ですもの。」彼女は笑つてゐた。

「周さんはもう好い顏になつたらう東京へは出て來ないやうだ。」下村がきくと、

「え、このあひだ京都のお茶の會に行つてゐましたけれど、東京はもつと修業をつんでからにするとか言つて、近頃はちつとも……」

とにかく此處も幸福な家庭の一つには違ひなかつた。一時周吉が女に溺れたとかいつて、別れるとか出るとか云ふ騷ぎの持ちあがつたことは耳にしてゐたけれど、周吉が何うした動機でか、ふつつり酒を止めてからは、總てが順調であるらしかつた。

下村は棚から二三の骨董品を取りおろして見たりしてから、「又來よ！」と言つて、そこを出て、それからさう遠くもない處だつたので、歩いて姉の家を訪問することにしたが、そこでも可成まごついて、廣い長い坂を、じわ〳〵照りつける秋の日に汗をかきながら、あつちこつちを搜しまはつた果てに、漸と發見することができた。

そこはこの町の中央にある公園へ行くときに、下村がよく通つたことのある坂であつた。そこには石段の高い、見晴しのよささうな別莊風な家が建つたり、瀟洒な住宅の二階が見えたりして、その頃とは大分模樣が變つてゐたけれど、それらは主に町の近郷や他國から入込んで來た移住者によつて築かれたもので、昔ながらに、この町特有の竹簾の格子のはまつた陰氣くさい古い家も取殘されてゐた。彼等の家もその一つであつた。そして何處かで尺八と琴の合奏をしてゐるのが、その邊まで來ると、ふと彼の耳についたのであつたが、それは彼等の往來に近い一つの部屋のなかゝら洩れる音であることに氣がついて、彼は思はず入口で躊躇した。

下村は廣い入口の土間から、衝立の立つてゐる奧の方へ聲をかけると、姪の京子がその衝立の陰から、體つきのすらりとしたその姿を現はした。

「入らつしやい。どうぞ。」京子は少し羞かんだやうな顏をして、切の長い目元に微笑しながら言つた。

「隨分廣さうだな。」下村はそんな事を言つて、今合奏の聞えた、この家族の茶の間になつてゐるその部屋へ通つた

「廣いにや廣いですけれど、家が古くて……。」甥の廣一がさう言つて、尺八を傍において坐りなほした。

彼等は兄と妹とで、ちようど合奏をしてゐたところであつた。琴もそこに横はつてゐた。下村は生活が裕かであ

裕かであるにつけ、貧しければ貧しいにつけ骨董やお茶や生花や食味や謡曲などで持切つてゐる、隠居氣分のこの町にその少年期を過しながら、絶えず生活の悶えに苦しんでゐた彼自身の過去を考へるとさうして妹を相手に尺八など吹いてゐられる廣一の心持が不思議に思はれもしたけれど、格別腹も立たなかつた。彼を激勵するとか、鞭撻するとか云ふことは全く無駄なこともわかつてゐたし、寧ろ無慈悲だと云ふことも知つてゐた。

「お母さんは」と訊くと、京子は琴爪を箱におさめながら、

「東京のお宅から來たお手紙をもつて、今をちさんとこへ行つたんですの。途中でお逢ひにならなくて。」

「いゝや。道寄りをして來たから。」下村は應へたが、廣一が中を掃除して尺八を袋に收めるのを見ながら、

「その尺八は大分好ささうだな。」と言つてお茶を濁さうとした。

「これですか」と廣一は人のよささうな顔を少し曇らせて「いや、大して好くもありませんが、まあちよツと……死んだお父さんが悪戯に作つたものです。」

「尺八まで作つたのか。」下村は少し驚いたやうに言つた。總てに器用な腕をもつてゐた義兄ではあつたけれど、その器用が却つて彼の生涯に祟つてゐた。

「え、器用な人でしたけれど。」廣一は寂しい微笑を浮べてゐた。

「二階は廣さうだね。」

下村は團扇を使ひながら、

「え。でも十疊一室に四疊半ですから、使ひにくゝつて駄目ですわ。」京子はお茶をいれながら答へた。

勿論下村は彼等がこの頃素人下宿のやうなことをしてゐることを知つてゐた。彼は時々姉を自分の傍へ呼びたいと思つてゐた。下村の妻もよく其の事を口にしてゐたけれど、やつぱり子供達と一つにしておく方が、彼女に取つて安易だと云

ふ氣がした。姉は廣一の弟が、親類の書畫を持出して行つたとき、東京へ金の無心に來て、下村の處に一月ばかり遊んでゐたことがあつたがちよこまかした敏捷い都會人に比べると、まるで太古の人のやうにぼんやりしてゐた。そして其は本來さういふ風に產れついてゐたのではあつたけれど、一つは早婚の結果でもあつた。彼女の結婚したのは、十五の歳であつた。廣一のやうな子の產れたのも、若もそれが彼の父と祖父の飲酒から來てゐるのでなければ、確かにそれに原因してゐるのだと思はれた。彼は小學校時代に、もう頭髮に白い毛を交へてゐた。勿論その割に、三十過ぎても、彼の白毛は別に目に立つほど殖えてもゐなかつた。

して躶も完全に、頭腦も人並みに產れついた京子は不幸にも父と母との盲目的な溺愛によつて、折角の好い素質を、妙にふやけた無節度なものにしてしまつた。

少し話してゐるところへ、姉が歸つて來た。彼女もさう變つてはゐなかつた。生活が頽廢がちながらも、悶踠いてゐるやうな痕迹はどこにも見られなかつた。たゞ目が一層わるくなつて、どうかすると頭腦がふら／＼したりするといふのであつた。

「去年の秋外から歸つて、上口で卒倒してから、何やら氣味が惡るうなり、中氣でも出る前兆か知らないと、そんなことを思つたりして……。」彼女は笑ひながら話した。

「そんな事もあるまい。」下村も苦笑してゐた。

「事によると今度が顏の見おさめかも知れん。」姉はさうも言つてゐた。

制服を着て、足駄をはいた一人の學生が友達を訪ねて來た。

「午後からお出かけになりました。あんたのところぢやなかつたんですか。」

玄關へ出て行つた京子は、そんな事を言つて、「また何うぞ」と、お愛相を言つてゐた。

「書生は幾人くらゐ居るの。」下村はその書生たちの話について、さう言つて訊いた。

「今二人しかないのやけれど……。」姉はいくらか極りわるさうに、

「部屋の都合がわるうて、廣い割にたんとは置けんのやさかえ。その代りみんな好い方ばかりや。もう誰方も家族同様に食卓も一緒や。その方が氣がおけんで好いさうで……」姉はさう言つて、その學生たちの身元などを話した。

彼女の話によると、彼等の親達が時々出て來て、好意を感謝してくれて、米など贈つたりして、親しくしてゐるといふのであつた。

「けれども、そんなことぢや仕様がないね。尤も廢一の月給がいくらだか知らないけれど、暮しの足しにもなるまいからね。」下村は言つた。

「それやさかえ今のところ苦しいとこと。」姉は笑つた。

下村は先刻から目をつけてゐた、隅の方の茶箪笥の上にある盆の柿を指しながら、

「その柿は澁いの。」

「これ？甘いのもあるやろ。これも書生さんが家からもつて來て下すつたのや。惡いのばかり殘つて。」姉は言つた。

京子は小刀で皮を剝きはじめた。

下村は一片二片、それを食べたが、甘くはなかつた。これから夕飯をすゝめられたけれど、下村は長くゐる氣もしなかつたので、直に脱ぎ棄てゝおいた羽織を着て、「いづれ又來ます」と言つてそこを出た。

それから殘つた荷をもつて、今一人の大きい姉の家の方へと道を取つた。

法要がすんでから、しばらく兄の家に遊んでゐた下村も、やがて東京へ歸る時が來た。彼は暇乞ひかた〴〵又それらの

家々を歴訪した。

陽氣が少し涼しくなつてゐた。彼はセルを着てゐた。今度歸つたら、彼處へも行かう、此處へも行つて見ようと、附近の温泉場や美しい海濱や、山間の自然美などを見舞ふつもりで、豫定のプログラムはあつたけれど來てみるといつも興味がなくなるのが例であつた。故郷の土や人に深く親しむことが、出來なかつた。零砕な少年期の記憶を搜してみても、彼を惹着けるやうな懷しい思出は、一つもなかつた。彼は寧ろそれを厭うた、けれども全く故郷を振顧らないでゐることは、彼に心の咎めを感じさせた。

姉の家の近くまで來ると、どこへ行くのか、ちよこ〳〵と俯伏がちに此方へやつて來る姉の姿が目についた。

「どこへ。」下村は近いたとき聲をかけた。

彼女は「あら」と言つて立止つた。そして、「今に限つたことでもないのや。」と言つて、弟を案内した。

この間足に怪我をしたとかで、會社を休んでゐた廣一も、その日は出勤してゐて、居なかつたが、京子は窓先きへ出て縫板の前にすわつて、針仕事をしてゐた。

「もう歸らうと思つて。大分長くなつたから。」下村は告げた。

「あらもうお歸りなさるの。」京子が吃驚したやうに言ふと、姉も失望の色を浮べて、

「何でそんなに早う歸らんならんのや。」

下村は顏を背向けてゐた。

「何でと云ふこともないが……來年あたり又來るかも知れない。」

「來年は來年や。それに折角來たのに、一晩もこゝに泊りもしないで……。」

「同じことだ。」下村はわざと笑つた。

姉も京子も、しかし何う言つて留めていゝかを知らなかつた。
「どうしても歸らんならんのなら、今日はお夕飯でもたべて、ゆつくり行つて貰はんならん。」
「いや、さうもしてゐられない。それに此の間、お寺の歸りに、多勢寄つて飲食ひもしたから。」
「それあをぢさんの御馳走ですもの。」
「同じことだよ。」下村は笑つてゐた。
そして暫らく話してゐるうちに、姉が遽に外へ出て行かうとした。何か御馳走の註文に行くらしかつた。
「僕は歸るから、止めときなさいつて……さう言つて來てくれ。」下村は京子を急き立てた。
「何うしてゞすの。」
「いや、今日はね、これから岡さんが何處かおごるさうだから。ちやうど其の時間なんで……。」
下村はさう言つて、紙入から少し金を取出して、そこに置いたりして立ちあがつた。
「あら、こんなことして貰ふと困ります。」
「いや、お母さんに上げるんだ。」下村はさう言つて早や外へ出た。
「京ちやんもしつかりしなくちや駄目だよ。男はみんな駄目なんだから。」下村は後からついて來る京子に私語いた。
京子は「え」と言つて、羞かんだやうな微笑を浮べながら、母を捜しに行つた。下村もついて行つた。
京子と姉の姿が、やがて一町ほど先きにある料理屋の門から出て來た。
「せつかく來て、箸もとつて貰はんと、歸つてもらうて、詰らん。」姉は嘆息するやうに言つた。
下村は姉が可哀さうだつたけれど、感情を壓しつけて附合ふほど優しい心にもなれなかつた。
姉は何か話したさうに、下村について來た。

京子も何ういふことになるんだか、心配だね。」下村はきいて見た。

「それについて實は少し話したいこともあるけれど……。」姉はいつにない緊張した語氣で言出して、

「二階にゐる書生さんが、實は來年は學校を出るので、それから東京へ出て、實地をやるのやさうで……田舍の家もお醫者で、あの界隈での財産家です。東京で開業したい希望もあるやうだが、その人が京子をお嫁にほしいと、まだ表立つて話したわけぢやないけれど、その積りでゐるのでね。」

「けれども親達は。」下村はいきなり訊いた。

「親御さんから、早晩そのお話が出るのは、決まり切つたことなのでね、これはまだ誰にも相談したことはないけれど……まだそれを言ふてもらふても困るけれど。」

そして彼女は、今迄にその外にも色々の緣談のあつたことまでを話した。

「それが確實なら、それもいゝだらうが、よく考へて……輕卒なことのないやうに。事によれば、僕も來てもいゝから。」

下村はさう言つて、その邊にあつた大きな瀨戸物屋の店頭に立止つた。そして何か買はうかと思つて、内へ入つて行つた。

十五分ばかり、色々のものを見た果てに、何も買ひたいものがなかつたので、やがてそこを出た。そして姉に別れを告げた。

「今のお話は當分内密にね。京子がさう言ふさかえ。」姉は念を押した。

下村は途々京子とその靑年との戀愛について考へた。結果が姉の失望にをはりさうに思へてならなかつた。

校正室だより

◇空は眞白の山ざくら、四月の七八日から十五、六日頃まではざわめく花の世界です、諸姉よ、上野へ、郊外へ、心も、身も五臟六腑を花に浸しなさい、どうせ三日見ぬまの櫻かなです、だが、又私どもは心しづかに散り行くあの花の姿に對して深い人生觀を練らねばなりますまい。

◇倉田氏が病を押して、御執筆下さる、氏の血のにじむ文字は、その一句にも、深い敎訓と力とを感じます。私たちは氏の藝術的精進の心境から迸る、敬虔な愛情に、泪ぐまずには居られません、武者小路氏の透徹した、眞劍な、簡素な、汗の滲んだ氏の體驗からの叫びである「精神上の苦痛」の論文は、必ず讀者諸姉に、深い反省と發奮とを促すことゝ信じます。

◇別れの一文を後に、賀川豐彦氏は愈々四月二十九日神戸發渡歐されます。私たちは、賀川氏が、飽くまでも日本の婦人を讃仰する」とおつしやるお言葉を、うれしく思ひます。

◇北原白秋氏、本居長世氏、中川紀元氏等の、兒童藝術敎育に關する力強い主張は、必ず若いお母樣達の胸にこたへて、そして、自分のお子樣方に對しては、今まで影をひそめてゐた、新たな抱負と期待とを以て接して行かれることゝ信じます。

◇五月中旬を期して文藝講演會を開きます。文藝思潮が渾沌として行着くところを知らぬ今日、多數文壇の諸大家を聘して親しく講演を聞くことの出來るといふ事は、文壇に於ける適切の試みであると共に、また、本誌愛讀者にとつて大なる幸福の一事であると思ひます。どうかこの機會を逸せず、多數御來會下さい。目下交渉中の諸家の顔觸れと期日と場所とは、來月誌上に發表致します。

◇女性改造の旺盛な發展振りは確かに、誌界の驚異となつて居ます。總てが努力だといふことを痛切に感じます。私達は讀者諸姉の御好意に對しても、必死の努力を續けなければなりません。總ては、唯だ眞劍です。奮闘です。

女性改造定價表

册數	定價	郵稅
壹册	五十錢	壹錢五厘
六册	參圓	郵稅共
十二册	六圓	郵稅共

註文の注意

◇増大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は壹部郵稅拾六錢を申受く(但し支那を除く)
◇見本は發送せず
◇郵稅切手代用は壹割増のこと
◇拂込みは振替によるるが最も便利なり

本誌一頁廣告料 一等百圓 二等七拾圓

◎本社廣告取次所 博報堂 弘盛舍 日本電報通信社

大正十二年四月十三日印刷納本
大正十二年五月一日發行
(四月號金五十錢)

編輯兼發行印刷人 東京府芝區愛宕下町一ノ一 平田貫一郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿七番地 株式會社秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話芝(長)一六三八 二八五四 四三〇三
振替東京八四〇二

THE JOSEI KAIZO

A LADY'S MONTHLY REVIEW OF SOCIAL AFFAIRS, LITERATURE, EDUCATION, POLITICS, ETC. PRICE. FIFTY SEN A COPY.

OFFICE: KAIZŌ SHA, 1, ATAGOSHITA MACHI SHIBAKU, TOKYO.

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可 大正十二年四月十三日印刷納本
大正十二年五月一日發行（毎月一日一回）

第二卷第五號

五月號

定價五拾錢（送料二錢）



復刻版　女性改造〔戦前編〕　第2回配本（第4巻～第6巻）

2007年12月10日　発行

揃定価（本体60,000円+税）

発行者　船橋　治

発行所　不二出版

東京都文京区向丘1-2-12

☎03（3812）4433

印刷所　三進社

製本所　青木製本

乱丁・落丁はお取り替えいたします。

ISBN978-4-8350-6073-6（全3冊 分売不可 セットコード ISBN978-4-8350-6072-9）